五色の戦士、仮面の守護

辰巳　結愛

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
五色の戦士、仮面の守護

【Ｎコード】
Ｎ００８９Ｊ

【作者名】
辰巳　結愛

【あらすじ】
それは、「西暦２００３年のトンネル騒動」から僅かに経ったある日の出来事。「仮面ライダー」と呼ばれる彼らは、自身の与り知らぬところでまとまってしまった話により、異なる世界の少しずれた時間に飛ばされた。そこにいたのは「五色の戦士」…そう、ここは「女帝」の世界…。１０の「仮面ライダー」が、１０の「戦隊」と出会う時、何が終わって何が始まる？
つー事で、辰巳クロスオーバーシリーズ番外編。自分の欲望のままに、「スーパー戦隊」の世界に平成の「仮面ライダー」を送り出し

ます。皆様、お時間ありましたら、お付き合い下さいませ。

始まり（前書き）

こんにちは。
何を血迷ったかまた書き始めました。

注意事項が何点か。
まずは、この物語は、私、辰巳結愛が執筆しております、「仮面ライダークロスシリーズ」の番外編と言う位置付けです。
故に、世界観や解釈は、「クロスシリーズ」の物を持ち越しています。
この作品から初めて起こしになられる方は、初っ端から訳のわからん単語が続出ですので、ご了承下さい。
そして、今までもお付き合い頂いてきた皆様へ。
この物語は、現在執筆中の「明瞭な夢、曖昧な現実」、「英雄の笑顔、悪者の涙」より後の時間になっております。
矛盾が生じる可能性は大いにありますが、そこは「まあ、番外編だし」と大目に見ていただけますと幸いです。

なおこちらの作品は、頭に超が付く程の不定期更新になります。
と、逃げ道を作ったところで。
「五色の戦士、仮面の守護」……スタートです。

始まり

ライブラリカフェ、「Ｍｉｌｋ　Ｄｉｐｐｅｒ」。その女店主である野上愛理は、１人の客の話を聞いていた。

珍しい事に、今のこの店にはその客以外は誰もいない。その事を気にする風でもなく、客は愛理の入れたコーヒーに口を付けながら、湯気で曇った眼鏡を軽く拭く。

「これが、コーヒー……悪くない味です」

「ありがとうございます。豆達が、一生懸命仕事をしてくれた味ですから」

客は、どことなく不遜な物言いをしているが、それに関して特に気を悪くするでもなく、愛理はいつもの、穏やかな笑顔を浮かべて客を見やる。

客は、知的な印象の美人だ。優等生然とした、少々近寄りがたい雰囲気はあるが、それもまた彼女の魅力の１つだろう。

「所で、わざわざお店に来るなんて。何かあったんですか？」

滅多に来ない客なのか、心底不思議そうに愛理は相手に問いかける。

すると客の方は、黙って手の中にあったカップをソーサーの上に乗せ、ゆっくりとその視線を愛理に向けた。

「ええ。実は厄介な事になりました」

「厄介な事？」

客の言葉に、愛理は僅かに首を傾げる。客である「彼女」が厄介だと言ったという事は、本当に厄介な事が起こっているのだろう。

「この１０年分の各時間に、『この世界』を襲った者達が現れたくらいです。厄介でしょう？」

傍から聞けば、何を言っているのか分からない内容だったが……愛理にはその意味が理解できたらしい。困ったような……それでいてどこか緊張感に欠ける表情で、はぁ、と頷くと……

「それは、確かに大変ですね」
その言葉は同情か、それとも本当に大変だと分かっているのか。
愛理は一瞬、思案顔になり……だがすぐに、いつもの穏やかな笑顔に戻ると、「彼女」に向かって言葉を放つ。
「彼女」が求めているであろう、その言葉を。
「それじゃあ、皆にお使いに行って貰いますね」
にこり、と。何の悪意も敵意も無さそうな……それでも有無を言わさぬ雰囲気の笑顔を向けて言われ……「彼女」はどこかほっとしたように、1つ溜息を吐くと、温くなったコーヒーを一気に飲み干した。
「貴女のご協力に感謝します、『皇帝』」
「いえいえ、困った時はお互い様です、『女帝』さん」
「皇帝」と呼ばれ、愛理はいつもの笑みを崩す事のないまま、普段の客に接するのと同じように言葉を返した。
目の前にいる、ヒトとは異なる姿をした漆黒の女性……異なる世界の冥府の神、スフィンクスと呼ばれる彼女に。
「それでは、私は戻ります」
「はい、お気をつけて」
勘定を置き、店を出て行くスフィンクスの後姿を見送って……愛理は珍しく思案顔をする。彼女の言う「お使い」に、どうやって送り込もうかと。
異なる世界を行き来する方法はいくつかあるが、「皇帝」の権限で扱えるのは「時の列車」くらいのもの。しかしそれも、今現在自由に使えるのは3つだけで、とても10組もの「仮面ライダー」を向かわせる事など出来ない。
「うーん、でも、どうやって……」
「それは、私が手伝おう」
「まあ、鳴滝さん。いらっしゃい」
いつの間にやってきたのか。鳴滝と呼ばれた、眼鏡をかけた男は、カタンと椅子を引くと、愛理に向かって言葉を放った。

「珍しいですねぇ、鳴滝さんが手伝って下さるなんて」
「他の世界に手を出す連中の神経を疑っているだけだ」
「あら。ゾル大佐ともあろう人が随分と珍しい事を仰るんですね。それとも規律に厳しいからでしょうか？」
「……その笑顔で茶化すのはやめてもらおう」
愛理の言葉に、鳴滝は機嫌を悪くした風でもなくただ俯きがちに言葉を放つ。単純に、若気の至りだとでも言いたそうな表情だ。
「そんなにディケイドさんが……門矢さんがお嫌いなんですか？」
「生理的に受け付けない。あれは……破壊者だ」
「でも、彼は立派な『仮面ライダー』……私が愛した子供です」
にこりと、笑いながら愛理は鳴滝に濃い目に出したコーヒーを手渡す。受け取った鳴滝の方は特に砂糖もミルクも入れずにそれを一口含む。
程よい苦味と酸味が味覚を刺激し、直後には鼻に香りが抜ける。彼女の淹れるコーヒーは本当に美味しいと思えた。
「相変わらず、美味いコーヒーだ」
「ありがとうございます。それだけは得意ですから」
にっこりと微笑みを返す愛理に、鳴滝の頬も僅かに緩む。時々浮かべる邪悪な笑みではなく、ごく普通の……優しい笑みが。
「それで……最初は誰を送るつもりだ？」
「最初は……２００９年に向かってもらおうと思っているんです」
「すると、『女帝』の世界で活躍しているのは……」
「はい、『シンケンジャー』の皆さんの所って事になりますね。お願いできますか『魔術師』さん」
愛理のその言葉に応えるように、鳴滝は軽く頷き……この物語を、開始したのである……

第一幕：音極鬼　（おとをきわめしおに）

この世とあの世の隙間に存在する、三途の川。そこに住まう、「人にあらざる者」を外道衆と呼ぶ。

彼らは死者でも生者でも無いが故に、この世に住まう人間を妬み、「この世」を外道衆の物とすべく、人々を襲う。そんな外道衆から人を守る者達がいた。

文字の力、「モヂカラ」を操り、その力と剣術にて外道衆と戦う者達……彼らは「侍戦隊シンケンジャー」。その名の通り、由緒正しき「侍」である。

現在、その中心は「火」のモヂカラを操る、志葉家１８代目当主、丈瑠。そしてその彼を「殿」として守る４人の家臣……「水」のモヂカラを用いる池波流ノ介、「天」のモヂカラを操る白石茉子、「木」のモヂカラを用いる谷千明、そして「土」のモヂカラを用いる花織ことは。

そしてもう１人。彼は丈瑠の家臣でも、そもそも「侍」の生まれでもないが、丈瑠の幼馴染であり、モヂカラの解読に対しては天賦の才を持つ者……「電子モヂカラ」を用いて戦う梅盛源太。

この６人が、今世のシンケンジャーとして、この世界を守っていた。

これはそんな、ある日の物語。

「スキマセンサーに反応しないアヤカシ？」

「はっ。黒子の１人が山菜採りに出かけた際に見かけたと」

一段高くなっている席に座っている丈瑠へ報告しているのは、志葉の家老的存在、日下部彦馬。

そんな彦馬の後ろでは、その「奇妙なアヤカシ」を見たらしい黒

子が、こくこくと首を縦に振っていた。
「アヤカシ」とは、人語を解する外道衆の事を指し、その他の雑魚に分類される雑兵を「ナナシ」と呼ぶ。
黒子は、その名の通りの格好をした、この家の世話人達の事である。顔を隠し、「個」を殺す事で、影となってシンケンジャーをサポートする大切な仲間達。
普段は料理や屋敷の掃除などを行っているが、戦場（いくさば）ではシンケンジャー達のために志葉家の家紋入りの陣幕を掲げる他、逃げ遅れた一般市民の避難誘導などを行っている。
しきたりなのかどうかは分からないが、基本的に黒子達は声を発しない。声そのものも、「個」であると認識しているからか。
「スキマセンサーがたまたま無かった、とかじゃねぇの？」
軽く首を傾げながら言った千明に、控えていた黒子は勢い良く首を横に振って否定を返す。
どうやら、スキマセンサーに反応しないというのは本当らしい。
「どちらにせよ、放って置く訳にも行かない、か」
「うん。アヤカシ放っといたら、沢山の人が傷つくかもしれへんし」
茉子の言葉に、ことはも頷く。
「……行くぞ」
「はっ」
丈瑠の一言に、流ノ介が恭しく頷き、黒子が山菜取りに出たと言っていた山に入ったのが、ほんの１０分程前。
あらかじめ連絡を入れておいた源太とも合流し、６人は３組……丈瑠と源太、流ノ介と茉子、そして千明とことはと言う組に分かれてその「アヤカシ」を探す。
そんな中、最初に「異変」と遭遇したのは、流ノ介と茉子だった。
彼らの眼前には、茶色い「ちゃんちゃんこ」のようなものを纏った、髪の長い女が立っている。目の下に赤いペイントをしていると言うだけでも充分に奇妙だが、それ以上に奇妙なのは……その女の足元に転がる、人間の亡骸。

喉の部分が無く、亡骸は驚いたような表情で息絶えている。
「あんたが殺したの!?」
「貴様、アヤカシか!?」
秘伝再生刀、シンケンマルを抜き放ち、まっすぐに構えながら2人はその女に問う。すると、女はその口の端をニィと歪め……
「私の子のために、その声を頂戴」
その口から漏れた声に、思わず2人は顔を顰める。
外見は、間違いなく女だ。それもかなり美人の部類に入ると思う。だが……今の声は間違いなく、男の物だ。女性のような外見をもつ男性、と言う可能性も無くは無いが……
などと、考えている余裕はくれないらしい。女は瞬時にその姿を猿に似た異形に変化させると、奇妙な笑い声を上げながら2人めがけて襲いかかる。
「……どうやら、我々が当たりだったみたいだな!」
苦笑めいた声を漏らしつつ、流ノ介はそうぼやくと、その赤い顔の異形の攻撃をかわし、変身用携帯電話、ショドウフォンを「筆モード」と呼ばれる形態に変えて構え……
『一筆奏上!』
茉子と同時に、自身の受け継いだ文字を宙に書く。流ノ介は「水」、茉子は「天」。その文字が彼らの身を包むと、全身をタイツのような物が覆う。青き侍、シンケンブルーと、桃色の侍、シンケンピンクにそれぞれ変身し、2人は抜き身の刀で相手の勢いを利用して斬りかかる。
だが、猿のような外見は伊達では無いという事か。太刀を軽やかな動きでかわすと、異形はするりと登った木の上から、不思議そうな表情でこちらを見下ろした。
「お前達……鬼じゃないな?」
「鬼?」
「我々は侍だ!」
異形の放った「鬼」と言う言葉に、茉子は訝しげに、そして流ノ

介は心外と言わんばかりに声を返す。
特に流ノ介は自身が「侍」である事に誇りを持っている分、けなされるような事を言われるのは我慢ならなかったのだろう。返した声は半ば怒りに震えていた。
「鬼などと……茉子、ここは一気に行くぞ」
「ハイハイ」
苦笑混じりに流ノ介の言葉に返しながら、茉子は自身のシンケンマルに持っていた秘伝ディスク……亀ディスクを読み込ませ、「天」の字が描かれた扇形の武器、ヘブンファンへと変えると、風を生み出し相手を吹き飛ばす。
「何っ！？」
茉子の生んだ風の勢いに煽られ、異形は驚愕の声を上げながらその風に巻き上げられていく。元々、枝の上と言う不安定な足場の上にいた事もあり、余計に体勢を崩し易かったのかも知れない。
そして異形の落下に合わせる様に、流ノ介も自身のシンケンマルに龍ディスクを読み込ませ、水の力を司る弓、ウォーターアローに変化させ……宙を舞う相手の眉間目掛けて、その矢を放つ。
その矢が相手に当たった、まさにその時。流ノ介達がいたのとは全く別の場所から、やはりその異形目掛けて放たれた弾丸らしき物が、流ノ介の矢と同時に異形の体に着弾した。
「うあああぁぁぁっ！」
矢の威力なのか、それとも弾丸の威力なのか。異形は断末魔の悲鳴を上げると、その身が地に落ちる前に、爆音と共に木の葉となって散った。
それは見慣れた「アヤカシの最期」とは異なる。少なくとも彼らは、その亡骸を木の葉に帰るような風流は持ち合わせていない。
「……何だったんだ、今の奴は……」
「それに……今の銃弾、一体……？」
変身を解かずに、警戒したように構えながら2人は周囲を……正確には銃弾が飛んできた方向に視線を巡らせる。そして……「そい

つ」を見つけたのは、2人ほぼ同時だったかもしれない。
彼らの視界が捉えた「それ」は、手に金色の「何か」を持った、「鬼」。黒を基調としているが、手や顔の隈取のようなものは「青」。腰には丸い、バックルのような物がついているが……不思議と、外道衆のような邪悪な感じはしない。むしろ、清々しい印象さえ受ける。
その姿が鬼でさえなければ、警戒を解いていただろう。
「何者だ!?」
それぞれに元の姿に戻したシンケンマルを構え、流ノ介が緊迫した声で問いかける。
すると鬼は、まるで害意など無いと言いたげに両手を上げると……首から上が淡く光り、顔だけが人間と同じ物へと変化した。
その行為に、2人の間に困惑と緊張が走る。しかしそれに気付いていないのか、鬼は場に似合わぬにこやかな笑みを浮かべて言葉を紡いだ。
「僕に敵意はありません。始めまして。僕は、イブキって言います」
「イブキさん、ね」
「本当に敵意が無いと言うのなら、その格好を解いてはどうだ?それとも、それが本来の姿か?」
刀を突きつける事をやめず、2人はゆっくりとイブキと名乗ったその鬼に近寄りながら、そう声をかける。敵意が無いと言う割には、首から下は鬼のままだ。爪は鋭く、体躯も良い。下手に油断して、その太い腕で攻撃……と言う事になっては大変だ。
だが、流ノ介の言葉にイブキは軽く困ったような笑みを返し……
「これが、本来の姿って訳じゃないんですけど……諸事情で、首だけ変身解除って事で許してもらえませんか?」
――出来るかっ!――
そう、声に出して言おうとした瞬間だった。
ドン、と太鼓を叩くような……そんな音が響いたのは……

「はぁぁぁぁっ！」

流ノ介と茉子が、「青鬼」と対峙していた頃。千明とことはもまた、「鬼」と遭遇していた。

正確に言うならば、「遭遇」ではなく「見かけた」と言うべきか。

2人が見つけた鬼は、こちらに気付いた様子もなく、ただ眼前に立つ猿のような異形と交戦。己が武器を振り回し、相手を切り裂かんと奮闘していた。

鬼は深い緑を基調としており、森に潜んでいれば見逃しそうな色だとことはは思う。だが……千明には、そんな格好よりももっと突っ込みたい所があった。

それは……鬼が振り回している、武器。

刃物……まるで剣か何かのように振り回しているが、そう言った類の物では無い。どうみてもあの武器は……

「ギター、だよな？」

「凄い！　うち、ギターで戦う鬼なんてはじめて見る！」

「いや、ことは。そこ感動するトコじゃねぇから」

呑気に言うことはにツッコミつつ、千明は鬼と戦う異形に目をやる。

赤い顔は狒々を連想させ、動きも猿そのもの。体躯から考えるに、オスなのだろうか。鬼の存在に気押されているように見えた。

そして何度目かの回避だったか。異形は鬼の持つギターの間合いから距離を大きく取ると、悔しげに軽く舌打ちし……

「鬼が出た。退かなきゃ、退かなきゃ！」

体躯に合わない、女のような声で異形は吐き捨てるように言うと、その外見よろしく身軽な動きでその場から退いて行く。

「あかん！　逃げる！」

「ああっ！　待つっす！！」

ことはと同時に鬼も怒鳴る。だが……かなり逃げ足が速いらしい。

ことはと千明が飛び出した時には、既にその姿は見えなくなっていた。
「逃げられた……」
心底がっかりしたように鬼は肩を落とすと、その顔だけを人間の物に変えて2人に視線を向けた。
年齢は丈瑠よりも上か。髪を短く切った、スポーツマン的な印象を受ける男だ。あの戦いの中でもこちらの存在には気付いていたのか、その顔に驚きの色は見えない。
むしろ心の底から心配そうに眦を下げて彼らに近付くと、ギターを背にかけて声をかけてきた。
「あ、君達、大丈夫だったっすか？　童子に何もされて無いっすね？」
「童子？」
「さっきのアヤカシの事やろか？」
鬼だった男の言葉に軽く首を傾げながら、千明は不審そうに、そしてことはは不思議そうにその男を見る。
未だ、首から下は鬼の格好のままだ。顔だけ人間と言うのは、なかなか面白いと思う反面、微妙に格好悪くも見える。ただ、確実に言えるのは……表情が見て取れる分、先程の完全な鬼の格好より親しみ易さは感じられると言う事だ。
「アヤカシ？　あれは、魔化魍の童子っす」
「さっきの、外道衆のアヤカシと違うんやろか？」
「それよりも、アンタ……一体何なんだよ？　人間なのか？」
訝しげに見やる千明の視線に、相手は困ったように軽く唸り……自分の格好と千明達を交互に眺めると、やがて意を決したのか真っ直ぐに2人を見つめて敬礼じみたポーズを取って言葉を紡いだ。
「自分、トドロキって言うっす！　『猛士』関東支部所属の、鬼の1人っす。よろしくお願いします！」
「……はぁ？」
「凄い、ホンマに鬼なんや……」

2人は2人で、トドロキと名乗った彼に対し、それぞれの反応を返す。千明は相変わらず訝るような視線で、背にギターを背負うその姿を見つめ、ことははキラキラと輝くような視線を送っている。

――ことはじゃねぇけど、ギターで戦う鬼なんて聞いた事無いぜ――

心の中で千明が呟いた、まさにその瞬間。

彼らの耳に、微かな剣戟の音が飛び込んできた……

そして、こちらは丈瑠と源太。こちらは只今ナナシ連中と交戦中だったりする。

「こりゃ、センサーの故障って考えた方がしっくり来そうだぜ、丈ちゃん」

「な」に濁音が付きそうな声を上げて斬りかかってくる有象無象を、自力で習得した居合刀、サカナマルで切り払いながら、源太は自分に背を預けてくれる幼馴染の「殿様」に言う。丈瑠の方は、シンケンマルを既に「烈火大斬刀」に変え、切り払うというよりは薙ぎ払うくらいの勢いでナナシ連中を倒している。

呑気そうな声の源太とは逆に、丈瑠の胸の内には妙な違和感があった。

――アヤカシが、いない――

黒子の話では、見たのはナナシではなくアヤカシだったはず。では、それは一体どこに……そう思った時、丈瑠の視界に1人の男の姿が映った。

自分達より確実に年上。30少し前だろうか、精悍な顔つきの青年だ。山菜採りに来た一般人かとも思うが、どうにもそんな風に思えない。男の放つ空気は、どことなく自分達と同じ……「戦う者」特有の物だと直感した。

「うーん……確かヤマビコ退治に来たはずなんだけどなぁ」

「なぁぁっ！」

呑気な声を上げた男に気付いたらしい。ナナシの中の1体は、丈瑠達にくるりと背を向け、迷う事無く彼に向かって蛮刀を振り上げ、襲い掛かる。

ここから男までの距離はかなりある。間に合わない……丈瑠も源太もそう思ったその時。

男は、特に驚いた様子も見せずにひょいとナナシの攻撃をかわすと、逆にその首筋に向かって手刀を叩き込んだ。

「あのおっさん……戦い慣れてる！」

「おーい、そこの金色君。聞こえてるぞー」

男は気を悪くした風もなく朗らかな声を返すと、更にとんでもない事を言い出した。

「なあ青年達、手伝おうか？」

「手伝う、だと？」

「そ」

短く答えた男が懐から取り出したのは……鬼の面の装飾が施された金色の音叉。こちらが返答を返すより先に、その男は自身の手の甲にそれをぶつけて鳴らす。

音叉特有の澄んだ音が響き渡り……やがて男はそれを額に近付けた。

瞬間、その額に、音叉に施されている物に似た鬼の面が薄く浮かび上がり……そう丈瑠が認識したと同時に、男の体を紫色の炎が覆った。

「何……っ！？」

驚きのあまり、丈瑠の攻撃の手も止まる。炎の向こうで、男の姿が変わっていくのが微かにだが見えたから。

「はぁぁぁぁぁ……破ぁっ！」

次の瞬間、気合と共に自らを包んでいた炎を腕で払い飛ばすと、男はその姿を彼らの前に現す。

……否。既にその姿は「男」では無い。暗い紫を基調とした、しかし僅かに赤の混じった「鬼」。

「まさか……そんな事ってあるのかよ!?」
「ん？　鍛えてますから」
源太の言葉に、やはり朗らかな声で返しつつ、その鬼は背に付けていた棒を外し、構える。それは、何となくだが太鼓の撥のように見えた。
「侍」である丈瑠から見ても、すぐに分かる。この鬼は強いと。彼が常に戦いの中に身を置く者であろう事は、その一分の隙も無い構えからも見て取れた。
「それじゃ、行きますか」
言うが早いか、鬼はまず近くのナナシの腹へ、その「撥」の一撃を入れる。次に流れるような動作で背後にいたナナシ2体を、片手でそれぞれ叩きのめし、更に襲い来る別のナナシの胸部を蹴り飛ばす。
……撥の攻撃が炸裂する度、ドンドンと太鼓を叩く様な音が鳴る。その音が、そして鬼の動きそのものが。まるで目に見えぬ太鼓を叩いているように見えた。
それからどれ程経っただろうか。いつの間にか全てのナナシは消滅し、残っているのは赤と金、2人のシンケンジャーと紫の鬼だけ。
変身を解き、不審そうな顔を向ける2人に、鬼もまた顔だけ変身を解いてにこやかに笑う。
「お前は……何者だ？」
「ん？　俺？」
自分を指差すと、男は敬礼に似たポーズを取り……
「俺はヒビキ。よろしくな」

第一幕：音極鬼　（おとをきわめしおに）（後書き）

朱杖炎雀（以降、朱杖）：あの女……アホだろ

青器龍水（以降、青器）：何を今更言っているの？　辰巳がアホで考えなしでどうしようもない腐った脳みその持ち主だという事は、前々からわかっていた事じゃない

朱杖：龍水、流石にそれは言いすぎだ。つか、ひょっとして俺らをはじめて見るって読者様もいるんじゃね？

青器：いるでしょうね。「スーパー戦隊」と言うカテゴリで引っ掛かった、可哀想な読者様がとりあえず、自己紹介をしておくわ。私は青器龍水。「あおき・りゅうみ」と読むわ。辰巳の書く、「ライダークロスオーバーシリーズ」に出てくるオリジナルキャラクターの1人よ

朱杖：そして俺が朱杖炎雀！　「しゅじょう・えんじゃく」だ。名前だけ見るとどっかの落語家くさいかもしれねーけど、ぴっちぴちの男子中学生でっす！

青器：見た目だけね

朱杖：グサ。そういう事言うなよ龍水、傷つくだろ。……俺らの詳しいプロフィールは、アホな作者、結愛が執筆している作品、「明瞭な夢～」と「英雄の笑顔～」の後書きを見てくれ。本編も見てくれたらなお嬉しい

青器：さて、宣伝も終わった所で

今回は「シンケンジャー」と「響鬼」なのね。どちらも「和」と言う事かしら

朱杖：らしいな。あと、アヤカシと魔化魍って、妖怪モチーフじゃん。だからってのもあるらしい。結愛も無茶するよなぁ……大体、あの女の考えた事って上手く行った試しが無いじゃん。絶対途中でめげるね

青器：だから、「超不定期更新」なんて言って逃げ道を用意してるんじゃない

朱杖：……本当にアホだろ、あの女……ま、良いや。見捨てないでいてくれたら、次回また会おうぜ

青器：これからよろしくお願い致しますね。それでは

二之巻：魔化魍と妖

「殿！」
「源太、無事？」
唐突に襲ってきた赤い異形を倒し、目の前に立つ青年達……どことなく「侍」を感じさせる赤と金の戦士だった2人に、ヒビキが自身の名を告げた瞬間。別方向から1組の男女が、その2人に駆け寄ってきた。その2人の後ろには、顔だけ変身を解いた鬼、イブキの困ったような姿もある。
しかし「殿」とは……変わったあだ名だなぁと思いつつ、ヒビキもイブキに視線を向ける。鬼に変身しているという事は、何かしらの敵と交戦、その最中に男女に見つかって困惑していると言った所か。
自分達「鬼」をサポートする組織……「猛士」からの情報では、この辺りにはヤマビコが出没していると言うし、その童子か姫が相手だったのだろう。
……もっとも、その「情報」を持ってきたのは、「猛士」の中でも「白い独裁者」と称されている「銀」の女性だったのではあるが。
それにしても、気になるのは先程の赤い異形の事。この山に来る途中で、何か銀色の幕のようなものが現れたのも、ヒビキの記憶の片隅に残っている。
「イブキ、そっちはどうだ？」
不審に思いながらも、そんな事はおくびにも出さず、ヒビキは「宗家の鬼」に声をかける。声をかけられた方は、人の良さそうな爽やかな笑顔を見せ……
「やっぱり、この山にいるのはヤマビコですね。姫と遭遇しました。そこで、彼らと出会ったんですが……」
ちらりと新たに現れた男女を見ながら、イブキはどこか不審そう……と言うか、不思議そうに首を傾げた。

「鬼じゃない、別の物に変身してたんです。おまけに思い切り警戒されてます」

その言葉に、ヒビキはああ、と小さく呟く。「殿」と呼ばれた青年も、自分の知らぬ戦士に変身していた。イブキと一緒にやってきた2人も、恐らくはその仲間なのだろう。という事は、あの2人も「侍」か。妙に納得する自分に、ヒビキは我知らず苦笑を浮かべていた。

銀色の幕や、見慣れぬ……魔化魍とは異なる異形、何より自分達をこの場所へ行く様に仕向けた「白い独裁者」の事を考えれば……おのずと、ここが「異世界」と呼ぶべき場所である事が想像できた。

「ヒビキさん？　珍しいですね、溜息なんて」

無意識の内に溜息を吐いていたらしい。イブキが物珍しげな表情で自分を覗き込む。それに対し、ヒビキは軽く苦笑を浮かべ……

「イブキ、俺達はどうやら、厄介事に巻き込まれたらしいぞ」

「え？　それって……」

「ヒビキさーん、イブキさーん！！」

イブキが何かを問おうとするよりも先に、イブキが来た方向とは別の方面から、聞き覚えのある声がした。

「弦」の使い手、雷の力を持つ鬼……トドロキだ。

その後ろには、ヒビキに言わせれば「少年少女」と呼べる年齢と思しき男女がいる。少年の方は胡散臭そうに、少女の方はどこかキラキラと輝くような眼差しでトドロキを見ていた。

「トドロキさん。その姿って事は……魔化魍と遭遇したんですか？」

首だけ変身を解いているトドロキに視線を送りつつ、イブキが真剣その物の表情で問う。

ヤマビコの姫と出くわしたと言っていたから、童子や、ヤマビコ本体がいてもおかしくないと思ったのか。

その問いに、トドロキは軽く肯き……

「はい。自分はヤマビコの童子と遭遇したんっすけど……すみません、取り逃がしました」

心底申し訳無さそうに謝るトドロキ。彼も鬼である以上、事の重要性は把握している。童子を取り逃がせば、それだけ被害に逢う人間が増えると言う事だ。

魔化魍、ヤマビコ。人の「声」……それの詰まった「喉」を好み、木々を腐らせる異形。それを育てているのが童子と姫と呼ばれる傀儡であり、魔化魍を育てる為なら手段を選ばぬ「敵」。

「そうなると、この辺りを拠点にディスクアニマルを……」

「話し中の所悪いが」

イブキが今後の対策を練ろうと提案しかけたその時。それまで遠巻きにこちらを見ていた、赤い侍だった青年……「殿」とか呼ばれていた人物が、その呼び名通りの威厳を持って、ヒビキ達3人に声をかける。

思い切り、疑惑の眼差しを向けて。

それもそうだろう。彼らから見ればこちらもまた「得体の知れない存在」だろうし……何より3人が3人とも首だけ変身解除状態……つまり首以外は鬼の姿のままなのだから。

「お前達は、何者だ？」

「あー、うん。その質問に答えても良いんだけど、その前に……」

気を悪くした様子も見せず、ヒビキは青年の方へと向き直ると、困ったような笑いを浮かべてこう言った。

「俺達、着替えてきても良いかな？」

……その言葉に、目の前の6人が、奇妙な表情を浮かべたのは……言うまでも無い。

「いやあ、悪かったな青年」

ヒビキがそう言った場所は、先程の山の中ではなくどこかの武家屋敷。表札には「志葉」と書かれていたので、志葉家と呼ぶべきなのか。一段と高い場所に赤い「侍」の青年が座り、その両脇を固めるように他の5人が円座の上で座り、ヒビキ達は青年の真正面で、

横一列になって座っていた。
トドロキの車に乗せてあった替えの服を着た後、落ち着いて話せる場所で話そう、と言う事になった際……通されたのがこの武家屋敷だ。
当初、「殿」と呼ばれていた青年や、生真面目そうな青年は物凄く渋い顔をしていたが、少年や寿司屋の半被を着た青年がゴリ押しで通した形で、この場に招かれたと言うのが現状である。
そんなヒビキ達の後ろには、灰を基調とした着物姿の壮年男性の姿もある。
ここが武家屋敷で、目の前にいる青年が本当に「殿」ならば、後ろにいる男性はさしずめ「爺」と言った所か。
そんな風に思いながら、ヒビキは周囲を見回す。
折り紙で作る兜のような形の模様は、この家の家紋だろうか。青年の後ろの円窓には、黄色でそんな模様があしらわれている。
「改めて聞きたい。お前達は何者だ?」
「何者って聞かれてもなぁ……」
困ったように頬をかきつつ、ヒビキはイブキとトドロキを交互に見やる。
目の前にいる青年達は、間違いなく鬼とは異なる「戦士」だった。
鬼の存在は、あまり公にする事ではないが、だからと言って変身した姿を見られている以上、誤魔化すのも得策では無い。ならば彼らには話しておくべきだ。
目だけでそう会話を交わすと、ヒビキは軽く肯き……
「俺達は、鬼だ」
「鬼だぁ?」
「もしや、外道衆の仲間か!?」
寿司屋の半被の青年の言葉の後、生真面目そうな印象の青年が緊張感漂う声で言う。後者にいたっては、持ってもいないのに腰に手をあて、刀を抜くかのようなポーズを取っている。
外道衆と言うのが何なのか分からないが、名前から考えると、あ

まり良い印象は受けない。もっとも、「鬼」と言う呼び名も同じだが。

「僕達は、自分の体と心を鍛え抜いて『鬼』になったんです。……人々を、魔化魍と呼ばれる化物から守るために」

「マカモウ？　って想像つかねぇんだけど、どんな字？」

「悪魔の『魔』に化物の『化』、魑魅魍魎の『魍』って書いて、魔化魍っす」

少年の問いにトドロキが答えていると、どこに控えていたのか、黒子の1人が半紙と墨と筆を差し出してトドロキに渡す。

しかし渡された方は困ったように眦を下げると、そっとそれらを隣にいる「宗家の鬼」に回した。

……古文書などで見慣れているため、毛筆文を読むのは得意だが、書くのは苦手と言う事なのだろう。回された方は軽く苦笑を浮かべると、慣れた手つきで筆先に墨を含ませて「魔化魍」の字を綴る。

「何か……随分とおどろおどろしい名前ね」

「実際、古くから人間を襲ってきた存在ですし、簡単に倒せる相手じゃありません。仮に物理的に倒せたとしても、魔化魍は穢れの塊の様な物ですから、きちんと音で清めないといけません。そして、それが出来るのは僕達鬼なんです」

「……鬼、か」

「殿様、あの……この人達、自分の事を鬼て言うてはるけど、人を守るって言うのはうちらと同じやし。悪い人や無いと思います。うちらの事、守ってくれはったし」

言いながら、少女は穏やかな笑みで瞑目している「殿」へと上申する。その彼女の言葉に、少年もうんうんと肯き……ふと思い出したように、ぽんと手を打つと、グイと身を乗り出して問いを口にする。

「じゃあ、さっきの『童子』って奴。あれが『魔化魍』なのか？」

「童子や姫は、正確には魔化魍の教育係だ。人間を襲うって点では、同じだけどな」

少年の言葉に苦笑しながらも返しつつ、ヒビキは真っ直ぐに「殿」を見やる。こうしてみると、目の前の青年も……若いながらも何か色々と背負っているように見える。

かつてのイブキと、同じように。

「そうなると、最近現れたセンサーに反応しないアヤカシと言うのは、その『魔化魍』とやらの可能性が高くなって参りましたな」

後ろで事の成り行きを見守っていた男性が、深刻そうな表情で呻くように呟く。

アヤカシ。音だけ聞けば「妖」と言う字を思い浮かべる事ができる。彼らの言う「アヤカシ」が、魔化魍の事を指しているのか、それとも……もっと別の存在を指しているのかは定かでは無いが……どうやらこちらも、あまり歓迎できる相手では無いらしい。

そこまで考えた時、ふとヒビキは思い出す。先程現れた、赤い異形の事を。

「なあ、こっちからも聞いて良いかな、青年？」

「……何だ？」

「『外道衆』とか、『アヤカシ』とか……ひょっとしてさっきの赤い連中の事？」

「確かに、先程戦ったのは外道衆だが、あれはアヤカシではなくナナシ。アヤカシと比較して格下の存在だ」

そして……その後、しばらくの間ヒビキ達は「外道衆」と呼ばれる存在に関しての説明を受けた。

「この世」と「あの世」の隙間に住まう存在である事、人に害をなし、この世に出ようとしている事、そして目の前にいる6人は、その「外道衆」と戦うために集められた侍集団、シンケンジャーと呼ばれる存在である事を。

簡単な自己紹介込みで。どうやら「殿」……丈瑠と言うらしい……は、ヒビキに青年と呼ばれる事を、快く思っていなかったらしい。呼んでいた本人は、そんな事など全く気付いていないが。

「そもそも志葉家とは、戦国の世より代々外道衆と戦ってきた武士

の家系であり、殿はその１８代目当主にして火のモヂカラで……」
「……爺」
「は？」
「……長い」
ともすれば暴走しそうになった「爺」こと彦馬を、困ったような表情で丈瑠が止める。周囲の面々が苦笑しているところを見ると、このやり取りはある種日常茶飯事らしい。
「あははは。面白いなぁ。僕の家にも、似たようなお爺さんがいましたよ」
「イブキは宗家の鬼だから、家柄は似てるといえば似てるもんな」
「家は兄が継いでいますけれどね。それにしても、文字の力を扱って戦う侍ですか……」
「俄かには信じられ無いっす……」
イブキとトドロキの声に、少年こと千明と、寿司屋の青年こと源太が苦笑を浮かべる。
「それはこっちの台詞。音の力で戦う『正義の鬼』なんて、ちょっと信じらんねぇっつーか……」
「でも、事実なんだよなぁ……」
しみじみ、と言わんばかりに源太が腕を組みながらそう吐き出した途端。
後ろで、鈴の音が響く。共に、その鈴に直結していたおみくじの箱がカタンと倒れ、番号の書かれた棒を吐き出す。
「うわっ！　な、何だ!?」
「あれ、スキマセンサーって言うんです。外道衆探知機……みたいなものかな」
驚くヒビキに、年長の女性……茉子が簡単に説明してくれる。
どう言う仕組みかは分からないが、外道衆に反応し、その番号によって何処に現れたかを知らせてくれるものらしい。
――今度、猛士で提案してみようか――
そう思いながら、ヒビキ達も何処からとも無く現れた黒子が差し

出す地図を見やる。
　場所は、先程の山。ヤマビコがいると考えられている場所だ。６人の侍と、３人の鬼は互いに顔を見合わせ……
「俺達は外道衆を倒す」
「なら、俺らはヤマビコ退治と行きますか」
　そう言うと、９人の戦士達は、再びその山へと向かったのであった。
　勿論、トドロキの車を駆って……

「確か、この辺りのはずだが……」
　生真面目そうな青年こと流ノ介が、僅かに顔を顰めながら呟きを落としたその瞬間。まるで彼らを待ちうけていたかのように、１人の男と、奇妙な姿の異形が立ち塞がった。
　男の方の格好は、茶を基調とした質素な和装。しかし、首周りには何かの動物の毛皮のような物が巻かれており、色の白い顔には、右目の下に赤い線で何かの紋様が描かれている。
　異形の方は、オウムに似た嘴と、マイクに似た腕を持っている。体色はくすんだ緑色をしており、魔化魍・コダマに似た印象を持つ。
「やはり現れたな、外道衆」
「それに、その隣にいるのは……童子だな」
　丈瑠に続くように、ヒビキも低く呟く。
　いるだろうと予想はしていたが、まさか一緒にいるとは思ってもみなかっただけに、難儀な事だと苦笑すら浮かぶ。
　それでいて、本命の魔化魍の姿が見えないのだから、余計に厄介だとさえ思えた。
「現れたな、シンケンジャー」
「それに、鬼も」
　忌々しげに吐き捨てるアヤカシとやらに続き、童子も顔を顰めながら、女性のような声で言い放つ。

童子が女声で喋るのはいつもの事だ。そう驚く事ではない。しかし……ヒビキはそれ以外の点で、童子に対して驚きを感じていた。

通常、童子と姫が別の者と手を組む事は無い。それは魔化魍同士でも同じ事。稀に合成魔化魍を生む為に手を組む事はあるが、基本的には魔化魍同士でも縄張り争いをするくらいだ。それが今、他種と手を組んでいる。

……通常なら、あまり考えられない事だった。

「驚いたな。まさか童子がそんなのと手を組むなんて」

「彼と私の利害が、一致したのだよ」

「利害、だと？」

驚きをそのまま言葉にしたヒビキに答えたアヤカシへ、今度は丈瑠が軽く眉を顰めて問い返す。

他の面々も気になっているのか、半ば睨みつけるようにそのアヤカシを見つめて、その先の言葉を待つ。

「そう。このアヤカシ、コエトリが人間の声を奪い、絶望させ……」

「奪った声を、子供にあげる。喰われた声は2度と戻らず、人間は永遠に嘆き続ける」

「人間の嘆きが、三途の川を溢れさせ、この世を賽の河原と同じにする。……利害の一致、だろう？」

くっくと低く笑うアヤカシ……コエトリとか言うらしいそいつと、その横で楽しげに笑う童子達に、全員が殺気立つ。

この世を三途の川に沈めようとするアヤカシも許せないし、人に害為すためだけに存在している魔化魍も許せない。

ならば、彼らの取るべき手段はいつもと同じ。これ以上の被害を出さぬよう、相手をこの場で相手を倒す事だ。

ヒビキが決意し、同時に他の2人の鬼もそれぞれ変身するために構えた瞬間。

ドンドンと、手持ち太鼓の音が響いたかと思うと、自分達の周囲に黒子達が陣幕を掲げだした。

陣幕の紋は「折紙の兜」……志葉家の家紋。そして、いつの間に

か自身の後ろにも、巴紋に似た印……ヒビキの太鼓の模様の入った、特別な陣幕が掲げられる。

「……は？」

「え？」

「何だ？」

思わず呆けた声をあげつつも、鬼達はひょいと隣を見ると……私服姿だったはずのシンケンジャー達が、袴姿で立っている。しかもその手に、携帯電話のような、筆のような……赤い何かを構えた状態で。

――いつの間に着替えたんだ？――

不思議に思いながらも、慣れた様子の彼らを見て……どうやら、こう言った物らしいと自身を納得させるヒビキ。そして……

「ま。一丁やりますか」

「……ええ、そうですね」

「こう言うのも、たまには悪く無いっす」

3人の鬼は、そう言うと、各々の変身ツールを構える。

ヒビキは音叉、イブキは笛、そしてトドロキは手首に着けている小さな弦を。

目の前の敵を、倒すために……

第三幕：侍鬼共闘　（さむらいとおにのきょうとう）

時は少し遡り、三途の川に浮かぶ六門船。そこには、筋殻（すじがらの）アクマロの動きを気に入らない、骨のシタリが、1人寂しくうろうろと部屋の中を行ったり来たりしていた。

「アクマロは信用できないし……かと言って、最近どうにもマシなアヤカシがいないしねぇ……」

独り言のように呟きながら、何とかアクマロを出し抜く方法は無いものかと思案するシタリ。

正直に言って、彼はアクマロに胡散臭い物を感じていた。その直感は、実は当たっているのだが……その理由が明かされるのは、もう少し後の事となる。

外道衆の御大将こと、血祭（ちまつり）ドウコクがアクマロの動きを気に止めていないので、余計に悩ましいのかもしれない。

自分がお払い箱になりそうで、怖いと言うのもあるのだろうが。

そう思っていたその時。ふと、何者かの気配を感じ、振り返る。

そこに立っていたのは……見た事の無い、漆黒のアヤカシ。

「……お前さん、何者だい？」

「貴殿の敵では無い。そして、筋殻アクマロ配下でも無い。ご心配召されるな」

やたらと堅苦しい言葉遣いをする男だ、とシタリは思う。

姿は、割とスマート。黒い体色に、同じく漆黒の長い髪を後ろで1つに括っており、目元は爛々と血色に輝いている。腰には剣を提げているが、背に釣竿のような物も担いでいる。腰にぶら下がっているのは魚籠だろうか。

その中では三途の川では滅多に見ない、漆黒の魚がぴちぴちと跳ねている。

「アタシャ、名前を聞いたんだけどね」

「これは失礼を。我は星髪（ほしがみ）　爪牙（そうが）と申す者。こちらは御大将の酒の

肴にでもされると良かろう」
「……聞いた事無い名前だねぇ」
「我もはぐれ外道衆である故、余計な面倒を呼ぶまいと、今までは六門船に近付かぬようにしておったのでな」
星髪爪牙と名乗ったその自称はぐれ外道衆は、口の端を笑みの形に歪めながら、魚籠から取り出した漆黒の……鯛に似た姿を持つ魚を差し出すと、シタリに向かって深々と一礼を送る。
妙にその動きが優雅で、外道衆にしては人間臭い。
もっとも、人から外道に堕ちた者……「はぐれ」だと言うのだから、人間臭いのは当たり前なのかも知れないが。
「で？　そのはぐれ外道がアタシに何の用だい？」
「実は……我もまた、アクマロを快く思っておらぬ。故に、シタリ殿にお力添えを、と」
「何だって？」
随分と胡散臭い男だ。唐突に現れて、自分に力を貸したいなどと。アクマロも充分に胡散臭いが、この男はその上を行く胡散臭さを醸し出している。
目の前の男の瞳に、感情を感じられない。外道衆だと言うのなら、目の前の男にも何か1つは「執着するもの」があるはずだ。その執着が強すぎるからこそ、外道に堕ちているのだから。それが見えない以上、相手をほいほいと信用すべきではない。
……とは思うのだが。力を貸してくれると言うなら、しかもそれがアクマロを陥れると言うのなら尚のこと、その力を使わなくもない。使える、使えないは別としても。
こちらの考えを見透かしているのか、爪牙はニィと口の端を歪めて懐から何かを取り出した。
「これを、アヤカシが1人、コエトリにお渡し願いたい」
「……？　何だい、この変な物は？」
「なぁに……アヤカシに新たな力を与える物だ」
爪牙に渡されたのは、人差指程の長さの「何か」。真ん中に、何

かの模様のようなものが描かれているが、これが何なのかまでは分からない。

新たな力を与える物……そうは言うが、やはり非常に胡散臭い。

「これ、本当に使えるんだろうねぇ？」

「少なくとも、シンケンジャーには有効かと。使う、使わないはシタリ殿のご一存にお任せ致す」

胸元に手を当て、再び慇懃に腰を折る相手に、少々不気味な物を感じながらも、シタリはふぅんと小さく呟き……

「1つだけ聞かせておくれ。何でこんな物を、ドウコクじゃなくてアタシに渡すんだい？」

その問いに、爪牙は軽く笑い……

「シタリ殿程の明晰なお方ならば、有効に扱えるかと。それに、今の荒れておいでの御大将に近付く程、我とて無謀でもない」

再び軽く笑うと、爪牙はそう言い残し、煙のように掻き消えた。まるで最初から、「星髪爪牙」と言う存在など居なかったかのように。

しかし、シタリの手の中には、あの男に渡された奇妙な物体がある。シタリの見た、自分に都合の良い白昼夢と言う訳では無かったらしい。

もっとも、常に黄昏時に似た赤い闇に閉ざされた三途の川では、昼夜の感覚など無いのだが。

――アヤカシに新たな力を与える物、ねぇ……――

「面白そうじゃないか」

我知らず、シタリの細い目がますます細められ……

「コエトリ、いるかい？」

＊

アヤカシ……コエトリと対峙し、丈瑠達はいつも通り袴姿に着替えると、ショドウフォンを筆モードに変え、すっと構える。

その隣で、鬼を名乗る3人も、各々の変身道具を構えているらしい。

音叉とか笛とか小さい弦とか、微妙な物だとは思うが……筆を構えている自分達も同じかと、丈瑠は心の中でのみ苦笑し……

「行くぞ！」

「そんじゃ、行きますか」

丈瑠の声と、紫の鬼だった男……ヒビキの声が重なり。

9人は、それぞれ変身する。

『一筆奏上！』

「一貫献上！」

『哈っ！』

各々の引き継いだ文字を纏い、6人の侍は色鮮やかな戦士の姿へと変わる。

一方で、ヒビキの鳴らした音叉が、イブキの吹いた笛が、そしてトドロキの弾いた弦の音が、その場を清めるかのように鳴り響き……

「破ぁっ！」

「也っ！」

「汰ぁっ！」

紫の炎を、蒼い疾風を、碧の雷を、それぞれ纏い、切り裂いて、3人の鬼も姿を現す。

「シンケンレッド。志葉丈瑠」

シンケンマルを肩に担ぎ、堂々とした立ち振る舞いで「火」の力を纏った赤き侍、丈瑠が名乗り。

「同じくブルー。池波流ノ介」

歌舞伎役者よろしく、手を前に突き出して「水」の力を纏った青き侍、流ノ介がそれに続き。

「同じくピンク。白石茉子」

舞うようにシンケンマルを掲げた後、優雅に構えて「天」の力を纏った桃色の侍、茉子が構え。

「同じくグリーン。谷千明」

軽く刀身をなぞって、やんちゃな雰囲気を残したまま「木」の力を纏った緑の侍、千明が謳い。
「同じくイエロー。花織ことは」
性格同様、真摯かつ真っ直ぐにシンケンマルを向け「土」の力を纏った黄色の侍、ことはが述べ。
「同じくゴールド。梅盛源太」
居合刀・サカナマルをいつでも抜けるように添え「光」の力を纏った金色の侍、源太が締める。
「天下御免の侍戦隊」
『シンケンジャー、参る！』
その宣言と同時に、彼らの気迫か、黒子の演出か。背後でどぉんと派手な爆発が、彼らの登場を際立たせる。
そこが、戦場（いくさば）であると……周囲の「現実」に知らせるかのように。
「羨ましいっす」
「僕達には、ああ言った名乗りはありませんからね。変身したら即戦闘、ですし」
「まぁ良いじゃないの。俺達は俺達らしくやれば」
轟鬼、威吹鬼、響鬼の順で言いながら、彼らも各々の武器を構えて敵と相対する。
轟鬼は2本のギター型の剣、「烈雷」と「烈斬」を、威吹鬼は金色のトランペット型銃、「烈風」を、そして響鬼は撥型のロッド、「烈火」を油断無く構え、すぐさま彼らは童子と呼んでいた異形の方へと駆け出した。
「俺達も行くぞ」
「了解！」
言うが早いか、真っ先にコエトリに向かったのは、千明とことは。2人がまず、コエトリの両脇に展開し、シンケンマルを振るってコエトリの腹を薙ぐ。
その直後、流ノ介と茉子が同じように両脇から、今度は相手の両肩を薙ぎ斬り、更に後から源太の居合刀がコエトリの嘴を捕らえ、

深々と抉った。
「んぎゃっ！？」
抉られるように斬られた嘴を押さえながら、数歩後ろへとコエトリはたたらを踏む。悲鳴もそうだが、アヤカシでありながら随分と手応えが無いのは気のせいか。
「なぁんだ、こいつ結構弱いじゃん」
「油断するな千明、まだ何か隠し持っているかも知れん」
「……だね」
「ヘイヘイ、わかってるつーの」
馬鹿にしたように言う千明を、流ノ介と茉子が軽く窘める。
言われずとも、千明もそれは理解しているのだが、いかんせん生来のノリの軽さが口にも影響しているらしい。ついつい口が滑ってしまうのである。
決して、相手を見くびっているつもりなど無い。相手は外道衆、それもアヤカシだ。恐らく何らかの特異な力を持っている可能性は高い。
「人間の声を奪う」事が出来るらしいのは、先程コエトリ自身が言っていたので間違いないだろう。そしてそれが齎（もたら）すのは、互いに意思の疎通が取れなくなった人々の困惑と嘆き。そして苛立ちと言った所か。
人間の負の感情が、三途の川の水嵩を増す。そしてそれがこの世にあふれ出した時、外道衆は「水切れ」と言う制限を失い、この世を阿鼻叫喚の地獄絵図へと変えるだろう。
それだけは、何としても防がねばならない。
そう思った瞬間。コエトリの様子に、奇妙な変化が起きた。
一瞬だけ、その身をびくりと震わせたかと思うと、聞き慣れない「音」がして……コエトリの姿がゆらりと揺らめき変わる。体色は薄緑そのままだが、両手に剣のような物を持ち、その肌質は今までの生物のような艶かしい印象の物から、どこか植物のような水っぽい印象を抱かせる。

「これは……凄い。力が漲る！」
変じ終わると同時に言葉を放つと、コエトリはシンケンジャーとの距離を一気に縮める。近付かれたのだと認識した次の瞬間には、相手の持つ2本の剣が、悉く彼らの体を切り裂いていた。
「なっ！？」
与えられたダメージに眉を顰めながらも、侍達は自分を通り過ぎたコエトリにもう1度視線を向ける。
先程までとは、段違いに動きが速い。それに、どこか禍々しい力を感じる。今まで出会ったアヤカシとは異なる……強いて言うなら、いつだったか「通りすがりの仮面ライダー」が現れた際に暴れていた「ライダーのアヤカシ」に近しいような印象だ。
外道衆本来の力に、別の力が付与され、おかしな具合に混ざったような……
――まさか、今回も同じような事が？――
ふと、そんな考えが丈瑠の脳裏を過ぎるが、その真偽を確かめている余裕は無い。妙に強くなったと言う事実には変わりないのだ、一気に決着をつけた方が良いだろう。
考え、丈瑠は金字で「真」と書かれた黒い印籠を取り出し、シンケンマルに装着。直後、1枚のディスクをそこにセットした。
『スーパーディスク』
ディスクが読み込まれた瞬間。丈瑠の……否、シンケンレッドの体を、ひらりと白地に金の縁取りが施された、美しき陣羽織が覆う。
……それはスーパーシンケンレッドと呼ばれる、彼の者を強化した姿。
「スーパーシンケンレッド、参る！」
言うが早いか、丈瑠はそのままシンケンマルを烈火大斬刀へと変えると、先のお返しと言わんばかりにコエトリとの距離を詰めるべく駆け出した。
「悪いが、さっさと終わらせてもらうぞ。真・火炎の舞！」
その名の通り、強力な火炎を纏った烈火大斬刀を大きく振るい。

志葉家１８代目当主は家臣達の見守る中、堂々と「殿」たる威厳と共に相手を沈黙させたのである……

アヤカシが、奇妙な強さを発揮し始めた頃、３人の鬼はと言うと……童子を取り囲み、数と実力の両面から、圧倒的に有利な戦いを推し進めていた。

いくら童子が戦闘形態……怪童子と呼ばれる姿になったとしても、響鬼の打撃を、威吹鬼の射撃を、そして轟鬼の二刀の斬撃を完全にかわしきる事など不可能らしい。既に童子の体には無数の傷跡が存在し、ぜいぜいと肩で息をしている。

視界の端では、唐突に強くなったコエトリの緑色がチラチラと映るが、目の前の童子は「ごく普通の童子」らしい。異様な強さを誇る「スーパー童子」でないだけありがたく思いつつも、３人の鬼は追撃の手を緩めない。

普通であろうと無かろうと、童子は童子だ。ましてアヤカシと手を組み、人を襲って、魔化魍を育てている以上、野放しには出来ない。

「まだまだぁっ！」

満身創痍の童子に対し、轟鬼は容赦なく師匠の形見である「烈斬」で相手の体を縦に切り裂くべく振り下ろす。だが、童子はその斬撃を後ろへ飛ぶ事で致命傷を避けた。とは言え、反応が少し遅かったらしい。切っ先は僅かに童子の体を裂き、彼の胸から臍にかけ、縦に１本の線が浮かび上がらせる。

そしてその事実を見逃すほど、ここにいる鬼は甘くはない。

真っ先に威吹鬼が手の中にある「烈風」で、童子が着地するのと同じタイミングで銃弾を放ち、その腿を撃ち抜いた。

撃たれた方の腿からはぶしゅりと音を立てて童子特有の白い血が噴出し、その場でバランスを崩して地に膝をつく。ごく普通の銃撃なら即座に回復するところだが、威吹鬼の放つ銃弾は「鬼石」と呼

ばれる物。そしてそれは、童子や姫、そして魔化魍にとっては毒のような物質だ。

治らぬ傷に苛立ちながらも、童子はきつく鬼達を睨み……すぐさまそこを、今度は轟鬼の「烈雷」が薙ぐ。

足を撃ち抜かれまともに動けぬ故か、咄嗟に庇った童子の右腕がごとりと言う音と共にその場に落ちる。

「おのれ……おのれ、鬼めぇぇぇっ！」

憎悪の篭った視線を威吹鬼と轟鬼に向け、鬼女のような怨嗟の声で童子は叫ぶ。

びりびりと空気が震え、まるで自然の怒りであるかのように感じながら……それでも、彼ら「鬼」は、真っ直ぐに自分の武器を構えた。

「お前さんの気持ちも、わからなくは無いけどな」

童子の「後ろ」で、響鬼が低く呟く。彼は、彼なりに理解しているつもりだ。異形達にも「戦う理由」があり、そのために人を襲っているのだという事を。

だからと言って、それを許す訳にも行かない。響鬼の力を増幅させた音撃棒、「烈火」の先に付いている鬼石が、煌々と炎を吹き上げ、童子の腹に炸裂する。

先程威吹鬼が放った物とは比べ物にならない大きさを持つそれに打ちのめされ、更に足の中で未だ童子を苦しめる先の鬼石が共鳴し。

その瞬間、童子はその身に溜まり己を形作っていた「穢れ」を清められ……元の土塊と化し、砕け散ったのであった。

響鬼が童子を倒し、そしてスーパーシンケンレッドがコエトリの1つ目の命……「一の目」と呼ばれるそれを撃破した瞬間。

地響きと共に、7メートル近くの大きさを持つ異形が、咆哮と地響きを伴ってその場に姿を現した。

茶色い、獣の毛皮のような物に覆われたそいつは、周囲の木々を

枯らしながらこちらへと近付いてくる。それが響鬼達の言う魔化魍……ヤマビコだと気付くのに、そう時間はかからなかった。

同時に、コエトリの２つ目の命……巨大化を伴う「二の目」も発動。ヤマビコの何倍も大きな体躯を持って、戦士達に襲い掛かる。

「……こう見ると、魔化魍も小さくて可愛いもんだなぁ」

「何をしみじみと呑気な事言ってんすか、響鬼さぁん……」

緊張感の欠片も無い声で言った響鬼に、轟鬼がどこか情けない声を上げる。

だが、その気持ちは、分からなくもない。魔化魍も充分に大きいが、二の目が出たアヤカシは、５０メートルを優に超えるのだから。

そんなのと並ばれたら、「小さくて可愛い」と思えるのも道理だろう。

「……アヤカシは俺達が何とかする」

「悪いな青年。それじゃ、俺達はヤマビコ退治と行きますか」

それだけ言うと……シンケンジャーは全侍合体ディスクを用いてサムライハオーを召喚し、鬼達はここからが本番と言わんばかりに、魔化魍へと向かって行ったのであった……

第三幕：侍鬼共闘　（さむらいとおにのきょうとう）（後書き）

朱杖：……1日に2話とか……引くわぁ……

玄金武士（以降、玄金）：引くとか言うなよ、これでも結愛ちゃん、頭に超が付く位、いっっっそがしい合間縫って、読者のニーズに応えたらしいんだから

朱杖：……げ、変態蝮。何でお前がここにいるんだよ？

玄金：やあヘタレフェニックス。後書きに君と龍水ちゃんだけ出るって、ずるくない？　僕も来ちゃった。エヘ

朱杖：可愛くねーよっ！　誰が「ヘタレフェニックス」だ！　微妙に格好良く聞こえるから怖いじゃねーか！
つか変態の名を欲しいままにしてやがるお前に人気集中してる理由がマジでわかんねぇ……

玄金：それは勿論……僕の人徳って奴？

朱杖：お前に人徳なんてカケラもねぇ！　単純に、物珍しい変態ってだけだろ！
まぁ、いいや。クリスマスイブ更新分は、シンケンジャーと響鬼、互いの敵の認識と、とりあえず巨大戦一歩手前ってトコだな。戦隊で言うとこの「ＶＳシリーズ」の流れそのままだ

玄金：まあ、衝突はない訳だけど。それにしても……誰？　第三幕……実質４話目冒頭の、あのはぐれ外道衆。オリキャラが増えるなんて、聞いてないけど？

朱杖：これは後々の伏線って奴だな。つか、今回の件の元凶と言っても良い

玄金：ふぅん……そう言えば、1話おきにタイトルの表記方法が変わってるみたいだね？　アレ、意味あるの？　僕はてっきり誤植かと思ったんだけど……

朱杖：勘の良い読者様なら気付いてるとは思うが……奇数話（第一幕、第三幕など）は、戦隊側のタイトル表記、偶数話（二之巻、四之巻など）はライダー側のタイトル表記だ。それに合わせて視点も戦隊寄りだったりライダー寄りだったりする

玄金：ふうん……
ま、いいや。それじゃあ皆、またね！

朱杖：次の更新時に、会えたら会おうな！！

四之巻：真剣なる侍

６人の侍……シンケンジャーが、巨大化したアヤカシに対して、同じ位の大きさの巨人型ロボットを召喚、乗り込んで立ち向かうのを見送り、ヒビキは思わずそのアヤカシを呆然と見上げてしまった。

先程までのアヤカシの姿とは、まるで異なっている。しかし、その姿に見覚えがある。今のアヤカシの姿はまるで……

「まるで……コダマだ！」

隣で呆然と呟くイブキに、同意するようにトドロキもまたこくりと肯いた。

勿論、ヤマビコへの攻撃の手を緩めるような愚は犯さないが。

コダマ。ヤマビコと同様に考えられている、魔化魍の１種。だが、それは人と同じサイズだったし、何よりも出現場所も「コダマの森」と言う場所だと決まっていた。

そもそも、シンケンジャーが戦っているのは魔化魍ではなく外道衆のはず。

何故、アヤカシが魔化魍であるコダマと同じ姿形をしているのかは定かでは無いが……そこはかとなく、嫌な予感がヒビキの胸の内に生まれた。先程唐突に強くなった事と今の格好は、何か関係があるのかもしれない。

「威吹鬼、轟鬼。さっさと決着をつけた方が良さそうだ」

「同感っす！　何か、物凄く嫌な予感がするっす！」

「同じく」

言いながら、イブキは銃弾型の鬼石をヤマビコに撃ち込み、トドロキは烈雷と烈斬を使ってヤマビコの足を斬りつけて、その動きを止める。

ヤマビコからすれば小さな傷だろうが、この攻撃は「斬る」事を目的にした訳では無い。

「それじゃ、まずは自分から！　音撃斬、雷電激震！」

烈雷を深々とヤマビコの足に突き刺すと、腰に着けていた音撃震……「雷轟」と呼ばれる弦状の物を烈雷に装着。本当にギターをかき鳴らすかのように音撃を放つ。

これこそが、「音による清め」。童子や姫を相手にするより遥かに膨大な穢れを相殺する為の「術」だ。

その音による清めが苦しいのか、もがくようにヤマビコはトドロキを払いのけようと、そのゴリラのような豪腕を振るう。

だが、トドロキはその腕が当たる前に烈雷を引き抜いてその場を離脱、ぺこりと頭をイブキに向かって下げ……

「威吹鬼さん、お願いするっす！」

「分かりました、轟鬼さん。音撃射、疾風一閃！」

まるで最初から打ち合わせていたように、既に音撃鳴……「鳴風」を烈風に装着済みのイブキが、トドロキの奏でた音を引き継ぐようにその音を奏でる。ギターから引き継がれたトランペットの音が、先程撃ち込んだ鬼石と共鳴して相手を身の内から苦しめる。

「おお……ぐぅおおおおおっ！！」

最後の足掻きと言わんばかりにヤマビコが吼え、周囲の木々を腐らせて行く。だが、その邪気にも似た声を相殺するかのように、イブキの奏でる清めのメロディーがヤマビコの「声」による侵食を防いでいた。

そして……パァン、と最後の一吹きを鳴らし終えると同時に。

苦しげに蹲ったヤマビコの背に、巨大な太鼓……ヒビキの持つ、音撃鼓、「爆裂火炎鼓」がその姿を現した。

「それじゃあ、最後の締めと行きますか。音撃打、一気火勢の型！」

いつの間にかヤマビコの背に乗っていたヒビキが、その言葉通り、最後の締めとして、強烈な一撃をヤマビコに加える。

その、瞬間。

流石に3人の鬼による音撃の連続技に耐え切れなかったのか、ヤマビコは大きく一声だけ吼え……だがしかし、そのまま爆発。凝り固まった邪気は清められ、木の葉となって自然へと還って行った。

「よし、これで魔化魍は片付いたな」
「後は……」
「アイツっすね」
ヒビキ達が、コエトリを見上げた時。
シンケンジャー達の巨人が、必殺技を繰り出そうとしていた。

「どうやら、ヒビキ達の方は片付いたらしいな」
ギター、トランペット、そして太鼓の音が曲と言う形を為し、続け様に聞こえた後、サムライハオーの足元で魔化魍が木の葉となって散ったのを確認した丈瑠は、フと笑いながらそう呟く。
「なら、こっちも終わりにしようぜ、丈瑠！」
「当然だ」
鬼達に感化されたのか、どこかノリノリの千明に言われ、シンケンジャーはすべてのモヂカラを集中させる。それは今の彼らが持つ、最強の技。
サムライハオーがその刀で円を描くように回すと、「獅子」、「龍」、「亀」、「熊」、「猿」、「兜」、「舵木」、「虎」、「烏賊」、「海老」、「牛」の文字が現れ、それを凝集、サムライハオーの後背部にある牛ディスクからオーラが放たれ、コエトリはそのオーラに捕らえられ……
『モヂカラ大弾円！』
１１の折神の力と、６人の侍のモヂカラが１つとなり、コエトリを倒した。
……はずだった。
だが……
「甘い……甘いぞ、シンケンジャーぁぁぁぁっ！」
「嘘でしょ！？」
「モヂカラ大弾円が、通じてへん！」
驚く暇もあらばこそ。コエトリは両手の刀でサムライハオーを何

度も斬りつけ、中にいる丈瑠達にも、振動と言う形でダメージを与える。
　一介のアヤカシならば、モヂカラで倒せるはず。ましてモヂカラ大弾円は、全ての折神と侍の力を結集させた技。「一介の」どころか大方のアヤカシは今の攻撃で散るのが常だ。
　しかし今、自分達を斬りつけているコエトリには、多少のダメージは見られる物の、とどめと言うには程遠かったらしい印象がある。
「くっ……我等のモヂカラが、足りないと言うのか！？」
「違うぞシンケンジャーぁ。私はぁ、アヤカシでありながら、魔化魍になったのだぁぁぁっ！」
　流ノ介の言葉に答えるように、コエトリはまるで勝ち誇ったかのような口調で高らかに宣言する。
――アヤカシでありながら、魔化魍になった、だと？――
　その言葉の意味を上手く汲み取れぬまま、サムライハオーは再びコエトリの太刀を喰らう。
「素晴らしい！　素晴らしいぞ、この力！　これが魔化魍の力……モヂカラに負けぬ、圧倒的な力！　今なら御大将……否！　ドウコクにも勝てる気がするわっ！　ハハハ……ハーハハハハハっ！」
　まるで得た力を楽しむかのように、狂気に満ちた笑い声を上げながら、コエトリは何度も何度もサムライハオーを斬りつける。
　しかも、自身の力を過信しているのだろうか、事もあろうに外道衆の頭領である血祭ドウコクに対する叛意すら滲ませている。
「それにこの身の内にわだかまる穢れっ！　三途の川の水と同等っ！　水切れの心配もない。私の天下だぁぁぁぁっ！」
「水切れの心配もないだと！？　無制限にこの世にいられると言うのか！」
「不味いぞ丈ちゃん、このままじゃ……」
「分かっている」
――だが、このままでは……――
　打つ手を考えながらも、打開策が見つからない。

どうすれば良い、と丈瑠が自分に問いかけた、その瞬間。
「諦めるな、青年！」
足元から、ヒビキの声が、した。
その手に、太刀のような物を握っている。
「響鬼、装甲！」
その太刀に向かって宣言したかと思った瞬間。ヒビキの姿が……変わった。鎧は紫から、赤を基調とした色合いとなり、額の鬼の印には「甲」の字に似た何かがかぶさっている。
「おいおい、ありゃあ……」
「まるで、スーパーディスクを使った時みたい……」
感心する源太と茉子に応えるように、足元のヒビキは敬礼のようなポーズをとる。
その横には、イブキとトドロキも、こちらを見上げて何かを言いたそうにしている。
「青年、ちょっとそいつに乗せてもらって良いか？」
「何？」
侍巨人に、モヂカラを扱えない者を乗せた事が無い。そもそも乗せる事が出来るのかも不明。その事を一瞬だけ丈瑠は考えるが……
「……やってみる価値はあるか……」
面の下で苦笑じみた顔をしながら、彼は3人の鬼をサムライハオーの中に呼び込む。
案外と抵抗なく呼び込めた事に心の内で驚く。それどころか、これは彼らの持つ清めの力なのだろうか、少しだけ体が楽になった気がする。
「へぇ、中はこうなってるんすね……」
「それで？　ここに乗せろと言ったからには、何か策があるんだろう？」
しげしげと周囲を見回すトドロキをさらりと流しながら、丈瑠は自分の肩に手を置くヒビキに言う。
問われた方は、勿論と言わんばかりにその首を縦に振り……そし

て、言った。
「あのアヤカシ、魔化魍の力も持ってるって言ってたよな？　確かにアイツは、ある魔化魍にそっくりな姿をしてる」
「ああ。だから、モヂカラが通用しなかった」
「待てよ？　相手が魔化魍の力を持ってるって事は……」
「ヒビキさん達の音撃が通じるって事やろか？」
「その通りだと思います、千明君、ことはさん」
「だから、俺達も乗せてもらったっす」
成程な、と納得する。確かに、魔化魍には音撃しか通用しない。その事は屋敷にいた時に聞いていたし、実際に先の戦いから考えてもそうなのだろう。
そして、その理論ならば納得できる。
どうやってコエトリが魔化魍の力を手に入れたのかは不明だが、問題は経緯ではなく結果の方。実際に、相手にモヂカラがほとんど通用していないのは、相手が音撃もなければダメージを受けぬ体に変わったからだ。
ならば、ここはヒビキ達の音撃に頼るしかない。
「とは言え……この大きさの奴を清めるとなると、ちょっとばかし苦労しそうなんだよ」
「それに、相手は魔化魍の力だけでなく、きちんとアヤカシとしての力も残しています。だからこそ、少しだけとは言え先程の攻撃も効いているんです」
「つまり、音撃とモヂカラ……その両方で同時に攻撃する必要があるっす！」
言いたい事は分かる。
普段は7メートルクラスの魔化魍を相手にしているとは言え、今回は大きさが根本から違い過ぎる。3人だけの音撃では、恐らくあの体を支える穢れを清めきるのは難しいだろう。
ならば、サムライハオーを通じて音撃を叩き込むのが、もっとも効果的と言う事か。そして同時に、モヂカラを叩き込むにも、サム

ライハオーが必要になる訳だ。
だが……ここで1つ問題が生じる。
「だが、音撃を扱うディスクなど存在しない」
折神の力を引き出すには、秘伝ディスクが必要となる。丈瑠が懸念するのはそこだ。彼らが扱うのはあくまでモヂカラであり、音撃ではない。音撃と言う力を記録したディスクなど、丈瑠達は持っていない。恐らく志葉家の倉庫を探しても存在しないだろうし、探している時間もない。
しかし……
「大丈夫だ青年。ディスクならある。ほら」
ヒビキが言って見せたのは、彼らの腰に付いている色とりどりの「ディスク」……鬼が主に扱うディスクアニマルであった。
シンケンジャーの用いる秘伝ディスクとは異なるが、ディスクアニマルも元はと言えば折紙で作った式神を元にしたもの。かつては「音式神」と呼ばれていたそれは、シンケンジャーの持つ折神と似通っている所がある。
だがその力を、サムライハオーを通じて扱えるかどうかは……
「……賭け、だな」
「大丈夫だって青年」
「何もしないよりは、良いと思いますよ」
「これが、俺達の『俺流』っす！」
茜、鈍色、青磁の3色のディスクを差し出され、一瞬だけ迷うが……丈瑠はそれを受け取ると、鈍色を茉子に、青磁を千明に渡し……
「行くぞ」
「しょうが無い、やってみっか」
「何か、ちょっと楽しいかも……」
言いながら、3人はシンケンマルの柄にそのディスクを嵌め……
秘伝再生を行う。
その瞬間。
『アカネダカディスク』

『ニビイロヘビディスク』
『セイジガエルディスク』
三者三様の声が響くと同時に、まるで折神を召喚する時のように、巨大なディスクアニマルが虚空から呼び出された。
「ホンマに、出来た……！」
「よぉし、それじゃあ本番はここからだ」
ヒビキが言うと同時に、召喚された3体のディスクアニマル達が、次々にコエトリを襲う。茜鷹はその翼で敵を打ち、鈍色蛇は巻きついて動きを拘束し、青磁蛙は高く跳躍して上から押しつぶすように相手の顔面に着地する。
「それじゃ、最後と行くか」
「……ああ」
『音撃武装！』
まるで示し合わせたように、ヒビキと丈瑠の声が重なる。
否、声だけでは無い。シンケンマルを構える丈瑠の姿と、装甲声刃（アームドセイバー）を構えるヒビキの姿もまたぴたりと重なっていた。
――まるで、殿が2人いらっしゃるようだ――
――ヒビキさんが、2人いる――
色合いや雰囲気までもが似ているせいか、流ノ介とイブキが同時に思う。それ程までに今の2人は見事にシンクロしていた。
すると、彼らの声に応えるように……3体のディスクアニマルが、サムライハオーの体を覆った。それはまるで、ヒビキが装甲声刃（アームドセイバー）で装甲響鬼（アームド）になる時のように。
全員がそう思ったのだろう。完成されたその巨人の名を、9人の声が同時に宣言する。
『装甲（アームド）サムライハオー、天下平定！』
「何が……何がアームドだ！　この私に……アヤカシと魔化魍の力を持つこの私に敵うものかぁ！」
怒鳴りながら、コエトリはその刃を構え、真っ直ぐに装甲（アームド）サムライハオーへ向け突進する。先程よりも更にあがった速度を伴って。

だが……

「お前がアヤカシと魔化魁の力を持っていると言うのなら」

「こっちは音撃とモヂカラを持ってるんだ。悪く思うなよ？」

言うと同時に、装甲（アームド）サムライハオーの刀がコエトリを捕らえ、切り裂く。

まるで嘘のように、サムライハオーの動きが軽い。茜鷹の装甲版……鋼鷹の特徴は、纏った者のスピード強化。故に、サムライハオーのスピードも上がったのだ。コエトリの動きを上回る程に。

「それじゃ、終わりと行きますか」

「この一撃で、止めだ！」

丈瑠が言うと同時に、シンケンジャーは己が刀を、鬼達は己が武器を構え……

「音撃！」

「モヂカラ！」

『大合奏斬り！』

６人のモヂカラと、３人の音撃が、装甲（アームド）サムライハオーを通じて増幅され……モヂカラは牛ディスクから、そして音撃はまるで装甲（アームド）響鬼が「鬼神覚声」を行うかのように構えられた剣から放たれる。

その二重（ふたえ）の清めに耐えきれず……コエトリは案外と呆気なく、この世から完全に消え去ったのであった……

「もう行かれるのですか？」

「ちょっと、音撃も習ってみたかったかも」

「僕はまだ、弟子を取れる程、成熟した鬼じゃありませんから」

別れ際。

流ノ介と茉子の言葉に、イブキは少し困ったような顔をしたが……すぐに、いつものにこやかな笑顔に戻ると、彼らに向かってそう答える。

紆余曲折、と言う程大きなすれ違いもなかったが、彼らと共に戦

えた事は大きな意味があるような気がした。
「じゃあなトドロキ。あんたの剣、忘れないぜ？」
「うちも……絶対に忘れへん。モヂカラも剣も精進して極めます」
「それが良いっす。自分も鍛えて、２人に負けない様にしておくっす！」
千明とことはに宣言され、トドロキも負けじと宣言する。ある意味、最も気があったのは、この３人なのかも知れない。
そして……
「俺の寿司、いつか食いに来いよ！　屋台引いて待ってるから！」
「……待ってるぞ。外道衆を打ち倒してな」
「ああ。いつか……時間がある時にでも、な」
やたら明るい源太と、最後まで殿の威厳を崩さぬまま言い放つ丈瑠に、ヒビキは飄々とした顔で答える。
その言葉が終わると、３人の鬼はトドロキの車に乗り込み……そして、志葉家を後にしたのであった。
するりと現れた、銀色の幕を通って。

こうして。６人の侍と３人の鬼はそれぞれの日常に戻った。侍達は外道衆との戦いに備え更に日々の鍛錬に励み、鬼達は魔化魍との戦いのために己を鍛える事を怠らなかった。
シンケンジャーは、ことはの笛の音を聞く度に、音の力で戦う鬼達を思い出し。
鬼達は古文書の書を見る度に、文字の力で戦う侍を思い出した。
何故、あの時アヤカシが魔化魍の力を手に入れたのかは分からず終いであったが……それでも、彼らは己が敵と真っ直ぐに向かい合い、戦い続けるだろう。
何はともあれ、西暦２００９年。シンケンジャーと響鬼編、まずはこれにて。

「残念だったでありんすなぁ、爪牙たん」
先の見えぬ闇の中、1人たそがれるアヤカシ……爪牙に向かって、1人の女が声をかけた。
銀色の、どこかメタリックな印象を持たせる服。どことなく着物のような印象を受けるが、実際の着物ならその丈はもっと長いだろう。女の着ている服の丈は、せいぜい腿までの長さしかない。
爪牙とは違い、人間と同じ愛らしい印象の顔立ちをしているが、その目はどこか狂気を孕んでいた。
「なに、所詮は実験であろう。『あれ』が人間以外にも扱えるのか、と言うな」
「ま、それは否定しなんすが……倒せたのなら、御の字と言う物でありんした」
「しかし、鬼の存在に気付けぬのは我が不覚。呆気ない幕引きに茫然自失よ」
「鬼は爪牙たんのせいでは無いでありんす。全ては邪魔するあいつらのせいでありんしょう？」
廓言葉を使うその女は、慰めるように爪牙の肩を軽く叩く。
しかしその手に体温と言うものは存在しない。ただひんやりと、金属特有の冷たい感触があるだけだ。
「２００８年でわっちが挽回しんす。多分、『あれ』との相性は、ガイアークが1番良いと思いんす故」
「ならば……気をつけるのだな。連中がまた、対応する戦士を送って来ないとも限らん」
「爪牙たんは優しゅうおすなぁ」
「廓言葉とは異なる言語が混じっておるぞ、ステラ」
ステラと呼ばれたその女は、ニィとその口角を吊り上げ……
「では次はこのわっち、ガイアーク害務大臣、ムダニステラが、ゴーオンジャーをやっつけるでありんす」

四之巻：真剣なる侍（後書き）

朱杖：無茶ぁぁぁぁっ！

白刀風虎（以降、白刀）：煩いぞ、朱杖炎雀　（ズビシッ）

朱杖：ごはっ！　だから、前にも言ったよな風虎！　首筋に手刀はやめれ！　死ねるわ！

白刀：フン。死なんくせによく言うで？　何が無茶だというのだ？

朱杖：お前、今回の話を見て何も思わなかったのか？　何だよ、「装甲（アームド）サムライハオー」って！
百歩譲って出来たとしよう。だけどな、どう考えたってシンケンマルの柄にディスクアニマルの小せぇ穴が入る訳がねぇだろうが！

白刀：何を今更……無茶、無謀、設定無視は辰巳結愛の十八番では無いか。今更足掻いた所でどうなる訳でもなし。諦めろ。ちなみに私が手渡しておいた特殊仕様と言う事になっている

朱杖：達観しすぎだ、風虎。つかお前何やってんだ！？
それにしても、次はゴーオンジャーか。色んな読者様から言われてる事だけど、コラボるライダーは……

白刀：カブトだ。そこはばれているから別にオープンで良いだろうつまり……「マッハ全開でワームを倒すぜ、スピードル！」と言う感じで事が運ぶのでは無いか？

朱杖：つーか……「世界一キラキラなアニ」と「地獄兄弟の兄貴」の奇跡のコラボだろ？　うわぁ、引くわぁ。映像で見てみたい気分に駆られてる俺に引くわぁ……

白刀：そう思っている読者様は、案外と多いと思うが……まあ良い。それでは、次回、「ＧＰ０５：最速ノカブト」で会おう

朱杖：タイトルはもう決まってるのかよ！？

白刀：２０１１年８月２３日、「シンケン＆響鬼編」の修正＆加筆完了だ

GP05：最速ノカブト

西暦２００８年。様々な機械生命体が住む世界である「マシンワールド」から、人間が住む世界であるここ……「ヒューマンワールド」に、ガイアークって言う連中が逃げ込んできた。

あいつらの目的は、この綺麗な「ヒューマンワールド」の空、海、大地を汚染して、自分達の住みやすい世界に変えてしまう事。

それを止めるため、ガイアークと同じ「マシンワールド」から、オレ達「炎神」が突入。人間の相棒を見つけて、ガイアークの企みを阻止するヒーロー……炎神戦隊ゴーオンジャーとゴーオンウィングスになってもらってるって訳。

あ、自己紹介がまだだったな。オレっち炎神トリプター。炎神の中でも空を舞う事の出来るオレ達は、「ウィング族」って呼ばれる、数少ない種族なんだ。

空はオレの縄張りさ。オレっちの相棒である人間の名前は須塔大翔（すとうひろと）。オレは尊敬を込めて、「兄貴」って呼んでる。兄貴はゴーオンウィングスの片翼、黄金の戦士、ゴーオンゴールドだ。

ガイアークの幹部である害地副大臣、ヒラメキメデスを倒し、何となくゴーオンジャーとも仲良くなりかけたそんなある日の事。まさか、こんな事が起こるとは……オレっち、全く想像してなかったんだ、バタバタバタ～！！

「あれ、大翔じゃねーか」

「１人なんて珍しいね」

「走輔（そうすけ）と……範人（はんと）か」

１人で散歩していた大翔に、赤いジャケットを着た男……江角（えすみ）走輔と、ほぼ同じデザインの緑のジャケットを着た男、城（じょう）範人が、その両手いっぱいに買い物袋をぶら下げて声をかける。

どうやら相変わらず、馬鹿みたいに能天気な連中らしい、と心の

中で溜息を吐きつつ、その2人を見やる。
「お買い得」と書かれたシールが袋から覗いているのを見ると、タイムセールを狙って食料の買出しをしてきた所らしい。随分と侘しいものだな、と思いつつも、そこは言わぬが花と言う奴である。
「偶然だな大翔！　こんな所で会うなんて」
「ホントホント。散歩の途中？」
「……まぁな」
慣れと言うのは随分と恐ろしい。走輔達の能天気かつ馴れ馴れしい態度も、最近は不快に思わなくなってきている自分が怖い。
出会った当初は、「自分達よりも後から炎神に選ばれた、ロクに戦闘訓練も積んでいない素人集団が」と見下していたのだが……ひょっとすると、彼らの内にある熱い何かに、自分も影響され始めているのかも知れない。
とは言え、そんな事を言おうものなら調子に乗りそうな彼らの事。それに自身のガラでもないので、決して口には出さないが。
そんな風に大翔が思った瞬間。脇から現れた1人の男が、走輔がズボンのポケットに入れていた財布を奪い、勢い良く駆け出して行った。
それがスリ……と言うか強盗と言うか、とにかく泥棒だと気付くのに、3人して一瞬の間を要し……
「ああっ！　俺の財布！　俺の全財産！」
「待て！」
大翔と、妹の美羽は生まれながらに「人の悪意」を感知する事ができると言う特異な力を持っている。
しかし、最近はガイアークと言う強烈過ぎる悪意をほぼ毎日のように感知していたせいか、今回の泥棒の悪意が小さすぎて気付かなかったらしい。
――これも、慣れか……嫌な物だな――
口の端に苦笑を浮かべつつ、とにかく相手を追う。
一方で走輔は盗られた財布が本当に「全財産」なのだろう。大翔

とは対照的に、必死の形相で相手を追う彼ら対し、追われている方はナイフをちらつかせながら牽制する様に怒鳴る。
「どけ、死にてぇのかぁ！」
等と怒鳴っているが、常日頃からガイアークと、言葉通り命懸けで戦っている彼らにとって、ナイフは別段怖い物ではない。勿論、刺されたら痛いでは済まない事くらいは承知している。小さいとは言え、刃物は刃物だ。
そんな泥棒の前から。
鼠色の作務衣を纏い、片手に料理で使うボウルを持っている男が、悠然と現れた。年は走輔より少し上だろうか。やや垂れ目気味ではあるが、端正な顔立ちをしている。
そんな彼の前を強行突破しようと、泥棒はナイフを振り回すが、その刃先はギリギリの所で青年の喉元を空振る。
青年は怯える様子もなく、逆に悠然とその騒ぎの前を通り過ぎる。逆にその堂々とした態度に怯んだのか、泥棒の動きが鈍り……あっさりと追いついた範人と大翔の2人に取り押さえられ、何とか逃げだそうともがく。
「危ないだろ！　何で逃げない！？」
「俺は誰からの指図も受けない」
あわや大惨事につながりかねなかった青年の行動……と言っても歩いていただけだが、それに対して礼よりも先に走輔の怒声が飛ぶ。
泥棒は捕えたし、それはある意味、その青年のお陰ではある。しかしだからと言って、刃物を避けるでもなく逆に堂々と刃物に向かっていくような真似は頂けない。
だが、青年は彼らに背を向けたまま、カランコロンと下駄の音と共に、どこか不遜な態度で言葉を返すだけ。
「何だってぇ？」
「俺の通る道は俺が決める。それにもう1つ！　下手にかわせば、折角の豆腐が崩れる」
「あのなぁ……運よく助かったから良いような物の、下手すりゃ、

刺されてたかもしれないんだぞ！？」
「『運良く』と言う言葉は俺には無い。第一、そんな鈍（なまくら）は俺の命を奪えない」
確かに泥棒が持っていたナイフは小物だが、それでも刺さりどころが悪ければ死んでしまうだろうし、鈍と呼ぶには鋭すぎる。追って行った自分達も大概無謀だが、目の前の青年は更に無謀。
そんな彼の態度に、走輔だけでなく範人と大翔までもが呆然とその青年を見つめてしまう。
その行動が悪かったのだろうか。少しだけ2人の拘束が緩んだのを機と取ったか、泥棒は何とか力付くで拘束から逃げ出すと、青年の方……と言うより人の少ない方が偶々青年の方だっただけだろうが、そちらに向かって必死の形相で走っていく。
邪魔と判断したのか、その場に走輔の財布を投げ捨てて。
その瞬間。
「忘れ物だ」
そう言うと同時に、青年は投げ捨てられた財布を下駄の爪先で蹴り上げ、そのままそれを逃げる泥棒の頭に向かって蹴り飛ばす。
「あああぁぁぁっ！　それ、俺の財布っ！」
走輔の悲鳴じみた抗議も虚しく、蹴られた財布は見事に泥棒の後頭部を直撃、跳ね返った財布は青年の手の中にすっぽりと収まっていた。
「凄い。サッカー選手みたい」
「並大抵の技じゃないな……」
純粋に感動する範人に対し、感心したように言う大翔。そして、こちらを振り返りもせずに青年は走輔に向かってぽぉんと財布を放り渡す。
その、妙に気障ったらしい態度が気に入らなかったのか、走輔は憮然とした表情で青年の背中を見やり……
「何なんだ……お前……」
「お祖母ちゃんは言っていた。天の道を往き、総てを司る男」

「何ぃ……？」

すかした奴だと大翔は思うが、そこは自分も同類と言う自覚は多少なりとも存在しているのか、黙ったまま振り向いた青年の顔をじっと見つめる。

彼の表情は自信に満ち溢れており、確かに「天の道を往く」と言う自身の言葉に偽りは無さそうだ。

などと考えているうちに……青年が歩いてきた方から、黒いスーツ姿の男が、ヒィヒィと息を荒げ、顔を赤く染めながら、必死の形相で走ってきた。

しかもスーツの青年は、大きく息を1つ吐くと……作務衣の青年に向かって、半ば恨みがましい視線を向け……

「て、天道！　おま……お前、ちょっ……早い……」

「……よぉ、遅かったな加賀美」

作務衣の青年……天道と言うらしい彼は、どこかからかう様な笑顔を向けると、スーツの青年……こちらは加賀美と呼んだ方に向かって苦情を受け付けぬようにしらっとした態度で言葉を返す。

「『よぉ、遅かったな』じゃないだろ!?　まったく、何やってんだよ……」

親友と言った間柄なのか、加賀美の苦情の中にも諦めと親愛の情が滲んでいる。一瞬だけ視線を天道から外し、走輔達へと巡らせ……何があったのかを悟ったのか、その顔に苦笑が浮かぶ。

「……何か、既視感を覚えるんだけど」

「奇遇だな。俺もだ」

「俺達がはじめて会った時の状況に似てるのか？」

――そりゃまたあまり嬉しくない出会い方だぜ――

心の内で思う走輔を余所に、呼吸を整え終えた加賀美がゆっくりと天道に近付くと、彼の手の中にあるボウルを覗き込む。

「お、今日は豆腐料理か!?　何にする気なんだ？」

「今日は豆腐となめたけの味噌汁だ」

「なんだ、麻婆豆腐じゃないのか？　残念」

「何故お前が、俺の料理を食べる気満々なんだ？」
「良いだろ、偶には！」
まるで掛け合い漫才のようなやり取りが、路上で展開される。今時ボウルに豆腐を持って歩いている作務衣の男、と言うのもどうかと思ったが、路上で漫才を繰り広げるこの光景もどうかと思う。少なくとも、立ち止まっている以上は通行の邪魔だ。
まあ、呆然と見ている自分達も、人の事は言えないだろうが。
「何なんだ、この2人は……？」
不審そうに大翔が呟いた瞬間。彼らはようやく自分達をはっきりと認識したらしい。
だが次の瞬間、目の前にいた2人の青年の顔が驚きに彩られる。まるで、しばらく会っていなかった知り合いにでも会ったかのように。
「え？　矢車、さん？」
「だが、あの男にしては随分と明るい印象だな」
「じゃあ、まさか……」
今度は2人が不審そうに顔を顰めて呟いた瞬間だった。唐突に、彼らの真横から、1人の青年が現れたのは。
……その人物は、走輔と同じジャケットを着ている。おまけに顔や仕草、黒子の位置さえも走輔と全く同じ青年。
そう……もう1人の「走輔」と呼んでも過言では無い存在だった。
「えええ！？　俺が、もう1人いる！？」
「え？　なになに？　走輔、双子の兄弟でもいたの？」
「まさか、俺に生き別れの双子の兄弟が！？」
その存在に対し、真っ先に走輔自身が驚き、次に範人がぽかんとした表情で自分の隣にいる走輔と、いきなり現れた「走輔」を交互に見やる。そして大翔は、一瞬だけ驚いたような顔をした物の……すぐに「走輔」から放たれる、この上ない悪意を感じ取ったのか、険しい表情でその「走輔」を見つめた。
「何者だ？　走輔じゃ無いな？」

険のある大翔の声に、「走輔」は見下すような視線を大翔達に向け……

「なぁ大翔、邪魔するなよ。俺は……『俺』になるんだから」

走輔なら絶対に浮かべないであろう、悪意に満ちた笑みを浮かべて言うと同時に、目の前にいた「走輔」の姿がゆらりと揺らめき、変わる。

人間より、一回りくらい大きいか。全体的にずんぐりした感じの緑色の異形に。何処となくだが、昆虫のサナギのようにも見える。

「うわ、化物！」

「ガイアークの新手か！　なら、マッハ全開でぶっちぎるぜ！」

走輔、範人、大翔が、その異形を自らの敵であるガイアークの「蛮機獣」と認識したのか、それぞれ変身する為のソウル……チェンジソウルを構えた瞬間。彼らの前にいた男2人の方が、僅かに行動が早かった。

彼らの腰には銀色のベルト、その手にはいつの間にか機械で出来た赤い甲虫と青い鍬形虫が、それぞれの手の中に納まっており……

『変身！』

『Ｈｅｎｓｈｉｎ』

その2人が宣言すると共に、何処からか電子音が響き……その身が、銀色の鎧で包まれる。印象としては、サナギのようだ。

作務衣の男は青い瞳、黒スーツの男は赤い瞳の戦士に変わり、真っ直ぐにその異形へと駆け出すと、まずは赤目の戦士が飛び蹴りの要領で相手の顔面を蹴り飛ばし、続いて青目の戦士が構えていた銃の様な物で緑の異形を撃ち抜く。

異形は唸り声のような物を上げながら、数歩後ろに下がり……その横に、幻影の「走輔」の顔を映し出すと、その顔が忌々しげに歪んだ。

『畜生……何でこの世界に、カブトとガタックがいるんだよ！』

「何？」

異形の言葉に、大翔の顔が軽く歪む。

「この世界」と言う言い方をしたのを考えると、この異形は、このヒューマンワールド以外の世界……マシンワールドやサムライワールド、ジャンクワールドと言ったところから来たと言うのだろうか。

――なら、今戦っている戦士も？――

「この世界、か」

「なあ天道、ひょっとして俺達……違う世界に来ちまった？」

「ああ。どうやら、そのようだ」

２人の会話を聞いて、やはり、と思う。どうやらこの２人も、ヒューマンワールド以外の世界から来た存在らしい。どこの世界から来たのかは、良く分からないが。

「とにかく、ワームがいる以上、被害が出る前に倒す！」

そう赤目の戦士が宣言した瞬間。

電子音が響いた。それも……２人の戦士とは、別方向から。

『Ｒｉｄｅｒ　Ｓｌａｓｈ』

その音と共に。どこからか飛んできた光の刃が、走輔に成りすました異形を切り裂き……相手は悲鳴を上げる暇もなく、緑色の爆煙を上げてその場で散った。

「な……何、何なの今の！？」

範人の驚きの声を聞きながら、大翔は光の刃が飛んできた方……自身の後ろを振り返り、見つめる。そこに立っていたのは、紫の鎧を纏い、同じ色の剣を構えた戦士。その姿はどことなく、蠍を連想させる。

その戦士の剣から、機械で出来た蠍が離れると……鎧は消え、１人の青年の姿となった。

その出で立ちは……一言で表現するなら王子。白を基調とした服装に、首元にはビラビラとしたスカーフ。軽く茶の入った髪も、ごく緩やかにウェーブがかかっている。

「そんな、馬鹿な！？」

いつの間に変身を解いたのか、天道と加賀美が、その青年を信じ

られないと言わんばかりに……それこそ死人でも見るかのような眼差しで、相手を見つめている。しかし見られている方は気にした様子は無い。むしろ、その反応は当然と言わんばかりに苦笑し……

「確かに、俺は『神代剣』であって、『神代剣』じゃない。……俺も、ワームの擬態だ」

その言葉と共に、先程の「走輔」同様、「神代剣」と名乗った男の姿が、一瞬だけ異形へと変化する。

先程の緑色の異形とは異なり、今度はスマートな、銀色の蠍を連想させる姿だった。同じ蠍でも、今の姿は生物らしい印象を受けたが、先程の紫色の方は鎧のような機械めいた印象が強い。

「じゃあ、やっぱり……！」

「だが！　俺は俺だ。全てのワームは俺が倒す。……俺自身も含めて。我が友カ・ガーミ、永遠のライバル天道。そして……」

いきり立つ加賀美を制すように言うと、今度はちらりと「神代」がこちらを見た。

未だ何が起こっているのかわからず、パニック状態になりつつある走輔と範人、そして冷静になろうとするがやはりパンク状態になりつつある大翔の3人を。

「この世界の戦士。炎神と共に戦うお前達にも、聞いて貰わなければならない。何しろ、この世界の危機……と言っても過言では無い」

「この世界の危機、だと？」

訝る大翔に、彼は真剣な表情で頷く。今の所、異形とは言え悪意は感じられない。信用しても、良いように思えた。……もっとも、「擬態」と言う言葉が引っかかってはいたのだが。

「だが、まだ話すには早い。爺やが言っていた。急がば割れ間に落ちる、と。もう1人が今、他の面々を集めている。それまで待て」

「お祖母ちゃんが言っていた。急いても事は仕損じるな、ってな」

――それを言うなら「急がば回れ」と「急いては事を仕損じる」じゃないのかな？――

普段聞く格言とは異なる言い回しで放たれた言葉達に、心の中で

冷静に範人がツッコミを入れる。どうやら向こうでは加賀美が自分と同じ事を思っているらしく、軽く頭を押さえて苦笑を浮かべている。

「俺、何か訳わかんなくなって来ちまった……」

奇妙な空気が漂う中、走輔は頭を抱えて考え込み、範人は持っていた荷物をどうしようかなぁとのんびり思い。そして大翔は、奇妙な胸騒ぎを覚えていた。

ガイアークとは異なる、何か別種の悪意を……この時彼は、感じ取っていたのかもしれない…

GP05：最速ノカブト（後書き）

玄金：いや～年明けちゃったねぇ。シンケンジャーのＴＶ本編も急展開、波乱の幕開けになったし。こっちはこっちで波乱の幕開けって感じ？

青器：あら、随分とご機嫌ね玄金？

玄金：そうかなぁ……？
さて、今回はカブト、ガタック、そしてサソードの登場……って、えぇぇぇぇっ!?　サソード!?　何、結愛ちゃん、「死者蘇生」のカードでも使った!?　って言うか、彼、ゲームから除外されたんじゃ無かっ……

青器：某カードゲームみたいな表現はやめなさい。そもそも、今回現れたサソードこと「神代剣」は、別のワームによる擬態、と言う設定なのよ

玄金：……でも、随分良い人っぽいけど？

青器：原作でもそうだったでしょう？　神代剣と言う男は、ワームに対する「思い」が強すぎて、ワーム本来の本能のような物まで駆逐してしまうのよ。それが、今回も起きてしまったって訳

玄金：それ、作中で説明した方が良かったんじゃ？

青器：するんじゃないかしら？　多分
それにしても……天道の登場シーンは、カブトの第１話……加賀美との出会いのシーン、そのままね。何のひねりも無いわ

玄金：それは言っちゃダメだよ。ほら、前回は「戦う鬼と遭遇」パターンだったじゃない？　今度は「最初は一般人？」って感じにしようと思ったら、こうなったんだって

青器：随分と安易な事ね

さてと、辰巳の執筆ペースは落ちているけれど、これからもお付き合い頂けると嬉しいわ

玄金：次回、また会おうね～

06

「なかなかゴーオンジャーに勝てないでおじゃる」
「蛮機獣の強さも、そう簡単には上げられないぞよ」
「最近ではゴーオンウィングスも、鬱陶しく我々の邪魔をしてくるなり」
『はあ～あ……』
大きな歯車が回る広間。ここはガイアークの本拠地、ヘルガイユ宮殿の真ん中。そこで、3人の幹部が、カウンターバーの様な作りをしている席で、ネジやらナットやらをつまみにして、深い深い溜息を吐いた。
1番背が高く、渋い声の金色の存在は、害地大臣ヨゴシュタイン。その肩書きの通り、大地を汚す事を目標としている蛮機族。語尾に「なり」が付くのが、彼の特徴だ。
半身ずつで銅色と銀色の2色を持つ、甲高い男の声をしているのは、害気大臣キタネイダス。彼は大気を汚くするのが得意な蛮機族であり、語尾に「ぞよ」とつける。1番細いのも、ひょっとすると彼かも知れない。
そして唯一、人間と同じ顔をしているセクシーな紅一点は、害水大臣ケガレシア。水を汚す蛮機族で、2人の仲間からは「ケガちゃん」と呼ばれる事もしばしば。語尾に「おじゃる」をつけるあたりも可愛らしい。
そんな彼らの目下の敵は、マシンワールドにいた頃からの仇敵である「炎神」を味方につけたこの世界の人間……ゴーオンジャーとゴーオンウィングス。幾度となく蛮機獣と呼ばれる機械生命体を生み出しても、悉く彼らに倒されてしまい、彼らの願い……自分達の住みやすい、大地を汚し、大気を汚くし、水を汚した……所謂、汚染された世界に住むという計画は、一向に進んでいなかった。
正直、蛮機族を生み出すためのアイディア切れと言う感もある。

溜息を吐きたくなるのも当然だろう。
　そんな彼らに1つの影が近付く。ケガレシア同様、人間と同じ顔。髪は高く結われ、金属で出来ているらしい服は、どこか着物を連想させた。
「なぁんか、暗いでありんすねぇ～」
「何者ぞよ！？」
「お初にお目にかかりなんし。わっちはガイアーク害務大臣、ムダニステラと言う者でありんす。ステラと呼んでおくんなし」
　ムダニステラと名乗ったその女は、振り返って敵意を向ける三大臣に対してすっと頭を下げる。その仕草は、どこと無く昔いたと言うこの世界の高級娼婦……花魁と呼ばれるそれを連想させる。
「害務大臣……？」
「なりか？」
「そうでありんす～。実は、そんな風に落ち込んでいる三大臣の皆様にご助力を……と思い、わっちはこのようにヒューマンワールドにやって来たでありんす」
　暗く、落ち込んでいた3人に比べ、異様なまでのハイテンションでムダニステラはそう言うと、1本の細長い「何か」を彼らに見せ、手渡す。
　その奇妙な物体をしげしげと眺め……やがて、不審その物の表情で、ケガレシアが問いかける。ひょっとすると、「可愛い女幹部」の座が奪われるかもと危機感を持っているからかも知れないが。
「これは、何でおじゃるか？」
「蛮機獣のパワーアップアイテムなりよ～。これを使うと、ちょっと面白い事になりんす」
「こら！　『なり』はヨゴシュタインの口癖ぞよ！」
「真似をしないで欲しいなり」
「あうわぁ……食いつくトコは、パワーアップじゃなくてそこでありんすか……」
　一瞬だけ驚いた様な、そして憐れむような顔をしたが、それでも

彼女はにっこりと綺麗に笑うと……

「さあ！　スペシャル蛮機獣を作って欲しいのでありんす。わっちはここで応援してるでありんすよ～」

無責任とも取れるその一言に、3人は顔を寄せ合い……

「本当にあいつは信用できるのでおじゃるか？」

「何か、胡散臭いぞよ」

「害務大臣と言う肩書きも、微妙なり」

「追い返すぞよ？」

「本当に蛮機族なのか、疑わしいなり」

「そもそも、蛮機獣が欲しいなら自分で作ればいいでおじゃる」

「あうぅ、聞こえてるでありんすよぉ……何なら、わっちを利用するだけって考え方でも良いでありんすからぁ……」

軽く落ち込みながら、ムダニステラは何とか3人にその気になって貰おうと泣き落としにかかる。無論、そんな物は効きやしないのが蛮機族……ガイアークなのだが。

しかし、実際こちらとしても行き詰っているのは事実。ならば……持って来た物を利用させてもらうのもアリかも。そして上手くいったらその時の手柄は奪ってしまおう。そんな考えが3人の中に浮かび……その日、1体のスペシャル蛮機獣が生まれた。

＊

ジャラ、と音を立てながら、1人の男が陰鬱な表情で歩いている。

彼の名は、矢車（やぐるま）　想（そう）と言う。闇に身を沈めた男だ。黒い革のジャンパーに、同じ素材のパンツ。ジャラリと言う音は、彼が自らの身に「枷」のように纏っているチェーンの音らしい。

「……世界は……俺には眩しすぎる……」

目を細め、本当に眩しそうに彼は空を眺める。そうして思い出すのは、彼が亡くした「弟（あいぼう）」の事。

……本当の兄弟だった訳では無い。だが、その生き様が、そして

人生が。自身とあまりにも似通っており、見捨てていられなくなった。だから、「弟になれ」と誘い、2人で闇に身を沈めた。「相棒」と呼び、共に光を疎い、そして己は底辺にいるのだと言う、心地よい痛みに酔いしれた。

だが……その彼も、矢車すら知らぬ「闇」を知り、そして……

「あれから何年も経つと言うのに……忘れられない、か」

そう言って彼がポケットから取り出したのは、どこかの写真家が取ったという、白夜の写真。

「闇に身を堕とした俺達でも、見れる光がある」と、勇気付けられた写真だ。

一緒に見に行こうと、「弟」と誓った白夜を……彼はまだ、見る事が出来ないでいた。経済的な問題もあったが、何よりも……彼の中ではまだ、整理がついていないのかもしれない。

――我ながら、随分と甘いものだ――

思いながら苦笑したその時。ポンと肩を叩かれ、振り返る。

そこに立っていたのは1人の女性。自分よりも僅かに年下といった所か。利休鼠色の、虎のアップリケのついたパイロットジャケットのような物を着ており、脚線美に自身があるのか、随分と短い丈のパンツを履いている。髪はポニーテールに括られており、それなりに愛らしい印象を持つ。

誰だ、と矢車が問うよりも先に、女性の方が先にむくれたような表情で言葉を紡いだ。

「もぉ！　こんな所にいたの、アニ？　探したんだから！」

「何？」

「今日は私と一緒に買い物に付き合ってくれる約束でしょ！？　逃げようたって、そうは行かないんだからね」

不審に思う矢車をよそに、彼女はポンポンと言葉を投げつけてくる。しかも、矢車の腕をぐいぐいと引っ張って。

……どうやら、誰かと勘違いしているらしい。

「悪いが……俺に妹はいない」

「……何言ってるの、アニ？」
「だから、人違いだ」
呆れたような溜息と共に、冷たくそう言い放ってその場を去ろうとするが……女性がしっかりと自分の腕を掴んでいて離さない。振り解いて立ち去っても良いのだが、随分としっかり掴まれているので、恐らく振り解くのも一苦労だろう。
そんな矢車の考えをよそに、彼女は頭の先から爪先までを何度もなめるようにして見つめるが……
「そりゃあ、今日は服装がいつもの世界一キラキラな感じとは違うけど……何処から見てもアニじゃない。ね、ジェットラス」
まるで誰かに同意を求めるように放たれた言葉に、思わず矢車は周囲を見回す。だが、この場には自分と目の前の女性以外誰もいない。
――俺に見えない誰かでも見えているのか？――
と、少々失礼な事を思った次の瞬間。女性は何やらグリップのような物を取り出し、そこに何か四角い物……正確には長方形の２つの角を斜めに切り落としたような形の六角形の物だったが……をはめ込むと、ヴンと小さな音が鳴ると共に、ホログラムが浮かび上がった。
虎とジェット機を掛け合わせたような、アニメーション。それがまるで、意思ある者のようにこちらを見やり……
『ギィィン。確かに、大翔以外の何者にも見えないな』
「でしょう？　おかしなアニ」
どうやら自分は、「大翔」と言う男と勘違いされているらしい。しかも、どうやらその男と瓜二つのようだ。
ふぅ、と軽く溜息を吐くと、矢車は自分に出来る最大級で冷たい視線を彼女に送ったその瞬間。
「女性にそんな氷のような視線を送るのは、失礼と言うものですよ？」
「……誰だ？」

唐突に聞こえてきた声の方に、冷たい視線をそのまま送ると……そこにはギターケースを持った、茶色い服装の男が、小学生くらいの少女を連れてこちらに向かっている所だった。

その顔に、矢車は覚えがある。

「女性は花。花に氷は冷たすぎる」

「あなたは？」

「失礼。さすらいのメイクアップ・アーティストです。あなたの様に美しい方は見た事が無い。例えるなら、海から生まれ出でた美しい……美しい……」

「『美しい人魚姫』」

「そうそう。それそれ」

まるで漫才の様な掛け合いをする男性と少女。それは、かつて属していた組織、ＺＥＣＴの誇る鎧、ドレイクの資格者である風間大介と、彼がいつも連れて歩いていたパートナー、ゴンこと高山百合子だった。ちなみに「ゴン」とは、一時期百合子が記憶を失っていた時に、「名無しの権兵衛」からつけられた通り名のような物である。

相変わらず、肝心なところで間の抜けた男だと思う。優男、女誑（おんなたら）し……発言からはそう取れなくも無いのだが彼の場合心の底から「全ての女性は花」と思っている節がある。おそらくは、根っからのフェミニストなのだろう。

そんな彼の後ろには、見覚えのない団体がいる。青、黄色、黒の、色違いのジャケットを纏った3人組だ。デザインから考えると、矢車の腕を掴んでいる女性の友人か何かだろうか。

「美羽、それに大翔さんも！」

「兄妹仲良く、買い物っすか？」

黄色のジャケットの女性に次いで、青いジャケットの男がにこやかな笑顔で言葉を放つ。

――……どうやら、余程自分の顔はその「大翔」に似ているらしいな。だが、どうせ俺なんか……――

軽く苛立ちにも似た感情を覚えながら、近寄ってくる3人組と、何故か楽しそうにクックと笑いをかみ殺している風間に視線を送る。
「お前、今俺を笑ったな？　ハッ、良いよなぁ、光に愛された奴は」
「私は風。闇も光も関係なく、自由気侭に花の間を行き交う者。しかし花は光のある所で咲き誇る。……光に愛されているのは、私ではなく花の方ですよ」
囚われない、と言いたいのだろうか。だが、今の風間はゴンと言う存在に充分囚われていると思う。だが、その事に何か感想があるかと問われれば全くない。通り過ぎるだけの存在だと言うのなら、自分の側からも通り過ぎて欲しい。
風は時に、忘れかけた光の匂いを運んでくるから。
微かな光の気配に、再度目を顰めた刹那、自分を「アニ」と呼んでいた女が矢車の顔をひょいと覗き込んだ。
「アニ？　どうかした？　今日ちょっと変よ？」
「そう言われてみれば……ちょっと雰囲気が違うかも。ほら、スマイルスマイル」
銀色の女同様、黄色いジャケットの女も矢車の顔を覗き込むと、彼の頬をつまんで無理矢理口角を上げさせる。
言葉通り、彼に笑顔を作らせるためなのだろうが……その行動に不快感を覚え、自分に出来る最高具合の冷たい視線を相手に送る。
「だから、そんな視線を送るのは失礼と言う物ですよ。送るなら男性に送るべきでしょう？」
「男なら良いんすか！？」
「適当すぎる……」
矢車の表情を窘めた風間の言葉に、青、黒の順に抗議の声をあげている。
だが、矢車にとってはどうでも良い。早くこの煩い集団から離れ、自身の望む闇の中へと帰りたい。
そんな風に思ったその瞬間。
『ウガァァッツ！』

『ウガッツ！』

灰色を基調とした、何やら機械のような印象を抱かせる異形達が、前触れもなく現れた。

しかも……どう考えても、こちらに対して友好的とは言えない雰囲気だ。

その異形の後ろには、親玉だろうか、黒い……蒸気機関車の様な姿の異形が偉そうに立っている。それを見止めるや否や、隣に立っていた女性……多分、美羽と言うらしい彼女は矢車から手を離し、能天気そうに近付いてきた3人組もまた、キリとした表情でその異形達に目を向ける。

「ガイアーク！」

黒いジャケットの男が叫ぶ。恐らく目の前の異形が、ガイアークと言う名なのだろう。ただ、それが個体名なのかひっくるめてそう言うのかは分からないが。人間を襲う「何か」なのかもしれないが、目の前の連中を助ける義務も義理も無い。こちらに襲い掛かってくるようなら、返り討ちにしよう……そう思いながら、矢車は自信の体に巻きついている鎖を、再びじゃらりと鳴らす。

その音に反応するように、灰色の、おそらくは雑魚と呼んでも差し支えなさそうな異形達が、一斉に彼らに向かって襲い掛かる。

それに反応するように、風間はゴンを後ろに下がらせ、どこからか自身の変身アイテムであるドレイクグリップを構える。が、それよりも一瞬だけ、カラフルなジャケットを着た面々が声を上げる方が早かった。

『チェンジソウル、セット！　Ｌｅｔ’ｓ、Ｇｏ－Ｏｎ！』

綺麗に重なった声を訝しく思い、矢車は軽く眉を顰めて隣の女性を見やる。

次の瞬間、そこに立っていたのは「銀色の戦士」。青、黄色、黒のジャケットの面々も、対応する色のボディスーツを纏った戦士になっている。

デザインとしては同じ種類の戦士かもしれない。車を連想させる

3人組とは異なり、銀色の彼女だけは僅かに飛行機のようなデザインも含まれており、彼らとは違うようにも見えるが。

彼らは腰に下げているホルスターから銃のような物を取り出すと、迷う事無く異形達に向かってエネルギー弾を発射する。

「成程、美しいだけでは無いと言う訳ですか」

いつの間に隣に来たのだろう、風間が女性2人の方を見ながら、感心したように呟いている。

「もぉアニ！　アニも見てないで変身して！」

スペースシャトル型の何か……時に短剣の様に振るい、時に銃の様にエネルギー弾を発射するそれを構えながら、銀色の女性が呆れたような、そして怒ったような声で矢車に言う。

――さっきから人違いだと言っているんだが？――

僅かに苛立ちながらも、彼は深い……それはもう心底呆れ返ったような深い深い溜息を1つ吐き……

「良いよなぁ。正義の味方ぶってる奴は。……変身」

『Ｈｅｎｓｈｉｎ』

『Ｃｈａｎｇｅ　Ｋｉｃｋ－Ｈｏｐｐｅｒ』

電子音が響き、矢車の体を緑の鎧が覆う。マスクドライダーシステムの1つ、脚力が強化された、バッタモチーフの戦士。その目の色は、地獄の底を映しているかのような、暗い赤。対を失った、哀れな存在。

……キックホッパー。ＺＥＣＴではそう呼ばれる戦士である。

「え！？」

「ゴーオンゴールドじゃないっす！？」

「どういう事だ！？」

襲い来る灰色を蹴り飛ばす矢車を見て驚く面々。その様子を、風間がやれやれと言わんばかりの表情で見ているのが、非常に腹立たしい。

「フっ。どうやらゴーオンジャーだけでなく、仮面ライダーとやらもいるようだな！」

機関車らしき怪物の言葉に、ピクリと矢車の体が震える。
「お前今……俺を笑ったな？」
低く……殺意すら篭った声でそう言うと、矢車は高く飛び上がり、群がる灰色の異形を次々と上から踏み潰すようにしつつ、真直ぐに機関車のような異形の前へ降り立って、強化された脚力で強烈な蹴りを放つ。
「はぎゃっ！？」
まさか一瞬で間合いを詰められるとは思っていなかったのか、その異形は情けない悲鳴を上げてよたよたと数歩、後ずさる。それを追撃せんと、矢車は再びその足を異形に伸ばすが……
「こ、これは一旦轢くしか……じゃなかった、退くしかないっ！」
半ば涙声でそう言ったかと思うと、異形の姿が一瞬だけぶれ……そして、次の瞬間には矢車の、そして他の色取り取りの戦士達の視界から消えた。
「まさか……今のはクロックアップですか」
「……ちっ。逃げられたか」
不審その物の声で言う風間に対して、矢車は相手がクロックアップした事よりも逃げられた事に苛立っているらしい。吐き捨てるようにそう言って、変身を解除する。
そして……同様に変身を解除したカラフルな面々……あの異形はゴーオンジャーとか呼んでいた……に囲まれている事に気付く。
「ズバリ、イメチェン……じゃなさそうっすね」
「お前、何者だ？」
それも、あまり歓迎されていない雰囲気で。
――厄介な事になりそうだ――
そう思いながら矢車もまた、彼らに向かって濁った瞳を向けるのであった。

０６（後書き）

玄金：ようやく更新？

朱杖：この量を？　こんな長期間かかるような話か？

玄金：でもね、この話、アップ直前に結愛ちゃんの変なこだわりのせいで、１０行位削除されたらしいよ？

朱杖：……拘るなよ、ワードでの枚数とか……
まあ良いや。で？　今回は結局、「アニに間違われた矢車さん」の話だった訳だが

玄金：うん。本当は最後まで影山を出すか否かを迷ってたらしいんだけど、結局自己枚数制限に引っかかったから、今回はかかなかったって。登場しなかったんだって。って言うか……全然似てないと思うんだけど、想君と大翔君の２人。顔だけじゃん
雰囲気とか、真逆だと思うんだけど

朱杖：それ言ったら進めないだろーが、この変態黒亀蝮
それにしても、今回はまた新キャラか？　誰、「ムダニステラ」って。ハイテンションな女とか……今までの結愛の作品には比較的珍しいタイプじゃね？

玄金：だね～。今回の黒幕共のキャラ付けで、１番あっさり決まった存在が、この「ステラ」だったらしいよ。名前は結構悩んだらしいけど

朱杖：ああ……「奴」を連想させる単語が入っていて、なおかつガ

イアークっぽい名前って制限付いてるからなぁ。そりゃ悩むだろ。
前回の「星髪」も壮絶に悩んだらしいしな

玄金：ちなみに、キャラの元ネタは「ナデ○ロ！」って言うＣＤに出てくるキャラだって

朱杖：明かすなよ、そんな裏話。確かに結愛の中にあるキャラのストックは少ないけどよぉ……
……ってか、今回このペースで大丈夫なのか？　４話で１クロス完結って出来そうになくね！？

玄金：……まあ、そこは結愛ちゃんの腕の見せ所でしょ。僕は知～らない

朱杖：責任感を持て、このド変態がっ！　一応このクロスの間は、お前があとがきの進行役だろうがよ！

玄金：うわぁ、面倒くさいなぁ……
それじゃあ皆、また次回会おうね～

GP07：仮面ライダー

神代剣と名乗った男に連れられて向かったそこには、既に香坂連達他のゴーオンメンバーが揃っていた。しかし、何やら揉めている様に見える。

――何かあったのか？――

大翔が不審に思ったその刹那。彼の妹である、美羽の怒声がその場に響いた。

「あなた、一体何者なの！？　アニじゃないの！？」

「だから、違うと何度も言っただろう」

美羽の問いに答えたのは、詰め寄られた男。その顔を見て……

「えっ！？」

「嘘！」

「……どうなっている？」

走輔達が、ピキリと音を立てて硬直した。その中でも1番驚いていたのは、大翔だろう。彼らしくない、ぽかんとした表情でその男を見ている。

何故ならば。詰め寄られている男と、自分の顔が同じだったからだ。瓜二つと言っても良い。

声も似ているかもしれない。自分が不機嫌になって、つい凄んでしまう時などはあれ位の低い声が出る。

服装や雰囲気は全く異なるが、並んで立っていなければイメージチェンジと言われて納得してしまうだろう。

ただ、大翔とは正反対の、暗く澱んだ雰囲気と表情を浮かべている点を除けば。

「あれ、ドッペルゲンガー？」

「よく似た他人って奴か！？　それとも実は双子だったとか！？」

「そんな訳あるか」

大翔そっくりの黒い男……「闇大翔」と仮に呼ぼう……の方を指

差しながら問いかける範人と走輔に、極力冷静を装って答える大翔。
少なくとも、自分の兄妹と呼べる存在は、妹である美羽だけのはずだ。だから、あそこにいる自分そっくりの男は、自分とは何の関係も無いはず。自身の両親が、「実はあなたには生き別れの双子の兄弟がいて……」とでも言い出さない限りは。
「矢車さん!?　それに風間も……何だってこんなところに!?」
そんな大翔達とはまた別の意味で、加賀美が驚愕の声を上げる。その声でようやく美羽達もこちらに気付いたらしい。大翔と、「闇大翔」……加賀美いわく、矢車と言うらしいその男をを交互に見やり……更にその場が混乱した事は、言うまでもない。

その後、十数分間にも及ぶ長い混乱の後、何とか落ち着いた面々は、改めて互いに自己紹介をした。自己紹介とは言っても、本当に簡単な物……名前を言うくらいの物であったが。
「で？　いきなりだけど……何が起こっているのか聞かせてくれないか、神代」
「当然だカ・ガーミ。だがその前に……そこ、俺の話を聞け!」
「メイクアップ、完了」
「うわぁ、凄い!　あっという間!」
「キラキラに拍車がかかったみたい……」
自己紹介が終わるや否や、マイペースにも風間は女性陣に向かってメイクを施し、施された方はその手際の良さと出来の素晴らしさにキャイキャイとはしゃいでいた。
ずびしっと言う擬音と共に指をさしながら怒鳴る神代など、軽やかに無視して。
「くっ……まあ、良い。あいつらは放って置くとしよう」
ヒクヒクとこめかみを引きつらせながらも、神代はそう言うと、軽く1つ咳払いをし……そして、真剣な表情で語り始めた。
まずは、ゴーオンジャーに対して、自分達がこの世界とは異なる

世界……例えて言うなら「ライダーワールド」とも呼べる場所から来た存在である事、かつて「ワーム」と呼ばれる、「人間に擬態する異形」と戦ってきた存在である事、そしてここにいる神代自身もまた、ワームの1人である事を。

「君も、ワームなんっすか!?」

「そうだ。俺の名は神代剣。神に代わって剣を振るう男……であると同時に、スコーピオンワーム。それが俺の正体だ。だから……この件が終われば、俺はお前達の手にかかろうと思う」

「何だと?」

気高く……だが同時にとても寂しげにも見える表情で放たれた神代の言葉に、大翔が軽く睨むように彼を見ながら問い返した。

少なくとも、目の前の男からは「悪意」を感じられない。それなのに、相手は自分を殺せと言っている。その理由が……正直、分からなかった。人間に害をなさないのであれば、何も死を選ぶ必要は無いはずだが……

「今はまだ、俺は『神代剣』として存在している。だが、いつまたワームとしての本能が暴走し、人間を襲うとも限らん。そうなる前に……俺が他の誰かに、『俺』と同じ思いをさせる前に、俺を殺せ」

真剣な表情で言われ、一同は言葉を呑んだ。固い決意のような物を、神代から感じ取る事ができたから。

重くなりそうな空気の中、唯一矢車だけは、何の感慨も抱いていないような視線で神代を見つめていたが。

「……話を続けるぞ」

重くなりそうな空気を切り替えるかのように、神代は周囲の反応を待たずに言葉を続ける。

入り込んだワームの数こそ少ないものの、その狙いはこの世界の重要人物……国を動かす指導者や、金融関係者、はたまた教会のお偉いさんなど、中枢を乗っ取り、じわじわとこの世界の人間を死に追いやっていく事であり、それを止めるために、天道達「仮面ライダー」と呼ばれる戦士達が、本人の意思に関係なくこの世界に連れ

て来られた事、そして……それを引き起こした黒幕が、現在ガイアークと手を組んだという事を。

そこまで神代が一息に言い終えた瞬間。殺気にも似た気配を感じ取ったのか、非戦闘員であるゴン以外の全員が一斉にある方を向く。

「ゴン、下がっていろ」

１２人の視線を受けた「そいつら」……ゴーオンメンバーと全く同じ姿をしている7人は、口の端を邪悪にゆがめて笑う。

本来の彼らなら、絶対にしないであろう笑みが、妙に気に障る。それがワーム達の擬態と言うものであると気付くまでに刹那、そして相手が繰り出した攻撃をかわしたのは、逡巡の間であった。

「うわぁ……僕と同じ顔だ。ちょっと気持ち悪いや」

「確かに。不気味すぎる」

「本日2回目の俺の擬態、キター！！」

本物の範人、軍平、そして走輔が自身のチェンジソウルを構えながら言う。その後ろでは、早輝と美羽が、自身の擬態を薄ら寒そうに見つめていた。

鏡に映る自分は見慣れていても、それはあくまで平面の話。おまけに左右も反転しているから実際は似て非なる自分を見ている事になる。だが、ワームの擬態は完璧に自分と同じ姿形。それが生理的な恐怖を感じさせているのかも知れない。

「へっ。今度こそゴーオンジャーを倒し……ライダーも、マッハで倒してやるぜ！　ウガッツ！！」

走輔に擬態していた存在が、ぱちんと指を鳴らす。と、地中からガイアークの擁する機械の兵士、ウガッツが、その名の通り地面を穿ちながら勢い良く地上へと飛び出してきた。

「ガイアークとワームが、手を組んだっすか！？」

「ズバリ、その通りっす」

連の言葉を、連に擬態したワームが肯定する。その瞬間、「走輔」以外の全員が自身の正体を現した。

「ヤダ、気持ち悪い～！！」

「こんなのに成り代わられるなんて、冗談じゃないわ！」
女性陣の抗議の声が合図になったかのように、綺麗に敵と味方が2つに分かれる。
そして、それがさも当然であるかのように、戦士達は横一列に並び……
『チェンジソウル、セット！　Ｌｅｔ’ｓ、Ｇｏ－Ｏｎ！』
炎神ソウルを模した白いソウル……変身に用いる為のチェンジソウルを、それぞれの変身ツールに差し込み、ゴーオンジャーとゴーオンウィングスは、その姿を7色の戦士に変えた。
「マッハ全開！　ゴーオンレッド！」
ゴーオンレッド。ＳＰＥＥＤ　ＫＩＮＧの異名を持つ、赤き隼のスーパーカーを相棒とするは江角走輔。
「ズパリ正解！　ゴーオンブルー！」
ゴーオンブルー。ＣＹＣＬＯＰＥＤＩＡの異名を持つ、青き獅子のバスを相棒とするは香坂連。
「スマイル満開！　ゴーオンイエロー！」
ゴーオンイエロー。ＳＷＥＥＴ　ＡＮＧＥＬの異名を持つ、黄色き熊のアールブイ車を相棒とするは楼山早輝。
「ドキドキ愉快！　ゴーオングリーン！」
ゴーオングリーン。ＶＡＧＡＢＯＮＤの異名を持つ、緑のオルカのバイクを相棒とするは城範人。
「ダッシュ豪快！　ゴーオンブラック！」
ゴーオンブラック。ＣＨＡＳＥＲの異名を持つ、黒きシェパードのパトカーを相棒とするは石原軍平。
「ブレイク限界！　ゴーオンゴールド！」
ゴーオンゴールド。ＰＨＩＬＯＳＯＰＨＥＲの異名を持つ、金の禁鳥のヘリを相棒とするは須塔大翔。
「キラキラ世界！　ゴーオンシルバー！」
ゴーオンシルバー。ＬＯＶＥＬＹ　ＳＥＮＳＡＴＩＯＮの異名を持つ、銀の虎のジェットを相棒とするは須塔美羽。

彼らが各々の名乗りを上げると、それに対応した色の爆煙が上がる。それはまるで、この世界が彼らを応援しているかのように、仮面ライダー達には感じられた。

「正義のロードを突き進む！」

『Ｔａｋｅｏｆｆ、ゴーオンウィングス！』

『炎神戦隊、ゴーオンジャー！！』

金と銀の空の戦士、ゴーオンウィングスと、五色の大地の戦士、ゴーオンジャーが名乗った瞬間、一際大きな「祝砲」が上がり、現実とは程遠い世界が演出された。

「……何か、随分と派手だなぁ……」

呆然と、彼らの名乗りを見た加賀美が呟く。その手には、いつの間にか彼の変身用ツールであるガタックゼクターが握られているが。

「お祖母ちゃんが言っていた。派手な料理よりも、素朴な料理の方が人の心に残るってな」

「いや、ある意味１番派手なお前に言われても……」

言いながらも、彼らは自身の変身ツールを構え、宣言する。

『変身！』

『Ｈｅｎｓｈｉｎ』

その音が響いた直後、彼らの体を一瞬だけ銀色の外装が覆う。が、すぐにそれも弾け飛び、その下から色取り取りの鎧が姿を見せた。

赤い甲虫、カブト。それは天の道を往き、総てを司る男、天道総司の変身した姿。

青い鍬形、ガタック。それは賀(よろこ)びを加え、世界を美しく新たにする男、加賀美新の変身した姿。

紫の蠍、サソード。それは神に代わって、剣を振るう男、神代剣の変身した姿。

水色の蜻蛉、ドレイク。それは風の間を抜け、大きく全ての花を介す男、風間大介の変身した姿。

緑の飛蝗、キックホッパー。それは矢を番えた戦車から、闇を想う男、矢車想の変身した姿。

ゴーオンジャーに比べれば随分と質素な印象を抱かせる色合いだが、それでも十二分の存在感を発揮していた。
それを見やった瞬間、「走輔」もまたその姿を変える。だがその姿は、ワームではなく……ついさっき、矢車に撃退されたはずの、キカンシャバンキだった。
「そんな……蛮機獣が、走輔に擬態!?」
「ンなぁにぃぃ!! アリなのか、それ!?」
「アリだ!」
走輔の抗議を聞きとめると同時に、キカンシャバンキの姿が消える。……いや、消えたように見えた。
「クロックアップか!」
言うのが早いか、加賀美と神代もまた、クロックアップと呼ばれる高速移動で相手の動きについていく。蛮機獣はその2人に任せて平気と判断したのか、他のライダー達はウガッツやワームをたたき伏せにかかり、ゴーオンジャーとゴーオンウィングスは足手纏いになると判断したのか、やはりクロックアップしない存在……サナギ態のワームやウガッツと言った、「小者」と呼んで差し支えない存在を相手にしていた。
「……1つ聞いても良いか?」
「おや、珍しい。君が私に質問なんて」
襲い来るワームとウガッツを撃ち抜きながら、天道が風間に声をかける。声をかけた方も、かけられた方も、どこと無くだが余裕を感じられる。
「ドレイクゼクターは、あの時破壊されははずだが?」
「ここに来る前、ある女性占い師から聞いたのですが……このドレイクゼクターは、『違う世界』から来たそうですよ」
サソードゼクターもねと付け加え、風間は次々とウガッツを撃ち抜く。その回答に納得したのか、天道は小さく笑うと、近寄ってきたウガッツを叩き斬る。
その少し先では、ゴンを守るようにしながら早輝と美羽が、自身

に擬態していたワームに向かって弾丸を放つ。
『早輝、あんな奴、ドカンと蹴散らして、実力の差ぁ見せたり！』
『ギィィン。私の相棒（バディ）は美羽だけだ。彼らでは成り代われない』
２人の炎神であるベアール・ブイとジェットラスが言うと同時に、ワームはその横に幻影の早輝と美羽の顔を映し、それを悲しそうに歪ませる。その表情に、一瞬だけ自分達が嘆いているような錯覚に陥る。
そんな彼女達に気付き……後ろに立っていたゴンが、ふぅと溜息を１つ吐き出すと、真っ直ぐに彼女達を見上げて言葉を放った。
「あの人達に代わられて良いの？　お姉さん達は世界中で１人しかいないんでしょ？　誰も、誰かの代わりにはなれないんだよ」
その言葉に、弾かれたように２人は顔を上げる。
――満開のスマイルを浮かべられるのは――
――キラキラの世界を彩れるのは――
『出来るのは、私しかいない！』
その声と同時に、彼女達は憤然とワームに向かって攻撃を再開した。一切の迷いを断ち切って。
更に少し離れた場所では、走輔が自身の武器であるロードサーベルで敵を斬り散らし、大翔がウィングブースターと呼ばれるスペーススシャトルを模した短剣でとどめを刺す中、矢車は密集し、群がるウガッツを上から連続で踏み潰す。
「……大翔と言い、あの矢車って奴と言い……あの顔は上から攻撃するのが好きなのか？」
「ちょっと待て走輔。お前、俺をどんな目で見てるんだ？」
「こんな目」
――メット越しで目なんか見えるか――
走輔のボケとも真剣とも取れる一言に、大翔が心の中で冷淡に突っ込んだ瞬間。それはほぼ全てのウガッツとワームが倒れた時だったのだが……ドンと言う派手な音と、聞き慣れない電子音が彼らの耳に届いた。

「何だ！？」

訝しく思い、視線を音のした方に向けたそこには……苦しげにそこに倒れている加賀美と神代、そして何故か、漆黒だったはずの体が、真っ赤になっているキカンシャバンキの姿があった。

「何が起こってるんだ！？」

『物凄いエネルギー反応だ！　気をつけろ、走輔！！』

走輔の持つ炎神ソウルから、スピードルの声が響く。それと、ほぼ同時だっただろうか。真っ赤に……それこそ燃えるような赤を纏っていたキカンシャバンキの皮がずるりと剥け、中から真っ白な別の存在……おそらくはリニアモーターカーと思われるフォルムがその下から現れる。

「まさか……脱皮した！？」

「そんな馬鹿な。さっきまでだってクロックアップしてたんだぞ！？」

基本的に、ワームはサナギの時にクロックアップは出来ない。しかし、キカンシャバンキ……いや、リニアバンキは、ワームで言うサナギ、つまりキカンシャだった時からクロックアップし、こちらを翻弄していた。

それが不自然に思えたのだろう、ぜいぜいと息を吐きながら、加賀美は風間の言葉に対し、半ば怒鳴るようにそう声を上げた。その、刹那。

「遅かった、か。他の連中はどうでも良いけど、兄貴までやられるのは嫌だなぁ……」

そんな声が、矢車の耳に届く。そして、その声の方向には……自分と同じデザインの、黒い飛蝗の姿。

「おま、え……」

声が掠れるのを感じながら、思わず矢車は手を伸ばし、近寄ってくる黒い飛蝗の腕を掴む。

２度と会えないと思っていた相手。共に闇の中の光を見ようと誓った存在。そして……己が手にかけた、最高の……

「相棒……」
「ごめん兄貴。遅れた」
そう返す存在は、黒の飛蝗、パンチホッパー。それは漆黒の影を纏い、屍の山を瞬く間に築く男、影山瞬が変身した姿……

＊

「おお！　パワーアップしたぞよ！」
「キカンシャバンキが、リニアバンキになったでおじゃる」
「さすが、害務大臣殿の持ってきた物なり！！」
一方、ヘルガイユ宮殿では。キカンシャバンキからリニアバンキへと進化……と呼んでも過言では無い変化を遂げた蛮機獣を見て、三大臣がわいわいとはしゃいでいた。
しかしその一方で、「パワーアップアイテム」を持ってきた害務大臣……ムダニステラは、形容し難い、複雑な表情でそれを眺めている。
「……いや、これはちょっと……わっちも驚きでありんすよ」
「どういう意味ぞよ？」
「元々、今回持ってきた『アレ』は、『ワーム』の力を記憶した物でありんすが……通常ならせいぜい、擬態能力とクロックアップが出来るだけの物であったはず。脱皮までは出来ないはず……でありんす」
――これは、効き過ぎたと言う事でありんすかねぇ――
心の中でのみそう呟き……彼女はその口元を、邪悪に歪めたのであった。

GP07：仮面ライダー（後書き）

玄金：……旅に出てたんじゃなかったっけ、結愛ちゃん

白刀：旅先で創作意欲が沸いて、書いたらしいぞ。ちなみに今回は……と言うか今回も漫画喫茶から投稿だ
一体この女はどれだけの人間に迷惑をかけていると思っているのだか

玄金：うわーい、怒ってる怒ってる
まあ、気持ちは分かるけどね

白刀：で、今回の話だが……ゴーオンジャーサイドのはずが、物凄くライダー寄りになっているのは気のせいか？　炎神の台詞など、スピードルの1行だけだぞ？

玄金：いや、何かね、名乗りが思った以上に行数食ったらしくて。これでもすっごく短くしたらしいよ？

白刀：……仮面ライダーの紹介の下りは要らんだろう。何も無理に名前の漢字に当てなくてもいいと思うのだが。加賀美新や矢車想は、かなりの無茶があると思うぞ

玄金：あ、それは重々承知の上だってさ。元々、「戦いの神」とかにしようと思ったらしいんだけど、それじゃカブトとガタックだけになっちゃうじゃない。だったら漢字字典とにらめっこして、漢字の意味から無理矢理引っ張る方が楽だって思ったみたい

白刀：どっちもどっちだな……
それから思うのだが、リニアモーターカーはエコな乗り物の印象が

あるのだが？

玄金：……エコ！？　アレが！？　何言ってんの風虎ちゃん、そんな訳無いじゃない（力説）！！

白刀：何？

玄金：アレ、電磁石で動いてるんだよ？　どれだけの電気食うと思ってるの！？　おまけに電磁石を維持するためにかなりのエキチ使うし……

白刀：えきち……？　ああ、液体窒素の事か。しかし、随分と詳しいな玄金武士

玄金：まぁね。１回大学でミニチュア模型作ったからね。某電気街行って部品買ってハンダで付けて回線組んで……それでも進むどころかその場でユラユラするだけってどうなのさ！！　アレは流石に泣いたよ！！

……それじゃ次回でこのコラボも終了。噂によると、次回の巨大戦はぶっちする気らしいよ

白刀：噂ではなく、事実だ。今回はそれなりの理由で「巨大戦無し」、と言う事にしたらしい

……一応、次回に壮絶にがっかりされる前に言っておかねばな

玄金：うわーい、実に堂々とした逃げ！！　それじゃあ皆、また次回会おうねー

２０１０年２月２４日

玄金：新君の名前解釈に１文追加、想君の名前解釈を変更したらし

いよ。少しはマシになったんじゃないかな？

08

黒の飛蝗……パンチホッパーこと、かつて闇の中へ沈み、そして死んだはずの影山瞬の登場に、ライダー達の動きが止まった。

「お前は……」

「俺もそこの蠍と同じ。ワームの擬態だ。だから……この一戦が終わったら、また兄貴の手で、俺を闇の底へ叩き返してくれないか」

それまでは、また兄貴の弟として戦いたい。そう付け加え、現れたパンチホッパーは並み居るウガッツを殴り飛ばし、リニアバンキまでの道を開く。

だがそいつは、もう1度「影山瞬」という存在を手にかけろと言う。喪った者は2度と戻らない。その事は理解しているし、数年かかったが納得もした。

それなのに……今また、ワームの擬態とは言え、同じ顔、同じ声、同じ性格をした存在が帰ってきた。

……ひょっとしたら、ワームと言う存在の本来の存在意義は、そう言った「喪った悲しみを癒す為」にあったのかもしれない。

大切な人を喪い、悲しみに暮れる存在を、その「大切な人」に成りすます事で癒す。その見返りに、人間社会の中で平和に暮らしていく……それが、いつの間にか「人間を滅ぼすための擬態」へと目的が変わったのかもしれない。

何故か、加賀美は現れたパンチホッパーを……そして隣で戦うサソードを見て、そう思った。

矢車が悲しんでいたから、「彼」は影山に擬態したのかもしれない。そして、この場にはいない岬祐月が悲しんでいたから、「こいつ」は神代に擬態したのかもしれない。

その上で……彼ら自身が耐えられなかったのだろう。自分が、ワームである事に。だから「殺せ」と頼んだ。

……随分と、残酷な仕打ちをする物だ。例えそれが仮初の姿でも、

その姿の者が死んだら、悲しむ人間がいると言うのに。
「そいつは、お前達の仲間か？」
何も知らない大翔が、矢車と影山を見比べながら問いかける。色こそ違え、同じデザインの2匹の飛蝗。だからこそ「仲間か」と問いかけたのだろう。
その問いに、矢車はフンと鼻で笑い……
「『仲間』？　そんな生温(なまぬる)い物じゃない」
「何？」
「こいつは俺の……相棒だ」
そう言うと同時に、矢車は影山の後ろに佇んでいたワームを蹴り、粉砕する。同時に影山も、矢車の後ろにいたウガッツを殴り飛ばす。
その様子と彼の答えに納得したのか、大翔も軽く頷き……
「成程な。なら……俺達も行くぞ、相棒」
『了解だぜ、アニキ！』
「トリプターソウル、セット。Ｇｏ－Ｏｎ！」
『バタバタバタバター！！』
ウィングブースターにセットされた、炎神トリプターのソウルが、エネルギーとなって敵を粉砕する。その後を追うようにして、影山が走り、取りこぼされた敵を、殴り飛ばす事で完全にその息の根を止めていく。
『へへっ！　アニキと俺のコンビネーションは凄いだろ！』
「はっ！　笑えよ。どうせ俺なんか、兄貴がいなきゃ、俺は何も出来ないんだから」
『うっ……それを言ったら、俺っちの方が何も出来ないと思うんだけど……』
暗く、陰鬱なのは鎧の色だけでは無かったらしい。トリプターまでも影山のネガティブな空気に巻かれ、自己嫌悪に陥りそうになる。
――そうだよ。どうせ俺っちも、ヒューマンワールドじゃアニキがいなきゃただのお荷物……――
「……トリプター、俺はお前が相棒で良かったと思っている。俺の

相棒はお前しかいない。……分るな？」

周囲を巻き込んでのネガティブ思考に呑まれかかっているトリプターに気付いたのか、大翔が溜息混じりにそう言葉を放つ。

大翔とて、トリプターと出会わなければ、今ここにはいない。おそらくは窮屈な社交界で愛想笑いを浮かべ、これが己の限界と諦めていただろう。そんな諦念を……そして限界を壊したのは、他でもないトリプターだ。

「俺はお前と言う相棒を持てて誇りに思う。お前は、違うのか？」

『……アニキ……そんなの、俺も誇りに思ってるに決まってる！』

感極まったように、アニメーションのトリプターの絵の目元には涙が浮く。それを横で眺め、影山は深い溜息を吐き出し……そして、陰鬱な声で言葉を吐き出した。

「良いよなぁ、キラキラ光ってる奴は。光に愛されてて。どうせ俺なんか……」

その声に、いつの間に隣に立ったのだろう。矢車が影山の肩を軽く叩き……

「相棒、俺達は光に愛されていない分、深い闇に愛されてる。……それ以上を望むのは、贅沢だ」

「……兄貴……っ！」

今の言葉のどこに感極まる部分があったのかは分らないが、影山には心打たれる「何か」があったらしい。嬉しそうに仮面の下で笑うと、襲い掛かるワームやウガッツを殴り飛ばす。

「なら……やるぞ、相棒」

「ああ、兄貴！」

「ライダーキック」

『Ｒｉｄｅｒ　Ｋｉｃｋ』

「ライダーパンチ！」

『Ｒｉｄｅｒ　Ｐｕｎｃｈ』

大きく……その飛蝗に似た外見その物のように。２人は高く飛び上がると、その足に、そして拳にタキオン粒子と呼ばれるエネルギ

ーを纏い、交差するようにして敵を蹴散らし、殴り散らす。
遠距離から打ち抜く光と、近距離から蹴り抜く闇。そんな好対照な2人の「兄貴」とその相棒達が、いつの間にがリニアバンキへの道を開いていた。それに気付き、真っ先にその道を走ったのは……2人の「赤」。
天道と走輔だった。
「サーベルストレート！」
叫びながら、まずは走輔がロードサーベルで横に一閃。そしてそのすぐ後ろを、天道がカブトクナイガン・アックスモードで縦に一閃する。
しかし……手応えが無い。
斬った物が、リニアバンキの残像だと気付いた瞬間、走輔の体は大きな衝撃と共に宙を舞っていた。
――高速移動って奴かよ！――
心の中で毒吐きながら、走輔は隣に走っていたはずのもう1人の「赤」の姿を探す。しかし、その姿を自分の視界に捉える事は出来ない。おそらくは、彼もまた「クロックアップ」なる高速の世界に突入した為だろう。
走輔には、それがとても悔しかった。
スピードに自信があったのに追いつけない……と言うのも多分にある。だがそれ以上に、相手が蛮機獣でありながら、それに対して一切手が出せないという事実の方が、悔しい。協力したいのに、自分が動けば足手纏いにしかならない。
正義の味方は、世界を守ってこその存在なのに。
そんな焦りを感じたのか、リニアバンキの攻撃から立ち上がった走輔に、神代が声をかける。
「おい、そこの赤いの」
「色で呼ぶなよ。俺には江角走輔って名前が……」
「そんな事より、蛮機獣に対抗したいのだろう？」
そう言って……神代は、1つのソウルを走輔に手渡した。

……カミサマの使いから贈り物だ、と苦笑めいた声と共に……

一方、天道の方はそのリニアバンキ相手に激しい攻防を繰り広げていた。

クロックアップした上で、それでも相手のスピードは自分を僅かに上回っている。ハイパークロックアップをした状態なら何とかなるかも知れないが、それも攻撃が当たらなければ意味が無い。

リニアモーターカー……ここでは、「磁気浮上式鉄道」の事を指す。これは、電磁石の力を用いて車体を浮上、推進させる事で摩擦による減速を低減させた乗り物だ。

その原理を利用しているのか、敵の体は地面から僅かに浮いており、減速する気配が無い。それどころか地面からの摩擦が無い事を利用し、動いている際に発せられる音も風のような空気の甲高い音だけと言う静かさ故に、居場所が掴み難い。

そもそも、何と反発し合って浮いているのかは分らない。だが、そこはガイアークとか言う組織が関わった異形だ、地球その物と反発しているのかもしれない。

厄介な相手になってしまった物だ、と思う。

相手はおそらく、何らかの形でワームの能力を手に入れた蛮機獣だろう。通常のワームならば、こんな動きはありえない。と、言うか耐えられない。機械の体だからこそ、こんな無茶なスピードを出し、無茶な攻撃が繰り出せるのだ。

しかも……相手は、その「反発する力」を上手く利用して、自身に向けられた攻撃を、僅かにだが曲げている。カブトクナイガンは、天道が纏う鎧と同じ、ヒヒイロカネという「金属」で出来ている以上、磁場の影響は少なからず受けてしまう。

近接戦は向かないとなると、銃撃戦に持ち込むしかない。しかし、相手が距離をとる事を許さない。結果的に、近接戦になってしまうのだ。

――さて、どうするか――

圧倒的に不利な状況下であるにもかかわらず、天道は冷静に周囲を見回し、事を焦らない。

天の道を往き、総てを司る者。それが天道だ。だからこそ、彼が強く望めばそれが叶う。少なくとも、彼の祖母はそう言っていた。だからこそ……望む。今、この状況を打破する事の出来る方策を。

そんな風に思った瞬間。

「ライダーシューティング」

『Ｒｉｄｅｒ　Ｓｈｏｏｔｉｎｇ』

その音は、天道自身の後ろから聞こえた。それが、クロックアップした風間の放った攻撃だと気付くと同時に、天道は大きく横へ跳び退り、エネルギー弾の弾道をあける。

だが、それすらも予測していたのか。リニアバンキは天道とは逆方向へ飛び、目標を見失った銃弾は近くの岩場にぶつかって弾け飛んでしまった。

『Ｃｌｏｃｋ　Ｏｖｅｒ』

「そんな……ある程度の追尾は可能のはずですが！」

「その速さを上回る敵、と言う訳だ」

「……どうしろと言うんです、そんな相手」

通常時間に回帰し、半ば呆れたような声で言いながら、風間は天道に声をかける。

その一方で天道の方は、いつの間にやらその手に銀色のプラスパーツ、ハイパーゼクターを構えていた。

「ハイパークロックアップで闘う。おそらく、勝算はそれくらいだろう」

「そう言う事なら、俺も行くぞ、天道！」

いつの間にか、加賀美もその手にハイパーゼクターを構えている。

……以前、「別の歴史」へ向かった際に手に入れた、ハイパーゼクターが。

『ハイパーキャストオフ！』

『Ｈｙｐｅｒ　Ｃａｓｔ　Ｏｆｆ』
『Ｃｈａｎｇｅ　Ｈｙｐｅｒ　Ｂｅｅｔｌｅ』
『Ｃｈａｎｇｅ　Ｈｙｐｅｒ　Ｓｔａｇ　Ｂｅｅｔｌｅ』
天道と加賀美の纏う鎧が更に変化し、２人の「角」の部分が１回りずつ大きくなる。
「風間、その辺の雑魚は頼む」
「やれやれ。突風からそよ風に……と言う訳ですか」
加賀美の言葉に、苦笑気味に返しながら風間は、いつの間にか２人の女性とはぐれてしまったらしいゴンを標的に定めたらしいウガッツに向かって容赦の無い連射をぶちかます。
何だかんだ言って、風間にとってゴンは大切な存在なのだ。
「ゴンもまた美しい１輪の花。それを散らそうとする風は疎ましい物ですからね」
そう呟き、彼は小さな百合の花を守る微風となるべく、駆け出していった。

「へっへ～ん！　そんじゃ、マッハ全開でぶっちぎるぜ！　準備は良いか？　相棒！」
『勿論だぜ、走輔！！』
「そんじゃぁ……ハイパークロックアップソウル、セット！」
『Ｈｙｐｅｒ　Ｃｌｏｃｋ　Ｕｐ』
神代から渡されたソウル……それは「ハイパークロックアップソウル」と呼ばれる物らしい。彼曰く、この世界に来る前に、黒尽くめの自称「神の使い」から、「多分役に立つと思うよ～」と言う一言と共に押し付けられた物だそうだ。
正直、その「神の使い」とやらを胡散臭いと思ったが、これが自分達に与えられた対抗手段だと言うのなら、やらないよりもやった方が遥かに良いはずだ。
そして走輔は、何の躊躇も無くマンタンガンにソウルをセットす

る。その瞬間、天道達「仮面ライダー」の物と同じ電子音が彼の耳に届いた。

そう認識した刹那。走輔のスーツが強化される。天道達の様な「鎧」ではないが、自分達のスーツをより強固にした様な印象だ。スピードルに似せたメットは、より嘴部分が大きく突き出し、肩にはショルダーガードの様な物がついている。握っていたマンタンガンは1回り大きくなり、左手に持っていたロードサーベルは刀身が自身のスーツと同じ、真紅に染まっている。

周囲の動きがスローになり、ウガッツの動きもそれを蹴散らす仲間達の動きも、皆全て遅すぎるように思える。唯一まともな速度で動いているのは、敵であるリニアバンキと、それと戦う天道と加賀美。それが分ると同時に、走輔はすぐに認識を改める。

周囲が遅くなったのではない。自分が……それこそ、マッハ全開の高速の世界へと突入したのだと実感した。

よく考えて動かなければ、おそらく自身が引き起こす衝撃波で仲間をも傷つけかねない。そう認識し、走輔はまずリニアバンキを仲間から遠ざける事を思いついた。

先程リニアバンキに攻撃された際に、自分の感じた衝撃の大きさを考えると、あながち考えすぎとは言えないだろう。

「行くぜ、相棒！」

『ドルドル！　ここからが本当のスピードキングだぜ！』

言うが早いか、走輔はリニアバンキに向かって一気に駆け出し、その体をロードサーベルで縦一閃に斬り裂く。が、それは妙な手応えと共に僅かに反れ、致命傷には至らなかった。

まさか走輔が高速移動してくるとは思っていなかったのか、リニアバンキはひぃ、と小さな悲鳴を上げ、加賀美はあからさまに驚いたような声を出した。

「あんた……クロックアップできたのか！？」

「へっへ～。正義の味方は、最後の最後で逆転の手段を手に入れるんだっぜ！」

そう言うが早いか、今度はマンタンガンを構え、相手を見据える。同時に天道と加賀美も、腰につけたハイパーゼクターの角を倒し、その足にタキオン粒子を纏わせた。

それが、最後の一撃と言わんばかりに。

「いかに電磁石と言えど、こちらの力が強ければ反発する力も保たない」

「つまり、エネルギー最大のこの攻撃を反らせるかって事だ！」

『Ｍａｘｉｍｕｍ　Ｒｉｄｅｒ　Ｐｏｗｅｒ』

『ハイパーキック！』

天道と加賀美の声が重なり、２人分のハイパーキックがリニアバンキの体を捉える。そして直後……

「スピードルソウル、セット！　Ｇｏ－Ｏｎ！！」

『ドルドルドルドルー！！』

音速を超えた、超速の弾丸がリニアバンキの胸を貫き……

「さ、産業革命……ならずぅぅぅぅっ！」

『Ｃｌｏｃｋ　Ｏｖｅｒ』

通常時間に戻ると同時に、相手の体が大きく爆発。そのまま、リニアバンキは息絶えた。

＊

「……あれ？」

「巨大化しないでおじゃる」

「どうなっているなりか？」

ヘルガイユ宮殿で、不審そうに呟く三大臣に対し、害務大臣ムダニステラはじりじりと入り口まで後ずさりながら、乾いた笑い声と共に自身の考えを述べる。

「多分、パワーアップ……と言うか脱皮に、エネルギーをかなり消耗したのではないか、と思ったりしちゃうでありんす。キカンシャからリニアへの脱皮自体が、一種の『産業革命』って言うか？　…

…あ、わっち、急用を思い出したでありんす。それじゃっ！」
「あ、逃げたでおじゃる！」
「待つぞよ、害務大臣殿！！」
追いかけようとした時には既に遅く。害務大臣を名乗る女の姿は、そこから跡形も無く消えていた。

＊

「終わった、な」
全ての敵を倒し、安心したように全員が変身を解き、互いに笑顔を向け合う。特に矢車は、影山に対して懐かしさと、ほんの僅かな困惑の色を浮かべて。相手も、困ったような笑顔を浮かべている。
そしてそれは、神代も同じ。おそらくは、自身の「死」を望んでいるためだろうか。
そう、部外者であるはずの大翔が感じ取った瞬間。大きすぎる「悪意」が、彼と美羽の感覚を撫で上げ、大翔は影山を、そして美羽は神代を抱えて大きく横へと飛んだ。
２人を抱えたのは、本当に反射だった。だがその反射は正解だったらしい。今まで彼らのいた場所には細剣を丁度心臓があった部分に突き出している女の姿があった。
銀色の着物のような物はどこと無く花魁を連想させるが、その身の放つ悪意はあまりにも強すぎる。大翔や美羽は勿論の事、悪意を感知する能力の無い走輔達まで、その女の悪意に当てられたのか、薄ら寒そうにその女を見やり、風間は怯えるゴンを守るようにその体を自身の後ろに隠した。
「あらら。避けられたでありんす。うーん、悪意に敏感な人間と言うのも、考え物でありんすねぇ」
「お前、何者だ！？」
「わっちでありんすか？　わっちはムダニステラ。肩書きの１つに『ガイアーク害務大臣』と言う物を持つ者。本当の肩書きは違うで

ありんすが、皆様にはその方が分かりやすいでありんしょう？」
　鋭い目付きで睨みつけて問う軍平に対し、ムダニステラと名乗るそいつは、にっこりと愛らしい笑顔を浮かべると軽く一礼を返す。
　その笑顔に、悪意は一切無い。いや、無いように見える。だが、見た目の表情に騙されてはいけないと、本能が告げている。
「兄貴」
「……どうした、相棒？」
「あいつが今回の元凶だよ」
「そう。あの女こそが……『俺達』を蘇らせ、そしてこの世界にワームを送った元凶」
　言いながら、神代と影山、２人の姿がゆらりとぶれる。仮面ライダーとしての姿ではなく、ワームとしての姿に。だが、それも一瞬の事。すぐに人間の姿に擬態し直すと、きつく相手を睨みつけた。
　それをどう思ったのか、彼女は軽く首を傾げ、むぅと唸り声を上げる。
「いやはや全く。本当に役に立たない虫けら共でありんした。折角この世界に連れて来たって言うのにろくな働きもせず。おまけに何で連れて来た覚えの無い『神代剣』と『影山瞬』が、ここにいるのでありんしょう？」
　ぱっと見た感じでは、隙だらけに見える。だが、それでも動けないのは、やはり彼女の持つ「悪意」のせいか。
　その感覚に、天道と加賀美は覚えがある。少し前に行った「異界への旅」。その終着点で出会った存在（元凶）と対峙した時によく似ている。
――まさか、こいつも――
――「奴」と同じ存在か――
　黙りこみ、答えが帰ってこない事を不快に思ったのか、それとも自身の中で出た答えが不快な物だったのか。ムダニステラは顔から笑みを消し、その目をするりと細め……
「……ああ。やっぱり『あいつら』の差し金でありんすね？　そうでありんしょう？」

「あいつら？　誰の事だ？　大人しく吐け！」
「虚勢張っても無駄でありんすよ、軍平たん。膝がガクプルしてるでありんすもん」
「ぐ、軍平『たん』！？　それに、これは……これは武者震いだ！」
「軍平、震え過ぎだよ……」
「ナイス漫才。……しかしこの感じで行くと、本当に何も知らずにここにいるって感じでありんすね～」
はあ、と心底疲れたような溜息を吐き出し、相手はカリカリと自身の後ろ頭を掻く。
その仕草でようやく硬直から抜け出せたのか、走輔が慌ててチェンジソウルを構える。同時に、天道もまた硬直から抜け出したのか、カブトゼクターを構え相手を睨みつけた。
「何でも良いっ！　お前が今回の元凶で、おまけにガイアークだって言うなら、マッハ全開で倒すのみだっぜ！」
「あ、それ、無理でありんす。だってお前ら、わっちがどこにいるか、分っていないでありんすもん」
走輔の言葉に、そうムダニステラが言った瞬間。
ドスリと、鈍い音が響く。
それと同時に、神代と影山……並んでいた2人の胸から、1本ずつ細剣の先が生えた。
「あ、が……！？」
突然の出来事に、その場にいた全員の視線がそちらに釘付けになる。そして、2人が貫かれたのだと気付いた時には、既に生えていた剣は引き抜かれ、その持ち主は付いた血を軽く振り払っていた。
彼女は自身に向けられたの敵意と驚愕、そして殺意の混ざった視線など気にしていないらしい。その場に倒れ、自分の足元で文字通り虫の息で転がって呻く2人の頭を踏み躙り、そのまま天道達の方へと蹴り飛ばした。
ダメージの大きさ故なのか、擬態を保てなくなってしまっている2人に蔑みの視線を向け、更に言葉を紡ぐ。

「虫けらは虫けららしく、すっからかんの脳みそでわっち達に操られていれば良かったのでありんす。正義の味方？　世界を侵略する為の『隠者の虫』如きが阿呆らしい。大それた夢を見たものでありんす」

「いつの、間に……」

「言ったでありんしょう？　『わっちがどこにいるか、分っていない』って。最初からここに居たでありんすよ。お前らが話していたのは、わっちの影でありんす。ほら」

にこりと笑い、そしてパキンと指を鳴らすと同時に、今まで会話をしていた方のムダニステラの姿が宙に溶けて消える。

あまりにも強大すぎた悪意のせいで、正確な位置が把握できなかったのだと、今更のように大翔と美羽も気付く。最初の一撃は、わざと自身達に気付かせ、彼女の言う「影」と会話させる。その隙に本体は影山達の背後を取り、今の攻撃に到ったのだろう。

「貴様……よくも相棒をォォォっ！」

「想たん、何を言っておいでなのやら。そいつらはワーム。本物では無いんでありんすよ？　本物は自分達の手で殺したでありんしょうに」

「ぐっ……」

「それに、そいつらだって死を望んでいた。優しい皆様の事、どうせ殺してあげるおつもりだったのでありんしょう？　わっちが殺して、何の問題がありんすか」

「っ！　黙れ！」

矢車の怒りが完全に沸点を超えたのか、即座にキックホッパーへとその身を変えると、薄笑いを浮かべて佇む女へ向けてタキオン粒子を纏わせた渾身の蹴りを放つ。

だが……狙っていたはずの女の姿はまたしても宙に溶け、今度は少し離れた小高い丘の上にその姿を見せる。

「お前達と遊ぶのも楽しそうではありんすが、あんまり遊んでいると楽しすぎて殺しちゃいそうでありんす。でもそれは、面倒臭い事

になるから駄目って言われているので、わっちはこの辺で失礼をば。
『皇帝に愛された子』と『女帝の子供達』に、永遠の闘争を。そして、平穏の無い人生を」
最後に、呪いにも似た言葉と、狂気に彩られた笑みを見せて。彼女は、霞の如くその場から消え失せた。
……戦士達に、後味の悪い「物語の終わり」を残して……

「えーん、思った以上に効きすぎたみたいでありんすぅ……産業革命（巨大化）してクロックアップしたら、被害は相当だったと考えられるでありんすのにぃ……」
「そうしたら、色々とまた売れたであろうにな」
「そうなんでありんすよぉ。うえーん、完全なただ働きだと知られたら、きっとわっち、後でものすんごーく怒られるでありんすぅ～」
「安心せよ。我などただ働きどころか赤字故。しかし……遊びすぎではあるまいか、ステラ」
「……えへっ」
とても神代と影山の2人を殺した者と、同一人物とは思えない程可愛らしく、ムダニステラは近くの小石を蹴り飛ばす。
「いやそれ誇れねぇだろうよ爪牙っ！　それから素のお前知ってると、その仕草は微塵も可愛くねぇんだよステラ」
「あ、天たん。可愛くないとは酷いでありんす」
「事実だからしょーがねぇだろうよ。しかし、アレとの相性も考えろって事かぁ。どうにも思い通りにならねぇなぁ」
そこは、どこかよく分からない空間。闇の中に浮かぶように、ステラと彼女に泣き付かれている星髪爪牙。そしてその2人に声をかけた1人の青年。
「天」と呼ばれたその男は、２０歳前後だろうか。灰色の道着に

似た服の上に、狼の毛皮を肩からかけている。左の目はアイパッチで隠しているが、黄金に光る右の目は、まるで獲物を狙う獣のように、爛々と輝いている。好青年の部類に入るはずだが、醸し出す空気の凶悪さが、人を寄せ付けない。

そんな彼も、ステラには甘いのか。ハン、と軽く鼻で笑うと、すぐに彼女の額を弾き……

「それからな、俺は『てん』じゃねぇ。『ティエン』だ。発音は正しく頼むぜ、ステラぁ」

「貴殿の名は読みにくいのだ、天狼（ティエンラン）」

「ひゃはは、爪牙ぁ、お前本っ当に堅苦しい奴だなぁ。ステラや鬼宿（きしゅく）程フランクに、とは言わねぇけど、俺達相手の時くらい、もう少し崩せ。こっちが疲れる」

はあ、と溜息混じりに言う天狼（ティエンラン）に、爪牙は僅かな笑みを返すだけに留まった。

「ま、良いけどよ。そんじゃ今度は、俺サマが行って来るわ」

「臨獣殿でありんすね！　お気を付けなんし～」

「取りあえず、死なん事を祈っているぞ」

「サーンキュ、ステラ、爪牙。そんじゃぁ……」

にいと口の端から犬歯を覗かせ、天狼（ティエンラン）は軽く伸びをする。瞬間、彼の纏う空気が徐々に狼の姿を取り……

「妖獣フェンリル拳の使い手……天狼（ティエンラン）サマの出番って事ったぁ！　ひゃぁっはぁっ！」

08（後書き）

玄金：何、今回のこの終わり方！？　絶対非難囂々だよね！？
……ま、いいや。困るの結愛ちゃんだし
その結愛ちゃんが、「後書き」のネタに困ったらしいんだ。だから……取りあえずここで、簡単なオリジナルキャラの紹介をしようって話になりました

星髪爪牙（以降、星髪）：どこかで聞いた事があるような話だな

玄金：いや、ほら。今まで設定紹介みたいな物はあったけど、君らの紹介無かったじゃない？　だからやっちゃおうかって言う結愛ちゃんの「温情」と言う名の「穴埋め」

星髪：身も蓋も無い輩め。まあ良い。それで今回は我が呼ばれたと言う事だな

玄金：そう言う事。じゃ、ちゃっちゃと自己紹介よろしく～

星髪：名は星髪爪牙。一応は「はぐれ外道衆」と言う立ち位置を持っているが、それが本来の姿ではない事は既に皆の理解の及ぶ所だろう。我の実際の肩書きは「星の弐」だ
我ら「7人」の中では、戦闘力は天狼（ティエンラン）と同等の2、3番目の実力を持っていると自負している
名の由来は、外道衆幹部たる者の共通項である、「体の一部」を入れた物だ。ちなみにはぐれ外道の名は全て漢字なのでな、それも相まって「髪」、「爪」、「牙」を入れている。ちなみに見目のデザインモチーフは七福神が1人、恵比寿
名前から察せられる通り、我ら「7人」は「星」と言う名の神の一

部と言う事になっている。故に、我らの名には「星」を意味する単語、もしくは「星」その物の名がついている。我はそのままだな、「星」と言う字が宛がわれている

玄金：いきなり正体のネタバレ！？　それってどうなの、アリなの！？

星髪：今更隠しても仕方あるまい。作者殿は単純である故、腹芸など出来んと言う事だ。つまり、今回の世界で暗躍している「アレ」と言うのも……

玄金：そこは……っ！　そこだけはせめて結愛ちゃんの考えてる通りに事を運んであげて……！　後半部分のデカレンジャーに行くまでは、明言しないつもりらしいんだから！！

星髪：我は構わぬが、現在のペースではそこに行き着くまでにどれだけかかるか分ったものでは無かろう。そこまで読者様が待っていてくれると思ったら大間違いだと思うが

玄金：そんな正論吐かないであげてぇぇぇっ！　って言うか、悪役の癖になんでそんなに読者様サイド！？　ちょっと良い人っぽく見えちゃうのは僕の気のせい！？

星髪：作者など、我が擁護する義務も義理も価値も無い存在だと知っている。我らを生んだのは作者である辰巳殿かも知れぬが、我らが日の目を見られたのは、ひとえに読者様方の温情があったが為。「我らキャラクターは、作者をこき下ろしてナンボの存在だ」と天狼（ティエンラン）も言っていた

玄金：天狼（ティエンラン）と言えば、次回はゲキレンジャーだね。どのライダーと

コラボするか、爪牙君は聞いてる？

星髪：それを答える義務も、我には無いのだが……まあ、知りたいと思う読者様もいるだろうから明かそう。次回のコラボは「ゲキレンジャー&ファイズ」だ

玄金：……ン何で！？

星髪：そこは天狼（ティエンラン）が次回説明してくれるだろう。調子に乗った辰巳殿の解釈が、もう1つ発揮されると聞いている

玄金：まだ何かやる気なの、彼女！？
まあ、とにかく次回、「修行その9：サリサリ！　赤い光と灰色の狼」でね

星髪：……本当に、タイトルだけは思い浮かぶのだな……

玄金：西暦2011年8月29日、「ゴーオン&カブト編」修正完了。……いやいやいやっ！　更にステラちゃんがひっどい子になってるって事実はスルー！？

修行その9：サリサリ！　赤い光と灰色の狼

獣を心に感じ、獣の力を手にする拳法、「獣拳」。「獣拳」に、相対する2つの流派あり。

1つ、正義の獣拳「激獣拳、ビーストアーツ」。

1つ、邪悪な獣拳「臨獣拳、アクガタ」。

戦う宿命の拳士達は日々、高みを目指して、学び、変わる！

紫色の空の下、白い顔をした茶色い道着を纏った異形達が組手を行っている。その奥に、道場らしき建物も見える。

臨獣殿と呼ばれるそこには、道半ばで命を落とした古代の臨獣拳の使い手達が、秘術で蘇生、偽りの生命を与えられた存在……一般兵士の扱いを受けるリンシーと呼ばれる者達と、それよりも実力を持つリンリンシーと呼ばれる者達がいた。

この臨獣殿に生者はほとんどいない。いるのは秘術の使い手である理央と、その背後で見え隠れしているロンと言う名の青年くらいの物だ。

時は、理央がロンの口から、「幻獣拳」と言う第三の獣拳……「獣拳を超えた拳法」の存在を知った頃の話。

臨獣殿奥の広間で、理央が瞑想している。その横では理央に見とれている彼の腹心、臨獣カメレオン拳使いのメレと、嫌な笑みを浮かべた金髪の青年、幻獣ドラゴン拳使いのロンが立っていた。

理央が瞑想しているのは、ほぼいつもの事。今回の瞑想の内容はおそらく……「自身もロンと同じ幻獣拳使いになるべきか否か」だろう。

そう考え、ロンがクックと低く……そして小さく笑った瞬間。理央がすっと目を開き、手元の杯を扉の方へ向かって思い切り投げつけた。

投げつけられた杯は扉に当たって砕け散り、中に注がれていた水を撒き散らしながら地に落ちる。

その行為の意味が分からぬまま、不審そうな表情で自身を見やる2人を無視し、理央は砕けた杯に向けて、針のような視線と氷のような凍てついた声を放つ。

「何者だ、貴様？」

「ひゃははっ。そんな怖い顔すんなよ理央様ぁ。折角のイイ男が台無しだぜぇ？」

その誰何（すいか）の声に反応し。柱の影から現れたのは、1人の男。服の基本色は灰色、肩からは狼と思しき動物の毛皮を斜めにかけているが、袖は肩の部分から先が引きちぎられたのか、随分と解れている。顔は人間と同じだが、左目をアイパッチで隠し、覗いている右目の方は黄金に輝いている。ニヤリと笑う男の口からは、鋭い犬歯が覗いていた。

その男の気配に、メレもロンも気付けなかった。唯一気付いたのは理央だけだったのだが、それでもかろうじて分る程度。

――この男、出来ますね――

ロンは無意識の内に値踏みするような視線を送りつつ思う。まさか自分が気付けぬなど……

「何者かと聞いた」

「おっと失礼。俺サマは天狼（ティエンラン）。臨獣拳でも激獣拳でも……まして幻獣拳でもない拳法である『妖獣拳使い』だ。ちなみに俺の拳には、妖獣フェンリル拳って名前がついてる」

ニィと口の端を歪め、天狼（ティエンラン）と名乗ったその男から、奇妙な……どす黒いオーラがゆらりと揺らめき、徐々にそれは狼のような形を取る。

だが……その気配は、彼らが扱う「臨気」とも、ロンが扱う「幻気」とも……まして彼らの仇敵たるゲキレンジャーが纏う「激気」とも異なっている。全くもって異質な力。そう表現するに相応しい気配だ。

「妖獣拳？　聞いた事がありませんね」
「だが……どの様な拳を使うのか、興味はある。それにその気配……一体、何だ？」
睨むような視線のまま、理央は興味深そうに天狼（ティエンラン）を見つめ、問いを重ねる。
臨気やその強化系の怒臨気とは、比較にならない程の「邪悪」。強いて言うなら「妖しい」と言う表現がしっくり来る様な気配。その気配に、理央の手が小刻みに震える。武者震いと言う物でも、歓喜から来る物でもない。
……恐怖や嫌悪、そう言った負の感情の全てが理央の体を駆け巡っている。
――「妖獣」とはよく言った物だ。この俺ですら、震えが止まらん――
そう思う理央に気付いているのかいないのか、天狼（ティエンラン）はにやけた笑みのまま、黄金の右目をすぅと細め、謡う様に言葉を紡ぐ。
「激気、臨気、幻気……これら3つは、元々『気力』と呼ばれる力から派生している。だが、俺サマが使うのはそれとは根本から異なる力……『妖力』だ」
「何ですって？」
「獣拳創始者、ブルーサ・イー。奴は元々、気力を操る一族である『ダイ族』の出身でね。故に、正規の獣拳は皆『気力』を元に戦う。ほら、理央様達の扱う力……全部に『気』の文字が入ってるだろ？」
言われたその言葉には、妙な説得力がある。
今でこそ分派し、互いに争う関係にあるとは言え、獣拳は元々ブルーサ・イーと言う一個人が立ち上げた拳法。故に分派した今でも、力の根源は同じと言う説明は納得がいく。そしてその根源が「気力」と言うものなのだろう。
無意識の内に天狼（ティエンラン）の言葉を受け入れている理央とメレに気付いたのか、天狼（ティエンラン）は更にその目を細め、今度は自身が扱う力について軽く触れた。

「そして、そのダイ族と敵対する存在……ゴーマ一族が扱うのが、俺サマも扱う『妖力』って訳だ。理央様達の扱う臨気ってのは、限りなく妖力に近い気力だな」

「……それで、あなたは何をしに来たと言うのです？」

ぎろりと睨みつけるようにしながら、今まで沈黙を守ってきたロンが口を挟む。もしもここで、「妖獣拳を理央に教えに来た」などと言われようものなら、自身の計画が崩壊する。自身の……「理央を幻獣拳使いの頂点に仕立て上げ、世界の崩壊を見る」と言う計画が。

そんなロンの邪心に気付いているのか、天狼（ティエンラン）はロンすらも寒気を覚える程の邪悪な笑みをその顔に貼り付け……ひょいと、肩をすくめた。

「なぁに、大した用事じゃねぇよ。ちょっと1人、リンリンシーをもらいたいのさ。俺サマも、ちょっとばかしゲキレンジャーには興味があってね」

トントンと、人差し指くらいの長さの「何か」を軽く叩きながら、天狼（ティエンラン）は手近にいた鷲のようなリンリンシーを指差す。

臨獣イーグル拳の使い手、ゲワシハ。今は亡き三拳魔が1人、カタの弟子の1人であった。

「1度死んで蘇った者。しかも、獣の力を持っている。これ程今回に向いた物は無ぇぜぇ、理央様」

そう言いながら笑う天狼（ティエンラン）の瞳が、妖しく光ったように見えたのは、メレの気のせいだったのだろうか。

＊

巨大スポーツメーカー「スクラッチ」。そこは、激獣拳ビーストアーツの「表の顔」である。最新のスポーツ科学を使い、ゲキワザを進化させる目的を持つ他、純粋に拳士達のデータから、より一般にも使いやすいスポーツ用品を提供する優良企業である。

その中の一室に、激獣拳の使い手……獣拳戦隊ゲキレンジャーの面々が集っていた。

赤きジャケットを纏った、トラの力を宿す漢堂ジャンは、トレーニングロボであるロボタフとじゃれあい、青きジャケットを纏った、ジャガーの力を宿す深見レツはキャンバスの前で絵筆を握っている。

その後ろでは黄色のジャケットを纏った紅一点、チーターの力を宿す宇崎ランが覗き込むようにして感嘆の溜息を漏らし、柱の影には紫のジャケットを纏った、狼の力を宿すレツの兄……深見ゴウが腕立てをしている。そしてジャンを眺めてメンチカツをぱくついている白ジャケットを纏った無精ひげの青年は久津ケン。

別段、普段と変わらない日常の一コマであった。

……ジャンが、何かに気付くまでは。

「？　……何だ？　グニグニ？」

押さえ込んでいたロボタフから離れ、不思議そうに首を傾げるジャン。

幼い頃から森の中でトラに育てられていたせいなのか、彼の感覚は常人のそれよりも鋭い。その反面、少々独特な擬音を発する。

独特すぎて、理解に至るまでが結構長かったりするのだが。

それを知っているためなのか、ジャンの言葉を聞き取ったケンが、不思議そうな表情を浮かべた。

「グニグニって……何か感じたのか？」

「う～、よくわかんねぇ。でも、ゾワゾワとは違う」

ジャンの言う「ゾワゾワ」とは、臨獣殿の住人の事を指す。リンシーやリンリンシーの気配は、彼の体に悪寒めいた物を走らせる事から、そう呼ぶらしい。

「グニグニ、すぐ消えた。でも……なんか、変な感じがした」

ジャン曰く、臨獣殿の拳士が現れた時とは異なる奇妙な感覚が彼を襲ったらしい。それこそ空気が「グニグニ」と歪み、そして弾き返すような一瞬の感覚。

それと同時に感知したのは、一体何だったのだろう。少なくとも、

邪悪な印象は無かった。自分達に近いような、そうでもないような……そんな、よく分らない「何か」がやって来た様に思えて仕方が無かった。

それが、皆に伝わるような言葉に出来ないのが、ジャンなのだが。

「何だったんだろう……？」

むぅ、と首をひねりながら考え込むも分らない物は分らない。

諦めて再びロボタフとじゃれあおうとした瞬間。今度は、体に纏わり付くような重苦しい「邪気」を感知した。

慣れたくないのに、感じ慣れたその感覚を、ジャンは既に何度も言葉にしている。そして、今回も……

「ゾワゾワ！！」

思うより先に、言葉が口をついて出ていた。その言葉に反応するように、部屋の中にぴんとした空気が張り詰める。

「ゾワゾワ」……臨獣殿の登場だと、知っていたから。

ジャン達が到着した時には、リンシー達に襲われ逃げ惑う人々の姿と、瓦礫の山が出来ていた。変わったところと言えば、炎が上がっている様子も無いのに、妙に灰が舞い散っている事くらいだろうか。そう言えば、灰が山になっている周辺では、服だけが残っている。

だが、それを訝るよりも先に視界に入った物があった。

……それは、ぶつかり合う2つの異形の影。

1つは宙を舞いながら、そしてもう1つは大地を素早く駆けながら、互いに一歩も退かぬ戦いを繰り広げている。

「あれは……？」

「参ったぜ。臨獣殿同士の仲間割れか？」

ランの訝しげな声に、ゴウが思ったままを返す。

それもそのはず、片や鷲のような印象のリンリンシー。基本的には黒い羽根を持っているが、先だけ白い。顔はやや赤みのきついピ

ンク色をしており嘴も目つきも鋭い。リンシーを率いて1人の青年を襲わんと、羽根を飛ばす攻撃を繰り出している。

一方でその攻撃から青年を守っていたのは。灰色の体色を持つ、狼の異形だった。その細い足からは想像もつかない程の脚力で、リンシー達を文字通り蹴散らし、それを踏み台にしながら鷲のリンリンシーへ強烈なキックをおみまいしている。

確かに、リンリンシー同士の仲間割れと取れなくも無い光景。だが……どう見ても、狼の方は人間を守っているように見える。人間の悲鳴と嘆きを力に変える臨獣殿の存在の割には、妙な話だ。

そうレツが不審に思った瞬間、ジャンが呆けた様な声でポツリと言葉を落とす。

「鷲の方はゾワゾワだけど……狼の方は、違う」

「え？」

「サリサリだ」

自分でも、言っていて分っていないらしい。しかし、本能的に分かる事が1つだけ存在する。即ち……灰色の狼の方は、臨獣殿とは全く異なる存在だと言う事。

守られている青年も狼が自身を守っている事を理解しているのだろう。灰色の狼から逃げる様子も無く……むしろ近くに停めてあったバンの中から、何か黒いアタッシュケースのような物を引きずり出しすと、それを狼の方に掲げた。

「たっ君！　あったよ！」

その声を聞きとめると、「たっ君」と呼ばれた狼は人間の……ジャン達より僅かに年上とおぼしき青年の姿に変わり、青年から黒いアタッシュケースを受け取る。

そしてすぐさま、そこから黒い携帯電話と銀色の金属製のベルトを取り出した。

ベルトの方は……当たり前だが腰に巻きつけ、携帯電話の方は同じ数字を3回程押す。同じ数字だと分ったのは、響いてきたプッシュ音が、3回とも同じだったからだ。

こんな状況下で、何を暢気にベルトを巻き、更には携帯電話で何をする気なのか。分らぬまま、5人が思わずその様子を見つめていた瞬間。

『Ｓｔａｎｄｉｎｇ　Ｂｙ』

携帯電話が、そう告げた。そしてそれを聞き届けるや否や、狼だった青年はその携帯電話を高々と持ち上げ……

「変身」

『Ｃｏｍｐｌｅｔｅ』

ベルトの中央部分に、その携帯電話を取り付けた瞬間。青年の体を、鎧が覆った。

自分達が変身した時に纏う全身タイツ的なスーツとは、明らかに異なる。黒いスーツの上に、赤く光るライン。スーツを覆う鎧の色は銀、仮面の中央に1つ、真円の形をした黄色い「眼」があり、その中央を、ボディに走るラインと同じものが貫いている。

ギリシャ文字の「Φ」の文字に似ていると、レツは思った。

「サリサリが、ピカピカになった！」

「どういう事だぁ？」

楽しそうに言うジャンに対し、ケンは心底驚いたような声を出す。ゴウに至っては、自身の額にこつんと拳を当てる癖と共に、「参ったぜ」の一言が飛び出す。

「な……何者だ、貴様！？」

「それはこっちの台詞だっつーの。いきなり襲ってくる奴があるかよ」

リンリンシーの驚愕の声に、鎧の戦士はそう返すと、右手首を軽く振って……いきなり、その拳を突き出した。

正拳突きだ、と理解するのに半瞬、そしてそれを相手がかわしたと理解するのにもう半瞬。

全部で一瞬と言う、拳士にとっては充分すぎる時間をかけた後、ジャン達は弾かれたようにリンリンシーに向かって駆け出し……

「研ぎ澄ませ、獣の刃！」

「響け、獣の叫び！」
『滾れ、獣の力！』
『ビースト・オン！！』
最後の「ビースト・オン」と言う言葉だけは綺麗に重なり、スクラッチの誇る最新技術の結晶であるスーツが、ジャン達の体を覆う。
それを見止めるや、仮面の戦士とそれに守られていた青年は不審そうに首を傾げ、リンリンシーの方は忌々しげに大きな舌打ちを鳴らす。
「ゲキレンジャーかっ！」
「やい、ゾワゾワ！　お前達の好きにさせない！！」
言葉とほぼ同時に、ジャンは武器の１つであるゲキヌンチャクを取り出すと、勢い良くそれを振り抜きリンリンシーの肩を叩く。
その攻撃でバランスを崩し、よろめいた所を見逃さず、今度はランとレツの蹴りが相手の胸部へと極まる。
「ふぐぅっ！」
胸への直撃のせいで肺の空気が押し出されたらしい。呻くような声と共に、盛大な呼気がその口から漏れる。
呼吸は拳法を扱う者にとって大切な要素である。それを乱され、目を白黒させながらも何とか自身のペースを取り戻そうとリンリンシーは何度か呼吸を繰り返す。
しかしそこへケンの追撃。サイブレードによる首へのチョップが、整えた呼吸を再び乱す。
「うぐ、ふっ、ふぐぅっ……」
――ここで倒されては、何の意味もない。今は亡き三拳魔の皆様方の顔に、泥を塗る結果に……！――
思い、一時退却すべくリンリンシーはばさりと羽根を広げる。
逃げる、と言う意図を察したのか、２つの影が相手を逃がすまいとそちらに向かって駆ける。
方や紫、そして方や赤い光を纏う銀。２つの影はほぼ同時にリンリンシーの前で拳を固め……

「逃がすか！　ゲキワザ、厳厳拳（ごんごんけん）」
「逃がすかよ。お前には聞きたい事があるんだ」
『……何？』
まさか自分以外にも、と言う思いがあったのだろうか。紫……ゴウと、銀……見知らぬ戦士と化した青年の動きが一瞬鈍る。
その一瞬を機と取ったのだろう。リンリンシーはその拳が自身に届く寸前で大きく宙へと飛びあがり、拳の方は空しくも空をきるのみ。
「チィ、分が悪い上に鬱陶しい……人間を襲うのは、また今度にしてやる」
言いながら、リンリンシーはばさりと羽根を翻すと、そのまま後ろも見ずに飛び去ってしまう。
鷲の見た目は伊達では無いのか、ほとんど無音に近い風切り音を鳴らしながら、リンリンシーの姿は見る間に小さくなっていく。
「しまった！」
「おい、逃げるなハゲワシ！」
一応そう怒鳴るのだが、それで逃げない悪役はいない。リンリンシーはリンシーと共に、どこかへと飛び去ってしまった。
後に残ったのは、大量の灰と瓦礫、そして仮面の戦士とそれに守られていた青年。
この現場の意味する事を、ゲキレンジャーはまだ、知らなかった。目の前に立つ、「狼だった青年」の正体も、そして……先程のリンリンシーが、ほんの少しだけ「変質」していた事も……

修行その9：サリサリ！　赤い光と灰色の狼（後書き）

青器：ああ、成程。今回は「1回死んで生き返った敵」つながりなのね。しかも獣の力を扱う「獣拳」に対し、動植物の力を持つ「オルフェノク」とは。案外考えているじゃない、辰巳にしては

白刀：しかし、この物語のオリジナルリンリンシー。実は遥か昔に辰巳結愛が没にしたネタ、「スーパーヒーロータイム」から丸のまま持ってきた物らしいぞ。その時は、「同じ年代のヒーロークロス」を思っていたらしいが

青器：と、言う事は当時は電王とのクロスオーバーを予定していたのね

白刀：らしいな。未だに辰巳の未練が残っているらしく、データは綺麗に残っているらしいぞ
さて、今回の話だが……

青器：天狼の台詞かしら。
「激気、臨気、幻気……これら3つは、元々『気力』と呼ばれる力から派生している」
……どうなの、この解釈。これ、「五星戦隊ダイレンジャー」が元よね？
獣拳の創始者であるブルーサ・イーがダイ族だと言ってしまっているし、その上今回の敵である天狼……彼、臨獣殿の住人じゃ無くてゴーマ一族って事になってしまうけれど

白刀：ふむ。何でもゲキレンジャー放映時、まだ三拳魔が存命だった頃、いつも通り番組が終わって妄想にふけっていたら、

「はっ、何が怒臨気だよ。たかが気力じゃねぇか」
と言う台詞が浮かんだらしくてな。その台詞をいつか使いたい、と言う欲望が、今回の設定につながったらしい。ちなみにその時妄想の世界にいたのが、別作品の「伯爵閣下」だと言うのだから驚きだろう？

青器：酷いわね。それってある意味リサイクルなのかしら？
ああ、そうそう。キャラクター紹介の件だけど……確か、「1クロスで1人」と言う事らしいわ。ムダニステラの紹介を待っていらっしゃった皆様には、大変申し訳ないのだけれど、彼女の紹介はこのクロスの最終話で、と言うことになるの。ごめんなさいね

白刀：それは前回、玄金武士が言っておくべきだったな。後でシメておくか

青器：あら、いいわね。私も付き合おうかしら
それでは皆様、また次回お会いいたしましょうね

第１０話

おかしい、とバンを運転しながら、菊池啓太郎は僅かに首を捻った。

宅配先の常連さんの家に向かう風景と、今走っている町並みとがまるで違う。行き慣れた道だからと言う事で、油断していたのだろうか。

隣では乾巧が、先程買った缶コーヒー……勿論アイスを飲んでいる。

オルフェノクの崩壊を止める研究も最終段階まで進み、巧のスマートブレイン社社長就任ももうすぐだと言うのに、随分と暢気なものだ。

――まあ、たっ君らしいと言えばたっ君らしいんだけどね――

思いながら、ふと我知らず啓太郎の顔に穏やかな笑みが浮かぶ。

何年経っても、どんな立場になっても変わらない友人に安堵したのだ。

きっと彼はこれからも自分の親友であり、自分も彼にとっての親友であり続けるのだろう。

――って、安心してる場合じゃなくて――

置かれた状況を思い出し、啓太郎はきょろきょろと周囲を見回す。

町並みはどんどん見慣れない物へと変化しており、既に自分がどこにいるのかも分らない。

先程の角を曲がった時に、妙な違和感を覚えたが……おそらく、道を間違えた物に起因する違和感なのだろう。ここ2、3日で街が1つ、丸々変化でもしない限りは。しかし、そんな事は十中八九無い。となれば、やはり道を間違え、迷子になってしまったのだ。電話口で、客も言っていたではないか。

……迷わないように気をつけろと。きっと最近工事か何かをして、道が変わってしまったのかもしれない。

そう考えると、啓太郎は心底申し訳無さそうな表情になり、正面を見据えたまま、悲しそうな声で巧に声をかけた。

「……ゴメン、たっ君。道、間違えた……」

「おいおい。大丈夫かよ？　珍しいな、疲れてるんじゃないのか？」

軽く眉を顰めながら、声をかけられた方は今更のように窓からの景色をしげしげと眺める。

今回の目的地は、啓太郎にとって土地勘のある場所のはずだ。だから、いくら油断していても道を間違えると言う愚を犯すとは思えない。

仮に啓太郎が道を間違えたとしても、自分もいる。今回の目的地は自分もそれなりに知っている場所であるだけに、自分がその間違いに気付かないはずがない。

無いのだが……確かに、周囲に広がる景色は見覚えのない物だ。道にはそれなりに気をつけていたにも関わらず。

という事は……おそらくは迷い込んでしまったのだろう。「常連客」の思惑通りに。

軽く舌打ちをしたい気分に駆られながら、ごくりとコーヒーを飲み干した、まさにその瞬間。突然、何者かの影がバンの前を横切った。

「ふわぁぁっ！」

急ブレーキを踏み、何とか「突然現れた者」との衝突は免れた。が。その現れた者に、啓太郎の視線が釘付けになる。

有体に言えば、「鷲の化物」。羽根が黒く、顔はやや赤みがかったピンク。羽根の先は白いところを見ると、ハゲワシか何かだろうか。その後ろには白い顔をした、茶色い道着を纏った「キョンシー」のような者達が、逃げ惑う人々を襲っている。

そして……非常に遺憾な事なのだが、こう言うシチュエーションに遭遇し慣れているせいなのか。啓太郎は慌てたように……しかし同時に冷静にシートベルトを外しながら……隣にいる巧の顔を覗き込み「お決まりの一言」を放った。

「た、たっ君！！　オルフェノクが……！」
「いや、どう見ても違うだろ」
「……分ってるよ。でも、つい癖で」
オルフェノクは基本的に、白に近い灰色の体を持つ。故に、黒や赤といった派手な色を持つ鷲の化物は、オルフェノクではありえない。
少なくとも、巧の認識は……そして啓太郎の認識でも、そうだ。
だが、車を降りたその瞬間。彼らはその光景に目を見張った。
鷲の化物が飛ばした「羽根」に貫かれた人々は、一瞬だけ小さく呻くと……次の瞬間、ざらりと音をたてて灰と化したのだ。まるで、オルフェノクに襲われ、そして……「オルフェノクになれなかった」時のように。
その羽根がこちらにも向かって飛んできているところを見ると、どうやら相手は無差別に人を襲っているらしい。
「ひ……人が灰に！？　やっぱりあれってオルフェノクなの！？」
「わかんねーけど……ったく、面倒臭ぇなぁ」
心底面倒臭そうにそう言うと、巧はその顔にウルフの表情が浮かぶ。
相手がオルフェノクなのか、それとも全くの別種なのかは定かではないが……どちらにしろ、襲い掛かってくると言うなら相手をするまでだ。
……ウルフオルフェノクとして戦う事は、非常に不本意ではあるのだが。
「おい、そこの鷲」
「あぁん？」
鷲の化物に声をかけ、相手が振り返ると同時にその顔めがけて蹴りを放つ。しかしそれはギリギリの距離でかわされてしまう。
とは言え、突然の攻撃には驚いたらしい。相手はばさりと羽根を翻すと、そのまま上昇し、怒鳴るように巧に向かって声をかけた。
「貴様、激獣拳使いか！？」

「ゲキ……？　何だそりゃ？　そう言うお前は、オルフェノク……なのか？」

「……それを貴様に答える義理はない！　まあ良い。敵対すると言うのなら、貴様も悲鳴を上げながら灰となって散るが良い！」

そう言うと同時に、鷲の化物は上空から「人間を灰に変える羽根」を撃ち始める。巧だけでなく、啓太郎に向かってまで。

――本当に無差別だな、あの鷲野郎――

心の中でのみ毒づき、巧は軽く羽根をかわすと、啓太郎の方をちらりと見やる。しかしどうやら、以前占い師に渡されたとか言う「お守り」が効いているのか、羽根は啓太郎に刺さる前にありえない角度で曲がり、地面に突き刺さっていた。

啓太郎の方は心配無用らしいと分るや否や、巧は群がる茶色い道着のキョンシー達を踏み台にして、鷲の化物に強烈な蹴りをお見舞いする。

とは言え、蹴りが主体のウルフオルフェノクの格好では、宙を舞う相手と戦う際、どうしても足場が必要になる。仮に足場の安定確保が出来たとしても、滞空時間の問題も大きい。

――この格好じゃ埒が明かないか――

思うと同時に、己が持ってきていた「荷物」の事を思い出す。そちらにシフトチェンジした方が早期に決着をつけられるかも知れない。考えを切り替えると、彼は影を上半身裸の人間の形に変え……

「啓太郎！　バンの中に、ファイズギアがあるはずだ」

「……分った！！　待っててね、たっ君」

影を通して放たれた言葉に頷き、啓太郎はよたよたとバンの後部座席を漁る。巧が「あるはず」と言った、黒いアタッシュケースを探すために。

そして……それは案外とあっさりと見つかった。

真っ白な洗濯物の中に紛れ込んだ、たった1つの「黒」。それを見止めるや否や、彼は勢いよくそれを掴み……

「たっ君！　あったよ！」

掲げられたアタッシュケースを見るや否や、巧は軽い音と共に大地に降り立ち、「ウルフオルフェノク」から「乾巧」の姿に戻る。そして、ファイズフォンとベルトを取り出して、宣言した。

「変身」

『Ｃｏｍｐｌｅｔｅ』

それが当然のようにファイズに変身し、巧は軽く右手をスナップさせる。

相手がオルフェノクなら、この姿を否が応でも知っているはずだ。それなりの反応を見せるだろう。

「な……何者だ、貴様！？」

――どうやら、あの鷲はオルフェノクじゃないらしいな。なら……どうして襲われた奴が灰になった？――

少なくとも鷲の怪物が浮かべている驚愕の表情が、演技とは思えない。

「それはこっちの台詞だっつーの。いきなり襲ってくる奴があるかよ」

こちらの疑念を押し隠すように、溜息と共に言葉を返すと、巧はそのまま相手の顔面めがけて拳を突き出す。だが、相手は再びそれをギリギリの距離で回避、今度は更に今まで以上に上へと舞い上がってしまう。

やれやれ、どうした物か。そう思った瞬間、声が響いた。

『ビースト・オン！！』

誰かの、声。不審に思い、その声のした方を見やると……そこには五色のボディスーツを纏った、妙な出で立ちの戦士達が並んでいた。

赤、青、黄色、紫、白。それぞれが何かの動物を連想させるフルフェイスのマスクを着け、自分と鷲の化物の間に割って入るように立ち塞がっている。

「ちっ……ゲキレンジャーかっ！」

「やい、ゾワゾワ！　お前達の好きにさせない！！」

相手の吐き捨てるような言葉とほぼ同時に、赤い戦士がヌンチャクを取り出し、それを思い切り振り抜いて相手の肩……羽根の付け根の部分を叩く。

その攻撃でよろめいた相手を見逃さず、今度は黄と青の蹴りが相手の胸部へ綺麗に入った。

「ふぐぅっ！」

呻くような声と共に、相手の口からは咽た時のような苦しげな吐息が漏れる。それでも己のペースを取り戻そうとしているのか、相手は何度か呼吸を繰り返して息を整え始める。

だが、そこへ白の追撃。その手に着けていた動物の角を連想させる武器が、相手の首筋に極まる。

「うぐ、ふっ、ふぐぅっ……」

不利とでも判断したのか。鷲がばさりと羽根を広げる。

――逃がすか――

逃げると言う意図を察し、巧は相手に向かって駆け、その眼前で拳を固める。とにかく相手の動きを止めねば、更なる被害が生まれる可能性が高い。

「逃がすかよ。お前には聞きたい事があるんだ」

「逃がすか！　ゲキワザ、ゴンゴンケン」

『……何？』

まさか自分以外にも、と言う思いがあったのだろうか。紫の戦士と、巧の動きが一瞬鈍る。

その一瞬を機と取ったのだろう。鷲はその拳が自身に届く寸前で大きく宙へと飛び上がり、固めた拳は空振りに終わる。

「チィ、分が悪い上に鬱陶しい……人間を襲うのは、また今度にしてやる」

言いながら、ばさりと羽根を翻すと、相手はそのまま後ろも見ずに飛び去ってしまった。

「おいおい……また面倒な事になってきたな……」

小さくなっていく相手の姿を見送りながら、憂鬱そうに呟いた巧

の言葉は、数多の「人だったもの」の灰と共に、青空へと消えていった。

「……たっ君」
「何だよ？」
「何で俺達、こんなところにいるんだろうね」
「俺に聞くなよ。知る訳無いだろ」
疲れきった表情で、啓太郎と巧は互いに言葉を交わす。
それもそのはず、あの後……五色の戦士達による物凄い勢いの質問攻めにあったのだから。
どうやら、巧がウルフオルフェノクとして戦っている姿を見ていたらしく、「じゅうじゅうなんとか」と言う技を使ったのかとか、あの変身は一体何だとか……終いには「説明の為に一緒に来い」とまで言われる始末。結局巧達は、バンに乗って彼らの本拠地と言える高層ビルにやってきたのだ。
ここはその最地下層。スクラッチとか言うこの会社の社員でも、限られた存在しか立ち入る事の許されないフロアらしい。
スマートブレインにも似たような場所が存在するので、どこの企業も似たような物かと納得はしてみるのだが……
「お主が、狼の力を持つ仮面の戦士じゃな？」
「……今度は猫だよ、たっ君」
「見れば分る」
そう。彼らの目の前に立ち、ひげを撫でながらそう言ったのは、黄色い毛並みをした「猫人間」。赤とこげ茶の中間色の服を纏い、腰からは何故か銀色のトライアングル。
正直に言って……怪しさ全開、と言ったところか。
「わしはシャーフー。ここで激獣拳の指導をしておる者じゃ。お主は？」
「乾巧。こっちで目を丸くしてるのは菊池啓太郎だ」

「ふむ。お主の戦いはカメラで見ておった。激獣拳とも、臨獣拳とも……いや、獣拳その物と異なる『獣の力』を扱うようじゃの」
1人納得している猫……シャーフーと言うらしい彼に対し、巧は軽く睨みつけるような視線を送る。
確かにオルフェノクである巧の体には、元々の「人間」としての力に加え、「狼」の能力も備わっている。だから、「狼の力を持つ」という言葉は否定しない。仮面ライダーである以上、「仮面の戦士」である事も認めよう。
「こっちからも聞きたい。その『じゅーけん』ってのは何だ？」
「獣の力を心に感じ、獣の力を手にする拳法の事じゃ。激気と言う力を纏う一派を激獣拳、臨気と言う力を纏う一派を臨獣拳と呼んでおる」
先程から出ている「激獣拳」とか「臨獣拳」と言った「獣拳」というものは一体なんなのか。
おそらく、猫の後ろに控える五色の戦士だった青年達は、「激獣拳」とか言う物を使う連中なのだろう。それは話の流れから何となく推察できる。しかし彼らは……そして先程の鷲の化物も、自分達の分らない単語を、まるで「知っていて当然」のように使ってくる。
それが余計に巧を苛立たせ、目つきを鋭くさせた。
「で？　俺達に何か用なのかよ？　勝手にこんなところに連れ込まれて、迷惑」
「用と言う程でもないが、ちとお前さんの『仮面の力』が気になってのう」
「仮面の力」とは、おそらくファイズの事だろう。気になると言う事は、あのベルトに興味を持ったと言う事だろうか。
あんなスーツを開発する企業だ、スマートブレインの持つ「兵器」であるファイズに興味を抱いてもおかしくは無い。ただ……それを悪用されては困る。
そう思ったその瞬間。
「なあ、これ、俺も使えるか？」

「ああっ！　たっ君、ファイズギア！！」
「あ？」
見つけた時には既に遅く。一体いつの間にアタッシュケースから取り出したのか、赤いジャケットの青年……道中、漢堂ジャンと名乗っていた彼が、自身の腰にベルトを巻きつけ、ファイズフォンにコードを入力し終わっていた。
ただ、彼の表情は無駄に明るい。何となくだが、新しい玩具を貰った子供のような印象を受ける。
「……大丈夫だ。多分、あいつには無理だろ」
「何？」
巧の声を聞きとめたのか、紫のジャケットの戦士……確か深見ゴウと名乗っていた彼が、軽く顔を顰める。
ファイズに変身するには、オルフェノクであるか、もしくはオルフェノクに近い体を持っているかでないと変身は出来ない。
――獣の力を心に感じるだけじゃ、多分無理だ。その体まで、獣の力に染まらなければ――
そう思い、ぼんやりと巧はその様子を眺めている。そんな巧を信じているのか、啓太郎もおろおろとはしている物の、特に止めに入る気配も無く……
「よぉし。変身！」
『Ｅｒｒｏｒ』
「ほら見ろ」
ジャンの声を拒否するかのように、電子音が変身不能を告げる。同時にファイズフォンはベルトから弾かれ軽い音と共に床に転がり落ちた。
それも、まるで狙い済ましたかのように、巧の足元へと。それを拾い、巧はぽかんと口を開けるジャンに視線を寄せると、その額を軽く小突いた。
「わかったろ？　お前じゃそのベルトは扱えない。扱えたら、それはそれで問題だけどな」

「むぅぅ。俺もさっきの赤ピカピカになりたい！　なーらーせーろー！！」

「だから、無理だって言ってるだろ。諦めろ」

「やだ！　こうなったら、うんとうーんと修行して、赤ピカピカになれるようになってやる！！」

――修行してどうこう、と言う物じゃないんだけどな――

巧の手からファイズフォンを奪おうとするジャンを軽くいなしつつも、その真っ直ぐな気性の青年に呆れ半分羨望半分の視線を送る。

ファイズを「赤ピカピカ」と言われるのは、非常に心外なのだが。そもそも、フォトンブラッドは「ピカピカ」でと言う可愛らしい表現で済ませられる代物ではない。

ファイズが「赤ピカピカ」なら、ここにいないカイザは「黄ピカピカ」だし、デルタは「白ピカピカ」、サイガは「青ピカピカ」でオーガは「金ピカピカ」か。

金の代わりに紫があれば、彼らと同じカラーリングだったなと思い、啓太郎は軽く声を立てて笑う。結局、人間が考えられる色と言うのは、そんな物なのかも知れない。

その瞬間、だっただろうか。

ジャンが何かに気付いたような真剣な顔つきになったのと、そして巧の耳に、どこからか響く爆発音が届いたのは……

第１０話（後書き）

青器：前半は前回の物語をファイズの視点から、後半は……なんと言うか……

朱杖：えーっと……団欒て訳でもないし、とりあえずシャーフー出そうって魂胆丸見えだな。他にもページ埋め？　だったらさっさとバトルに突入しちまえばいいのに。むしろアレか、スクラッチとスマートブレインという「大企業つながり」ってのも見せたかったのか？

青器：さあ、どうなのかしら？　……何となくだけれど、ジャンならファイズに変身出来そうではなくて？　個人的に非常にやれそうな気がするのだけど

朱杖：つか、俺としてはむしろゴウ兄さんにファイズになって欲しいね。狼つながりで。つか、まさか後半って、そのための布石……！？

青器：朱杖、うかつな事を言っていると、玄金のような不幸満載のキャラにレベルアップされるから気をつけなさいな。私にあなたを殺させる気？

朱杖：既に不幸キャラの立ち位置にいるって話もあるが……！？つか、このペースで本当に平気か作者？　次回もまた２週間後とか言ったら怒るぞ。主に俺が

青器：無茶を言わないの。それでは皆様、また次回

朱杖：ところで、ファイズのタイトルってこんな感じだったっけ…
…？

修行その１１：ピカピカの意思

「ゾワゾワだ！」
ジャンが言うが早いか、乾巧と名乗った青年が、ベルトと携帯電話を持って駆け出す。
ジャンが臨獣殿を感じたのと同じように、彼もまた何かを感じ取ったのかもしれない。
「え？　ちょっとたっ君！？」
「啓太郎、お前はここで待ってろ！　良いな？」
他の面々よりも数秒反応が遅れた青年、菊池啓太郎に、乾の厳しい声が飛ぶ。
その声に含まれる緊張を、彼も感じ取ったらしい。一瞬だけ不服そうな表情を浮かべはした物の、啓太郎はこくりと縦に首を振って、走り行く彼らの後姿を見送った。
「心配そうじゃの」
「……うん。でも……待つ事が出来るのは、今は俺だけだから」
シャーフーの言葉に返し、啓太郎はすとんと近くの椅子に腰掛けた。
心配はしている。だが同時に信じてもいる。だから……ここで待つ。余程重要な事でもない限り。
「俺が待ってれば、たっ君も安心して帰ってこれるでしょ？」
「ふむ。留守番の中にも修行あり、じゃな」
優しい声で言って、シャーフーがチリンとトライアングルを鳴らす。その優しい音に、啓太郎はくすりと笑い……２人でお茶を飲んで、のんびりと待つ事にした。

スクラッチ本社では、シャーフーと啓太郎がお茶の用意を始めていた頃。

そんな事になっているとは思っていないゲキレンジャー達……特にゴウは、前を走る乾を半ば監視するように睨みつけつつ、彼の後を追っていた。

狼の姿になっていた事、下手をすれば危険な兵器ともなるあの鎧。――信用しろって言う方が無理ってもんだろ――

自身もかつて、「獣獣全身変」と言うゲキワザを使用した事によって、その身を狼男へと変えた事がある。その際、己が身に流れる時間は止まり、意識もまた一個の獣と化していた。

だからこそ、懸念するのだ。乾巧と言う青年の存在を。

「……居やがった」

唐突に乾が呟きを落とし、足を止める。そしてそこには、自身の羽根で罪の無い人々を襲っているハゲワシのリンリンシーが、絶笑を上げながら暴れていた。

放たれた羽根は相手の胸をざっくりと貫き、貫かれた人間は、一瞬小さく呻くと……ざらざらと灰になって散っていく。

「そんな……人が灰に！？」

「参ったぜ……」

レツの驚きの声に対し、ゴウは口癖の一言を放つ。だが、その声の中には悔しさが滲んでいる。

今まで、一般市民は怪我こそあった物の死ぬと言う事は奇跡的に無かった。それだけに、目の前で繰り広げられる凄惨な光景は、彼の怒りに火をつけたのだろう。

「いくら臨獣殿でも、これはちょっとやりすぎだろ」

「あいつ、もうゾワゾワじゃない……」

ケンの言葉に返すように、ジャンが緊張した面持ちでリンリンシーを見つめながら言う。

ここに来るまでは、ジャン自身もいつもの「ゾワゾワ」だと思っていたのだが……この距離に来て、ようやく分る。相手が完全に「変質」してしまっている事に。

「ゾワゾワとサリサリを混ぜたような……ザリザリ？」

「サリサリ」という表現は確か、乾が狼男になっていた時に使われた表現だったはずだ。そう思うと同時に、相手はこちらに気付いたらしい。

先刻見た時よりも、更に狂気に歪んだ瞳をこちらに向け、心底楽しげに笑い声を上げた。

「よぉ、ゲキレンジャー。それに……あんた、ファイズって奴だな？　さっきは理解できなくて悪かったよ」

「……別に、理解なんかして欲しくも無かったけどな」

リンリンシーに言われ、乾は真っ直ぐに相手を見つめながら言葉を返す。どうやらジャンの言う「ピカピカ」の戦士の事を「ファイズ」と呼ぶらしい。

答えるまでの一瞬の間が気になったが、今それを問う時間は無い。とにかくリンリンシーを人気の無い場所に誘導しなければ。

冷静に思うゴウをよそに、リンリンシーはケタケタと笑い声を上げ、陶酔しきった様にその両の腕を広げた。

「人間の悲鳴は、やはり良い。この力を手に入れてから、更にそう思うようになった」

「この力って……まさか、人間を灰に変える力の事！？」

「別に灰に変えるつもりは無いさ。ただ、そいつらは選ばれなかっただけだ」

――選ばれる？――

その意味がわからず、ゴウの顔はますます顰められる。他の面々も意味がわからないらしい。軽く首を傾げながらもその先を待つように相手を睨む。……たった1人、乾を除いて。

彼はゴウとは違う意味で顔を顰めると、呆れたような……それでいて怒気を孕んでいると充分にわからせる声を上げた。

「もう1度聞く。お前、オルフェノクなのか？」

「オルフェノク？　臨獣殿じゃなくて？」

乾の言葉に、ランが皆を代表するように問う。しかしその問いに乾は答えず、真っ直ぐにリンリンシーを睨むだけ。

一方で相手は、その視線に心地良さでも感じているのか、うっとりとその目を細めると、謳うように言葉を紡ぐ。

「クックック……今の俺は、臨獣イーグル拳のゲワシハであると同時に、オルフェノクとしての力も持つ。強いて言うなら、リンリンシーオルフェノク、といった所か？」

そう言うと同時に、ゲワシハと名乗ったそのリンリンシーは、ゴウ達に向かって羽根を打ち放つ。

おそらく、相手の放っている羽根はケンの扱う「激気研鑽」と同じように、彼の臨気を研鑽して作られた物らしい。それは即ち、形を持つ臨気。どこまでも研ぎ澄まされた、邪悪な刃。

鋭く尖ったその羽根の攻撃をかわしつつ、ゴウは偶々近くにいた乾に問う。

「おい、オルフェノクって言うのは何なんだ？」

「手っ取り早い話、1度死んだ後に、動植物の特性と力を持って生き返った存在の事だ！」

特定の条件を満たした人間で無いとなれないがな、と付け足す乾の言葉に、ゴウは思わず呆気に取られる。

今のリンリンシーの殆どは、確かに昔起こった「激臨の大戦」で1度死んでいる。それを盟主である理央が、術を用いて蘇らせた存在だ。しかも、獣拳使い。「動植物の特性と力」の点もクリアしている。

そう考えれば確かに、「オルフェノク」という存在と似ているかもしれないが……

「それにな、オルフェノクに襲われた人間は、条件次第でオルフェノクに覚醒する」

「何？」

「覚醒できなかったら……さっきみたいに灰になっちまうけどな」

ちらりと、やりきれないような視線を灰と化した人間に向け、乾は悔しげに吐き出した。

そんな彼の悔しさすらも嘲笑うかの様に、ゲワシハはその顔を愉

悦の形に歪めると、その身を高く宙に舞わせ……

「リンリンシーにとって、人間の悲鳴や絶望は己の糧となる。そしてオルフェノクにとって、人間は下等な生き物でしかない。オルフェノクに覚醒できん人間など、恐怖と絶望の悲鳴と共に散り逝けば良いのだ!!」

言うが早いか、相手は今までとは比較にならない程の羽根を撒き散らし、無差別に人々を襲う。

逃げ遅れた市民は羽根に貫かれ、恐怖と絶望を抱きながら灰と化していく。

……無差別、と言うのは語弊があるかもしれない。ゲワシハはわざと、ジャン達へは攻撃を外していた。彼らに絶望を与える為に。

「ひゃはははははっ！　どうだゲキレンジャー！　どうだファイズ!!　己の無力を思い知ったか!?」

「て、テメェ……」

「何の罪も無い人々を、あんな風に……」

「許さない……俺、絶対に許さないぞ、このザリザリ!!」

「何とでも言え。所詮貴様らの言葉など、負け犬の遠吠えに過ぎんのだからな!!」

高らかに笑いながら、悔しがるジャン達に向かってゲワシハが言った瞬間。

「ああ～……ったく、面倒臭ぇなぁ」

その言葉と同時に、乾はその姿を最初に見た狼男の姿に変えると、相手の眼前まで飛び上がり……思い切り相手の顔面を殴り飛ばした。

ごしゃあっ、と言う派手な音と共に、ゲワシハの体は、彼が作り出した瓦礫の山にぶつかり、砂煙を立てて大地に突っ伏す。一方の乾は、人間の姿に戻ると軽く右手をスナップさせながら、吹き飛んだゲワシハに怒りの視線を向けていた。

……ここに来てようやく、ゴウは理解できた。乾の面倒臭そうなその態度は、フェイクなのだと言う事が。その態度の奥では、自分達と同じ「人間を守る」と言う意思が存在していると言う事にも。

懸念していた「暴走」など、恐らくは杞憂。彼は、どこまでも自分達に……いや、「自分に」近い存在であると。そして、近いからこそ気に入らなかった。もう1人の自分を見ているような気になって。

「煩いんだよ、ごちゃごちゃと。人間だ、オルフェノクだって。関係ないんだよ」

「関係ない、だと？」

「ああ、関係ないね。人間もオルフェノクも、良い奴は良い奴だし、悪い奴は悪い奴だ。俺はあんたが気に入らない。だから……ぶちのめす」

その言葉と同時に、乾はいつの間にか持っていた携帯電話を構え、「5」を3回、直後にエンターキーを押下する。

『Ｓｔａｎｄｉｎｇ　Ｂｙ』

「変身！」

『Ｃｏｍｐｌｅｔｅ』

高々と掲げられた携帯電話が、ベルトのバックル部分にはまると、電子音が彼の変身を許可し、その体を銀色の鎧が覆っていく。

黄色い瞳、赤い線。右手首を軽くスナップさせるのは彼の癖だろうか。

オルフェノクの、もう1人の「王」。ヒトとオルフェノクの共存を実現させると誓った者。それが乾巧であり、ファイズ。

そんな彼の変身に感化されたのか、ジャン達も己の変身ツールを構え……

『滾れ、獣の力！』

「響け、獣の叫び！」

「研ぎ澄ませ、獣の刃！」

『ビースト・オン！！』

掛け声と共に、5人の体を色とりどりのスーツが包む。

「体に漲る、無限の力。アンブレイカブルボディ！　ゲキレッド！」

無限の力をその身に宿し、何者にも破壊できぬ体を持つ者。それ

が、ゲキレッドこと漢堂ジャン。
「日々是精進、心を磨く。オネストハート！　ゲキイエロー！」
日々の修練を怠らず、それにより真っ直ぐに己の心を鍛える者。
それが、ゲキイエローこと宇崎ラン。
「技が彩る、大輪の華。ファンタスティックテクニック！　ゲキブルー！」
美しき華のような技を持ち、相手を魅惑の世界へ誘う者。それが、ゲキブルーこと深見レツ。
「紫激気オレ流、我が意を尽くす。アイアンウィル！　ゲキバイオレット！」
臨気に近い激気を纏い、それでもなお意思を貫く者。それが、ゲキバイオレッドこと深見ゴウ。
「才を磨いて、己の未来を切り開く。アメージングアビリティ！　ゲキチョッパー！」
自身の根源をひたすら磨き、それ故に強き拳を持つ者。それが、ゲキチョッパーこと久津ケン。
『獣拳は、正義の証！　獣拳戦隊、ゲキレンジャー！』
５人の拳士が名乗りを上げると、ゲワシハは忌々しげに舌打ちをし……
「リンシーズ！」
パチンと指を鳴らして、臨獣殿の一般兵士たるリンシーを呼び寄せる。ゲキレンジャーと戦う際は、質より量と言うのが、リンリンシー達の行動として多く見られるが、今回もその例に漏れないらしい。
無数のリンシー達に囲まれながらも、ジャン達は余裕気にそれらを蹴散らす。乾の方も、特に慌てた様子も無くリンシー達を殴り飛ばしている所を見ると、対多数戦闘の経験があるのだろう。それでも自分達よりは動きが悪いように見えるのは、経験が少ないからなのか。
それでも、元の実力差があるが為に、リンシー達はその数を減ら

し、いつの間にか残っていたのはゲワシハと数人のリンシーのみとなっていた。
「チッ。やはりリンシー共では荷が重すぎたか」
「やい、ザリザリ！　今度こそお前を倒して、皆を守る！」
「倒す？　俺を？　出来るのかな、貴様らに！」
言うや否や、ゲワシハは高く宙に舞い上がり、その翼を大きく広げると……
「リンギ、鷲羽満刺（しゅううまんし）！」
掛け声と同時に、無数と言う表現では生温いくらいの羽根が降り注ぐ。慌ててその羽根をかわすが、そこに出来た僅かな隙をつき、ゲワシハは高速回転を開始、一直線にケンに向かって急降下を開始した。
「何！？」
「気の研鑽ができるのは、俺だけで充分だ！」
血走った眼をケンに向け、研鑽された臨気の羽根で彼を断ち切らんと降下するゲワシハ。
ジャン達もその攻撃に気付いた物の、既に相手はケンの眼前にまで迫っている。
避けるのには間に合わない。となれば、相手の攻撃をいなすしかない。
瞬時に思い、ケンも自らの武器……サイブレードを構え、己の激気を研鑽してやってくる衝撃に備える。だが、研鑽する時間も間に合わないかもしれない。
そんな嫌な印象が、ケンの脳裏を過ぎった瞬間。
「させるかよ！」
『Ｃｏｍｐｌｅｔｅ』
『Ｓｔａｒｔ　Ｕｐ』
乾の声が響いた。その直後、ゲワシハの軌道は何かに弾かれたように横へと大きく反れ、再び瓦礫の山へと突っ込んでいく。
「何……っ！？」

驚きの声を上げる暇もあればこそ。気付けばゲワシハの周囲には、赤い円錐形の何かが無数に取り囲んでいた。

ファイズを知る者がいれば、すぐに分った事だろう。それが、超高速形態であるアクセルフォームとなった彼が、必殺技であるクリムゾンスマッシュを放つ瞬間だと言う事が。

次の瞬間には、四方からファイズの超高速の蹴りを喰らい、ゲワシハの体は大きく傾く。彼を拘束していた赤い円錐は、いつの間にか「Φ」のような模様となってその体に突き刺さっていた。

『Ｔｉｍｅ　Ｏｕｔ』

「まぁ、こんなもんだろ」

高速移動モードから通常モードに移行した乾が、ふぅと軽く息を吐きながら呟く。

普通のオルフェノクなら、この攻撃で倒れてくれる。余程の事がない限りは、これで決着がつくはず……そう思った。

しかし。相手は決して「普通」ではなかった。失念していた訳では無いが、多少は期待していたのだ。今の攻撃で終わってくれる事を。そんな期待も空しく、相手は傾いだ体を起こし、怨嗟の篭った視線をファイズに向ける。

だが、赤かったはずのその顔は、先程までのリンリンシーとしての顔では無く……オルフェノクと同じ、白に近い灰色をしていた。顔だけではない。その全身も、首筋を中心にして一気に灰に染まっていく。まるで相手が、完璧なオルフェノクになってしまったかのように……

＊

「邪魔を……邪魔をしおってぇぇぇっ！」

「何なのよあいつ……」

完全に灰色の体となり、吼えるゲワシハを見つめながら、薄ら寒そうな視線を向けるメレが、彼らとは少し離れた場所でその戦いを

眺めていた。
いや、もはやそれを戦いと呼んで良いのかすらもわからない。今のゲワシハには、高みを目指すと言う志を感じられない。
理央のための臨獣殿復興の意思や、世を制すると言う意思よりも……ただ、彼の身の内に宿る悪意の滾るままに暴れているようにしか見えなかった。
「あちゃー……暴走しちまったかぁ？　あいつ」
「天狼（ティエンラン）！」
カリカリと後ろ頭を掻きつつそう言ったのは、ゲワシハに不思議な物を渡した男……自称、「妖獣拳使い」の天狼（ティエンラン）。その表情は、困ったように聞こえる言葉とは裏腹に、とても楽しそうに見える。
一体いつの間に自分の背後を取ったのだろう。全く気配が無かった。自分が声をかけられるまで気付かない事など、ほとんど無いと言うのに。
――やっぱりこの男、出来るわね――
心の中で思いつつも、メレは目の前の男に警戒を抱く。ロンの言う幻獣拳も胡散臭いが、この男の扱う妖獣拳とやらも充分に胡散臭い。
「アンタ、何しに来たのよ？」
「ひゃはは っ。つれない事言うなよぉ、メレ。俺はただ、自分の使った物の末期（オワリ）を見に来ただけだぜぇ？」
金色の瞳を細めながら、天狼（ティエンラン）はむやみに暴れるゲワシハを見つめる。
……目の前の男は、「末期」と言う言葉を使った。と言う事は、この男は既にゲワシハの死を予期している事になる。自分が選び、「何か」を施した相手だと言うのに。
「ま、暴走したならしたで良い。その代わり、観察させて貰うぜぇ？　あの連中が『ブレイク』出来るかどうかをよぉ」
心底楽しそうに呟く天狼（ティエンラン）に、もはや自分の姿は映っていないらしい。呆れ混じりの溜息を吐きつつ、メレは黙ってゲキレンジャー達

の様子を見つめる。
――こんな得体の知れない力に負けてるんじゃないわよ、格下ズ――
心の中で、そう呟きながら……

修行その11：ピカピカの意思（後書き）

青器：結局2週間ぶりくらいになってしまったかしら？　皆様、お久しぶり

玄金：いやぁ、もうバレバレなんだから、さっさと「星」の皆様の実験内容明かしちゃえばいいのにね

青器：……それは、「明瞭な夢～」本編でのあなたの正体に関しても言える事よね、玄金？

玄金：ザクッ！

そ……それはさて置き！　今回のゲワシハ君のリンギ……「鷲羽満刺（しゅううまんし）」だっけ？　結局どんな技だったの？　今回は巧君に邪魔されちゃって決まらなかったじゃない？

青器：数年前に考えていた内容では確か……研鑽した臨気の羽根を、相手の全身に余す事無く突き立てた挙句、ゲワシハ自身も研鑽した臨気を纏って体当たり……と言う攻撃だったそうよ？

ところが、今回はゲワシハの羽根攻撃は、「オルフェノクの攻撃」と言う表現をなしている物だから、余す事無く突き立てたら、ゲキレンジャー全滅でしょう？

玄金：……だから、今回は「羽根攻撃で足止め、動けないところを体当たり攻撃」に変更した訳か……

……ってちょっと！　今回本当に巨大戦あるの？　何か前回のゴーオン&カブトの二の舞になりそうで怖いんだけど！？

青器：一応考えてはいるみたいだから安心なさい。次回は序盤でブ

レイクして、邪身豪天変でもさせる気でしょう
今回、メレが出てきたのは、バエを登場させるための布石と言う説もあるし

玄金：いや、でもね龍水ちゃん、結愛ちゃんはいつも布石を打っておきながら、文字数の関係上その布石回収しない事が多々あるじゃない
例えば、ゴウ兄さんのファイズ変身とか……

ごしゃぁっ

青器：……口は災いの元って諺を知らないのかしら。と言うか、本当に懲りないわねぇ、玄金。今回はコンクリートの塊と仲良くさせてあげたけど、いかがかしら？
今度こそ死んでくれると、ネタバレの心配が無くなって、とても助かるのだけれど……やっぱり無理かしらね？
それでは、次回はこの後書きにムダニステラが登場、彼女の自己紹介をしてもらうわ
それでは、また

第12話

「ぅををををっ！」

狂ったような声を上げながら、「ゲワシハだったモノ」はゲキレンジャーとファイズに向かって攻撃を放つ。だが、その技に精彩は無い。臨気の研鑽どころかリンギを使う様子も無く、ただひたすらに突っ込んでいるだけ。

それで果たして、リンリンシーと呼べるのだろうか。

確かにパワー面では先程よりも上かもしれない。だが、それも当たらなければ意味が無い。

リンギを用い、獣拳でねじ伏せてこそ、臨獣殿の勝利と言えるものを。

「アンタ……本当に何をしたのよ？」

隣にいる天狼（ティエンラン）に、メレは詰問するような口調で問いかける。

ゲワシハがおかしくなったのも、全てはこの男が「何か」を施したためだ。しかしそれが、臨獣殿の……理央の為になされたものでない事くらいは、今の様子を見ていて十二分に理解できる。

――理央様に仇なすのならば、いっそこの場で始末してくれる――

そう思いながら、彼女は楽しげに顔を歪める天狼（ティエンラン）へ視線を向けた。が、その殺気すらも心地いいのか、彼はますますその目を楽しげに細めると、喉の奥で低く笑い……

「別に、理央サマに敵対する気は無ぇから安心しな。まあ……言ってしまえば、あのハゲワシヤローは俺の与えた力に溺れ、その悪意を暴走させてるって事さ」

「悪意の、暴走？」

「各個たる自我、俺の与えた悪意を上回る悪意……そう言った物があれば、こんな暴走しなかったのになぁ。修行が足りなかったんだろ」

天狼（ティエンラン）が言うと同時だっただろうか。ゲキレンジャーの声が響き渡

る。
「ゲキワザ、咆咆弾（ほうほうだん）！」
「ゲキワザ、瞬瞬弾（しゅんしゅんだん）！」
「ゲキワザ、転転弾（てんてんだん）！」
赤、黄、青に彩られた激気の獣達が、それぞれゲワシハに向かってその牙で噛み付き、体当たりで吹き飛ばし、最後に回転をしながら薙ぎ払う。
「まだまだ！　ゲキワザ、超捻捻弾（ちょうねんねんだん）！」
悲鳴を上げる暇も与えず、今度はケンの放った研鑽された激気が腹部を貫く。
そして、気付けばゲワシハの眼前に、再び赤い円錐型のポインターがロックされていた。
そのポインターに向かっているのは……巧とゴウの2人。
「ゲキワザ、狼狼蹴（ろうろうしゅう）！」
「やぁぁっ！」
ゴウの延髄蹴りと、巧の蹴りが合わさり、ゲワシハの体に赤い「Φ」の文字と、紫色の直線が浮かび上がる。
それが重なり、最終的に赤紫色の十字架のような紋様となる。その十字架に磔にされたように、ゲワシハは両腕を広げ、天に向かってその嘴を突き出した。
「がああぁぁぁぁぁっ！？」
6人の攻撃に耐え切れず、ゲワシハの体が大きく爆ぜると同時に、その体は灰色から元のカラフルな物に戻った。
その足元に、何か小さな機械のような物が落ちている事に、一体何人が気付いただろう。既にそれは2つに割れてしまっているものの、目を凝らせば中央に貼ってあるシールに、ヒトと異形が絡まりあって「O」の文字がデザインされている。
すぐに、それも爆風に巻き込まれて跡形も無く消えたが。
「不味いわね。あいつ、邪身豪天変も使えなくなってるじゃないの……！」

「ひゃはははっ！　自分で巨大化できねぇって言うのならよぉ……」
いつまで経っても巨大化しないゲワシハに対して苛立っているのか、そう呟くメレの横で、楽しそうに天狼（ティエンラン）は言うと、懐から何かを取り出した。
鈍色の、丸い物体。中央付近に浅く溝が彫られたそれは、どことなく爆弾のように見える。
「外部刺激で巨大化させりゃあ良いだろ？」
「アンタ、何よそれ！？」
「クックック……」
メレの慌てた声も何のその、天狼（ティエンラン）はそのピンを己の犬歯に引っ掛けると、それを一気に引き抜き……
「巨大化爆弾！！」
楽しげに叫びながら、それをゲワシハの方へと放り投げる天狼（ティエンラン）。
そして、投げられたそれ……天狼（ティエンラン）曰く「巨大化爆弾」とやらは、綺麗な弧を描いてゲワシハの足元へ着弾した。
瞬間。それは狙い済ましていたかのように大爆発を起こし、濛々と土煙を上げる。
「爆発した！？」
「一体何が起きたってんだ！？」
レツとケンの驚きの声が響いた、まさにその瞬間。ゲワシハの姿は、「邪身豪天変」を使用した時と同様、５０メートル近い巨体へと変化していく。
本人は何もしていないと言うのに。
「今の、一体……」
「んあ？　巨大化爆弾の事かぁ？　こいつはゴーマの連中が巨大化する時に使っていた道具さ。ゴーマ宮がなくなる前にギッといて正解だったぜ。まあ、使い方に関しては俺サマ流に多少の改良（アレンジ）を施しちゃあいるが、効果の程はほとんど変わらねぇ。邪身豪天変と同じように、ちぃとばかし巨大化して、更にちぃとばかし凶暴になるだけだ」

喉の奥でクックと笑いながら言い切ると、天狼（ティエンラン）はもはやこの場には興味ないと言わんばかりにくるりと踵を返す。
「そんじゃメレ。俺はこれにて失礼させてもらうぜぇ？」
「何ですって？」
「俺の実験は終った。後の事にゃ、興味ねぇ。もう2度と、あんたらの前に出る事もねぇだろ。……儲かりそうもねぇしな」
それだけ言うと、彼の姿は煙の如く掻き消えてしまう。
だが、不思議とそれを追おうという気は起きない。むしろいなくなってくれてほっとしている自分に気がつくと、彼女は薄ら寒そうに自分の二の腕をさする。
あの存在は、理央だけでなく、この世界の敵になりうる。そう、本能的に感じていたのかも知れない……

＊

「何かいつもとデカデカのなり方が違う！！」
怒ったように呟くジャンを横目で見ながら、巧は軽く舌打ちをする。
以前、こことは異なる「異世界」に向かった時、今のゲワシハと同じくらいの大きさの敵に出会った事がある。
あの時、「敵」として立ちはだかり、そして和解した存在の事を思うと、少しだけ胸が痛む。彼は今、どうしているだろうと思ってしまう。
……とは言え、今は感傷に浸っている場合では無い。目の前で吠える巨大化した敵をどうにかしなければならないのだ。
――あの時は「時の列車」とやらで何とかなったが、今回はどうするんだよ――
と、考え込もうとした瞬間。
「来い、サイダイン！」
『ゲキワザ、来来獣（らいらいじゅう）！』

何だ、と巧が思う間もなかった。
ジャン達の声に応える様にして、先程放った激気の獣を、さらに大きくした物と、白い巨大なサイの様な物が現れ……それにジャン達が吸い込まれるようにして乗り込むや否や、1体の拳士としてその場に降り立つ。
『サイダイゲキトージャ、バーニングアップ！』
――……マジかよ――
と、思わず心の中でのみ、巧はツッコミを入れる。
巨大戦の経験があまり無い巧からすれば、この光景は異様としか言いようが無い。何故にさも当たり前のように巨大ロボット……と思しき物が出てくるのだろう。
そう言えば先程、ジャンは「いつもと」と言っていた。と言う事は普段からこんな巨大な敵と戦っているのか。
――そうか、慣れの問題か――
と、ガラにもなくぼんやりと考え込んでいる巧の耳に。聞き慣れた声が届いた。
「た……たっくーん！！」
「って啓太郎!?　お前、何だってここに?」
ぜいぜいと息を切らせながらやって来た啓太郎に、驚きの視線を向ける巧。確か啓太郎は、あの「スクラッチ」と言う会社に置いてきたはずだ。それなのに、何故……?
「たっ君、忘れ物……」
「忘れ物?」
「こ、これ……」
言いながら啓太郎が差し出したのは、ファイズ用の特殊ツール……ファイズブラスター。
「たっ君、これをバンの中に忘れてたから。シャーフーさんとお茶してる最中に思い出して、慌てて持ってきちゃったんだけど……いらなかった?」
「この状況で、いらない訳無いだろ」

少々呑気な事を言っている啓太郎の胸元を軽く叩いてそう言うと、巧は立った今渡されたファイズブラスターにファイズフォンをセットする。

するとファイズブラスターはそれを認識、「Ａｗａｋｅｎｉｎｇ」の音声と共にドライバーに再起動をかける。

瞬間、ファイズの姿が再び変わる。今までライン……フォトンストリームに流れていたフォトンブラッドはスーツの方に流れこんだために赤く染まり、逆に何も流れていないフォトンストリームの方は光を失い漆黒の影を落とし、更に背中には専用のマルチユニットが装備される。

それこそが、ブラスターモードと呼ばれる、ファイズの最強形態である。

「じゃ、ちょっと行ってくる」

「気をつけてね、たっ君！！」

「５２４６」とエンターを押し、巧はサイダイゲキトージャに加勢すべく宙を舞ってその場を離れた。

その瞬間。

「はーい！！　今日も私（わたくし）、熱い巨大戦を実況させて頂きます！　激獣フライ拳の使い手、バエです、ブーン！」

「う、うわぁぁぁっ！　何か中途半端に大きなハエがしゃべった！？」

啓太郎の耳元で響いた声に驚き、その主を見れば……そこにいたのは人の顔くらいの大きさのハエ……のような生き物。

ただ、口元はどこと無くマイクのように見えるし、喋っているのは間違いなく人語……と言うか日本語。ハエにしては大きいし、おまけにサスペンダー付きの服を着ている。手足も昆虫特有の６本ではなく、両手両足の計４本だ。

「ハエって言わないで下さい。バエって名前があるんですから。あ、私、巨大戦を実況するのが趣味でして。今日は解説をお願いしたいなぁと」

「ぼ……僕が！？」
「はい。メレさんにも私にも、ファイズさんの技は分りませんから」
――メレさんって誰？――
ブンブンと首を縦に振りながら言うバエに、啓太郎は一瞬だけ不思議そうにその顔を顰めるが……すぐにこくりと頷きを返した。
自分に出来る事は、そんなに多くない。ならば、自分に出来る事……巧を応援する意味も込めて、解説役を買ってみようと思ったのかもしれない。
スクラッチで信じて待つのも1つの「戦い」だが、ここで声援を送るのも啓太郎の「戦い」だからと判断したのか。
「はっ！　とか言ってる間に、ゲワシハによる上空からの羽根攻撃だぁぁ！」
「あいつ、馬鹿の1つ覚えみたいな攻撃しか出来ない訳？」
「……メレさん、今日はいつになく厳しいですねぇ」
「って、いつの間に君も隣に……？」
びくりと身を震わせながら、啓太郎はいつの間にか隣に立っていたメレに声をかける。
メレの方はと言うと、特に興味も無さそうにそっぽを向いてしまうが。
もはやこの2人に突っ込んではいけないのかもしれない。そう開き直ると、啓太郎は戦いの方に視線を向けなおす。
サイダイゲキトージャの体に、ゲワシハの無数の羽根が突き立っているが、どうやら既にオルフェノクのように灰化させる力は無いらしい。
ただ、物理的な攻撃として羽根を飛ばしているのだと分った。
「これは痛い！　サイダイゲキトージャの機動性の低さが仇になったか！」
「うーん……確かにあれだけ大きいと、機動性は期待できないよね。だけど……僕達には、たっ君がいる」
『Ｂｌａｓｔｅｒ　Ｍｏｄｅ』

啓太郎が力強い声で言うと同時に、ファイズブラスターの電子音が周囲に響く。直後、フォトンブラッドによる砲撃がゲワシハの片翼を撃ち貫き、もぎ取る。

片翼だけではバランスが取れないのは自明の理。相手は派手に地面に叩きつけられ、悶え苦しむ。

「おっとぉ！　ゲワシハの自慢の羽根が、ファイズによって撃ち抜かれた！　これは形勢逆転か！？」

「1人人間サイズな分、小回りが利いたのと小さすぎてゲワシハには見えなかったって事ね」

「今のはフォトンバスターモードだね。普通はあの攻撃だけで灰になっちゃうらしいんだけど……」

不思議そうに首を傾げながら言う啓太郎。その言葉に、メレはその怜悧な顔を忌々しそうに顰めると、よろりと立ち上がるゲワシハを見やる。

切り落とされた方の羽根はザラザラと灰に変わるのだが、本体の方は少しも灰化の気配がない。

「……さっきまで変に暴走してたせいで、灰化の耐性でも出来てんじゃないの？」

――あるいは、天狼（ティエンラン）が巨大化させる際に、更に何かやったか――

声として出てくる可能性と、心の中に浮かぶ可能性。どちらの方がありえるかと言えば、メレは迷いなく後者を選ぶ。

両方、と言う考えもあるが、先程まで共にいた、寒気がする程関わりたくない相手の事。「使い方に関して改良した」と言っていたが、改良……否、「改悪」した部分が使い方だけとは思えない。

「あ、あとは大きさが違いすぎるせいで殆ど効かなかったとかかな？」

「……かも知れないわね。理央様の役に立たないような奴なんて、どうでも良いけど」

啓太郎の声に返すメレの口調は、やはり冷たい。と言うよりも投げやりと言った方が良いか。

恐らく彼女は、「得体の知れない力」に溺れたゲワシハを嫌っているのだろう。理央の為に戦わないリンリンシーなど、彼女にとっては敵も同じなのだから。

「よくも……よくも自慢の羽根をぉぉ！」

怒り狂いながらファイズを追い回すゲワシハだが、先程メレが言った様に、ファイズは人間と同じ大きさ。ゲワシハから見れば、非常に捕まえにくい大きさである。

それに……ゲワシハの敵は、ファイズだけではない。その事を失念していたらしい。

いつの間にかゲワシハとサイダイゲキトージャの距離が縮まり、ゲキワザの射程範囲内に入っていた。

『ゲキワザ、砕大頑頑撃（さいだいがんがんげき）！』

「しまっ……！」

気付いた時には既に遅く、ゲキトージャの上半身が回転、ゲキジャガー、ゲキチーター、ゲキウルフの高速移動により、竜巻が発生しゲワシハを上空に吹き飛ばす。

「隙を突いてジャガー、チーター、ウルフのフルコンボが、ゲワシハに炸裂ぅぅっ！　これはかなり効いているぅぅぅっ！」

そしてそのまま、サイダイゲキトージャは落ちてきたゲワシハをサイダインの角でざっくりと切りつける。

「斬撃も極まったぁぁぁっ！」

「たっ君、最後……行っちゃえ！！」

『Ｂｌａｄｅ　Ｍｏｄｅ』

それはまるで啓太郎の声に応えるかのように。天高く舞い上がっていた巧も急降下し、大型のフォトンブラッド剣で勢い良く相手を断ち切った。

「解説の啓太郎さん、今のは一体何と言う技ですか？」

「フォトンブレイカー！　ブラスターモードの必殺技の１つだよ！」

２つの斬撃が、ゲワシハの体に刻まれ……そして彼は、偽りの命を再び散らした。

「やぁりましたぁぁ！　サイダイゲキトージャとファイズの見事なコラボレーション、その勝利ですぅぅ！」
「流石たっ君！」
『サイダイゲキトージャ＆ファイズブラスター、ＷＩＮ！』
夕日を背に負い、真っ赤に染まるサイダイゲキトージャと、その肩に止まるファイズの姿は、まるで1枚の完成された絵のように、鮮やかな勝利を演出していた……

「連中、ブレイクしやがった」
「ほう？　ブレイクは風の街の者達にのみ出来る物だと思っていたが……」
どことも知れぬ闇の中。そこへ戻ってくるなり楽しそうに呟いた天狼（ティエンラン）に、刀の手入れをしていた爪牙は僅かに驚いたような声を上げた。
その横では、手入れの様子を興味深そうに眺めているステラがいる。
だが、彼女の方は特に驚いた様子も無くつまらなそうに口を尖らせるだけだった。
「なんとな～くできるような気はしていたでありんすけど……実際やられたって聞くと、凄くムカつくでありんす」
「ベルトの設計者は、あの忌々しい『剣の小姓（ページ・オブ・ソード）』ですからね。出来て当然なのかも知れませんよ？」
心底苛立ったようなステラの声に応えたのは、天狼（ティエンラン）でも爪牙でもなく……4人目の存在。
その顔には穏やかな笑みが浮かんでおり、かっちりと着込まれたスーツは黒。手には銀色のジュラルミンケースを提げ、雰囲気としてはどこかのセールスマンのような印象を受ける。

だが、爪牙や天狼（ティエンラン）、ステラのようにこれと言った外見的な特徴はない。出会っても、すぐに忘れてしまいそうな顔立ちだ。

「よぉ。お前ぇか、エステル。今日はスーツか？」

「え……エ、エエエ、エステルたん……っ！」

「何をそんなに怯えていらっしゃるんです、ステラ？」

「……貴殿が手に、『それ』を持って構えているからだろう」

エステル、と呼ばれた男に対し、異常なまでの恐怖心を抱いているのか、ステラは怯える子供のように爪牙の後ろに隠れる。天狼（ティエンラン）や爪牙も、心なしかエステルとの距離をとろうとしているように見えた。

見た目は本当に普通の男だ。外見だけなら爪牙と天狼（ティエンラン）の方が明らかに強そうなのに……それでも彼らは、引き攣った顔を見せている。……つまりは、それだけエステルと言う男が怖いと言う事なのか。

「心外ですね、爪牙。いくら私でも、仲間を実験の対象にしようとは思いませんよ？」

「爽やか笑顔でさらっと嘘吐くな、エステル！　その顔は絶対ぇ何か企んでんだろうがよぉ！！」

「スマイルは商人の基本ですよ、天狼（ティエンラン）？　それに、嘘だなんて……吐いていますが、何か？」

「ひぃぃぃっ！　爪牙たん、天たん！　エステルたんが物凄い怖い笑顔でこっち見てるでありんすぅぅぅっ！」

「……しょうがねぇ、エステルはああ見えて俺ら『7人』の中じゃ最強だからなぁ。諦めろ」

「正直、逆らうだけ無駄と言う物だ」

「うふふ……嫌ですね、そんなに誉めないで下さい」

『誉めてない』

綺麗に3人の突っ込みの声が重なるが、エステルの方は別段気にした様子も見せず、ただにっこりと綺麗な笑顔を彼らに向けるだけだが、それが反って恐ろしい。

ステラはあからさまにびくりと体を震わせ、天狼（ティエンラン）は思い切り顔を

背け、爪牙は剣の柄に手をかけていた。
「まあとにかく……私はコレを、ネガティブシンジケートの皆様に買い取って頂きに参ります。留守の間、他の3人とも仲良くしてるんですよ？」
「……わっち達は、とっても仲良しでありんすよ？」
「テメェ以外とはなぁ」
「右に同じく」
「嫌ですねぇ。僕ほど人畜無害な死の商人はいませんよ？」
「『死の商人』の時点で、既に人畜無害とは言い難いであろう、エステルよ」
冷たい視線とツッコミを入れる爪牙だが、またしてもそれを軽く流すと、エステルはくるりと踵を返し、「次の商談相手」の元へと1歩、歩を進める。
その顔に、あからさまに邪悪な笑みを浮かべて。
「フフフ……ご購入下さるのなら、相手は誰だって良いのですよ。世界を滅ぼす結果になろうが、買い手を滅ぼす結果になろうが、私にとっては金銭が全て。それがこの私……エステルの信条です」
それだけ言うと、エステルの姿は闇へと消える。
次の商売相手……ネガティブシンジケートと呼ばれる者達と、商談を行う為に……

第１２話（後書き）

青器：あら、今回は貴女なのね、ムダニステラ？

ムダニステラ（以降、ステラ）：その通りでありんす、龍水たん！
嬉しいでありんす、この「後書き」に出る事は、わっちの夢だったでありんすよ！！

青器：あれだけの事をしておきながら、随分と安い夢なのね

ステラ：あう。あ、あれは……あれはっ！　エステルたんの指示だったでありんす！　わっちは本当はやりたくなかったのでありんすよぉぉっ！　龍水たんのいぢわるぅぅっ！

青器：神様には一部を除き容赦しない性格なの、ごめんなさいね

ステラ：うぅ……どうせなら武士たんと一緒が良かったでありんす……。無い物ねだりしてもしょうがないので、自己紹介をさせて頂きなんし

青器：はい、どうぞ

ステラ：わっちはムダニステラ。表の肩書きは、「ガイアーク害務大臣」、本当の肩書きは「星の漆（しち）」。「７人」の中でも一番の格下でありんす。銀の花魁姿で、顔は可愛い系美少女の機械生命体でありんすよ～

青器：いつか白刀も言っていたけれど、文字ばかりのこの世界で、顔の描写が無い以上、そんな事を言っても説得力は無くってよ？

ステラ：ふっ。「言うだけならタダ」でありんす。結愛たんはあまり俳優さんを知らないから、誰がモデルとか全っ然言えないらしいでありんす
話を続けさせてもらうと……わっちの名前にある「星」は「ステラ」。これはイタリア語の「Ｓｔｅｌｌａ」からとっているでありんす。ちなみにしゃべり方は、ドラマＣＤ、「ナデプ〇！」に出てくる、「咲坂こ〇と」ってキャラを参考にしているらしいでありんす。興味があったら聞くと良いなりよ、読者の皆たん

青器：興味ないからそこは放置しておくわね

ステラ：ガビーン！！　め……メルトダウンするくらいにショックでありんす……

青器：それにしても……本当に、辰巳のオリジナルキャラにしては珍しく、ハイな女性キャラよね？　これは辰巳の願望の現われかしら？

ステラ：「得てしてオリキャラと言う物は、作者の願望の投影である」と言われているでありんすからねぇ……可能性は否定できないでありんす。その証拠に、天たんも、ここではまだ出てきていない鬼宿たんも超・ハイテンションでありんす。あ、でも、明るい敵キャラが好きって可能性も……

青器：それは確かにそうね
それでは、次のコラボの事なのだけど……

ステラ：ハイハーイ！　「ボウケンジャー」とのコラボは、正解が異様に多かった「クウガ」でありんす！　冒険者つながりって言う、

単純にして明快な理由からしいでありんす～

青器：と、言う事は次回のサブタイトルは……

ステラ：「Ｔａｓｋ１３：古代の戦士」
エステルたんのド汚い商人魂が垣間見えるかもしれないでありんす

青器：そうだと面白そうだけれどもね
それでは皆様、また次回、お会いいたしましょうね

青器：西暦２０１１年９月１日、ゲキ＆５５５編修正完了。……修正しても真咲美希を出せなかったのは、痛いところね。ちなみに、裏設定上、彼女は娘のなつめの授業参観に出ていた、と言う話があるそうよ

Ｔａｓｋ１３：古代の戦士

命がけの冒険に、今日も旅立つ者がいる。
密かに眠る危険な秘宝を守り抜くために、あらゆる困難を乗り越え進む、冒険者達！

サージェス財団。民間の団体でありながら、大いなる力を秘めた秘宝、プレシャスを回収、悪用されないように保護・管理する団体である。その回収に向かう実働部隊が、「轟轟戦隊ボウケンジャー」。明石暁をチーフとし、伊能真墨、最上蒼太、間宮菜月、西堀さくら、そして高丘映士の６人で構成されている。
そして今、長野県のある山奥に「霊石」と呼ばれるプレシャスがあると言う情報を受け、ボウケンジャーはその場所へ霊石回収のミッションとして、向かっている最中である。
「それにしても、霊石か……何て言うか、ちょっと曖昧だよな」
「曖昧？」
崖を登りながら呟いた真墨の言葉を聞きとめたのか、菜月は可愛らしく首を傾げながら問い返す。
かなり急な崖であるにも関わらず、誰一人として息を切らせていない辺りは、流石にプロだ。
「霊石って言うと意味が大分広いからね。『賢者の石』とか『龍顎（りゅうあぎと）の玉』とかも、霊石の一種って扱いになるよ」
「要は、『不思議な力を持つ石』全般を霊石と呼ぶんです」
蒼太の言葉をさくらが継ぐ。教えてもらった方は、へぇ～と間の抜けた声を返すが…果たしてわかっているのかどうか、微妙なところである。
もっとも、菜月のそんな態度はいつもの事ではあるのだが。
「ま、どっちにしろプレシャスなんだろ？回収するに越した事はね

ぇってこった」
「シルバーの言う通りだ。ネガティブ達がいる可能性もある。充分に注意しろ」
「はーい」
「了解です、チーフ」
元気に返事を返す菜月と、真面目な答えのさくら。両極端な答えだが、彼女達らしい返し方だ。
フ、と口の端に笑みを浮かべながら明石が思ったその時、彼の視界に小さな洞窟のような物が目に入った。
山の中だ、洞窟がある事自体はそれ程不思議ではない。動物の巣穴、植物の存在していた跡など、様々な要因で洞窟は出来る。
だが……今回見つけた洞窟は、そんな風に自然に出来た物では無さそうだと直感した。
それは他のメンバーも同じらしい、まずは真墨が洞窟の入り口を軽く眺め……ニヤリと笑った。
「明石、こいつはやっぱり人工物だ。それも……かなり古い」
「つまり、遺跡って奴か」
「そうみたい。だけど……」
「入り口は破壊されています。それも、つい先程」
てきぱきと周囲を調べ始めていた蒼太とさくらが、この洞窟……否、遺跡の入り口だった物と思しき欠片を見せる。
かなり強引な力で開けられたらしく、粉々、と言う表現をしても差し支えない程度には砕け散っていた。
……ネガティブに先を越されたか…
そう思うと、明石の表情がきゅっと締まる。プレシャスの力を悪用しようとする存在を、一括して「ネガティブシンジケート」と呼ぶ。
ネガティブの中にも様々な組織があるが、その中でも特にボウケンジャーと関わるのは、神官ガジャが率いるゴードム文明、龍の力で世界を支配しようとする創造王リュウオーン率いるジャリュウ一

族、己の経済利益のために動く忍集団、幻のゲッコウ率いるダークシャドウ。

そして厳密にはネガティブとは言えないのだが……人間駆逐を目的に動く、クエスターが挙がる。

ネガティブからプレシャスを守る事がボウケンジャーの任務。もしもどこかの組織が既にこの場所にあるとされている「霊石」を持ち去った後だとしたら…うかうかしている場合ではない。悪用される前に、何としてでも取り返し、保護しなければ。

そう思った矢先……遺跡の中を覗き込んでいた菜月が、ふと不思議そうな顔をして明石の袖を引っ張った。

「どうしたイエロー？」

「チーフ、何か…変な音がしない？」

「変な音……？」

「うーんとね、ガギィンとか、ゴッって感じの音」

菜月の言葉に軽く眉を顰め、遺跡の中から響く音に耳をすませる明石。

それに倣う様に他の面々も耳をすませ……そして、それが戦いによるものだと気付くのに、そう時間はかからなかった。

聞こえてくるのは気合と共に吐き出される呼気と、争いによる喧騒。音が小さい事を考えると、大分奥の方で戦っているらしい。

「ひょっとして、中でプレシャスの取り合いでもしてるのかな？」

「可能性は否定できないな。全員、警戒しつつミッションを遂行する」

菜月の言葉に、深刻に頷きつつ、明石は端的に指示を下すと、気配を殺しながら奥へと進む。それに続くように、真墨、菜月、蒼太、さくら、殿に映士の順で曲がりくねった……だが、分岐などは無い一本道を歩む。

山の中、それも最近まで封印されていたような場所であるにも関わらず、空気はそれ程澱んでいない。むしろ、清々しい印象すらある。

……霊石があると言う話は、当たりかもしれないな。
心の中でのみ思いつつ、更に奥へ進む。次第に近くなる争い……と言うよりはむしろ戦いの音に警戒しつつ、ようやくその音源の元へ到着した。
どうやらこの遺跡の最奥らしい。広い空間と、突き当りには祭壇らしきものがある。そしてその空間では…茶色っぽい、蝙蝠を連想させる異形と、赤い、鍬形を連想させる異形が激しいバトルを繰り広げている。
「何だ？　ネガティブ同士の争いか？」
「わからん。だが油断は禁物だ」
真墨の訝しげな問いに冷静に答えつつ、明石はじっと事の成り行きを見ている。
本来ならこの争いを止めて、プレシャスを回収すべきなのだろうが……冒険者の勘とでも言うべき物が、彼にこの戦いを見守るように告げていた。
「バゼ、ボボビギス、クウガ！？」
「相変わらず、何を言っているのか分らないな……」
蝙蝠の方の言葉の意味は不明だったが、鍬形の方は明らかに日本語。しかも彼にも蝙蝠の言葉は理解し難いらしく、苦笑めいた声で呟いた。多分、独り言のつもりなのだろう。
向かい来る蝙蝠の攻撃をかわしながら、鍬形の方はカウンターの要領でその腹部を蹴りつける。
その威力が大きかったのか、蝙蝠は呻くような悲鳴を上げて、近くの壁に叩きつけられ、力なくその場に崩れ落ちる。
止めを刺すには絶好の機会だが、どういう訳か鍬形の方は躊躇したように蝙蝠を見やる。
「こんな狭い空間で倒す訳にも行かないし……だからと言って放っておく訳にも……」
呟かれた言葉は、心底困ったような色が窺える。
蝙蝠を倒すと言う意思はあるようだが、ここで倒すつもりは無い

らしい。どういう理由かはわからないが、ここで止めを刺すには何か問題があるのだろう。

……それにしてもと、明石はその2体の異形を見ながら不審に思う。

今まで出会ってきた、どのネガティブシンジケートとも取れないフォルム。強いてあげるならクエスターに似ていなくも無いが、それも少々違う気がする。

未知のネガティブシンジケート……そんな可能性が明石の頭を掠めた瞬間、蝙蝠はこれ以上の戦いは不利と判断したのか、ばさりと羽を羽ばたかせ、鍬形との距離を広く取り……

「ガサダバゲゲルン、ラブガベザ、クウガ！」

それだけ言うと、蝙蝠は鍬形から逃げようと出口、つまり明石達のいる方へ向かって飛んでくる。

まずいと判断するのと、反射的に変身ツールであるアクセルラーを構えたのはほぼ同時。明石は瞬時に遺跡の壁でアクセルラーに付いているタービンを回し、赤いアクセルスーツを纏った「熱き冒険者」……ボウケンレッドに変身、腰のホルダーに下げていたサバイバスターで蝙蝠に対して威嚇射撃を行った。

「へ！？」

鍬形の、間の抜けた声が響く。おそらくはこちらの存在に気付いていなかったためだろう。

だが、今は鍬形よりも先に蝙蝠の方を相手にする事が先決と判断し、油断無く銃口をそちらに向ける。

自分の後ろでは、明石に倣って他の面々も変身しているらしい。僅かに視界に入ったさくらの銃口は、鍬形の方に向いている。

だが、どうやら蝙蝠の方は先程の明石の攻撃に怒りを覚えたのだろう、低く唸るとその口を大きく開け……

「ザラゾグスバ、リントゾロ！」

そう吠えたかと思うと、再び蝙蝠は勢い良く明石に向かって襲い掛かる。その瞬間、明石は蝙蝠を「敵」と判断、相手の左の翼を撃

ち抜くと、すぐさまサバイバスターにスコープショットをセット、サバイバスター・スナイパーモードに変え、右の翼も撃ち抜いた。
両の翼を撃ち抜かれた蝙蝠は、宙を舞う事が出来なくなり、床にどさりと派手な音を立てて落ち……
「クライマックスシュート！」
そこを見逃さず、映士を除く5人の射撃が、蝙蝠の腹部を貫き…
…その存在を絶命させた。
「ば、爆発しなかった……？」
ほっとしたような、驚いたような、何とも言えない声を上げ、もう一方の異形は自分達の方へ歩み寄ろうとする。
「動くな」
「ええっ！？」
蝙蝠のような敵意は感じられないが、それでも不審な存在である事には変わりない。近寄る赤い鍬形の異形……というよりも戦士らしき存在に向けて、明石はサバイバスターの銃口を向けなおす。
「ハザードレベル……２０００！？」
「つまり、それだけ危険って事！？」
明石の後ろで、さくらは鍬形に向けてハザードレベルを計測していたらしい。その数値が示されるや否や、冷静な彼女らしからぬ驚きの声が上がる。
それにつられてなのか、蒼太もやや上ずった声を上げ、鍬形の方を見やる。
存在そのものがプレシャスなのか、それともプレシャスを持っているのかは不明だが、どちらにしろ危険度を示すハザードレベルが２０００と言うのはただ事ではない。
通常、三桁でもかなりの脅威なのだ。ある意味、世界を破壊しかねないレベルと言っても過言ではない。
色々と聞きたい事がある物の、当初の目的はこの場にある「霊石」の回収だ。明石は真墨と菜月の方を見やり、指示を出した。
「ブラック、イエロー。霊石の回収は任せた」

「ああ」
「了解」
出された指示に小さく頷き、真墨と菜月は鍬形の方に注意しながらも祭壇に向かい、そこに静置されていた丸い水晶の様な石をプレシャスボックスと呼ばれる箱に納め、回収する。
勿論、その水晶からプレシャスとしての反応がある事を確認した上で。
「それで、お前は何者だ？　何故ここにいる？」
「いや、俺……」
両手を挙げ、困ったような声で言った鍬形がひょいと肩をすくめた瞬間。その体が僅かに光り、次の瞬間には人間の姿になっていた。
見た目は明石より少し年上、やや下がり気味の眦に、人の良さそうな笑顔を浮かべた青年。服装から考えると、自分達と同じ「冒険者」と言う印象の装備を持っている。
「俺は、五代雄介って言います。ここに来た理由は、もちろん冒険しに」
にっこりと、敵意どころか悪意すら無さそうな素敵な笑顔を明石達に向け、「五代雄介」と名乗ったその男はそう言うと……すぐに不思議そうな表情になって、逆に問いかけてきた。
「そう言うあなた達こそ、何者なんですか？」
と……。

＊

どこかのホールらしき場所に、ネガティブシンジケートの面々が集っていた。
「呼び出したのは、リュウオーン殿か？」
「何を言う。貴様こそこの俺を呼び出したのではないのか？」
赤い竜人、リュウオーンに問うたのは、白い服の神官ガジャ。そんな彼らを、少し離れたところで青い鎧の忍である闇のヤイバが見

つめており、用意されていたらしい机にはクエスターのガイとレイがどっかりと座っていた。

どうやらこの面々、何者かに呼び出されたらしい。

「ボウケンジャーに一泡吹かせませんか」と言う手紙によって。

てっきりこの中の誰かが呼び出したのだと思ったのだが、どうやらそうでもないらしい。不審に思いながら、レイが出入り口の方に視線を向けたその時。1人の、黒いスーツを着た人間が、銀のジュラルミンケースを引提げて彼らの前に姿を現した。

「本日はご多忙の中お集まり頂き、誠にありがとうございます。私はエステル、商人をしております」

「商人だと？」

ヤイバの不審気な声に対して軽く笑みを浮かべつつ、エステルと名乗ったその男は恭しい態度で彼らに一礼を送ると、すぐさま持っていたジュラルミンケースを机上に置いてその蓋を開ける。

中に入っていたのは、人差し指ほどの長さを持つ色とりどりの「何か」。その物体からは、プレシャス同様とてつもない力を感じ取る事が出来る。

「本日は新商品のご購入をお願い致したく、ネガティブシンジケートと呼ばれる皆様方にお集まり頂いた次第でございます」

「……購入しなくとも、貴様をここで葬れば済む事だ」

「珍しく意見が合ったじゃねえか……よ！」

言うが早いか、ヤイバとガイの2人はエステルに向かって襲い掛かる。だが、エステルはヤイバの刀を人差し指と中指で軽く止めると、ヤイバとは逆方向からやって来たガイの顎を、つま先で蹴り上げる。

まさかここまで出来るとは思っていなかったのか、2人は驚いたように目を見開き……次の瞬間、ヤイバとガイは互いに衝突していた。ヤイバがエステルに投げられたのだと気付いた時には、投げた方はスーツに付いた埃を払うような仕草を取り、心底呆れたような視線を2人に投げているところだった。

「やれやれ。無敵将軍もどきとエセ大連王が、余計な事を。私に無駄な体力を使わせないで頂きたいですね」
ヤイバとガイに向かって笑顔のまま冷たく吐き捨てると、エステルは視線をガジャとリュウオーン、レイの3人に向け直す。
「残ったのはオーブロッカーと大獣神、牙大王と言った所ですか」
「……何を言っているのか良く分らんが、なかなか出来るようだな」
「お褒めに預かり光栄です、ガジャ様。商人と言えど、それなりの事はできませんと。それで？　どなたかご購入希望の方はいらっしゃいませんか？　今なら、少々丈夫な異形をお付けしますが？」
「何……？」
くすりと笑いながら、エステルはパチンと指を鳴らすと……出入り口から軍服姿の男がその姿を見せる。
その瞬間から、闇が……蠢き始めた。

Ｔａｓｋ１３：古代の戦士（後書き）

白刀：……何だ、今回のネガティブ共に対するエステルの呼び名は？
朱杖：あー、それな、あの連中のデザインモチーフになったロボだとゴードム文明はオーレ、マジなんかの不思議なパワーを使う系……
「ミスティックアームズ」
ジャリュウ一族はジュウレンとかの恐竜とか動物系……「ワイルドビースト」
ダークシャドウはカクレをはじめとする忍者系の「ミスティックアームズ」
クエスターはメインはダイレン、メカはその他のロボ……「オーバーテクノロジー」＆「アーステクノロジー」
……と言う分類なんだと

白刀：その分類、カードゲーム「レンジャーズストライク」だと気付く読者が何人いると思っている？
何故普通に言えん、貴様

朱杖：良いじゃねぇか、好きなんだよレンスト。前からあるのに、最近ダイスオーやガンバライドに圧され気味な不遇な存在だけど

白刀：……まあ良い。それにしても、今回の出会い方はやや最初の「シンケン＆響鬼」に近い印象を受けるな。ネタが尽きたか？

朱杖：いや、普通に考えてこれ以上どうしようも無いだろ。って言うか、プレシャス扱いだぞ、雄介。そりゃあ、アマダムは完璧プレシャスだろうけど……

白刀：基本的にライダーシステムはプレシャスと同じだろうな

朱杖：身も蓋も無ぇな、オイ

白刀：まあ、時間も時間だ。今回はこの辺で失礼しよう

朱杖：えっ！？　グロンギ語の解説とか一切無し！？　ちょっとおい、風虎！！

白刀：強制終了だ。その辺は牧野先生辺りに何とかしてもらえ、次回

朱杖：そ、そんな無茶な……

EPISODE14：秘宝

5月13日、11：26、長野県　「霊石の遺跡」

正直、五代雄介は困っていた。

自分は確か、久方振りにクウガとしての原点、長野県の九郎ヶ岳の遺跡に向かっていたはずだった。

しかし……唐突に自分の目の前に「銀色のオーロラ」が現れたかと思うと、周囲の景色は一変。それなりに整備されていたはずの山道から、獣道しかない森の中へと変わっていた。

「自分が、異なる世界に来てしまったのだ」と気付くまでにはそう時間はかからなかったが、そこは持ち前のポジティブシンキングで、この冒険を楽しむ事にした。

「世界の境界を曖昧のままにする」と言う選択をしたのだから、こう言う事もあるだろうと思って。

だが。

道なき道を冒険しているさなか、見つけたのは1つの遺跡。しかもその入り口は強引に壊されたような跡があった。気になって入ってみたところ、そこには非常に見覚えのある異形…未確認生命体3号と呼んでいたそれが、祭壇にある「何か」を奪おうとしているところだった。

結果、彼は否応無しに戦闘に突入、直後に何だかカラフルな6人組に拘束されてしまったのである。

未確認……グロンギとか呼ばれるそれとは、また趣が異なる。彼らよりは、むしろ自分達「仮面ライダー」に近いような印象を受けた。

とは言え……どうやらあちらの方は自分を危険人物と判断したらしい。ぴりぴりとした緊張感が漂っていた。

「お前は何者だ？　何故ここにいる？」

「いや、俺……俺は、五代雄介って言います。ここに来た理由は、もちろん冒険しに」

赤い戦士に問われ、五代は変身を解除し、得意技の笑顔とサムズアップで正直に答える。

嘘を吐く理由は無いし、むしろ嘘を吐いた方が問題あるかもしれないと思ったからだ。何しろ彼らは妙に殺気立っている。出来る限り、争いで物事を解決したくない身としては、今は彼らの神経を逆撫でる様な真似はよした方が賢明だ。

「そう言うあなた達こそ、何者なんですか？」

不思議そうな表情で問いかけると、こちらに敵意が無い事が伝わったのか、赤い戦士だけはその「変身」を解く。

自分と同い年か、少し年下と言ったところだろうか。服装は戦士と言うよりは自分と同じ「冒険者」のような印象を受ける。茶色いジャケットに、裏地は赤の迷彩模様。腕には携帯ホルダーのようなものがあり、そこには特徴的な黒い携帯電話……に似た何かがぶら下がっている。

「明石暁、ただの冒険者だ。そこにあった霊石を回収するためにやって来た、な」

明石と名乗ったその青年は、それだけ言うと、真剣な表情でパチンと指を鳴らす。

それが合図になったかのように、青い戦士と銀色の戦士が五代の腕を両脇から掴んだ。まるで、自分を拘束するように。

「……え？」

「悪いけど、ちょっと付き合ってもらうよ？」

「嫌とは言わせねぇぜ」

「え？　ええっ！？」

驚く暇も有らばこそ。あっと言う間に五代の体はロープでぐるぐる巻きにされた挙句、銀色の戦士の乗る巨大メカ……多分消防車がモチーフ……に乗せられ、どこかへと連れ去られてしまった。

5月13日、13：07、サージェス財団

ビルの地下にあるサロンに連れ込まれ、五代は茶色い服を着た中年男性に引き渡され、そして更に1時間にも及ぶ長い間、CTやらX線やら……諸々の検査をされた。

もっとも、検査の際には拘束は解かれ、中年男性……牧野森男と名乗ったその人物は、自分の検査結果を逐一教えてくれた。

そう言う意味では、この牧野と言う人は、五代の知るおやっさん……喫茶店ポレポレのオーナーである飾玉三郎と、自分の唯一の主治医を名乗る椿秀一を、足して2で……いや、多分1．5くらいで割った感じの人だと思った。

「いやぁ、驚きました」

五代をつれてサロンに上がってくるや、牧野はそこで待っていた明石達に向かって、開口一番そう言った。

彼の手には、五代の腹部のレントゲン写真が入った封筒がある。

神妙な顔の明石達とは対照的に、牧野の顔はそれ程強張っていない。むしろ、どこかわくわくしているようにすら見えた。

「牧野先生、何か分ったんですか？　その……彼の事」

青の入ったジャケットの青年がちらりと五代を見ながら牧野に問いかける。

声からすると、おそらく青い戦士だった人物だろう。他の面々も、明石と同じようなベージュのジャケットに、彼らのパーソナルカラーと思しき色が入っている。唯一異質なのは、銀色のジャケットの青年だが、背中には他の面々と同じ、「Ｓｅａｒｃｈ　Ｇｕａｒｄ　Ｓｕｃｃｅｓｓｏｒ」の文字が入っている

「ええ。結論から言って、雄介君はプレシャスと一体化してしまっています。取り外すのは、まず無理でしょう」

プレシャス……秘宝。

検査の間、牧野は終始穏やかな様子で五代に説明してくれた。

自分を連れてきた明石達は、このサージェス財団の先鋭部隊。プレシャスと呼ばれる危険な「秘宝」を保護、回収するための「冒険者」らしい。

そして、自分が連れて来られたのは……自分の中にある霊石、「アマダム」が彼らの言うプレシャスの定義に引っ掛かってしまったからしい。

しかも、とんでもなく危険な物と言う認識を持って。

それはそうだろう。自分の力……クウガの力は、下手をすると世界を滅ぼしかねないものだ。おそらく彼らは、何らかの方法でクウガの危険度を検知、そして自分をここに連れてきたのだろう。

それも、牧野に説明された事だ。そして納得もした。自分が彼らの立場ならば、説得し、やはり自分のテリトリーに来てもらう。

「『雄介君』って……随分親しげですね、先生」

「いや、検査の最中に名刺を頂きましてね。『夢を追う男、２０００の技を持つ男』だそうです」

ピンクのジャケットにポニーテールの女性に言われながら、牧野は五代が渡した名刺を自慢げに見せびらかす。

技の数も２０００まで来ると、流石に打ち止めらしい。最近は新しい技に出会う事も少ない。自分の持っていない技を持っている友人は増えたが、それを習得するのはそれこそ至難の技だと思う。

「それで？　こいつは人間なのか？　それとも、人間の振りした鍬形の怪物なのか？」

「真墨、失礼だよ」

「雄介君は人間ですよ。一体化してしまったプレシャス、アマダムの力で、クウガと言う戦士に変身できるそうです」

「俺の、２０００番目の技です」

ぐっ、と得意のサムズアップを見せながら、五代は黒いジャケットの男性と黄色いジャケットのツインテールの女性に向かって言い放つ。

「そうか。手荒な真似をした。すまない」

「え、良いですよ。それに、皆さんはお仕事をしただけじゃないですか」

深々と頭を下げた明石に、慌てたように返した。

本来の世界では、クウガも元は「４号」……未確認生命体と同じ扱いを受けていたのだ。何も知らず、クウガの姿を見ただけの彼らが、自分を危険だと判じるのは当然だろう。

少々手荒で困った事は確かだが、命の危険は感じなかった。だから、正直な話…あまり気にしていなかった。

「好青年って感じだよね、雄介さんって」

「ま、悪い奴じゃないって言うのは何となく分るけどな」

「俺サマも、最初からこいつは良い奴だって思ってたぜ」

「え～？　映ちゃんは雄介さんをぐるぐる巻きにしてたじゃん」

青、黒、銀、黄の順にぽんぽんと展開される会話。その横では、ピンクの女性が呆れたような視線を向けている。

「皆、チーフ以外が自己紹介していないのを忘れていますね……。はじめまして。私は西堀さくら。コードネームはピンクです」

「あ、さくらさんだけずるい！　あのね、私は間宮菜月って言うんだよ。強き冒険者、ボウケンイエロー！　よろしくね、雄介さん」

「俺は、最上蒼太。コードネームはブルー」

「俺サマは高丘映士、ボウケンシルバーだ。悪かったな、簀巻きにしちまって」

バシバシと五代の背を叩き、銀色……映士はどこからか取り出したセロリを五代に差し出した。

……食べろ、と言う事らしい。ありがたく受け取り、それを齧る。

１人、つまらなさそうな表情で黒い青年がこちらを見やり……

「伊能真墨だ。俺の事は、色で呼ぶな」

「真墨の事をブラックって呼ぶと、機嫌悪くなっちゃうんだ。真墨、お子様だから」

「聞こえてるぞ、菜月」

むすっとしたように、菜月の囁きに真墨が返した瞬間。自分の後

ろにあった大きなスクリーンに、唐突に何かのキャラクターが映し出された。
底面を上にした灰色の円錐に、ちょび髭とパッチリとした目をつけたアニメーションだ。
『やあ皆、元気そうだね』
「おや、ミスターボイス。どうしたんです？」
アニメーションのキャラクターの名は、ミスターボイスと言うらしい。確かに、男性の声だったから、ミスターなのだろう。
牧野の不思議そうな問いに、ミスターボイスはこくりと頷くと、更に言葉を続けた。
相手が人工知能なのか、それともこの組織の偉い人で、顔を見える訳に行かないのかは定かではないが、随分と人間臭い仕草を取るアニメーションだ。
『ちょっと思い出した事があってね。それを伝えに』
「思い出した事、ですか？」
「それって？」
『うん。皆、多重世界論って信じる？』
さくらと菜月の問いに、さらりとミスターボイスが問い返す。
「こことは異なる世界が、無数に存在するって言う、あれか」
「うわ。真っ先に理解出来なさそうな映士が、珍しく説明役に回ってる……」
「……あのなぁ蒼太。言っとくが、俺サマは高丘……アシュを『百鬼界』に封印した一族だぜ？　それ位の事は、術士として知っていて当然じゃねーか」
「……そう言えばそうだったな」
「野菜を齧っているイメージしかありませんでした」
「明石とさくら姐さんまでそう言うか……流石に俺サマも少し凹むぜ」
『……ねえ、話を戻して良いかな？』
「どうぞ」

『そのいくつもある世界の中でも、私達の住んでいる世界に近い場所に、仮面ライダーって呼ばれる存在がいるんだ』

それがさも当然のように、ミスターボイスは話を始めた。

彼も、他人から聞いたと言う、「仮面ライダー」についての話を……

5月13日、13：30、長野県　「霊石の遺跡」

「こやつが、お前の仲間か？」

完全に事切れているコウモリ種怪人、ズ・ゴオマ・グを見下ろしながら、ガジャは隣に立つ軍服の男に声をかける。

だが、軍服の男は軽く鼻で笑うと……

「ボギヅグババラ？　パサパゲス　（こいつが仲間？　笑わせる）」

「ふむ。格下と言う事か」

相手の言葉が理解できるのか、ガジャはそう答えると、ゴオマの脇にかがみこむ。

その手の中には、黒い何かがあり、それを迷う事無くゴオマの体の中にうずめていく。それはまるで、水の中に錘を沈めるかのように、何の抵抗も無く体内へと消えていく。

「ゴセパバンザ、ガジャ　（これは何だ、ガジャ）？」

「これは、ワシが開発したアンチパラレルエンジン……ゴードムエンジン」

ずぶずぶと埋め込まれるそれを、薄ら寒そうに見つめながら軍服の男はそのまま黙り込んだ。

どうやらガジャの行っている事は、彼の信念に反する事らしい。

だが、そんな事に構っている場合ではない。少なくとも、ボウケンジャーを倒し、そして「彼」にとっても倒すべき敵……クウガを倒すためには、ガジャと手を組むしかない。それは、倒されたはずの自分を「作り直し」、この世界に連れて来たエステルにも言い含め

られている。
　不機嫌そうな軍服の男とは逆に、ガジャは楽しそうに喉の奥で笑う。
　ほんの僅かな時間しか行動を共にしていないが、グロンギと呼ばれる彼らは、どうやら結果よりも過程を重んじるらしい。
　だが、ガジャは逆だ。過程よりも結果が大切。ボウケンジャーを倒し、再びこの地上にゴードム文明を栄えさせるためならば、何だってする。それこそ、他のネガティブシンジケート達をはじめ、エステルと言う名の不気味な商人、そしてボディーガードとして雇ったグロンギや……今まさに生まれ変わらせようとしている存在まで。
　この世の事象の全ては、自分に利用されるために存在していると言っても過言では無いとさえ思っている。
　全ては、破壊神ゴードムの為。地上を制し、破壊の限りを尽くす……その点では、ある意味グロンギの信念と似ているかもしれない。
　エステルと言う商人の持って来た商品に興味は無いが、グロンギの方は充分に利用価値がある。
　エステルの方もそれを見抜いていたのかもしれない。少なくとも、エステルはこちらの要求を呑んで、グロンギだけ売って来たのだから。
　……思っている間に、ゴードムエンジンはゴオマの体内に完全に埋め込まれ……ガジャはそれを見届けると、大きく腕を振って宣言する。
「さあ、目覚めるのだ！　ワシの、手駒として……！　そして、憎きボウケンジャーを屠るのだ！」
　彼の声に応えるように、カッと稲光が走り……そして、ゴオマは目覚めた。
　……グロンギとしてではなく、ガジャの手先として……

ＥＰＩＳＯＤＥ１４：秘宝（後書き）

白刀：……何だ、今回のこの書き方は

青器：クウガを意識すると、こういった書き方になるの。日付と、時間と、場所

白刀：滅多に見かけない書き方だからちょっと怖いな

青器：慣れないし、見慣れない。見ている人間にとっては、賛否両論でしょうね。辰巳の文章力の無さに「がっかりした！！」か、「取り合えずそのクウガを再現しようとした努力だけは誉めてやる」になるか……

白刀：言っておくが、それはどちらも「賛」では無いな。まあ、その程度の文章力しかない辰巳結愛が悪いのだが

青器：それもそうね。それでは皆様、また次回

白刀：今回、どういう訳か「メモリ」の気配が無いのは……気のせいか？

青器：ゴードムエンジンで事足りるものね……

青器：２０１０年5月１７日、ガジャと「閣下」の会話部分を一部修正＆追記したそうよ。
これで多少は見れるようになったかしら……？

Ｔａｓｋ１５：異界の霊石

「目覚めよ！　新たなダイジャリュウ！」
何処とも分からぬ洞窟の中で、リュウオーンは新たに生み出した自身の巨大な部下……ダイジャリュウに向かって声をかけた。
リュウオーンが作るダイジャリュウは、基本的にレックス……肉食の恐竜を思わせる物が多いが、今回は違った。分かりやすい表現をするなら、人間の様な体を持つトリケラトプス。勿論、表皮はジャリュウ一族に良く見られる赤い色をしている。
だが、今までのダイジャリュウと違う点は、それだけでは無い。特筆すべきは尾の部分にある奇妙な紋様だ。それはまるで、何かの接続口の様にも見える。
「おや、終えられたのですね、リュウオーン殿」
「貴様か、エステル」
闇から滲み出る様にして現れた、特徴の無い顔のセールスマンは、相変わらず読めぬ笑顔をリュウオーンに向けて優雅な一礼を見せた。
「ふむ、これなら何とかなりそうですね」
「能書きは良い。早く貴様の『商品』を寄こせ」
「ええ。既に入金を確認しておりますからね。それでは、こちらをどうぞ。ご要望にありました、『トライセラトップス』でございます」
言いながらエステルがリュウオーンに渡したのは、薄紫色をした１０センチ程の長さの「商品」。真ん中には「Ｔ」を連想させるデザインが施されている。
受け取ったリュウオーンは嬉しそうにその顔を歪め、しげしげとその「商品」を眺めた。
「実に面白い。持っているだけで膨大な力を感じるぞ」
「お気に召されたのなら幸いです」
「ダークシャドウの連中や、クエスター共にも売ったのか？」

「ええ。私は商人でございますからね。ご要望があれば、どなたにでも売ります。少々値は張りますが、専属契約を結んで頂いても結構ですよ？」

その言葉を聞きながら、リュウオーンは思う。目の前の男は、実に食えない存在だと。心を許しすぎては、いつか身を滅ぼす事になる。

この男の売る商品は魅力的だが、付き合いはこれ一度きりにした方が良さそうだ。いつ寝首を掻かれてもおかしくない……そんな気がする。

「フン。その辺はおいおい考えるとしよう。とにかく今回は貴様のこの商品……試させてもらうぞ」

言うが早いか、リュウオーンはその「商品」をトリケラトプスに似たダイジャリュウの尾にある紋様に向かって突きたて……そして、満足げに頷いた。

これなら、ボウケンジャーに勝てる……そう踏んで。

「行けぃ、我が部下よ！　そしてボウケンジャーを倒し、人間を根絶やしにするのだ！」

リュウオーンの宣言を聞きながら、その後ろでエステルは邪悪に顔を歪めたのを……一体誰が気付いただろうか……

＊

ボウケンジャーの面々がミスターボイスから聞かされた話は、どれも驚きに値するものだった。

１番驚いたのは、連れて来た青年……五代雄介が、ボウケンジャーが住まうこの世界とは「異なる世界」から来たらしいと言う事。そしてそれを本人が自覚していた事だ。

そして次に驚いたのが「仮面ライダー」の存在。「異なる世界」とやらには、様々な異形や、ネガティブの様な「悪の組織」が存在しており、それと戦う特殊な力を持つ戦士を、「仮面ライダー」と

呼ぶらしい。ちなみに、五代の変身する姿の名は「クウガ」と呼ばれる物で、先程彼が戦っていた異形はクウガの敵である「グロンギ」と言う戦闘種族だと言う話だった。

彼らにとって人間は「ゲーム」の対象でしかなく、人を殺す事に何の躊躇いもない。それどころか、殺す事を楽しんでさえいるらしい。

「……まるで、アシュみたいな連中だな。そう言う奴らが、俺サマは1番ムカつくんだ」

一通りの話を聞き終えると、心底苛立ったように映士は言葉を放った。他の面々も、どうやら危機感を覚えているらしく、軽く眉を顰めている。

だが、1番辛そうな表情をしているのは……やはり五代だった。

話していて分かったのは……彼はどうやら、拳で物事を解決するのを好まないらしいと言う事だ。まあ、基本的に、誰しも武力で物事を解決するのは気持ちの良い物ではないはずだが。

そう思いながら、ちらりと五代の顔を明石が見やったその時。今までカチャカチャとパソコンを弄っていた牧野が、ふと画面から顔を上げ、信じられない言葉を口にした。

「明石君達の記録した蝙蝠型のグロンギの言葉が、ほんの少しだけ、解読できました」

「本当ですか、牧野先生!?」

「ええ。『レッドロッド』と呼ばれる言語学者が、以前サージェスに提供して下さった言語データに、該当が。それで、特に気になる事を言っているんです」

蒼太の問いに、こくりと頷きながら、牧野は皆に見せるようにモニターにその「気になる事を言っているシーン」を映し出す。

レッドロッド……赤い杖。恐らくは偽名だろうが、今はその怪しげな存在の残してくれたデータベースがありがたかった。

それは、丁度蝙蝠型の怪人が逃げようと飛び退った瞬間の台詞。

『ガサダバゲゲルン、ラブガベザ、クウガ!』

「この台詞なのですが、これを翻訳します。すると……」
『新たなゲゲルの、幕開けだ、クウガ！』
「新たなゲゲル！？」
「ゲゲルって……ゲームの事だよね？」
「ええ。ひょっとすると、この世界に入り込んだグロンギは、彼だけではないのかも知れません」
牧野の低い呟きに、その場にいた全員の背に冷たい物が走った。
グロンギの言うゲームは、人間を殺す事で成り立っている。それは即ち、何の関係も無い人間が殺されると言う事だ。
とは言え、相手の居場所が分らない現状では手の打ち様がない。どうする、と自身に明石が問いかけた瞬間、警報にも似た甲高い音と、スクリーンに再びミスターボイスが映し出された。
それも、慌てたようなアニメーションで。
『皆、大変だ！　灯溶山に、膨大なプレシャス反応が観測された！　しかも、監視衛星の写真では、そこにネガティブが集っているようだ！』
ミスターボイスがはけ、スクリーンには1枚の写真が代わって映し出される。そしてそこには、トリケラトプスのようなジャリュウを従えたリュウオーン、クエスターのガイとレイ、ダークシャドウの闇のヤイバ、そしてゴードムの神官ガジャ。しかもガジャの後ろには見覚えの無い軍服の男が立っている。
「あれは……４６号！」
驚いたように声を上げたのは五代。しかも、４６号と言う言い方をしたという事は……
「あの男も、グロンギなのか？」
「……はい。カブトムシ型のグロンギで……強敵です」
ぐっと拳を固め、辛そうに言う五代を見やり、明石は軽く目を伏せる。
五代の力は、ハザードレベル２０００。それを持ってしても強敵と言わしめる相手となると、用心するに越した事はない。

「五代さん、大丈夫？　菜月達だけで行こうか？」
戦いを良しとしない。そう言った彼に気を使ったらしい。心配そうに覗き込んだ菜月に、五代は軽く首を横に振り……すぐに満面の笑顔を返し、大丈夫です、と答えた。
彼は、他人の笑顔のために、自分の笑顔を犠牲にできる優しい男なのだと、改めて明石達は認識する。
だが、今はそんな感傷に浸っている場合ではない。明石は不敵に笑うと、五代の胸元を軽く叩き……
「ちょっとした冒険だ。付き合ってくれるか？」
「……はい。いい冒険にしましょう、明石さん」
笑顔のまま、今度はサムズアップも付けて、言葉を返したのだった。

「待ちくたびれたぞ、ボウケンジャー！！」
現れた彼らを見て、リュウオーンが叫ぶ。その横では、他のネガティブの面々が嫌な笑いと共にこちらを見つめていた。
「お前達の思うようにはさせない！」
「ほざけ！　大口が叩けるのも今のうちだ！」
噛、とリュウオーンが吠えたのを合図にするように、ボウケンジャーの面々は己の変身ツールを構え、五代は腰に手を当てて変身用のベルトを現出させた。
「……Ｒｅａｄｙ！」
『ボウケンジャー、Ｓｔａｒｔ　Ｕｐ！！』
「ゴーゴーチェンジャー、Ｓｔａｒｔ　Ｕｐ！！」
「超変身！！」
それぞれの掛け声が重なり、次の瞬間には彼らの姿が色とりどりの戦士に変わる。
「熱き冒険者、ボウケンレッド！」
その二つ名の通り、熱き心で様々な困難を乗り越える冒険者……

明石暁。
「速き冒険者、ボウケンブラック！」
その二つ名の通り、速き動きで獲物を掴み取る冒険者……伊能真墨。
「高き冒険者、ボウケンブルー！」
その二つ名の通り、高き志で真偽を見分ける冒険者……最上蒼太。
「強き冒険者、ボウケンイエロー！」
その二つ名の通り、強き体で仕掛けられた罠を掻い潜る冒険者……間宮菜月。
「深き冒険者、ボウケンピンク！」
その二つ名の通り、深き思慮で仲間を導く冒険者……西堀さくら。
「眩き冒険者、ボウケンシルバー！」
その二つ名の通り、眩き光でその道程を明るく照らす冒険者……高丘映士。
「果て無きボウケンスピリッツ！」
『轟轟戦隊、ボウケンジャー！』
６人の声が重なり、まるで狙っていたかのように派手な爆煙が上がる。サージェスの仕掛けた発破なのか演出なのかは分らないが、その爆炎によって空気がしまったのは確からしい。
ポーズを取る６人の横で、「金の赤のクウガ」……ライジングマイティフォームに変身した五代が、仮面の下では楽しそうな笑顔でそれを見て、下にいるネガティブの面々に宣言する。
「今日は俺も、ボウケンジャーの仲間入りです！」
「なら、さしずめ『優しき冒険者』……と言った所だな」
「いいですね、それ。今度名刺に書き加えておきます」
明石に言われ、サムズアップと共に礼を言うと…改めて五代が名乗る。
「それじゃ……優しき冒険者、クウガ！」
五代が名乗った瞬間、ボウケンジャーの時同様に、今の彼の色に合わせたらしい、赤に金ラメの舞い散る爆煙が、彼の背後で上がっ

た。

「ボウケンジャー、クウガ……Ａｔｔａｃｋ！」

爆煙が収まったのを見計らい、パキンと明石が指を鳴らす。それと同時に、７人それぞれが、敵に向かってその場を駆け抜ける。

ダークシャドウ、闇のヤイバの前に立ったのは、彼に因縁を持つ真墨。

だが、ヤイバの姿は普段見る彼とは異なっていた。フォルムは変わらないのだが、普段はダークシャドウのパーソナルカラーである青い鎧を纏っているはずなのに、今相手が身につけているのは黒よりも更に深い「闇色」の鎧。手に持っている剣の刀身も、どこまでも黒かった。

「どういう事だ……いつものヤイバと違うぞ！？」

「今の俺は、真の『闇』の力を手に入れた。ダークヤイバ、とでも呼んで貰おうか」

言うが早いか、ヤイバの周囲に黒い霧のような物がわだかまった……

その頃、ガジャの前に立っていたのは菜月とさくらの女性陣。彼女達の目の前にいるのは、先程の「霊石の遺跡」で見かけた蝙蝠型の怪人だ。所々、先ほど見た時とは異なり、機械的な部分を感じなくも無いが……

「そんな！　あの蝙蝠は、先程五代さんが倒したはずです！」

「残念だったな。そ奴はすでに、ゴードムエンジンによって生まれ変わっておるのだ」

「じゃあ、クエスターみたいな物！？」

悲鳴にも似た菜月の声を合図に、蝙蝠型の怪人は妙に甲高い笑い声をあげて、２人に向かって襲い掛かってきた……

更に別の場所。クエスターの前には、蒼太と映士の２人が立っていた。

こちらも、普段の彼らとは少し違う。手持ちの武器が一回り大きくなっており、腰には見慣れぬ、金色のベルトが巻きついている。
「どうなってやがる!?　クエスターの連中もやたらごつくなってるぞ!?」
「ネガティブが全員、パワーアップしてる……って事かな?」
「このまま人間皆殺し!　人間を……リントを殺しちまえ!」
「ああ。ゲゲルの開始だな」
彼ららしくない……グロンギ特有の言葉を発すると同時に、クエスターの2人はその距離を一気に詰めにかかった。

＊

「フフ……『トライセラトプス』、『ダーク』、そして『グロンギ』が2本。まあ、売り上げとしては上々と言った所ですか」
ジュラルミンケースを抱えたスーツ姿の男……エステルが、戦いの場から少しだけ離れた位置で、それを楽しそうに眺めていた。
ただ、彼の足元に地面は無い。……宙に浮いているのだ。
「修復したゴ・ガドル・バも、それなりの値で売れましたが……ここにクウガが現れたのは、少々計算外ですね」
軍服の男……グロンギの中でも1、2を争う強さを持つ存在、ゴ・ガドル・バと、それに対峙するライジングマイティクウガを見つめながら、彼は面白くもなさそうに呟く。五代の存在は、彼の言葉通り計算外だったらしい。声には微かに不快の色が現れていた。
その向こうでは、トリケラトプス型のダイジャリュウに苦戦しているダイボウケンの姿が見える。恐らく乗っているのはボウケンレッド……明石だろう。
「まあ、ここで彼らが倒されてもそれは構わないのですが……最低限の戦闘データは取らせていただきますよ」
いつの間に持っていたのか、彼はハンディカメラを構え、それぞれの戦いを記録し始めた。

いや、それは正確ではないかもしれない。何しろ画面の中心に置かれているのは、戦闘ではなくネガティブの面々だけなのだから。

「人間以外への悪意の定着……観察させて頂きます。これは、そのための『実験』なのですから」

低く笑うエステルの声は、風に乗って虚空に散る。まるで、世界が彼の悪意を拡散させるかのように……

Ｔａｓｋ１５：異界の霊石（後書き）

玄金：風虎ちゃん、すっごいごった煮だよ！　こんなに沢山バトって、結愛ちゃん大丈夫なの！？

白刀：やかましいぞ、よく読者から名前の漢字を間違えられる玄金武士

玄金：いや、それは今言わなくても良いじゃないっ！　確かに僕の名前の「武士」はよく「武人」とか「武士」とか書かれるけど……この際だから言っておくね！　僕の名前、「武士」だから最後の字は「士曜日」の「士」だから！！

白刀：さてと、バトルの多さだったな。巨大戦やネガティブ大集合を辰巳の枚数制限内で行おうとすると、ああなるらしい

玄金：理由が酷いなぁ……

えーっと、整理するけど、ヤイバ君が「ダーク」、リュウオーン君がダイジャリュウに「トライセラトプス」、クエスターの２人が「グロンギ」だっけ？　何か既にクエスターの２人がすっごいグロンギに引っ張られてる感じがしたけど

白刀：もっと言うなら、ダイジャリュウにあの程度の力が果たして作用するのかが疑わしいな。体の大きさ故に、悪意と力が拡散しそうな気がする

玄金：うわぁ、先の見えない話になってきたねぇ……

白刀：いつもの事だ

それでは、また次回に会おう

玄金：次回の後書きは風虎ちゃんと天狼君の対談だね！
……何故だろう、凄くギスギスしたものになりそうって気がする。
僕、そう言う顔してるでしょ？

白刀：大丈夫だ。奴に勝手に喋らせるだけだからな

玄金：それはもはや司会の意味が無いよ！！

EPISODE16：冒険

5月13日、16：47、長野県　灯溶山

五代の目の前には、既に本来の姿……カブトムシ種のグロンギ、ゴ・ガドル・バが悠然と立ち塞がっていた。彼の背後の方では、先刻倒したはずのコウモリ種のグロンギ、ズ・ゴオマ・グと思しき存在が、白い服を着た中年男性……ガジャと共に、菜月とさくらの前にいる。

……「思しき存在」と評したのは、僅かに異なる部分もあるからだ。体を覆っていた布……多分、人間で言うところの服に当たるものは、鋼のような物に変質しているし、翼もメタリックな輝きを帯びている。

何があったのかは知る由も無いが、少なくとも非常に厄介な事になっているらしい、と言うのだけはよく分る。

「クウガ、ボンゾボドビガラゾダゴグ　（クウガ、今度こそ貴様を倒す）」

ガドルが言うと同時に、その体が金に光る。ゴ・ガドル・バの電撃体と呼ばれる姿である。

そして、かつてはその姿で、五代に瀕死の重傷を負わせた事すらある。間違いなく、グロンギの中でもトップクラスの実力を持つ存在だ。

まずい、と思うと同時に、五代もその姿を「赤の金のクウガ」……ライジングマイティと呼ばれる姿から、かつて勝利した際の姿……「黒の金のクウガ」こと、アメイジングマイティへと変貌を遂げる。

呼び名の通り、クウガの基本色は黒。それまで右足だけだったアンクレットが左足にも装着され、手甲にある「リント文字」と呼ばれた古代文字は「雷」を表す字に変化した。

以前勝てたからといって、今回もこの姿で勝てるかどうか……正直、分らない。相手は戦う事を至上の喜びとしている存在だ。自分と戦うための準備くらいは、しているかもしれない。

そう五代が思った瞬間。ガドルはふっと鋭く息を吐くと、一気に五代までの距離を詰めにかかる。

早いと思うよりも、体が動く方が早かったらしい。五代は繰り出された拳を無意識の内にかわし、逆に自分の右ストレートを繰り出していた。

今まで経験してきた数々の戦いが、五代の反応速度を上げていたらしい。しかも、自身に向けられた敵意には、特に過敏に反応できるようになったらしい。それは五代にとって、非常に不本意な出来事ではあるのだが。

クウガの拳を喰らいながら、それでもガドルは心底楽しそうな声で言葉を発する。

「ボボゲゲルビバデデ、ガサダバゴグドギデ……リントゾゾソドグ」

「もぉ～、何言ってるのか全然わかんない」

「『このゲゲルに勝って、新たな王として……リントを滅ぼす』だそうじゃ」

ゴオマと切り結びながらも、ガドルの言葉は菜月の抗議に返したのは、後方でニヤニヤと卑下た笑みを浮かべているガジャだった。

恐らく、ガジャは既にグロンギの言葉を解読できるようになっているのだろう。ゴオマやガドルと共にいたのだし、彼らの言語の解読くらいはある程度出来るようになるだろう。

「ちなみに今回のゲゲルは、リント……人間の戦士とクウガを倒す事だそうじゃ」

「人間の戦士……」

人間の戦士を倒す。その条件は、かつてガドルがグロンギの王……ン・ダグバ・ゼバと戦うための条件として提示された物と同じだ。その時は、「人間の戦士」とは「男性警官」を指していたのだが、今回は違う。

……ボウケンジャーと言う、目の前の存在は、間違いなく「人間の戦士」だ。警察官などよりも、余程手強い。それ故に、彼は…ガドルは、この状況を楽しんでいた。戦いこそが、彼の娯楽であり、「生きている実感」なのだから。

もっとも、そんな事を五代達が知るはずも無いのだが、少なくともこのまま野放しにしておいてはいけない事くらいは十二分に理解できている。ある意味、戦いに身を置く者の……人を守る者の本能と言った所だろうか。

そう思った刹那、五代の目の前を、青と銀の戦士が過ぎった。

蒼太と映士だと気付くと同時に、今度は彼らに追い討ちをかけるかのような黒い影が2つ、再び五代の目の前を過ぎる。

確か、蒼太と映士は、クエスターとか言う存在と戦っていたはず。と言う事は、今目の前を通り過ぎた黒い影が、そのクエスターなのだろうか。

……それにしては、随分とグロンギに近しい印象を受けたが……

「ジョゴリゾグスバ、クウガ（余所見をするな、クウガ）！」

名を呼ばれ、五代ははっと我に返った。他の面々の事も気にかかるが、今は彼らを信じ、目の前に立つガドルに集中すべきだ。

思い直し、瞬時に自身の気持ちを切り替えると、彼は迫り来るガドルを迎え撃つべく意識を落ち着かせた。刹那、ピリとした感覚が全身を駆け、その感覚は意識を集中させた両足に集う。やがてバチバチと放電を始めた。

五代の足に集る雷の力に気付いたのか、ガドルは一声吠えると、五代と同じようにその足に電気の力を溜め、蹴りの体勢に入った。それは、五代も同じで……互いの必殺技ともいえる攻撃がぶつかり合い、一瞬、その場は静寂で支配された。

その刹那、菜月が何かに気付いたように顔を上げ、ゴオマと切り結んでいたさくらに耳打ちする。その言葉に驚いたように顔を上げるが、すぐにさくらは納得したように1つ頷くと、武器を退いて近くにいた映士と蒼太の腕をそれぞれ掴む。そして五代達から逃げる

ようにしてその場を離脱した。
「おい、菜月!?」
「あのままあそこにいたら、危ないよ！　菜月達も巻き込まれちゃう!!」
……菜月には、予知能力のような物が備わっている。それに……五代と出会った時、彼のハザードレベルは２０００と言う、驚異的な数字を指し示していた。今の彼は、その時よりも更に強化されている。当然、ハザードレベルも格段に上がっているはずだ。
故に、気付いたのだろう。あの２人の攻撃の及ぼす、余波の大きさと言うものに。
そして……一瞬の煌きの後、まるで巨大な風船が破裂したかのような音と、巨大な衝撃が周囲に容赦なく襲い掛かる。木々はなぎ倒され、逃げ遅れたゴオマはその翼を再びもがれる。ガジャはおうおうと情けない悲鳴を上げながらたたらを踏み、クエスターの２人はその場に何とか踏み留まりながらも、悔しげに顔を歪めた。
衝撃が止まると、今度は永遠のような一瞬の静寂がその場に落ち……宙で、巨大な爆発が起こった。
それは、五代の……いや、クウガの放った「封印エネルギー」が、グロンギの持つベルト……「ゲドルード」と呼ばれるそれを通じて、彼らの霊石である「ゲブロン」に注がれた証。だが、その反応の大きさ故に、通常は半径数キロメートルの範囲で爆発が起こるのだ。
五代はそれを知っているが故に、あまり大きな被害が出ぬよう、宙に飛ばして相手を倒す事が多々ある。今回も、それを適用させたらしい。宙から舞い降りたのは……姿を「赤の金」に戻したクウガであった。
「ば、馬鹿な！　あやつがああも簡単に……!!」
「驚いてる場合じゃ無いと思うよ、ガジャ」
「何!?」
慄くガジャの背後から、蒼太の声が響く。
どうやら爆発が起こる寸前で、ボウケンジャーの武器であるデュ

アルクラッシャー・ドリルヘッドで大地を穿ち、地中に逃げ込んで難を逃れたらしい。

「モグラか、お前達は！！」

渾身のツッコミを入れるも、ガジャのそれは軽く流され、蒼太の持つブロウナックルの起こした風によって、ゴオマ、そしてクエスターの2人が一箇所に纏められてしまう。

「て……テメェらっ！」

「ボセパ　（これは）！？」

ガイとゴオマの声が重なる。だが、そんな事は気にも留めず、さくら菜月に支えられた状態でデュアルクラッシャーを、映士は自身の武器であるサガスナイパーを、それぞれ構え、その引鉄を引く。

デュアルクラッシャーからはドリルの形をした破壊ビーム、サガスナイパーからは鋼鉄をも打ち抜くビーム。2種類のビームが発射され、ゴオマ、ガイ、そしてレイの3人を撃ち抜いた。

ガジャは……実に悪役らしく卑怯ではあるのだが、その3人を楯にしてビームから逃れていたので、多少の衝撃こそあったものの、ほぼ無傷だった。

「くっ、こんな……リント如きにっ！！」

いつもは冷静なレイまでも、悔しげに歯噛みするのとほぼ同時。ゴオマの方は当たり所が悪かったのか、普段の敵と同じように爆散し、レイとガイの2人の腕からは棒状の「何か」が抜け落ち、その姿をいつもの彼らに戻した。

「くっ。壊れたか……ここはひとまず退くぞ、ガイ」

パキン、と軽やかな音と共に壊れた「それ」を見て毒づくと、クエスター2人は苦々しい表情でボウケンジャーと五代を交互に見やりながら、その姿を消す。同時に、ガジャもその場からおろおろとした様子で姿を消した。

「これが、あいつらの使っていたプレシャスか？」

「破壊されたので、ハザードレベルはほぼゼロですが……間違いないと思います」

レイとガイの体から抜け落ちたその欠片を拾いながら、映士とさくらが言葉を放つ。
元は１０センチ程の長さだったのだろうが、今は破片しか見当たらない。機械のような回線と、「G」を象ったシールが真ん中に張られている。
「あいつら、一体どこからこんな物を……」
「あのー……考えてる最中申し訳ないんですけど」
真剣な空気を壊すかのように、五代はボウケンジャーの面々に声をかけ、未だダイジャリュウと戦うダイボウケンと、闇のヤイバと切り結んでいる真墨の方を指差し……
「まだ、終わってないみたいですよ？」

5月13日、17：00、長野県　灯溶山山頂近辺

「どうだ？　闇を受け入れる気になったか？」
ガイとレイ、そしてガジャが退いた頃、少し離れた場所にいた真墨は、闇のヤイバ……否、ダークヤイバに追い詰められていた。普段とは違う太刀筋。剣を振るう度にその場にわだかまる闇。
普段でも良くて五分の戦いをしている真墨からすれば、今回のバトルは非常にやりにくかった。
「誰が……お前の仲間になんか……」
「そうか。ならば、死ね」
言うと同時に、ヤイバの素顔が晒される。普段から悪鬼のような形相なのだが、今に到ってはそれを更に上回る……それこそ、「悪魔のような顔」を見せた。
「影忍法、闇鶴の舞」
ひらりと手を翼のようにはためかせたかと思った次の瞬間、真墨の体に衝撃が走る。斬られたのだと知覚したのは、彼の変身が解け、その場で自分の脇腹から溢れる自分の血を見た時だった。

「がはっ！？」
「ほう、間一髪、致命傷は避けたようだが……それでは動けまい」
本当は殺す気だった一撃をかわされたにも関わらず、ヤイバの声はあくまで平坦だ。血反吐を吐き、その場に蹲る真墨に向かってゆっくりと歩を進め、手に持っている剣を振り上げる。そして、それを振り下ろそうとしたその瞬間。
「バケットスクーパー！！」
「サガストライク！！」
菜月の声が響くと同時に、数多の岩がヤイバに向かって飛び、その合間を縫うように映士の放ったビームが相手の体を穿とうと駆け抜ける。だが、それを時に無造作に切り捨て、時に軽やかな足取りでかわしながら、鬱陶しそうにいち早くそこに到着した菜月と映士の2人を一瞥する。
だが、菜月の方はその視線を無視して、血を流す真墨に駆け寄ると心配そうに声をかけた。
「真墨、大丈夫？　痛い……よね？」
「馬鹿……こんな物、大した傷じゃ……がはっ、ぐ……ごぼっ」
「無茶すんな、真墨！！　ここは俺サマ達に任せとけ！」
強がろうと必死で笑顔を作るが、それも喉にこみ上げる熱い塊に邪魔をされて、上手く笑えない。
情けない、と強く真墨は思うが、それ以前にまずは目の前にいる「漆黒のヤイバ」だ。相手をぎろりと睨みつけながら、彼はこみ上げる血を堪えながら言葉を紡ぐ。
「こいつらに……菜月に手を出してみろ。その時は……お前の体を五分刻みに切り刻んで、鱶（ふか）の餌にしてやる……！！」
真墨の渾身の気迫がこもったその言葉を聞いた瞬間、ヤイバの動きがぴたりと止まった。真墨の気迫に気圧された訳では無い。むしろその逆……真墨に潜む更なる「闇」の気配に気付いたらしい。
ヤイバはニヤリと笑うと、左手首から細長い「何か」を取り出し……元の、青い鎧姿に戻った。

「何……！？」
「それは、貴様にくれてやる。その瞳に宿る、闇に免じて」
それだけを告げ、悠然と去っていく闇のヤイバの背を見送り……
真墨の意識は、「闇」へと落ちていった。

5月13日、17：00、ダイボウケン内、コックピット

ぐらり、とダイボウケンの巨体が傾ぐ。それ程の衝撃が、少し離れた場所で生まれ、周囲の空気へと散っていく。
……何が起こったのかを確認したいところだが、目の前にいるトリケラトプスのダイジャリュウを、明石1人で相手にしている状態である以上、仲間を信じて戦い続けるしかない。
とは言え、元々このダイボウケンと言うロボットは、プレシャスの力を自らの力に変換すると言う物。単独で動かすのは、どうにも調子が出ないのが実情である。しかも、今回のダイジャリュウは普段現れる物よりも、確実に強い。何度か切り付けてはいるのだが、相手には傷1つつけられていないのが現状だ。それ位、硬い。
「今日こそ死ぬがいい、ボウケンレッド！」
ダイジャリュウの中で、リュウオーンが吠える。同時に、ダイジャリュウは角をこちらに向け……信じ難い事に、それをミサイルのように飛ばしてきたのである。
これは、かわしきれないか。冷静にそう判断すると、明石は手元にあった黄金の剣を構え……
「頼むぞ、ズバーン！」
その一言と共に、その剣……意思を持つプレシャスである「大剣人ズバーン」を外に放ち、巨大化させてその角を半分切り落とさせ、残りの半分を武器である轟轟剣で何とか叩き落す。
「ズンズン！」
ガッツポーズにも似た格好で、誇らしげにポーズを取るズバーン

とは対照的に、明石の表情は晴れない。その理由は……今の攻撃で、轟轟剣の刃がこぼれた事に気付いたが故。無論、それまでのダメージも多分にあるだろうが……それでも、次に同じ攻撃を喰らえば、恐らく刃こぼれ程度では済まされないだろう。

さて、どうするか……そう思考しながらも、襲いくるダイジャリュウとの距離を一定に保ちながらその攻撃をかわしていた時。

コックピットにボウケンピンクとボウケンブルー……さくらと蒼太が転がり込むように乗り込んできた。……何故かその後ろにクウガ……五代まで付いて来ているのは不思議だが。

「チーフ！　ご無事ですか！？」

さくらの声に軽く頷きを返し、彼は2人がシートに着いたのを確認する。

いくらか余裕が出たらしい。今度は自分の脇に佇む五代に視線を送った。視線を送られた方は、仮面の下で飛び切りの笑顔を作った後、ぐっとサムズアップを明石に返し……

「俺も、今日はボウケンジャーの一員です。手伝わせて下さい」

「なら、席に着け。それから……あのダイジャリュウと、その中にあると思われるプレシャスを破壊する」

『了解。』

蒼太、さくら、五代の声が響く。

とは言え、五代は実際にこのダイボウケンを操縦するツールを持っていないので、真墨の席に座っているだけなのだが。

「相手はかなり強力なパワーと硬度を持っている。何しろ、轟轟剣が刃こぼれしている位だからな」

「それ、ちょっとまずいんじゃ無いですか、チーフ？」

蒼太の声にさくらも同意するように軽く頷く。その中で、ふと五代は考え込んだ。ロボットに乗る直前、さくらに聞いた話だが、このロボットはプレシャスの力を利用、増幅して戦う事ができる物らしい。

自分が彼らと出会った理由は、自分の腰にある霊石・アマダムが

「危険なプレシャスだ」と判断されたからだ。
それに、相手はパワー重視型で、なおかつこちらの武器は剣……即ち「切り裂く物」だ。ならば……
「あの、明石さん。ちょっと試したい事があるんですけど……」
そう言って、五代はその場にいる全員に自分の考え付いた事を述べる。
その反応は……三者三様。さくらは悲鳴にも似た声でその考えを止め、蒼太も苦笑気味に止めておいた方が良いと告げる。その中で、唯一明石だけはマスクの下で楽しそうに笑い……
「良いだろう。ちょっとした冒険、だな」
「チーフ！？」
「他に良い方法はあるか、ピンク？」
「……ありません。ですが……」
「なら、決まりだな」
なおも言い募ろうとするさくらの言葉を遮り、明石はそう断言すると、今度は五代が、アマダムに意識を集中させる。
プレシャスの力を増幅させると言うのなら……アマダムの力も増幅させるはず。
「ええ、それじゃあ行きますよ……超変身！」
アマダムから、独特の音が鳴り響く。次の瞬間、五代の姿が「赤の金のクウガ」から、「紫の金のクウガ」……ライジングタイタンフォームに変わる。
それと、同時だっただろうか。ダイボウケンが、五代のアマダムに反応し、自らの姿をも紫の装甲に変えたのは。名付けるのなら、ライジングタイタンダイボウケンと呼ぶ所か。刃こぼれしていた轟轟剣も「超変身」の影響からか、この姿のクウガの武器である「ライジングタイタンソード」へと変貌を遂げていた。
「五代、グッジョブだ」
「こっちこそ、大感動です」
互いにサムズアップをかわしながら、言う2人。そして、真っ直

ぐに前に向き直ると、ダイボウケンは突進してくるダイジャリュウに向けて持っている剣を構え……

『ダイボウケン、アドベンチャーカラミティ！！』

４人の声が、計らずも重なり。かなりの硬度を誇るはずのダイジャリュウの皮膚を難なく切り裂いて……そのトリケラトプスに似たダイジャリュウは、大爆発を起こし、この世から消え去ったのであった。

＊

「やはり、彼らでもダメでしたか。ふぅむ、悪意の定着は人間以外だとなかなか上手く行かない物ですねぇ。まあ、今回は利益が出たので良しとしましょう」

「でも、『ダーク』はボウケンジャーの手元に残ってしまったでありんすよ？　確か伊能真墨たんは、ダークの過剰適合者だったと記憶しているでありんすが？」

「コネクタがありませんから心配無用です。それに連中の事です、どうせプレシャスとして保管するでしょう」

どことも知れぬ闇。そこは恐らく、エステル達の住処なのだろう。４人の「元凶」はそれぞれに寛いだ様子でその場にいた。

独り呟くエステルに、ステラが心配そうな視線と言葉を投げかけたが、呟いた本人はさして気に留めている様子も無い。売った商品の行く先には興味が無いと言ったところだろうか。

「一気に４本売った挙句、折角修復したガドルまで売りやがったぞ、あの男……」

「エステルは、金になるのなら骨の髄まで利用する存在故。それも致し方あるまい」

「……何か、わっちもいつか売られるのではとヒヤヒヤしっぱなしでありんす……」

「フフ。どうでしょうねぇ？　あなたの部品に価値が出るまでは、

とりあえず現状維持ですよ」

価値が出たら分解（バラ）す気なのか、と心の中でのみツッコミを入れ、天狼（ティエンラン）は哀れむような視線をステラに投げかける。

自分達「7人」の中で、最も力を持たない存在とは言え、紅一点だ。やはりそこは、可哀想と思ってやってしかるべきところだろう。

「エステルさん、あの、その……」

「おや、ズヴェズダ。どうしました？」

闇から染み出るように現れた存在に、エステルはさして驚いた様子もなく問いかける。

ズヴェズダ、と言うらしいそいつは、おずおずとした態度とは裏腹に、とても凶悪な顔つきをしている。例えて言うなら、西洋の書物に出てくる一般的な「悪魔」だろうか。しゃきっとしていれば、それはそれは強面の異形であった事だろう。

「えっと、あの……その……つ、次なんですけど……僕が行って良いかなって、聞きたかったんです」

「あん？　珍しいな、人見知りの激しいテメェが、行きたがるなんてよぉ」

「次は、その……地底冥府（インフェルシア）、ですよね。僕、結界を通り抜けられますし、それにこのご面相ですから……」

自分の外見をきちんと把握しているらしく、ズヴェズダはダメですか、と情けない声を出す。

「別に、構いませんよ。と言うかむしろ、あなた以外の誰が行けるとお思いですか」

「そ、そうですよね。すみません、ごめんなさいっ！」

呆れたようなエステルの声に、ズヴェズダは更に恐縮してぺこぺこと頭を下げる。

そして、やがて意を決したようにその凶悪な顔を上げると、とても似合わないおどおどとした声で宣言をした。

「それでは、あの……冥獣人、ハデスのズヴェズダとして……奪ったこれを引き連れて、行って来ます」

言いながら、彼が仲間達に見せた物は……数枚の、カードであった。

EPISODE16：冒険（後書き）

白刀：……チッ。鬱陶しいのが来た

天狼：ひゃぁっはぁ！　ちょっと待てテメェ、鬱陶しいってのは何だコラ！？　ゲストに向かって言う言葉じゃ無ぇだろうがよ

白刀：私と貴様のテンションの差異が激しいのだ。貴様といると疲れる

天狼：……こちとら曲がりなりにも神その物なんだが？何だこの扱い。たかが下僕の分際で良い度胸じゃねぇか。噛み砕くぞ、このクソ虎

白刀：出来るものならやってみろ、貴様如きに遅れを取る私ではない。と言うか、余計な字数稼ぎをするな、勿体無い

天狼：うーわ、やっぱこいつムカつくぜ。ま、いいか。自己紹介すりゃ良いんだろ？

白刀：そうだ。さっさと済ませて、次回予告して、さっさと帰れ、この駄狼（だウルフ）

天狼：駄狼言うなぁっ！　俺サマは天狼（ティエンラン）。肩書きは「妖獣フェンリル拳使い」。フェンリルって言うのは、北欧神話に出てくる狼の姿をした怪物の名前だ。ヴァルナガンドって別名もあるな。幻獣と違って、どんな解釈でも「良くないモノ」として扱われる空想上の生き物がフェンリル。だから、「妖獣」……「妖しい獣」って訳だ

一応、臨獣殿とゴーマ一族（五星戦隊ダイレンジャー）の両方に籍

を置いてるって事になってる
本当の肩書きは「星の肆（し）」……つまり、「星」の中でも４番目って事だな。まあぶっちゃけ、実力は「星の弐」である爪牙や、「星の参」……まだ本編にも出てねぇ鬼宿とほぼ同等だから、あんまり意味はねーんだけど
あとは名前の由来だな。こいつは「おおいぬ座」にある星、「シリウス」の別名である「天狼」の中国読みだ。シリウスは、冬の大三角形の１つとしても有名だな。流石俺サマ

白刀：別に貴様が有名な訳ではない。それで？　何故に中国読みなのだ？

天狼：幻獣拳使いのロン……あいつって「竜」の中国読みが元だろ？　それに、俺サマはゴーマにも名を連ねてるんだから、それっぽい読みの方が良いじゃねぇか
あ、言い忘れてたが、ゴーマとしての肩書きは「師父」な

白刀：貴様、崇め奉られるのが好きなタイプだな？

天狼：当たり前だろ！　俺サマ、神だぜ？　神って言うのは崇められるのが好きな生き物なんだよ！　ひゃーはははっ！　人間共（どくしゃ）、俺サマを崇めよ！　そして敬え！！

白刀：悪いが私は人間ではないので崇めもしなければ敬う気も無い。事ある毎に高笑いを上げるな、鬱陶しい。ああ、それから外見上の質問が匿名希望の作者から来ている。「何故天狼さんは左目を隠しているのですか？」

天狼：「作者」と言ってる時点で匿名希望の意味がねぇよ。左目を隠している理由だけど……俺サマの左目は昔、とあるヤローに傷つ

けられてな。それ以降、陽の光に弱いんで昼間は隠してんだ。でもまあ、格好良いからって言うのもあるが

白刀：これ以上付き合う義務も無いので流すぞ。次回予告だ

天狼：うっわ、この後書き終わったらマジで一遍噛み砕く。次回はマジレンジャー。向かうのはズヴェズダ。そしてやってくる仮面ライダーは……聞いて驚け愚民共！　「剣」だ！！

理由？　まあぶっちゃけ、「ここならアンデッドも普通に受け入れてもらえそう」（ヴァンキュリアがいるから）だから！

そんな訳で次回、「Ｓｔａｇｅ１７：カードの戦士　～マジーロ・マジ・ジンガ～」でまた会おうぜ

白刀：貴様の出番は無いが

天狼：そう言う事言うなつってんだろうがっ！

Ｓｔａｇｅ１７：カードの戦士　～マジーロ・マジ・ジンガ～

魔法、それは聖なる力。
魔法、それは未知への冒険。
魔法、そしてそれは、勇気の証。

西暦２００５年。西暦１９９０年に「天空聖界」の面々や、その力を借り受けた人間である「魔法使い」達によって封印されたはずの存在、「地底冥府インフェルシア」の面々が、人間の住む世界……「地上界」を征服するべく、再び動き出してしばらく経った頃。
インフェルシアに、１人の「悪魔」が姿を現した。
悪魔を連想させる住人は、通常は「デーモン」と呼ばれる種の冥獣人なのだが、それともまた少し異なる。それよりも凶悪な面構えだ。
目はインフェルシアを覆う闇よりも深い黒、捻くれた角。妙なまでの威厳も感じられる。
だが、そんな事はどうでも良い。問題はこの男が現れた場所だ。
何しろこの男は、憎き天空聖者によって施された封印を通り抜け、冥府門の前にいるのだ。
それを見つけたこの地底冥府の女幹部、妖幻密使バンキュリアは、彼の前に立つとじろじろとその姿を眺め……いきなり、２人の少女に分裂した。
「何なのよ、あんた？」
「あんた？」
パンクファッションの少女……ナイの言葉を継ぐように、ゴスロリファッションの少女……メアも同じ様に問いかける。
その問いかけを聞いた瞬間、目の前の「悪魔」は……意外な事に、びくんとその体を大きく震わせ、おずおずと彼女達に視線を向ける。

凶悪な顔からは想像できない程、目の前の彼は慄いていた。
「あ、あの……僕、ズヴェズダと言います。あの、その、えっと……元、冥獣人・ハデスのズヴェズダ、です」
「元って？」
「って？」
「あ、はい。あの、その……15年前の戦いで、異次元に飛ばされてしまって……それ以降、色々な組織を転々と渡り歩いていたので、今はもう、所属が、その……」
「あやふやなの？」
「なの？」
「……はい」
今にも泣きそうな、震える声で2人の問いに答えると、ズヴェズダと名乗ったその存在は、やはり似合わない顔でこくりと頷いた。
その刹那、どこで聞いていたのか知らないが、現時点での最高幹部的な存在である魔導神官メーミィが、扇子を口元に当てたポーズを取りながらその場に現れる。
「それは興味深いこと。どのような組織に属していたのかしら？」
……一応断っておくが、メーミィは男である。どういう訳か、オネエ口調と呼ばれる口調で物を話すが。
その口調も気にせず、ズヴェズダはうーん、と軽く唸り……
「……バイラム……からは逃げてたから、実際は魔女バンドーラ一味、妖怪軍団、ネジレジア、災魔一族……」
恐らくは、彼の属していた者達なのだろう。指折り数えられる者達の事は残念ながら分らないが、確かに「転々としている」と言っても差し支えなさそうだ。
「それで？　お前は今更何をしに戻ってきたのかしら？我に聞かせなさいな」
「は、はいっ。あの、その、えーっと……魔法使いを倒す算段を、持って……来たんですけど……ってお願いですから角にぶら下がらないで下さいぃぃっ」

ぶらぶらと彼の捻くれた角にぶら下がるナイとメアに対して、悲鳴にも似た抗議の声を上げながらも、彼は懐から4枚のカードと、1本の細長い棒状の物を差し出した。

カードの方は、地上界に存在するトランプのように見えるが、4枚ともマークも数字もバラバラだ。細長い物の方は、中央付近に「U」の文字が書かれたシールが張ってある。

「これが、魔法使いを倒す算段なの？」

「なの？」

「はい」

ナイメアコンビに問われ、ズヴェズダは不敵な笑みと共にその顔を真っ直ぐに上げた。

先程までの、おどおどした雰囲気は無く……ナイとメアだけでなく、メーミィすらも思わず身震いする程凶悪な雰囲気を持って……

＊

小津家の隠し部屋。

そこに集っていた兄弟達……長男・マジグリーンこと蒔人、長女・マジピンクこと芳香、次女・マジブルーこと麗、次男・マジイエローこと翼、そして末っ子の三男・マジレッドこと魁……と、彼らの「魔法の家庭教師」である天空勇者マジシャインことヒカルが、久し振りに穏やかな休日を過ごしていた。

魔法の勉強も大事だけど、たまには休息も必要だ、と言うヒカルの提案だった。

「どうか今日ばかりは、インフェルシアの連中が現れませんように」

「そうね。たまにはのんびり休憩も良いわよね」

魁の言葉に麗が返す。

こんなにのんびりとした休日は、いつ以来だろう。少なくとも、「天空の花」事件以降もそれなりに忙しかった記憶がある。主にインフェルシア関係で。

魁は普段は学校があるし、蒔人も自分の経営する農場の仕事がある。翼もジムに通っているはずだし、女2人は普段何をしているのか知らないが、少なくともそれなりに忙しいはずだ。

だからこそ、心の底から思う。

インフェルシアよ、今日だけは出てきてくれるなと。

しかし……誰の言葉だったか、「現実は厳しいのです」との事。

思い出したくもないのに、その言葉を魁は思い出し……そしてやはり、現実は厳しいのだと、近くの鉢植え……マンドラ坊やの声で思い知らされる事になる。

「皆々様方！　大変でこざりますです！！」

……こうして、彼らの束の間の平和は終わってしまうのであった。

マンドラ坊やの指示した場所に6人が到着すると、そこにはサソリを髣髴とさせる怪物が、倒れる人々の真ん中に悠然と立っていた。

「そこまでだ、インフェルシア！」

魁の言葉に応える様に、その怪物がゆっくりとこちらを振り向く。長い尾の先からは、ぽたぽたと濁った色の液体が垂れており、それがアスファルトに触れた瞬間、白煙を上げて地面を溶かしている。

毒だと気付くのに、そう時間はかからず、倒れた人々もその毒にやられたのだと気付いた。

「何て事を……！」

「絶対に許さないわよ！」

蒔人の言葉に同意するように、芳香も相手を睨みつけて言葉を放つ。そして……

『魔法変身、マージ・マジ・マジーロ！』

「天空変身、ゴール・ゴル・ゴルディーロ！」

赤、黄色、青、桃色、緑、そして金の戦士……と言うか魔法使いへと変身すると、まずは女子2人が持っていたマジスティックで怪物の腹部を薙ぐ。直後、翼はマジスティックをボウガン型に代え、

幾条もの光の矢を放ってその両肩を貫く。
そして、蒔人と魁は、それぞれマジスティックアックス、マジスティックソードを構え、相手の尾を切り落とす。
「ぐぅっ！」
目の前の怪物の口から、悲鳴にも似たくぐもった声が漏れる。
だが、こう言った攻撃のラッシュを喰らうに値する事をやってのけたのだ。攻撃の手を緩めてやるつもりはない。
最後にヒカルが、魔法のランプ……マジランプを構え、「マジランプバスター」で相手の腹部を撃ち貫く。
その攻撃に耐え切れなかったのか、怪物は苦悶の表情を浮かべるとゆっくりと地面に倒れこみ、その場で爆発した。
「なぁんだ、案外弱いじゃん」
「毒の攻撃が無かったからね。でも、油断は禁物だよ、芳香」
「ヒカル先生も心配性だよな。でも、巨大化するかも知れないってのはあるか」
魁がそこまで言った、その時だった。
爆発したはずのサソリの怪物が、再びゆっくりと立ち上がったのは。
「何だって!?」
「倒したはずだろ！」
蒔人と翼の驚愕の声が上がる。
マジランプバスターを耐え切ったインフェルシアの怪物が、いなかった訳ではない。しかし、今回の敵は、戦っていてそれ程手応えのある方ではなかった。むしろ、弱い部類に入るだろう。
それなのに、今……切り落としたはずの尾は再生しており、濁った緑色の血を流しながらも、相手は悠然と立っており、その瞳には、こちらに対する憎悪に似た色が浮かんでいるのが見て取れる。
まさか、バンキュリア同様、不死身の冥獣なのでは。
そんな考えが翼の脳裏を過ぎった、その瞬間。
「来るぞ！」

蒔人の声に反応し、６人は反射的に左右に分かれてその場から飛び退る。
瞬間、今まで自分達がいたに毒液を撒かれ、アスファルトはジュウジュウと音を立て、先程とは比にならない速度で溶解していく。
「やだ、気持ち悪い！」
「恐らく、想像以上の猛毒だろう。気をつけるんだ」
麗の言葉に、ヒカルがそう返した瞬間。
ピロピロと、聞き慣れない電子音がその場に響いた。
「何だ？」
音のする方に最も近かった魁が、そちらを向くと……そこには、芳香と同い年くらいの青年と、三十路前と思しき青年の２人が、手に何かの機械を持ってそこに立っていた。
「橘さん、いました！　カテゴリー８、スコーピオンアンデッドです」
若い方の青年が、怪物を指しながら言うと、年上の方……橘と言うらしい……は厳しい表情で頷き、持っていた機械をズボンのポケットにしまった。
「危ないですから、下がって！」
「危ない？　それはこっちの台詞だ」
守るようにしながら、その２人をどかそうとする魁に言葉を返し、橘は油断無く怪物……スコーピオンアンデッドと呼んだそいつを睨みつけると、どこからか取り出したベルトのバックルの様な物を腰に押し当てた。
若い方の青年も同じ様なものを腰に押し当て……２人同時に声を上げた。
『変身！』
『ＴＵＲＮ　ＵＰ』
『ＯＰＥＮ　ＵＰ』
電子音が告げると……彼ら２人の姿が、変わった。橘と呼ばれる方は、赤いスーツに銀色の仮面。クワガタムシと、トランプのダイ

ヤのマークを同時に連想させる姿で、その手にはやはりダイヤのマークのついた銃が握られている。
　一方青年の方はと言うと、緑のスーツに僅かに金の入った仮面。こちらは蜘蛛とクラブを同時に連想させ、手に持つ武器はやはりクラブマークのついた錫杖…ロッドだ。
「睦月、援護する。封印はお前に任せた」
「はい！」
「……へ？」
　間の抜けた声を、芳香が上げた瞬間。橘は銃で相手の足元を狙い撃って牽制攻撃を仕掛けると、青年……睦月と言うらしい……はロッドの先で相手の腹部を思い切り突く。
　いや、「突く」と言うよりは「刺す」と言った方が正しいかもしれない。ロッドの先端はスコーピオンアンデッドの腹部を貫通し、そこから濁った緑色の血を流させているのだから。
　そして、睦月はロッドの下部……即ち彼の手元の方から1枚のカードを取り出すと、その近くに存在するカードリーダーらしき物に読み込ませた。その刹那。
『ＢＬＩＺＺＡＲＤ』
　再び音が響き、宣言通りロッドから氷の力が解放され、相手の体を見る間に凍結させていく。
　まさか、今のは魔法？
　ヒカルが不思議に思うよりも先に、更に不思議な光景が広がった。凍りついたスコーピオンアンデッドから、睦月はロッドを引き抜くと、またしても1枚のカードを取り出し、それを相手に向かって投げた。
　それは、案外と軽い音を立てて相手の体に突き刺さると、淡い緑色の光を放ちながら、相手を吸収して行き……完全に吸い込みきった時、カードは再び投げ手……つまり睦月の手元へと、空を切って戻って行った。
「橘さん、取りあえず、スコーピオンアンデッドは封印完了です」

「流石だな睦月。腕は落ちていないようだ」
変身を解き、軽く溜息を吐きながら睦月は言葉を吐き、橘はそれに対して真剣な表情で返す。
今のは一体何だったのか。それに、封印とは一体何なのか、先程の敵は、インフェルシアではないのか。そもそも……目の前に立つ彼らは、一体何者なのか。
様々な疑問が小津ファミリーの頭の中を駆け巡るが、とりあえず…と言わんばかりに長兄の蒔人が変身を解いて彼らに声をかける。
「あなた方は一体？　それに、今のは……？」
「それはこちらの台詞だ。さっきの姿は……ライダーシステムじゃ無いな」
橘が怪訝そうな視線をこちらに向けながら、蒔人の言葉に返す。恐らく、こちらも同じ顔をしているのだろうな、と心の中で苦笑しながらも、自分より年長者であろう橘にどう説明すべきかを悩む。
魔法の存在は、そう簡単に人に教えて良い物ではない。その割には、割と自分達の母は宇宙警察の人間に教えていたようではあるが、まあそれはこの際横に置いておいて。目の前に立つ彼らが、悪人とは思えないが……魔法などと言う未知の力を目の当たりにすれば、どんな反応をするか……
そこまで思い悩んだ時、こちらに向かって駆け寄る足音と、緊張したような声が響く。
「橘さん、睦月！」
「剣崎さん、それに、相川さんも」
やってきたのは睦月よりも更に年上に見える2人。片方は極端に瞬きが少なく無愛想、もう一方は愛想は良いがボロボロの服を着ている。どうやら2人の知り合いらしいが……
「どうでした？」
「駄目だな、気配がない。逃げられたと思って間違いないだろう」
睦月の問いに、無愛想な方が首を横に振りながらそう答える。
現れた4人は一体何者なのか。そして、先程の敵は一体何だった

のか。分らないまま、魔法家族は混乱させられたのであった。

Ｓｔａｇｅ１７：カードの戦士　～マジーロ・マジ・ジンガ～（後書き）

朱杖：後書きの司会が一周したぁぁぁっ！？

白刀：何故に疑問系も混じるか。５番目なのだから、一周して当然だろう、朱杖炎雀

朱杖：いや、疑問にも思うって！　だってここまで来るのにどれだけ掛かってんだよって話だぜ？　既に２０１０年も半年過ぎようとしているし！
むしろ本当に「明瞭な夢～」と「英雄の笑顔～」本編書きやがれって話だろ！

白刀：ふむ。確かにな。しかしそうなるとこちらの更新は更に遅くなるが？
まあ、その辺りは辰巳結愛の頑張り次第だな

朱杖：まあ、いいけど……
内容の方に行かせてもらうけど、アレだな。何かフツーに始と剣崎が一緒だったな。これは何か？　「理由を知りたきゃクロスシリーズ読んでね、エヘ」って言う宣伝かオイ

白刀：かなり気色悪いが、概ねその通りだ。この辺りの下りは「生者の墓標～」になるな。最後だけ読んでいれば、分るだろうが……
この物語以上にぶっ飛んだ設定が読めるぞ

朱杖：ぶっ飛んだとか言ってやるなって……
それにしても、ズヴェズダ……所属、ところどころ抜けてるけど、何で？

白刀：あのラインナップは、「最初から地球にいた存在」を指す。
ネジレジアは微妙だが、Ｄｒ．ヒネラーは確か普通に地球人だったはずだ。ゴーマは駄狼が属しているので今回は除外らしい

朱杖：駄狼って言ってやるなよ……で？　次回はまた例に漏れず状況説明か。いい加減ワンパターンだな
おまけに今回は、力いっぱい「マジレンジャーＶＳデカレンジャー」の後って設定出っ放しだし

白刀：うむ。もはや時間軸とかを考えたり説明したりが面倒になったらしい
と言うか、最初の方から既に、「ＶＳシリーズの前後」と言う設定を書きたかったらしいんだがな。文字数の関係で消去される事が多かったとか何とか

朱杖：……それ、単に結愛が面倒臭がってるだけだろうが……
とにかく、次回また会おうぜ

第１８話

地球上に生息する様々な生物の始祖たる生命体が存在する。
彼らは、いかなる方法を用いても死ぬ事がない事からアンデッドと命名され、唯一彼らの活動を制限する事の出来るラウズカードと呼ばれる、トランプに似たカードに封印され、一部を除き深い眠りについていた。
そのラウズカードを、かつてアンデッドを封印するために戦っていた４人……剣崎一真、相川始、橘朔也、そして上城睦月で分担し、保管していたのだが……
ある日、それぞれ保管していた数から、１枚ずつ無くなっている事に気付き、それを捜索。
その途中、二手に別れ無くなったカードのうち１体…クラブの８、スコーピオンアンデッドが解放された状態で発見、先程睦月がそれを封印した。
直後、分かれていた剣崎と始が合流したのだが……どうやら彼らの方は、アンデッドを見つける事は出来なかったらしい。
落胆したような溜息が、睦月の口から漏れた瞬間。彼らより先にアンデッドと戦っていた６人のうち、１番年下と思しき赤いジャケットの青年……と言うか少年が、不機嫌そうに声をかけた。
「あんたらだけで話を進めないでくれよ。そもそも、あんたら一体何者？」
喧嘩腰に放たれた言葉に、いささかむっとしながら、睦月はその少年を見やる。
相手の方も僅かにだが、苛立っているらしい。睨むような目つきでこちらを見つめている。緑のジャケットの青年に窘められてはいるが、自分の態度を崩す気は無さそうだ。
そんな彼らに対して口を開いたのは、始。彼は見開かれがちなその目を、１人だけデザインが他の５人とは異なるジャケットを着た

青年に向けていた。
「……そう言うお前達こそ何者だ。特にそこの紺色の服の男」
「僕の事かな？」
「ああ。貴様……人間じゃないな。」
「それは俺も、何となくだけどわかる。人間とは違う気配だ」
困ったような笑顔を浮かべた青年に対し、とんでもない事を始と剣崎は言い放った。
……この2人、実は人間ではない。2人とも、「ジョーカー」と呼ばれるアンデッドだ。普通なら、アンデッドは別のアンデッドの気配を察知すると、闘争本能に従って互いに戦うのだが……今は「ある事情」により、その闘争本能は互いに抑えられた状態となっている。
とにかく、そんな2人が「人間ではない」と判断したのだ。恐らく、6人の引率者らしき青年は、「ヒトではない何者か」だろう。新手の敵。そんな単語が頭を過ぎり、睦月は思わず自身が変身するための道具、レンゲルバックルを腰に当てる。
だが、相手は特に気にした様子も無く軽く笑うと……
「うん。確かに僕は天空聖者だから、人間じゃないね」
相手は随分とあっさりと、自分が人外である事を認めた。
だが、その割には特に敵意を持っているように見えない。その雰囲気は、かつて出会ったアンデッドの1人……クラブスートのカテゴリーキングであるタランチュラアンデッドこと、嶋昇と同じものに思える。敵意どころか他者を慈しんでいるようにすら感じられた。
「とにかく、ここじゃ難だ。一旦家で話を……」
天空聖者とか言った青年が「話をしよう」と言い切るよりも早く、橘が持っていた小型のアンデッドサーチャーが警告音を鳴らす。同時に、剣崎と始もまた、何かに反応したようにばっと同じ方向を向いた。
「橘さん……！」
「近いな。それに、この反応は……」

彼の手元の画面に映されたポインターには、「ＣＡＴＥＧＯＲＹ　Ａ」の文字。しかも、目と鼻の先にいる事になっている。

そして、ジョーカーである2人の視線の先にいたのも……体に無数の棘を生やした、カブトムシを連想させるアンデッド。スペードスートのカテゴリーＡ、ビートルアンデッドだった。

「あれは……」

「カテゴリーＡ！！」

認識すると同時に、剣崎は無意識のうちに声を上げていた。

その声に気付いたのか、ビートルアンデッドはこちらに向かって真っ直ぐに突っ込んでくる。だが……

「変身！」

『ＯＰＥＮ　ＵＰ』

先程腰にバックルを当てたままだった睦月が、襲い掛かるビートルアンデッドの前に躍り出ると、そのままバックルを展開、紫色の、蜘蛛の模様の描かれた光の壁……オリハルコンエレメントと呼ばれるそれが展開し、駆けて来た相手を退ける。

逆に睦月はその壁を通過すると、その姿をクラブスートの力で戦う戦士、レンゲルへと変えた。

体勢を立て直し、再度こちらに向かい来るビートルアンデッドの剣を手に持つロッド、醒杖レンゲルラウザーで払いのけ、袈裟懸けの要領でそのままレンゲルラウザーを振り下ろす。

だが、相手もさる者。その一撃をギリギリで持っていた盾で防ぐと、そのままレンゲルラウザーを弾き返す。

「くっ……」

攻撃を弾き返されたその瞬間、睦月の胴ががら空きになった。

まずいと思うが、睦月が持っている得物は所謂「長物」だ。有効範囲も広いが、弾かれた時の動作も大きくなり、再び構えるまでのタイムロスが大きくなる。

睦月の戦闘における実力は、はっきり言って弱くない。むしろ、改良型のライダーシステムと言う点もあり、充分に強いと言って構

わない。
だが、実力が拮抗している相手には、僅かな隙も命取りになる。相手がこの隙を、見逃してくれるはずが無かった。
今度はビートルアンデッドが睦月の体を袈裟懸けに斬るべく、剣を振り下ろしにかかる。
斬られる。衝撃を覚悟し、それでも直撃を避けるべく無意識の内に後ろに向かって睦月が飛んだ瞬間。
「大地よ、壁になれ！　ジルマ・マジーロ！」
声が、響いた。そう認識すると同時に、赤いジャケットの青年が携帯電話のような物の先をこちらに向けているのが見えた。
何をしているのだろうか、彼は。睦月が……そして剣崎達も不審に思った、その瞬間。睦月とビートルアンデッドの間にあった地面がせり上がり、彼の指示通り「壁」になった。睦月を、斬撃から守るかのように。
唐突に現れたその「壁」に対処しきれなかったのか、ビートルアンデッドは鬱陶しそうに一声吼えると、睦月ではなくその壁を叩き斬る。その間に体勢を立て直した睦月は、壁の向こうから現れたビートルアンデッドの腹部に突きを食らわせた。
何の強化もしていないが、それは充分に効いたらしい。相手は低く呻くと、数歩後ろへとたたらを踏む。
「魁ちゃんやるぅ！　それじゃあ、芳香ちゃん、かわりまーす。マージ・マジーロ！」
「何？」
「かわります」と言う宣言を、「代わります」と受け取ったらしい。睦月は心外そうにピンクのジャケットを着た女性の方に、僅かに視線を向けるが……どうやら、違ったらしい。「かわります」とは「変わります」である事に気付いたのは、その女性の姿がピンク色の扇風機になった、その瞬間であった。
「芳香ちゃん扇風機～！！」
扇風機のどこから声を出しているのか分らないが、先程と対して

変わらない妙に明るい声でそう言うと、「彼女？」はその首をビートルアンデッドに向けて固定。始の持つ「トルネード」のカードと同等、もしくはそれ以上の威力の風で、相手の動きを止めた。

「睦月、今だ！」

「はい！」

剣崎にかけられた声に対して素直に頷くと、睦月はカードを3枚取り出し、レンゲルラウザーに読み込ませる。

『ＲＵＳＨ』

『ＢＬＩＺＺＡＲＤ』

『ＰＯＩＳＯＮ』

『ＢＬＩＺＺＡＲＤ　ＶＥＮＯＭ』

レンゲルの必殺技の1つである、「ブリザードベノム」が発動、動きを止められたビートルアンデッドに対し、強烈な突きと共に凍結させ、その身の内に毒液を流し込む凶悪コンボである。まして、アンデッドは死なないが為に、その苦しみは想像に絶する物だろう。

扇風機からの突風もいつの間にか止んでおり、そちらに目を向けると、既に元のピンクのジャケットの女性の姿に戻って呑気にこちらを応援している。

そんな彼らの様子に、仮面の下で苦笑を浮かべながら、睦月は何も書かれていないカードを取り出し、相手に向かって投げつける。

ひゅ、と空を切る音と共に、カードは凍りついたままのビートルアンデッドの胸部に突き刺さる。

直後、カードは緑の光を放ちながら、ビートルアンデッドを吸引。その存在を、ラウズカードの中へと封印し、再び睦月の手の中に戻った。

「剣崎さん、あなたのカードだ」

変身を解いてそう言うと、睦月は今さっき封印したカードを剣崎に向かって投げる。カードは綺麗な軌跡を描き、剣崎の手の内に収まると……受け取った方は、ほっとしたような表情でそれを見つめた。

「これで残り2体か……」
「ああ。キャメルとホエールだ」
安堵したように呟いた剣崎に答えるように、始が何の感慨も無さそうに言葉を紡ぐ。
「もう半分」、というよりは「やっと半分」と言った雰囲気だ。
「……さっきは助けてくれてありがとうございました」
「礼を言われるような事じゃ無いって」
「も～、魁ちゃんってば照れ屋さん」
「……ほう姉が呑気なだけだろ」
頭を下げた睦月に対し、赤いジャケットの少年……魁と言うらしい……は照れたようにそっぽを向き、ピンクのジャケットの女性はその背中をバシバシ叩いて明るく笑う。
そんな彼女に、黄色いジャケットの青年が冷たく突っ込んでいたが、それはどうやら聞こえていないらしい。
「何だか話が途切れちゃったけど、改めて話を聞きたいな」
「それはこちらも同じだ」
紺色の服の青年の言葉に、橘が返し……4人は、とりあえずそれなりに和やかな雰囲気……と言うには少々疑問が残るが…とにかく、彼ら言う「家」に向かう事になった。

＊

「どうぞ！　『アニキサラダ』です！」
「……蒔人兄ちゃん、なんでこのタイミングでそれ……？」
「今朝は良い野菜が採れたからだ！」
「理由になってねぇよ、兄貴……」
通された家は、本当にごく普通の「家」だった。アットホームな雰囲気と、「家庭」特有の温かさのような物を感じる。
……玄関に入ってすぐに「隠し部屋」があり、そこには何故か「喋る鉢植え」に「勝手に動く絨毯」などがある事を除けば。

驚く彼らを尻目に、この家の住人らしい6人に通されるまま……そして出されるまま、その何とも言えないネーミングのサラダを取り分けて頬張る。

「今朝採れた」と言う言葉は嘘では無いらしく、しゃきしゃきしていてとても美味しかった。

そのサラダのお陰かどうかは分らないが、緊張もほぐれ、ある程度互いの説明も終わった頃。紺色のジャケットの青年……ヒカルと言うらしい……が納得したように頷いた。

「成程、さっきのは不死の生物……アンデッドか」

「ああ。普段は俺達が保管、悪用されないように管理しているんだが…いつの間にか、1枚ずつ消えていた」

「それで、探していたら俺達と遭遇したって事か」

橘の言葉に、黄色いジャケットの青年……5兄弟の下から2番目、次男の翼が返す。ちなみに、先程から剣崎の服に何か白い液体を噴霧している。彼曰く、「下手に出て成功したての仕立て薬」らしい。

「道理で倒せない訳だよ。バンキュリアみたいな物だろ」

「でも、封印ってちょっと凄いよね。睦月ちゃん強かったし」

「あの、ちゃん付けは止めて下さい……」

兄弟の末っ子である赤ジャケットの少年、魁の言葉を聞いているのかいないのか、ピンク色の上から2番目、長女の芳香は睦月の頬をふにふにと突きながら言った。

……天真爛漫と言うか、何と言うか。姉がこうだと、おそらく下の3人はとても苦労している事だろう、と睦月は思う。

「君達が魔法使いって言うのも、流石に驚いたけど……でも、あんなの見たら、信じるしかないよな」

「魁の錬金術と、芳香の変身魔法、ですね」

「ああ。俺の……俺達の『変身』とも違う。呪文のような物も唱えていたしな」

剣崎に返した緑色の長男、蒔人に、始も淡々と言葉を返す。

信じ難い事、ではある物の……アンデッドを探す際に、なにやら

銀色の幕のような物を通った事を考えれば、「この場所」は自分達が普段住んでいる世界とは違う、「異世界」であると推測できた。
特に始と橘は実際に「異世界」へ赴いた事があるだけに、簡単に実感できる。それ故に、「自分達が知らない事も、異世界だから」で何とかなりそうな気がしていた。
もっとも、自分達がかつて赴いた世界とは、根本的に異なるのだが……彼らがそれを知る事は無い。
「でも、おかしいんじゃないかな？」
「おかしいって、何が？」
真剣な表情で言ったのは青いジャケットの次女、麗。
不思議そうに問いかけた剣崎に頷きながら、彼女は部屋の壁にかけてある鏡を指差し……
「私達『メメの鏡』で、アンデッドの出現を知ったんですけど……そもそも、『メメの鏡』はインフェルシアが関わっている事しか映し出さないんです」
「そっか。マンちゃんも、アレを見て、私達に知らせたんだもんね」
麗の言葉に芳香も頷く。彼らの「敵」……この世界を侵略しようとしている存在を、「インフェルシア」と呼ぶらしい事は、話の最中に聞いていたが……それが今回の一件に関わっているとなると、少々厄介な事になる。
不死の生物であるアンデッドを利用し、不死身のゾビルやハイゾビル、あるいは冥獣人を生み出す可能性だって、ないとは言い切れないのだ。
「まさか……カードを盗んだのは、そいつらじゃ……！？」
睦月が真剣な表情で言った、その瞬間。再び橘の持つアンデッドサーチャーが鳴り響き、壁にかけてあった「メメの鏡」から怪物に追われ、逃げ惑う人々の様子が映った。
「あれは……ゾビル！」
「アンデッドも映ってる……やっぱり、あいつらがアンデッドを解放したのか！？」

魁の言葉に、剣崎も声を荒げて言う。その瞬間、彼らの心は１つに纏まった。ほぼ同時に立ち上がると、彼らはアンデッドサーチャーの指し示す場所に向かったのであった……

第１８話（後書き）

朱杖：あー……何とか更新されたな、マジ&剣編の第二回

青器：そうね。「明瞭」や「英雄」をそっちのけで、「外伝」から更新していくなんて……相変らず波の激しい感じね、辰巳は

朱杖：……龍水、１つ聞いていいか？

青器：なぁに？

朱杖：１人で何、ホールケーキ抱え込んでるんだよ。それ、「俺達に」って送ってもらったショコラケーキだろ！？

青器：ティエト・コーティオン様、誠にありがとうございます。映像で送れませんけれど、ただ今私の秘蔵の茶葉……フラワリー・オレンジ・ペコーで頂いております

朱杖：しかもちゃっかり高級茶葉でティータイム！？

青器：まあ、仕方ないわね、朱杖には分けてあげるわ

朱杖：４人に、だから。仕方ないとか言うなよ……しかも今回は俺が司会なんですけど

まあいいや、分けてくれたし。それじゃあ、気を取り直して今回の話

青器：そうねぇ……やはり、劇場版剣を意識したようなビートルＶＳレンゲルかしら。ただ、劇場版と異なるのは、ほんの少しだけビートルが強く、そしてマジの赤系２人組の手助けが入ったって事ね

朱杖：そうだな。それに……翼の魔法薬の名前も、結構無茶だったと思うぜ

青器：案外とあっさり剣組が「魔法」を受け入れてしまったのもマイナス評価ね。いくら異世界に向かった事があるからって、そこはもっと驚くべきだわ

朱杖：まあ……って言うか、受け入れないと話進まないだろしかし、この物語……あまりのワンパターンに結愛も少々てこずってるらしいぞ。もっと別の流れが作れない物か、と

青器：仕方ないわ。「起承転結」は大切よ。最近その中の「結」に、難があるように見えるけれどああ、朱杖、口元にクリームが付いているわ

朱杖：お、サンキューそれじゃあ、また次回会おうぜ

青器：あら、今日はもう終わりなのね。それじゃあキュウリのサンドイッチを頂きましょうっと

朱杖：本格的に英国風のお茶会を始める気かぁぁぁぁっ！

Ｓｔａｇｅ１９：勇気の切り札　～マージ・ブレイド・マジ・マジュナ～

小津ファミリーが、剣崎達を己の家に招き、互いの状況を簡単に説明していた頃。

インフェルシアでは、メーミィがキイキイと甲高い声で怒鳴っていた。

「何なの！　あの連中はっ！　不愉快！！」

「あの連中」とは勿論剣崎達「仮面ライダー」の事である。苛立つメーミィの横では、ナイとメアも同意するように頷き……

「折角あたし達以外の『不死生物』に会えたのに、封印なんてするし」

「するしぃ」

「頭にきちゃう。ねー、メア」

「ねー、ナイ」

こちらも愛らしく頬を膨らませ、互いに頷きあう。彼女達としては、自分以外の不死生物の存在と言うのは、他者には想像も出来ない位嬉しい物だったらしい。

そんな中、魔導騎士ウルザードだけは、どこか楽しそうにフム、と笑った。

「楽しそうですね、ウルザード様」

「……俺にそう言った感情は無い」

「あ、すみません。騎士として、彼らと戦ってみたい……そう思っているのかなって。あの、もしも出すぎた事なら申し訳ないんですけど」

ズヴェズダの言葉に、ウルザードは一瞬だけ黙り込み……そして、そうかもしれない、と気付く。

己の中にある「騎士」としての何かが、あの戦士達に反応しているのかもしれない。

「とにかく！　このままじゃ何の意味も無いわ！　あの憎き魔法使

い共を倒すチャンスだと言うのにっ！」
「そ、それなら、あの……メーミィ様……」
「何！？　言いたい事があるならはっきりと仰い！！」
「は、はひぃぃぃ！　すみませんごめんなさいごめんなさいっ！」
メーミィに怒鳴りつけられ、ズヴェズダはやはり顔に似合わない恐縮加減でペコペコと謝ると、やがて何かを決意したようにその顔を上げた。
その口の端を、奇妙な笑みの形に歪めて。
「次は、僕自身が行こうと思うんです。その、残り2体のアンデッドを解放して。それと……冥獣ゴーストを、1体貰いたいんですけど……」
「ゴーストなんて、何に使うのよ？」
「使うのよ？」
不思議そうに問いかけてきた彼女達に、ズヴェズダは更にその笑みを深め……やおら、最初に彼女達に見せた「もう1つの物」を取り出した。
「これを挿して、ライダーに対抗します。所謂、ドーピングです」
『Ｕｎｄｅａｄ』
ズヴェズダがその「何か」を軽く叩いた瞬間、そんな音が聞こえた。
何だかよく分らないが……その「何か」とズヴェズダ自身の放つ異様さに圧倒されたのだろう。メーミィはふ、と笑うと、彼に扇子の先を差し向け……
「良いわ。お前の実力、我が見届けてあげるとしましょう」
そして……彼は、ズヴェズダの希望通り、冥獣ゴーストを1体と、ゾビル、ハイゾビル、更にはウルザードも付け……
「メー・ザザレ」
その呪文と共に、彼らを地上界へと送り出した。
……ま、せいぜい頑張って頂戴……あまり期待していないけれど。
そんな事を思いながら……

＊

「そこまでだ、インフェルシア！」
「来たか、魔法使い達よ」
「こ、こんにちは」
魁達が到着するのを待ち侘びていたかのように、ウルザードは剣を抜き、悪魔のような姿をした冥獣人が、ぺこりと頭を下げた。
そんな彼らの後ろには、冥獣ゴーストと数多のゾビル、ハイゾビルの群れ、そして解放されたキャメルアンデッドとホエールアンデッドだった。
「やっぱり、アンデッドの解放にはインフェルシアが関わっていたのか！」
「あ、はい。僕が、その……皆さんから1枚ずつ頂きまして……それで、解放させてもらいました」
「お前が……？」
「はい。冥獣人ハデスのズヴェズダと申します。あの、僕、その……色んな世界を行き来できる者ですから。あ、ダイヤのあなたには、『運命の輪（フォーチュン）』と同じような存在、と言えば納得して頂けるかと」
訝る橘に対して、冥獣人がおずおずと答える。
その言葉の意味を理解できたのは……言われた橘、ただ1人。他の面々は何を言っているのか分らないと言わんばかりの表情で相手と橘の表情を交互に見やる。一方は、その凶悪な形相に似合わない、心底申し訳無さそうな態度。そしてもう一方は、それまで以上に緊張した面持ち。
「だから、その……申し訳無いのですけど、皆さんには、ここで死んで頂きたいんです。今後、僕達の邪魔になりそうなので」
ズヴェズダと名乗ったその冥獣人が言った瞬間。ゾビル達が一斉に魁達に向かって駆け出す。
そう認識した瞬間。１０人の戦士達は、それぞれ己の変身ツール

を構え、宣言した。
『天空聖者よ、我らに魔法の力を！　魔法変身、マージ・マジ・マジーロ！』
―マージ・マジ・マジーロ―
小津の魔法使い達は、宣言と共に呪文をコール。その「要請」にも似たコールを受け、重厚な天の声が響き、彼らを加護する天空聖者達の力が宿る。
「天空変身、ゴール・ゴル・ゴル・ゴルディーロ！」
―ゴール・ゴル・ゴル・ゴルディーロ―
ヒカルがチケットをチェックすると、一瞬だけ彼は仮初の姿である「ヒカル」から、本来の姿である太陽の天空聖者、「サンジェル」へと姿を変え、更に彼の戦装束とも言える黄金の鎧をその身に纏う。
「輝く太陽のエレメント。天空勇者、マジシャイン！」
黄金色の戦士と化したヒカルが、太陽の明るき光で照らす。
「唸る大地のエレメント。緑の魔法使い、マジグリーン！」
緑の魔法使いと化した蒔人が、大地と植物の代わりに大きく吼える。
「吹き行く風のエレメント。桃色の魔法使い、マジピンク！」
桃色の魔法使いと化した芳香が、風の様に流れる所作で悪意を散らす。
「揺蕩（たゆた）う水のエレメント。青の魔法使い、マジブルー！」
青の魔法使いと化した麗が、水の如き澄んだ眼差しで未来を映す。
「走る雷のエレメント。黄色の魔法使い、マジイエロー！」
黄色の魔法使いと化した翼が、雷に似た苛烈な意思で相手を射抜く。
「燃える炎のエレメント。赤の魔法使い、マジレッド！」
そして赤の魔法使いと化した魁が、炎と変わらぬ熱量で相手を焦がす。
「溢れる勇気を魔法に変える」
『魔法戦隊、マジレンジャー！』

彼らの宣言は、まるで名誉ある者に与えられた称号であるかのように高らかとなされた。

そして……

『変身！』

『ＣＨＡＮＧＥ』

『ＴＵＲＮ　ＵＰ』

『ＯＰＥＮ　ＵＰ』

こちらは４人の宣言が重なった。

２人のジョーカー……剣崎と始は、己の腰のジョーカーラウザーにそれぞれ「Ａ」のカードを読み込ませると、そのカードの特性、「ＣＨＡＮＧＥ」の音声がどこからか響き、その姿を瞬時に変える。

方や甲虫とスペードマークを連想させる青の戦士、ブレイド。

方や蟷螂とハートマークを連想させる黒の戦士、カリス。

一方の橘と睦月は、それぞれベルトにセットした「Ａ」のカードと同じ模様のオリハルコンエレメントが展開、それを通る事で彼らはそれぞれの鎧を纏った。

方や鍬形とダイヤマークを連想させる赤の戦士、ギャレン。

方や蜘蛛とクラブマークを連想させる緑の戦士、レンゲル。

彼らはその変身を終えると、まずは襲い掛かってきたゾビル達を叩き斬り、撃ち抜き、そして薙ぎ払う。

「はぁっ！」

「おおりゃあ！」

睦月のレンゲルラウザーによる薙ぎ払いの後に、蒔人のマジスティックアックスが止めと言わんばかりにゾビルとハイゾビルを叩き伏せる。

「やりますね、蒔人さん」

「アニキパワーです」

軽く言葉を交わすと、彼らは再び襲い来るゾビルとハイゾビル、そして冥獣ゴーストを相手に己の武器を振るう。ゾビルとハイゾビルは、軽く薙いだだけでその存在を消すが……難敵はゴーストだっ

た。相手はうう、と低く唸ると、特に大きなダメージを受けた様子も無く彼らに向かって襲い掛かる。
「何だこいつ……妙に強いぞ！？」
「まさか、アンデッドの細胞が掛け合わされたんじゃ……！？」
「そんな事があるんですか！？」
「……少なくとも、以前は！」
半ば怒鳴るようにしながら言う彼らの言葉を理解しているのかしていないのか。冥獣人ゴーストは、まるで不死身であるかのように、怨嗟の篭った声で唸り、彼らの元へと走るのだった。

こちらはマジカルシスターズこと、芳香と麗の2人組。その背中を守るようにして立っているのは橘だ。ギャレンラウザーで相手を牽制しつつ、シスターズの攻撃で止めを刺す…と言うパターンなのだが……
今、彼女達の前に立ち塞がっているのは、ハートスートのカテゴリー9であるキャメルアンデッドと、ダイヤスートのカテゴリー5であるホエールアンデッド。つまり、解放されてしまったアンデッド2体だ。
「アンデッドなら、たっちーの出番！」
「……たっちーと呼ぶな」
芳香の軽い言葉に、心底不機嫌そうに返しながら、橘は手元のギャレンラウザーを放つ。
その戦い方を見ながら、麗は心底感心する。本当に、彼は戦い慣れているのだと。アンデッドが相手なら、特に。自分達に出来るのは、その手助けしかないかもしれない。
「橘さん、私達にできる事は言って下さい！」
「……先にキャメルを封印する。あいつの能力は厄介だ。体力を回復させる能力を持つ」
「確かに、それは厄介ですね」

橘の言葉に軽く頷きつつ、麗はマジスティックの先をキャメルアンデッドに向け、得意の水による攻撃を放つ。
しかし……一緒にいたアンデッドにとって、その攻撃はまさに「水を得た魚」状態らしい。おお、と大きく吼えると、加速したようにこちらに向かって突っ込んで来た。
「きゃあっ！」
「……ちっ」
『ＢＵＲＮＩＮＧ　ＳＨＯＴ』
軽く舌打ちをすると、橘は狙いをキャメルから急遽ホエールに変更、そのままカードコンボを繰り出し、相手を撃ち貫いた。

「……雑魚が。消え失せろ」
低く、暗い声が響くと同時に、ズヴェズダの掌から無数の黒いエネルギーボールが生み出され、翼、ヒカル、そして始に向かって降り注ぐ。それを3人は各々の武器で撃ち落とすと、がらりと雰囲気の変わった相手に向かって、そのまま一発ずつ攻撃を放つ。
だが、相手はそれをひょいとかわすと、今度はいつの間にか持っていた剣を振るうと、黒い雷を放った。
「あいつも雷の力を使うのかよ！？」
驚く魔法使い2人には目もくれず、ズヴェズダは真っ直ぐに始の方に向かって駆け出す。悪魔のようなその形相を、さらに凶悪に歪めながら。
「他の連中も目障りだけど、1番目障りなのはお前だよ、『愚者（ジョーカー）』。だから、このままバラバラにしてやる！！」
「そうはさせないよ。ルーマ・ゴー・ゴジカ！」
言うと同時に、ヒカルは手元のマジランプを7回擦り、その引鉄を引く。すると、彼の魔力を帯びた魔法猫スモーキーが、黄金色の光を纏ってズヴェズダの手元に体当たりをかまし、その剣を落とさせる。

ヒカルとしては倒すつもりだっただけに、全くの無傷だったのには驚くが…それでも、相手の攻撃の手を止めるに到ったのは重畳と言った所か。

「ちっ、ウゼェ……マジでウゼェぜ、天空聖者ぁ。折角、女帝のヤローが引き篭もってるって言うのによぉ！」

赤い瞳を、さらに赤く滾らせ……ズヴェズダは再び彼らに向かって漆黒のエネルギー弾を放つのだった。

「赤の魔法使い、そして異界の騎士か。相手にとって不足は無い」

「今日こそ決着をつけてやる。母さんの仇だ！！」

静かに言葉を放ったウルザードとは対照的に、魁は苛立ったように言葉を返す。そしてその横にいた剣崎は……妙な違和感を覚えていた。

ウルザードの声は、無感情のようでどこか優しい……そう思ったのだ。

「魁、あいつは……」

「あいつは、俺達の母さんを殺した……俺が1番許せない敵なんだ！」

「どれだけ強くなったか、見せてもらおうか」

言うが早いか、ウルザードはその剣を構えてこちらにやって来る。

「魔導騎士」と言う二つ名は、伊達では無さそうだ。本当に騎士らしく、正々堂々としているように、剣崎には見えた。怒りで瞳の曇っている魁には、分らないかもしれないが。

そう感じると同時に、剣崎は無意識の内に自分の持つ剣の切れ味を向上させるカード……「スラッシュ」を再現させたブレイラウザーに読み込ませ、相手の剣を受け止める。

「ほう。やはりやるな」

「誉められても、あまり嬉しくないな。特に……今のあんたには」

剣を交え、その結果何かを感じたらしい。剣崎は悲しそうにそう

返すと、とん、と後ろに下がり、再びカードを読み込ませる。
『ＬＩＧＨＴＮＩＮＧ　ＳＬＡＳＨ』
「レッドファイヤー・スラッシュ！！」
打ち合わせた訳でもないのに、２人の剣戟がウルザードに向かって繰り出される。だが、その斬撃はジャガンシールドで防がれてしまった。彼らの戦いは、まだこれからである……

Ｓｔａｇｅ１９：勇気の切り札　～マージ・ブレイド・マジ・マジュナ～（後書

朱杖：更新早っ！

玄金：みたいだね。何でも、結愛ちゃん曰く、「頂き物を腐らせる訳には行かないから」って事らしいよ

朱杖：頂き物って……あっ、てめえこの変態蝮！！何で蒸篭（せいろ）抱え込んで豆沙包（あんまん）子食ってんだよ！？

玄金：炎雀にはこっち、杏仁豆腐ね。真ん中に芝麻球（ごまだんご）と桃包（ももまん）もあるから

今回のお茶は、龍水ちゃんじゃ無いけど、最高級烏龍茶としても誉れ高い、武夷岩茶（ぶいがんちゃ）の１つ、大紅袍（だいこうほう）を用意しましたー

朱杖：ヴィランズ様、中華スウィーツセット、誠にありがとうございますあ、武士、そこの八宝飯と月餅も寄越せ

……って事で、今回の更新分

玄金：ふもふもふも……

朱杖：食ってねーで後書きはきちんと回せやテメェェェッ！

玄金：４チームに分かれてのバトルだったね。マジカルシスターズと橘さんの組み合わせは、ちょっと意外だったかな。って言うか、麗ちゃん凄く足引っ張ってたじゃない

朱杖：まあ、しょうがないだろ。水だし。ホエールが使えないとなると、結愛の大好きな「バーニングドロップ」とか「バーニングデ

ィバイド」とか使えないと言う

玄金：好きなくせにねー
で、ウルザード君ＶＳ魁君、一真君は予想範囲内だったでしょ。睦月君を活躍させる為に、あえて冥獣ゴーストを、蒔人君と組ませたのも分る。遠距離攻撃系って事で、翼君、ヒカル君、始君を組ませたのも良いとして……問題はその3人と対峙しているあの人ですよ

朱杖：ふふぇふふぁ？

玄金：……後書きを回せと言ったの、お前じゃなかったっけ、炎雀。何で口いっぱいにライチ頬張ってるの

朱杖：ああすまん、いきなり振られるとは思わなかったから。ズヴェズダだろ？　あれはあいつの闇人格。どっかの黒ＫＯＳ－Ｍ○Ｓみたいなのを意識したらしい

玄金：伏字の意味が殆ど無いから。って事は、戦闘になるとあの人格出て来るの？どっかの漫画の「ファラオ」よりも酷いじゃん

朱杖：むしろ同じ漫画に出てきた盗賊王に近いな。未だに「腐れ、ゲスが！」は名台詞だと信じて疑わない。俺も結愛も

玄金：……何人がその台詞覚えてると思ってるの……
次回は巨大戦予定だよね？　出来るの？

朱杖：多分、できる。最終話に関しては、もはや制限をかけるのやめたらしいから
むしろ俺、次回の後書きの方が不安なんだけど。だって、俺とエステルの対談だぜ？

玄金：うわー、頑張ってねー（棒読み）。
と言う訳で今回はこの辺で。僕達にスウィーツをくれるのは嬉しいけど、その他はノーサンキューだから、気をつけてねー

朱杖：……噂によると、次回のスウィーツは辰巳特製抹茶ロールケーキらしいが……カビが生えても分らないって事か！？

玄金：それは穿ちすぎ……

第２０話

ホエールアンデッドの体にギャレンのコンボ、「バーニングショット」が炸裂した直後、そのホエールの腹部にあるバックルが開いたのを確認するや、橘は即座に自分の持っていたカードを投げ、それを封印する。

だが、今まで狙われていた方……即ち、キャメルアンデッドからすれば、今の橘の行為は愚かな事だった。殺されるはずの勢いは更に増し、低い唸り声と共に橘と麗に向かって突っ込んでくる。

「まずいっ！」

「きゃあっ！」

かわしきれない。少なくとも、橘も麗もそう思った瞬間。

「ジー・マジカ！　ピンクストームキィック！」

ひゅう、と風を……いや、竜巻を纏い、キャメルの横っ面を芳香の蹴りが捉え、相手の軌道を反らす……と言うか、完全に吹っ飛ばす。

「芳香ちゃん!?」

「麗ちゃん、たっちー、大丈夫だった?」

「……だからたっちーと呼ぶな」

呆れたように返しつつも、その声にはどこか安堵の色が混じっている事に、芳香は気付く。

芳香の、橘朔也に対する印象は、常に眉根を寄せて考え込んでいるお兄さん、と言う物だ。そんな顔をしていたら、きっと幸せが逃げていく。今までどんな生き方をしてきたのか知らないが、少しは笑うべきだ。笑えば、どんな不幸な出来事だって、昇華する事が出来るのだから。

だから、彼女はいつも笑う。しっかり物の兄弟に囲まれていると言うのもあるが、彼らはしっかりしすぎていて、往々にして眉間に皺を寄せている事が多い。それをほぐすのが、「姉」である自分の

仕事だと思っている。
「それじゃ、麗ちゃん、クジラもいなくなった事だし、お願い」
「ジー・マジカ！　ブルースプラッシュ！」
芳香のおねだりに、しょうがないなぁと言わんばかりの声でそう言うと、麗は彼女の魔法の真骨頂である水柱で、キャメルアンデッドの体を次々と叩く。
まさに、怒涛の攻撃。うねる水流にもまれ、時に腹部を、時に背を叩かれ、水流から開放された時には既に、キャメルのバックルは開いていた。
「橘さん、お願いします！」
「ああ」
短く答えると、橘は再び背の赤い、何も描かれていないカードを構え……そして、相手に回復する暇を与えずにそれを投げつけた。
とす、と軽い音がした。そう、芳香と麗が思った瞬間、カードは淡い緑色の光を放ち、キャメルの体を徐々に吸い込んでいく。その様子を、図らずも2人の魔法使いは、美しいと思ってしまう。
やがてキャメルアンデッドは完全に吸い込まれ…ひゅる、と言う空を切る音と共に、橘の手の内に返ってきた。
「……これで、今回解放されたアンデッドは封印完了、だな」
橘がそう呟いた瞬間、彼らの前を、3つの人影が飛んできた。
それが始、翼、ヒカルの3人だと気付くのに、そう時間はかからなかったが……
「翼ちゃん！？」
「先生！？」
「何があった、始！？」
それぞれに側に寄って問いかけると、彼らの前には血色の瞳の「悪魔」が、苛立たしげな空気を纏って悠然と歩いてくるのが見えた。
確か、冥獣人ハデスのズヴェズダだったか。
この3人を、たった1人でここまで追い込んだというのなら、油断なら無い相手だ。

「あぁ？　何でもうアンデッドの連中が封印されてんだよ。あいつら本っ気で使えねぇ！」

ケッと言う擬音が聞こえそうなくらいの苛立ちを見せながら、相手は足元の砂利を思い切り蹴飛ばす。戦う前に見た、オドオドビクビクした雰囲気は皆無だ。いっそ別人のようにさえ思えるその豹変振りに、橘はホルダーから無意識の内に2枚のカードを引き抜いた。

「ジャックフォームなら止めとけよ、銃撃の鍬形（クワガ）。お前が2枚読み込む前に、俺の攻撃が届く方が……」

相手の口の端が、ニ、と歪んだ気がした。そう思った瞬間、相手の動きがぶれ、消えた。少なくとも、橘にはそう見えた。だが…消えたのではなかったらしい。気が付いた時には、更に口角を引き上げたズヴェズダの顔が、目の前にあり……言葉の先を紡いだ。

「早ぇ」

その言葉と同時に、橘を……いや、その場にいた6人を衝撃が襲う。

予期せぬ攻撃に、彼らは受身を取れぬまま岩壁に叩きつけられ、地にひれ伏す。そんな彼らに軽蔑の眼差しを送りながら、ズヴェズダは悠然とした足取りで近寄り……

「クズが！　雑魚が！　ゴミ共がっ！　目障りなんだよ、テメェら全員！！　死ねよ、ここで！」

言いながら、ズヴェズダは持っていた剣を高々と振り上げ、その切っ先に今までとは比にならぬ大きさの闇のボールを生み出した。

先の衝撃のせいか、体が痺れて思うように動かない。かわせない……そう、翼が思いかけたその瞬間。

『ＲＥＣＯＶＥＲ』

音声が、響く。その次の瞬間、漆黒の旋風が、相手目掛けて奔（はし）った。それが、いつの間にか先程封印したアンデッドの力で回復した始だと気付いたのは、その闇のボールを彼が手に持っていた弓で撃ち貫いた時だった。

「殺すだと？　それはこちらの台詞だ。俺が、貴様を、ぶっ殺す」

一言一言区切るように、始は低い声で宣言する。
何故だかは、始自身も良く分らない。だが、ほんの少しの間ではあったが、小津兄弟の間にある絆は、栗原母娘の間にある物と同じような気がして……それを断ち切ってはいけないと、そう思った。
「……殺せるもんなら、と言いたい所だが……今日のところは時間切れか」
忌々しげにそう吐き捨てると、ズヴェズダは睨むように6人を見回すと、深い溜息を吐いて、その場から姿を消してしまった。
「見逃された……のかな？」
「わかんねぇけど……とりあえず、助かったって感じ……だな」
ヒカルの言葉に、悔しげに翼は返し……持っていた「嫌味のない癒し薬」で他の面々の治療を行うのであった。

『るぅうをぉぉぉぉっ！』
ゴーストの名の通り、まるで怨霊その物のような唸り声を上げ、蒔人と睦月に向かって突進してきた。
その目の部分からは、緑白色の涙を流し、常に「O」の字に開かれた口からは怨嗟の声が漏れている。細い両腕は、彼らを地獄に引きずり込もうと宙を掻き、幽霊と同じ様に足が無い。空中から、幾度と無く突進してくるのだ。
しかも地面との摩擦が無い分、スピードはなかなか速い。攻撃を当てたくても、かわすのが精一杯と言った所だ。
「相手の、動きを止めないと攻撃が当たらない！」
「どうします、蒔人さん」
睦月に問われ、蒔人は油断無く相手を見つめながら考える。確かに、今のままではジリ貧だ。やがて体力が尽きて、相手のいい的になるだろう。そうなる前に、相手の動きを止め、こちらも反撃しなければならない。
相手が大地に立つ者なら、大地のエレメントを操る蒔人の魔法で

縫いとめる事ができただろうが、いかんせん宙を舞っている。それに、この辺りには草一本生えていない。蒔人本来の力が、あまり活用できない状態だ。

ならば、活用できる力を使えば良い。幸いにも、ゴーストと戦っているのは自分1人では無いのだ。

「睦月さん、俺に考えがあります」

「考え……？」

訝しく思いながらも、睦月は蒔人の言う「考え」を聞き……その仮面の下で、驚愕の表情を浮かべた。

「そんな事したら、蒔人さんが危険なんじゃ！？」

「アニキパワーで乗り切ります！　大丈夫、俺はまだまだ、弟達を残して死ねませんから！」

何を根拠にしているのかは定かではないが、蒔人はどんと自分の胸を叩いてそう言い切ってしまう。

自分にも「兄」と言う物がいたのなら、こんな風に自分を思ってくれる物なのだろうか。不安な素振りを見せず、「弟」を引っ張ってくれる、そんな存在に……

思いながら、睦月は軽く頷くと……

「分りました。信じます、アニキパワー！」

かちゃ、とレンゲルラウザーを構え、言い切った睦月に対し、蒔人も満足気に頷き……

「さあ！　降りて来い、インフェルシア！」

『おおお……ををををっ！』

蒔人の挑発に答えるかのように、ゴーストは一際大きくそう吠えると、急降下して2人に向かって突っ込んでくる。だが、蒔人はそれを望んでいた。「相手の動きが一直線に狙ってくる」、この瞬間を。

「マジ・マージ！」

ゴーストと自分の体がぶつかる直前、蒔人はその呪文を唱え、筋骨隆々の姿、マッスルグリーンへと変身、加速し、勢いの増した相

手の体をその場に留めるべく、その豪腕で押さえ込んだ。
「睦月さん、今だ！」
「はい、蒔人さん！」
蒔人の声に頷き、睦月が1枚のカードを読み込ませる。
そのカードとは勿論……
『ＢＬＩＺＺＡＲＤ』
ブリザード。クラブの6、「ＢＬＩＺＺＡＲＤ　ＰＯＬＡＲ」のカードから生み出される強力な冷気で、相手を凍てつかせるカードだ。
蒔人によって押さえ込まれ、その動きを止められたゴーストは、その冷気を直接喰らい、ビキビキと音を立てて凍り付いていく。無論、押さえ込んでいた蒔人にもその冷気はかかるのだが、その強化された筋力をもって、自分に纏わりつこうとする氷を振り払い、ゴーストから距離をとる。
後に残るのは、完全に凍てつき、身動きの取れなくなった冥獣ゴースト。そしてそれに向かって、最後の一撃を繰り出そうとする、緑の魔法使いと緑の蜘蛛。
「ジー・マジカ！」
『ＳＣＲＥＷ』
『ＢＬＩＺＺＡＲＤ』
マッスルグリーンから、元のマジグリーンに戻った蒔人が呪文を唱えたのと、睦月が2枚のカードを読み込ませたのは同時。
そして……
「グリーングランドボンバー！！」
『ＢＬＩＺＺＡＲＤ　ＧＡＬＥ』
マジスティックアックスに込めた魔力を、いつもなら大地に向けて放つ所を今回は直接相手に叩き込む蒔人。その斬撃と同時に、氷の力を纏った拳で、ゴーストを殴り抜く睦月。
その2つの攻撃に耐え切れず、ゴーストはその身を粉々に砕かれ、その場に散った。

「よし、これで……！」
終わった。そう思ったまさにその時。
―ドーザ・メル・メガロ―
メーミィの声が聞こえ、倒したはずのゴーストは、復活、そして巨大化したのである。

「……どうやら、潮時のようだな」
巨大化した冥獣ゴーストを見上げ、ウルザードは魁と剣を交えながら、淡々と言葉を紡ぐ。
気付けば、ズヴェズダと名乗っていた冥獣人も姿を消している。自分を除く魔法使い達は、マジマジンと化して、既にゴーストと戦っているが、見た所やや劣勢…といった風に見えた。
「逃げるのかよ！」
「……強くなったな、赤の魔法使い。殺すには惜しい程に」
魁の言葉には答えず、ウルザードは剣を引きながら感慨深げに言葉を洩らす。
――やっぱり、あの人は――
ブレイラウザーを構えながら、剣崎はふと考える。目の前に立つ、紫の騎士の「正体」を。
自分の考えが正しいなら、彼は恐らく魁の……魁達5人の父親だ。それも、何らかの原因で心を操られた状態の。
剣を交えて感じたのは、相手の太刀筋が魁のそれと似ていた事。そして、いつかカテゴリーAの暗示にかかり、最強だと謳っていた頃の睦月に、印象が似ていた事だった。
だとしたら……「父子」で戦うのは、あまりにも悲しすぎる。あってはならない事だ。
家族を失った剣崎だからこそ、その痛ましい「事実」に気付けたのかも知れないが。
「あんたは……こんな状況のままで良いのか？」

「何が言いたい、異界の剣士よ」
「自分の正義を……勇気を見失ったままで、戦う意味はあるのか？」
「……俺の戦う意味は、ン・マ様のため。それだけだ」
剣崎の言葉にそれだけ返すと、ウルザードはそのまま姿を消した。
まるで、自分の仕事は終わったと言わんばかりに。
「待て……待てよウルザード！　逃げるな！」
「よせ、魁」
「離してくれ剣崎さん！　俺はあいつと決着をつけないといけないんだ！」
「お前は何の為に戦っているんだ？　今やるべき事は、あいつとの決着じゃないだろう！？　一歩引くのも勇気だぞ！」
剣崎に言われ、魁は軽く俯くと……素直に、ひとつ頷いた。
「……確かに、一歩引いて、冷静に見る……深追いしないのも勇気…だよな。忘れてたよ、剣崎さん」
マスクの下で苦笑を浮かべ、魁がそう答えた……その時。彼のマージフォンに、新たな呪文が舞い降りた。
「これは……『深追いしない勇気』に与えられた魔法……？　でも、2つある……」
不思議に思いながらも、魁はその2つの魔法の「本質」を理解する。
巨大化した冥獣ゴーストを、剣崎達と倒す為に与えられた魔法だと。
「……剣崎さん、俺と……俺達と一緒に戦って下さい。あいつを倒す為に」
「え？　でも俺、あんな巨大な奴、相手にした事ないんだけど……」
「大丈夫です。皆さんも同じサイズに出来ますから！」
「え……ええ！？」
言っている意味を理解しきれず、思わず頓狂な声を上げる剣崎。
だが、魁はそんな事意に介した様子も無く、マージフォンを構えると……

「カードの戦士達よ、巨人となれ！　マジーロ・マジ・ジンガ！」
―マジーロ・マジ・ジンガ―
天から声が降り注ぐ。それと共に、魁の放った魔法は対象……即ち剣崎達４人を、マジマジンと同じ大きさにまで巨大化させた。
一方巨大化させられた方はと言うと、唐突に起こった己の変化に戸惑ったらしい。睦月はおろおろと自分の体を見回し、橘は仮面の下で苦笑。始は思い切り顔を顰め、剣崎は間の抜けた声でええっと声を上げた。
そんな彼らを気に留めず、魁も己の姿をマジマジンであるマジフェニックスに変えると、そのまま他の４人とマジキングに合体した。
「マジキング、Ｎｏ．１！」
「連結完了。トラベリオン！」
いつの間にか、ヒカルも己の持つ魔法特急トラベリオンエクスプレスを変形させ、魔法鉄人トラベリオンとして、マジキングの隣に立っていた。
「成程、魁に与えられたのは他者を巨大化させる魔法だったんだね」
「いや、成程って……」
「諦めろ剣崎。恐らく、この世界は普通にそう言う事が起こりうる場所なんだろう」
「受け入れるの早すぎですよ、相川さん……」
軽く頭痛を堪えるように頭を抑えつつ、睦月はいつもと変わらぬ様子の始に突っ込みを入れるが…諦めたのか、それとも条件反射なのか、視線をゴーストに向け直し、レンゲルラウザーを構える。
とりあえず、目の前にいる敵を倒すのが先……と言う事だろう。
「相手は空中からの攻撃を得意とします」
「なら、俺と睦月で上空から攻撃する。剣崎と始は地上から頼む」
「そうか。……上城、使え」
橘に言われ、始は１つ頷くと、自分のホルダーから１枚のカードを投げ渡す。
『ＦＬＯＡＴ』

始に渡された、「宙を浮く為のカード」を即座に使用し、睦月はゴーストの眼前まで赴くと、思い切りレンゲルラウザーで殴りつけた。

同時に、いつの間にか高機動型のジャックフォームへとフォームチェンジを終えていた橘もまた、その銃弾をゴーストに向けて浴びせる。

殴られ、撃たれたゴーストは、低い悲鳴と共に真っ直ぐにトラベリオンの方へと飛ばされ……

「それじゃあ行くよ！　ディストラクションファイヤー！」

「おまけだ、これも喰らえ」

『ＤＲＯＰ』

『ＦＩＲＥ』

『ＢＡＲＮＩＮＧ　ＳＭＡＳＨ』

トラベリオンの放つ炎に包まれたゴーストの脳天に、橘の二段蹴りが炸裂する。

『ぎぃぃおぉぉぉっ！』

炎の力が二重に加わったせいか、ゴーストはその身を焼かれながら、精一杯の抵抗と言わんばかりに、トラベリオンの放った炎の鎖を引きちぎる。本来ならば、相手をトラベリオンに取り込み、燃やし尽くすのがディストラクションファイヤーの真骨頂なのだが、取り込む前に逃げられてしまう。

だが、引きちぎった時には既に遅く。

『ＣＨＯＰ』

『ＴＯＲＮＡＤＯ』

『ＳＰＩＮＮＩＮＧ　ＷＡＶＥ』

竜巻の力を込めた始の手刀が、ゴーストの両腕を容赦なく切り裂く。

しかし、それでも獣としての執念なのか、ゴーストはその凶悪なまでの攻撃に耐え、低く、恨めしげな唸り声を上げて彼らを見やった。

「剣崎さん！最後の魔法だ！」
「ああ、行くぞ、魁。」
頷くと、剣崎は己の腰のジョーカーラウザーに、キングのカードを読み込ませる。
『ＥＶＯＬＵＴＩＯＮ』
電子音に似た音声と共に、１３体のアンデッドの力を支配下に置いた黄金の戦士、ブレイド・キングフォームへと変化する。
「使え、剣崎！」
「剣崎さん、お願いします！」
「やれ、剣崎！」
３人の仮面ライダーも、言いながら1枚ずつ己のカードを剣崎に向かって投げ渡す。
それを見届けると、魁は……いや、マジキングは静かに頷き……最後の魔法を解き放った。
『マージ・ブレイド・マジ・マジュナ！』
本来ならばマジキングの為の剣、キングカリバーが現れる所が、今回はブレイドのキングラウザーが現れ、その手に握られる。
そして剣崎の方は、渡された……否、託されたカードと、自分のカードをキングラウザーに読み込ませ……
『ＳＰＡＤＥ、ＨＥＡＲＴ、ＣＬＵＢ、ＤＩＡ　ＫＩＮＧ、ＳＰＡＤＥ　ＡＣＥ』
『ＦＯＵＲ　ＣＡＲＤ』
出来上がったコンボは、４人の持つ「キング」の力のフォーカード。その5枚のカードが、エネルギーとなって剣崎の眼前からゴーストまでの直線距離を結び……
「これで終わりだ！」
『マジカルブレイド・キングカード！』
剣崎とマジキングが、同時にそのエネルギーの壁を突き進み、手に持つ剣にその力を纏わせ、「Ｘ」を描くように２つの剣戟がゴーストの体を切り裂いた。

『チェックメイト！』

魔法使いの、その宣言が響き……冥獣ゴーストは、今度こそ本当にその命を失ったのであった。

体に流れる血の色を、アンデッドを示す緑白色から、どす黒い闇色に戻して……

＊

どことも知れぬ、闇。そこから染み出るように、ズヴェズダは疲れきった表情で、その姿を現した。

「只今戻りました……」

「……ズヴェたん……？」

「ズヴェズダ、だよな？」

「ズヴェズダのはずだ」

彼の声を聞くや否や、ムダニステラ、天狼（ティエンラン）、爪牙の順で声がかかる。

その言葉の意味を汲み切れず、ズヴェズダはきょとんとした表情で首を傾げると、不思議そうに声を上げた。

「な、何ですか、その三段活用。僕以外の誰が……」

『闇人格のシュテルン様が』

「……うえぇぇっ!?　あの人、やっぱり出てたんですかぁっ!?　ど、道理で記憶が曖昧な訳です……」

3人の声に、やたら大げさにズヴェズダは驚いた様子を見せる。恐らく、彼が戦いの際に見せた「残忍な性格」の持ち主は、ズヴェズダとは異なる「人格」なのだろう。

その名を、シュテルン、と言うらしいが……今はいつも通り、「人見知りの激しいズヴェズダ」だ。

「では、やはり『愚者の欠片』と戦っていたのは、シュテルンの方か」

「そ、そんな事もしてたんですか!?　僕、本当はあのまま騒ぎに

乗じてウルザードさんを殺そうと思っていただけなのに……！」
「……お前、それも充分卑怯だぞ」
「卑怯上等でありんす！　ズヴェたん、今からでも遅くないので、殺っちまうでありんすよ！！」
「い、嫌ですよぉっ！　もうこれ以上あの世界にいて、またクイーンバンパイアの2人に虐められるのは嫌なんです！　って、ステラまで角にぶら下がらないで下さいぃぃ～」
「ぶら～ん。あ、これ結構楽しいでありんす～」
「痛いんですってばぁぁぁぁっ！」
涙目になりながらも、捻くれた角にぶら下がるステラに、取り合えず抗議してみるが……どうにも押しが弱いせいか、ステラは気にせずきゃっきゃと笑い、降りてくれる様子は無い。
本気で痛いし、殆ど金属で出来ている彼女は非常に重いのだが、それは何となく言ってはいけない気がしたので、結局はうう、と泣くだけになってしまう。
「ところでズヴェズダ、シュテルンは？」
「あ、エステルさん。それが……今は、眠っているみたいです。多分、活動限界時間を過ぎたからでしょう」
「最強なんだけどなぁ、シュテルンの奴。ただ、活動時間が1週間で20分間だけって言うのが玉に瑕って言うか」
「しかし、眠っているのは好都合。しばらくは彼も私の邪魔はしないでしょう」
銀のジュラルミンケースを引き下げ、今度はスーツ姿ではなくマントを羽織ったエステルが、軽い溜息と共にその姿を現す。どうやら、また出かけるらしい。
「また行くのか、エステル」
「ええ、勿論。同業者とお茶でもしようと思いまして。それに、エージェント・アブレラなら、ガイアメモリの有用性を理解して頂けるでしょうし……ね」
爪牙の言葉ににっこりと胡散臭い笑顔でそう答えると……エステ

ルは、ばさりとそのマントを翻して、その姿を消した。
……他人の命を喰らう事のできる、「牙」のメモリを持って……

第２０話（後書き）

朱杖：うーっす皆久し振り！お腹一杯夢一杯な今回のゲストは……

エステル：こんにちは皆様方。私はエステルと申します。本日は作者、辰巳結愛女史のご好意により、抹茶ロールケーキを頂きながらお送り致します。ちなみに用意されているのは、次回のデカレンジャーにちなんで、番茶（バン）、ほうじ茶（ホージー）、煎茶（センちゃん）、茉莉花茶（ジャスミン）、梅昆布茶（ウメコ）、そして鉄観音（テツ）です

朱杖：……ってな訳で、今回は「最凶の守銭奴説」が囁かれている、エステルさんにお越し頂いております

エステル：おや、何故「さん付け」なのでしょう？　他の方は呼び捨てにしているとお伺いしておりますが？

朱杖：いや、だってフツーに怖いだろ。仲間を言葉通り売る人なんて

エステル：そんな…フフ、大丈夫ですよ。あなたに関しては、見世物小屋か不老不死を夢見る馬鹿な老人相手にしか売り飛ばしませんから

朱杖：俺まで売ろうとするなぁぁぁっ！　いいからさっさと自己紹介してくれ！！

エステル：ふぅ、せっかちな方ですね。改めまして……私はエステル。人畜無害な「死の商人」です。ご用命がありましたら、いつなりとも、どのような商品でもお売りいたしますのでお声をおかけ下さい

さて、商人と言うのは表向きの職業。本来の肩書きは「星の壱」……つまり、あの中々に濃い面々を取りまとめ役をやらせて頂いております。護身術は一通りマスターしておりますので、お客様に襲い掛かられても、それなりの対処は出来るつもりですよ

朱杖：……誰かも突っ込んでたが、「死の商人」の時点で、人畜無害から程遠いってば。大体、ヤイバとガイをいなしてる辺りで、「それなりに対処できるつもり」ってアンタ……

エステル：フフ、商人は笑顔と謙虚さが大切ですからね

朱杖：謙虚は過ぎると嫌味に聞こえるから気をつけろー

エステル：そこは適当に誤魔化します
さて、私の名前「エステル」の由来ですが、これはスペイン語で「星」を意味する「Ｅｓｔｒｅｌｌａ」が元です。名前そのものが、「星」を意味する……ステラと似ているのは、言語圏も近いからですよ

朱杖：さてと、次回はまたあんたの出番らしいけど……

エステル：ええ。エージェント・アブレラと言う、尊敬に値する商人がいらっしゃいますからね。推理小説を読みながら、ゆっくりじっくり、どのようにしてデカレンジャーの皆様をいたぶろうか、と模索しようかと

朱杖：黒っ！　そして怖っ！　それじゃあ、次回の組み合わせは？
　何となく最後の方でそれっぽい事言ってはいるけど……

エステル：当然、キバです。デカ＆キバ。これは決して「クライマ

ックス刑事」が元ではなく、次回のメイン敵である「リバーシア星人」の性質に由来します。フフ……復讐に燃えなさい、アリエナイザー。そして、私にお金を落として行きなさい！

朱杖：本気で守銭奴だな、あんた……

エステル：それが私のキャラですから。それでは次回、「Ｅｐｉｓｏｄｅ２１：ヴァイオリニスト・ヴァンパイア」でお会い致しましょう

Ｅｐｉｓｏｄｅ２１：ヴァイオリニスト・ヴァンパイア

Ｓ．Ｐ．Ｄ……「スペシャルポリスデカレンジャー」。
燃えるハートでクールに戦う６人の刑事達。
彼らの任務は、地球に侵入した宇宙の犯罪者達と戦い、人々の安全と平和を守る事である！

「久し振りだな、エステル」
「お久し振りです、エージェント・アブレラ。商売人のあなたが、この星では大分苦戦されているそうですが？」
どこかの工場跡。そこに、天井から蝙蝠の如くぶら下がっている１人のエイリアンがいる。
彼の名は、エージェント・アブレラ。銀河を１つ破壊し、今はこの地球を拠点に兵器や戦力を売る、「死の商人」である。
そんな彼に声をかけたのは、これと言って特徴の無い顔の青年、エステル。ニコニコと胡散臭い笑顔をアブレラに向けている彼もまた、死の商人……即ち、アブレラの同業者である。
そんなエステルの言葉に返すように、アブレラは軽やかな足音を立てて地に降り立ち、ばさりと自分のマントを翻す。
「フン。それもこれも、デカレンジャーが私の商売の邪魔をするからだ。で？　同じ商人である貴様が、私に何の用だ？」
「決まっているでしょう？　商売に来たのです。あなたに、これを買って頂きたく」
「何だ、これは？」
開かれたジュラルミンケースには、人差し指程の長さの「何か」。その中にある、虹色の物を手にとって、アブレラはしげしげと眺める。
中央には、ステンドグラスの意匠で「Ｆ」の文字が書かれており、

何かに挿し込む為の端子が先端に付いている。強いて言うなら、パソコンなどのメモリ端子のように見えるが、その割には大きすぎる気がした。

「それは、ガイアメモリ。今あなたがお持ちなのは、『ファンガイアメモリ』と呼ばれる物ですね」

「ガイアメモリ？　何だ、それは？」

「早い話、そこに記録された力を、己に付加させる物……と言った所でしょうか。攻撃力、防御力、そして何より凶暴性が上がります」

ニィ、と悪役めいた笑顔を浮かべてエステルはそう言うと、マントの懐部分からじゃらり、と何かを取り出す。

……算盤（そろばん）だ。

彼はアブレラに見せ付けるようにしながら、その珠をパチパチと手慣れた様子で弾く。

「そうですね……本来ならばこれ位で売りたいところですが、同業者値引きと言う事で……１０万ボーンでいかがです？」

「高いな。出せて３万だ」

「それではこちらが倒産します。最低でも８万は頂かないと」

「ここに傷がある。３万５千」

「仕方ありませんね……７万で手を打つのは？」

「甘く見るな。どうせこれも、どこからか奪った物なのだろう。粗悪品ではこちらの沽券に関わる。……４万」

「粗悪品など！　奪った物である事は否定しませんが。こちらだって信頼第一でやっているんですよ、アブレラ。……最大譲歩で５万です」

「無理だ。こちらもこれ以上の赤字は御免なのだ。４万１千」

……その後も、およそ３０分に渡り、これ以上値引けない、高くて買えないを繰り返し……結局、４２１８０ボーンと言う、何とも細かい数字で決着がついた。

「ふ……エージェント・アブレラ。やはり最大のライバルはあなたのようですね。この私が、ここまで値切られるとは……！」

「それはこちらの台詞だ、エステル。まさか１０ボーン単位で値切る事になるとは思わなんだ」

とても、死の商人同士とは思えない会話を終え、２人はどっと疲れたように溜息を１つ吐くと……次にそれを売るべき客（カモ）を待つのであった。

＊

一方、宇宙警察地球署……通称デカベース。そこでは、ここ最近起こっている「連続人間ガラス化殺人」に関してのミーティングを行っていた。

「人の亡くなり方から言って、エイリアンの仕業である事は、ほぼ間違いない」

一際高い場所でそう言ったのは、ここの署長であるアヌビス星人、ドギー・クルーガー…通称、ボス。青い毛並みの犬に似た顔をしており、身長は２メートル少しと言った所か。黒い制服が、彼をスマートに見せている。

「アンビリーバボー。人間をガラスのように変質させるエイリアンか」

「おのれ、許すまじ」

黒地に、青い星の入った制服を着ている青年、戸増宝児……通称ホージーの言葉に、同じデザインだが星の色だけは黄色い制服の女性、礼紋茉莉花……通称ジャスミンが強い語調で呟く。

「目撃者の話だと、こうなる直前、２本の『牙みたいな物』が目撃されている……と」

「うーん……牙かぁ……まるで吸血鬼みたいだね」

ピンクの星の女性、胡堂小梅…通称ウメコがそう言うと、隣に座っていた緑の星の青年、江成仙一……通称センちゃんが返す。

確かに、少し吸血鬼をイメージさせるが、失われているのは血液ではなく人の命そのものだ。彼らの言葉も、場の空気も重くなる。

「ナンセンス。命を吸うエイリアンなんて！　血を吸わなければ生きていけないエイリアンは確かに存在しますが、彼らだって、人を殺す程大量には吸いません！」

「何にしろ、天網恢恢、勧善懲悪！　これ以上の被害が出る前に、何とかしないとまずいだろ！」

黒ではなく白い制服に紺の星の制服の青年、姶良鉄幹……通称テツが静かな怒りを秘めた声で言うのに対し、黒に赤い星の青年、赤座伴番……通称バンの方は、感情剥き出しでそう怒鳴る。

人の命が奪われる事……それは、彼ら刑事（デカ）として、最も悲しむべき事であり、同時に忌むべき事でもあった。

犯人がどこの誰なのかはわからないが、とにかくこんな事を平然とやれてしまうような奴だ。凶悪な存在である事には違いない。

そして、そんな存在を野放しになど出来ない……そう思い、バンがその拳を机に叩きつけたその瞬間。

『皆！　例のガラス化事件が、ポイント３７４付近で起こっているの！　現場に急行して！』

別の部屋にいたこの署のメカニック、白鳥スワンの焦った声に、６人の刑事達はほぼ同時に立ち上がり……

『ロジャー！』

了解した旨を告げると、彼女の教えてくれたポイントへと急行するのであった。

到着した時、既にそこには幾人もの「ガラス化した人間の亡骸」と、顔にステンドグラスの模様のような物を浮かべた男、そしてその男と対峙する様に、金色の人の顔ほどの大きさの蝙蝠を従えた青年と、白い円盤型の何かを従えた青年が立っていた。

ステンドグラスの模様を浮かべた方の背には、２本の牙の様な物が浮いている。

どうやら、そちらが犯人らしい。

そう理解し、慌てて残りの2人を保護しようと駆け寄ろうとした、まさにその瞬間。

円盤を従えている方の青年が、静かにその口を開いた。

「何故、人間を殺す？　何度と無く、待てと言っているだろう！？」

え……？

顔見知りなのだろうか、青年はまるで、相手の事情を知っているかの様な口調で相手に声をかけた。言葉としては、まるで説得しているようにも聞こえるが……相手はそんな事など気にしていないかのように、フンと鼻で笑うと、怒鳴るような口調で言葉を返す。

「人間の命を吸って何が悪い！　それに、ここは異世界だ！　王の命令に従う義務から解放された土地のはずだ！！」

そう叫んだ瞬間、男の姿が変わった。

青っぽい体色の、馬に似た生き物。今まで出会ってきたどのエイリアンとも合致しないが、どこか地球と交流の少ない惑星出身なのだろうか。

体の細胞は、まるでステンドグラスのモザイク画のようにも見え、高貴さすら感じられた。ただし、大量殺人犯である事を忘れていればの話だが。

その姿を見て、青年は心底がっかりしたように1つ溜息を吐くと……やおら、左手につけていた黒い手袋を外す。

その仕草は、どこかジャスミンがエスパー能力を使う時に似ている気がした。

「……そうか。それなら……」

「え……」

「王の判決を言い渡す。死だ」

手袋を外した左手を見せると、相手は慄いた様にたじろぐ。そして、その直後に下された宣言は、ある種、彼らがアリエナイザーに対して行う「ジャッジメント」に似ていた。

「兄さん……」

「渡、これは王である僕の仕事だ。……サガーク！」

『Ｈｅｎ－ｓｈｉｎ』
蝙蝠を従えている青年……渡と言うらしい……にそう言うと、彼の兄と思しき青年が円盤を呼ぶ。
その声に応えるように、円盤は青年の腰に巻きつき、「変身」と、確かにそう宣言した。
「おいちょっと待てよ……！」
バンが止める間も無く、青年の姿が変わった。
銀色の、どこか「王」を連想させるその姿。
手に持つ武器は縦笛だろうか、そこからは赤い鞭のようなエネルギーが伸びている。
「まさか……まさかお前は……！？」
震える声で言いながら、その馬に似た「何者か」は相手の顔を見つめるが……すぐに、吹っ切ったのだろう。グオオ、と一声吠えると、一直線にその銀の戦士に向かって走る。
だが、銀の戦士はそれを軽くかわすと、手元の鞭を軽く振るい、相手の体を打つ。
「ぐあっ！？」
「人間を襲い、幾人も殺した罪。お前は一族の掟を破った」
『Ｗａｋｅ　ｕｐ』
淡々と銀の戦士はそう言うと、今度はその鞭で相手を刺し貫き……その瞬間、夜が来た。
少なくとも、その場にいたバン達はそう思うくらいの闇が、辺りを覆い、その宙には何かの紋章らしき模様が浮かび上がる。
「や、やめろ……やめてくれぇぇっ！」
「ダメだ」
紋様に飛び込んだ銀の戦士に、背負うように宙へ吊り上げられたその「馬」が、悲鳴にも似た声を上げる。しかし戦士は冷たく一言だけ返すと……その鞭を指先で軽くなぞった。
刹那。「馬」は断末魔の悲鳴を上げ、呆気なくその場に散ってしまう。

色とりどりの、ガラスの欠片となって。
あまりの出来事に、呆然と見ていたバン達だったが、はっと我に帰り詰め寄るように変身を解いた青年の前に立つ。
いくら相手が大量殺人犯だからと言って、「審判」も無しに相手を殺すのは、法に反している。
特に、アリエナイザーに対しては惑星間の問題にもなりかねない。
「おい、お前！」
「……何だろう？」
「デリートの許可は下りていなかった。何故殺した！？」
詰問するようなホージーに、銀の戦士だった青年は真っ直に彼らを見つめ、不思議そうな表情を浮かべながら彼なりの答えを声に出す。
「これが僕達一族の掟だったからだ」
「掟……？　それに、一族？」
今度は不思議そうに、センちゃんが首を傾げると、青年も極力分りやすい説明を心がけているのか、こくりと１つ頷き……
「人間に害をなしたファンガイアは、王の判断によって裁かれる。それが、掟だ」
「なら、その王サマを連れて来なきゃ駄目じゃない！　勝手な判断で殺しちゃまずいでしょう！？」
「その……兄さんなんです」
ウメコの言葉におずおずと返したのは、金の蝙蝠を従える青年の方だった。
彼は恐々と言った風に彼らの顔を見ながら、更に言葉を紡ぎだす。
「今の、ファンガイアの王は」
『……はぁ！？』
訳も分らないまま……６人は素っ頓狂な声を上げた。
信じられないと言いたげな視線を送り、彼らはまじまじと２人の青年を見やる。
ファンガイア、と言う惑星は聞いた事が無いが、仮に彼がその一

族の王だとしたら……こっちのオドオドした青年は、王弟と言う事になる。

その割には、着ているものはカジュアルだし、それにお供もいない。

……あれだけ強ければ、確かにお供は必要ないのかも知れないが。

「おい、渡。こいつら、全っ然信用出来てないみたいだぞ？」

「そんな事言ったってキバット……兄さんが『キング』なのは事実だし」

「蝙蝠が……喋った？」

「……ナンセンス……」

「コラ！　そこの白い制服！　ナンセンスとは何だ！　ナンセンスとは！！　これでも俺サマだって、由緒正しいキバット族の一員なんだからな！！」

呆然と呟いたテツの周囲を飛び回りながら、金色の蝙蝠がその翼でペシペシと叩いて心外そうにそう怒鳴る。

一体、この生き物はなんなのだろう。

それに、この2人の青年は？ファンガイアとは？

混乱する頭を必死に整理した彼らが出した答えは……

「とりあえず、デカベースまでご同行願いましょ」

「デカベース……？」

「何なんだ、君達は？」

不思議そうに言う彼らに、バンがえっへんと胸を張り……

「俺達は、宇宙警察地球署の刑事。お巡りさんだ！」

「……はぁ？」

「……はぁ」

よく分らない、と言う表情で呟いた2人を、半ば強引にデカベースへと連行したのであった。

ちなみにその間、金色の蝙蝠が何故かずっとジャスミンに「噛ませろ」とせがみ、その度に「不埒者！」と叩き落とされた事を、ここに追記しておこう。

Ｅｐｉｓｏｄｅ２１：ヴァイオリニスト・ヴァンパイア（後書き）

玄金：……何、今日はいきなり２話更新！？

白刀：体調が優れないのだから、さっさと帰れ、辰巳結愛

玄金：全くだよね……あ、今回の頂き物は、ティエト・コーティオン様より、バニラクリーム入りワッフル。ありがとうございます
僕はちなみに、ミルクティーだけど……風虎ちゃんは？やっぱりフレーバーティーの定番、レモンティー？それともアップルティーかな？

白刀：コーヒー。それもブラックだ

玄金：何故に！？

白刀：ワッフルは基本、甘いだろう。そこに紅茶では、甘みで味覚が麻痺してしまう。舌先に残る甘みを洗い流し、感覚を取り戻す意味も含めて、私はコーヒーだ

玄金：……成程ね
それじゃあ今回のお話行ってみよう！

白刀：あっさり倒しすぎだ、登太牙。お陰でファンガイアは単なる噛ませで終わったでは無いか。ある意味、この世界のアンノウンなのだぞ？
まあ、宇宙最高裁判所の判決が下るまで待っていたなら、被害は増えるし、その前にデカ連中が死ぬが

玄金：……確かに
でもさ、僕としてはやっぱり冒頭の商人同士の熾烈な戦いを突っ込みたいんだけど。何で算盤弾いて値引き交渉してるの、あの人達

白刀：商人の性だろう。と言うか、商人＝算盤と言う、作者の脳内の等式をどうにかしてやれ。世の中の商人の方々に失礼だ

玄金：まあね……っていつの間にかワッフルなくなってるし！？

白刀：玄金武士、貴様、案外と食べるのが遅いな

玄金：風虎ちゃん、こういうのに興味無さそうなのに……
まあ、とにかく、次回また～

白刀：ご馳走様でした

第２２話：フェルマータ＝宇宙警察のカデンツァ

ヘーイ、皆知ってるかー？　「カデンツァ」とは、オーケストラの伴奏無しに演奏する、独奏楽器の即興音楽の事だ。

元々は、本当に即興で音楽を奏でていたそうだが、最近じゃあ楽譜に書き残された様々なカデンツァの中から選んで、演奏するのが一般的なんだそうだ。

まぁ、「自由に演奏する」って意味では、自分で作った即興曲でも、楽譜の中から適当に選んだ曲でも、好きなよーに弾けば良いって事だな！

フリーダム！！

「……いきなり何なの、キバット」

鳥籠の中で声高に叫んだ金色の蝙蝠……キバットバット三世に、紅渡は軽く眉を顰めてそう言葉を返した。

彼が鳥籠に入れられている理由は……あまりにもしつこく、黄色い星の制服を着た女性……ジャスミンと呼ばれていた……に対して、噛ませろとせがんだ為だ。

どうやら、彼女の首筋がキバットの好みにフィットしたらしい。

彼曰く、「モディリアーニの姉ちゃんの次に、噛み易そうな首だ！」との事。

……渡には、いまひとつ分らないところだが。

「『いきなり何なの』じゃねぇっ！　何で俺がこんな鳥籠に閉じ込められてるんだ！？　それなりに偉いんだぞ！？」

「偉い奴ならそんな風に、喧喧囂囂（けんけんごうごう）、侃侃諤諤（かんかんがくがく）騒がないってーの！」

「バン、『喧喧囂囂』は『大勢が一斉に喋る事』で、『侃侃諤諤』は『遠慮なく盛んに議論する事』だよ」

「センちゃん細かいよ……。『喧喧諤諤（けんけんがくがく）』って言わなかっただけ、マシだろ」

「造語だもんね～それ」
キバットの言葉に返したバンと言うらしい青年に、センちゃんと呼ばれている青年が、何かの雑誌を読みながらツッコミを入れる。
ここに来る前に「刑事だ」と言っていたが……その前に言っていた言葉が気にかかる。
確か、「宇宙警察地球署」に属している……とか言っていたか。
もしもそれを言葉通りに受け止めるとしたら、彼らは「宇宙の平和を守る警察官」と言う事になる。
その言葉を更に深読みするならば、この地球には異星人がいて、彼らは惑星間の犯罪を取り締まっている事になる。
うーん、と考え込む渡を尻目に、鳥籠の中ではひたすらキバットが騒ぎ立てていた。
「とにかくだ！　こんな所に閉じ込めやがって！　納得行かない！　俺は自由を主張する！！」
「公務執行妨害で逮捕中だ、大人しくしていろ」
「確かに、運転中に噛み付こうとするのは、充分に公務執行妨害に当たるだろうな」
「今回はキバットが悪いと思うよ。事故でも起きたらどうするの」
「渡と太牙まで俺の敵か！？　お前らグルか！？」
鳥籠に入れられているのが、よほど不服らしい。キバットは狭いその中をバッサバッサと飛び回りながら、周囲の面々にひたすら文句を垂れ流している。
もっとも、その「周囲の面々」は苦笑を浮かべるだけで、全く相手にしないのだが。
しかし、どうしたものか。
自分達はただ、紅邸にあるヴァイオリン……ブラッディ・ローズに導かれ、人間を襲うファンガイアに対して、新たに布いた「掟」通りに処罰しただけなのに。
その事が、目の前にいる彼らの「法」に合わなかったらしい。友好的とは言えない表情で、彼らは渡と彼の兄……登太牙を見ていた。

「とにかく、もうすぐボスが来ますから、大人しく座っていて下さい」

白い制服の青年……確かテツと呼ばれていた……が、そう言った瞬間。入り口から、青い毛並みの犬の顔をした存在が、その姿を現した。

見た目は、ウルフェン族に近いかもしれない。だが、やはり「狼」と言うよりは「犬」だ。背は高く、背筋もピンと伸びており、堂々とした雰囲気を醸し出していた。

優しげな印象の顔つきではあるが、その瞳の奥には己の「正義」への自信のようなものを感じ取る事ができた。

「待たせたな、皆」

鷹揚な態度でその「犬」が言うと、ここの署員らしい6人は、ピッと背筋を伸ばし、右腕を胸の前に持ってくる様なポーズを取った。どうやら、彼らなりの敬礼らしい。

そして、「犬」の視線は渡と太牙の2人で止まり、彼らに向かって真っ直ぐに近付いてきた。

「強引につれて来てしまった形ですまない。俺は宇宙警察地球署署長、アヌビス星人、ドギー＝クルーガーだ」

「登太牙です」

「紅渡です……」

丁寧な口調につられたのか、太牙と渡も、思わず立ち上がって一礼をする。

アヌビス星人、と言った所を見ると、やはり彼は異星人なのだろう。自分が思うよりも、案外と異星人と言う物は多いのかも知れない。

「早速だが、あなた達の話を聞かせて欲しい。実は、気になる事もある」

「気になる事、ですか？」

「ああ。ウメコ、戦闘記録の32秒目辺りを映してくれ」

「ロジャー。32秒目と言うと……この辺ね」

ポニーテールの女性…ウメコが、黒っぽい「何か」……多分警察手帳の様な物を机の凹みに挿し込んで何やら操作をすると、丁度太牙とホースファンガイアとの会話の最初の方が、前方のパネルに映し出された。

『人間の命を吸って何が悪い！　それに、ここは異世界だ！　王の命令に従う義務から解放された土地のはずだ！！』

「……この台詞だ」

「この台詞が、何か？」

ドギーの言葉に、ホージーと呼ばれていた冷静そうな男性が問う。

一方で、渡と太牙は、ドギーの言わんとしている事の意味を理解した。

成程、確かに「気になる事」だろう。

……「ここは異世界だ」などと言われれば。

「兄さん、これって……」

「ああ。どうやら僕達は、この世界にとって『異邦人（エイリアン）』らしい」

「『この世界』って……そう言えばさっきのアリエナイザーも、『異世界』なんて言葉を使っていたけど？」

2人の声を聞きとめたらしいセンちゃんが、ひょうきんそうな表情のまま2人に問いかけた。

こういう場合、なんと答えるべきなのだろうか。太牙はかつて「異世界」と呼べる場所に向かった事があるし、渡もそれを見送った事があるから、「異世界と言う概念」は分る。

しかし、それがこの世界の、この面々にも通用するのだろうか。異星人は普通に存在していても、異世界人となると話は別かもしれない……

思いつつ、それでも黙っている訳に行かないと思ったのか、太牙は真っ直ぐにこの場にいる刑事達の目を見つめ、口を開いた。

「その言葉の通りだ。僕達は、こことは異なる世界から来た」

「……ナンセンス。そんな事、信じられる訳無いじゃないですか」

「そうそう。言い訳にしたって突飛過ぎよ」

言い訳では無いのだが。
心の中でのみ苦笑しつつ、太牙はどう説明しようかと悩む。以前の自分だって、いきなりそんな事を言われたら「突飛な言い訳」として扱った事だろう。実際に向かった事があるからこそ、信じようと言う気になるだけで……
『それが、そうとも言えないみたいなの』
「スワン、何か分ったのか？」
唐突に別のモニターに映った、ドギー曰くスワンと言うらしい女性が、どこで聞いていたのかは分らないが、会話に割り込んでくる。
軽くウェーブのかかった長い髪に、白衣とフロントホックのゴーグル。どうやらここのメカニックらしい。その彼女の手には、先程太牙が倒したファンガイアの亡骸と思しき青い欠片があった。
『この『亡骸』の組成を調べてみたんだけれど、どの惑星の住人にも一致しないの。それに、他の科捜研仲間にも聞いてみたけど、『人をガラスのように変えられるエイリアン』は聞いた事無いって』
「つまり、『分らない』って事が分ったって事……？」
ウメコの問いに、スワンは画面の向こうでこくりと頷く。
どうやらこの世界には、ファンガイアは存在しないらしい。そう思い、何か口に出そうと思った瞬間。
渡の隣にいたジャスミンが、着けていた手袋を外し……
「ちょっと失礼」
そう言って、渡の手に触れた。
「え……ええっ！？」
「ジャスミンはエスパーだ。触れた相手の記憶が読めるんだよ」
驚く渡に、バンが告げる。
便利そうだが、ひょっとすると知りたくない事まで知ってしまうかもしれない。
世界が……この世が綺麗でない事は、渡だって充分に知っている。
空気も、人の心も、家の外に溢れる全てが汚れている。
かつてはそう思い、この世の全てから自分を守ろうとしていた事

もあった身だ。きっと自分の何倍、何十倍もそう思った事だろう。
それでも、こうやって他人に触れられる彼女は、とても強いのだろうな、と渡が思った瞬間。彼女はその手を離し、軽く笑った。
「心配してくれてありがと。『この世アレルギー』君」
……どうやら、過去を読み取れるというのは本当らしい。彼女の言葉に、こちらも苦笑を返すしかなかった。
「どうも、本当みたい。『キバって、行くぜ！』」
「あーっ！　それは俺の台詞！！　パクるな、姉ちゃん！」
「なら、噛み付きは禁止よ、ピカピカ蝙蝠君」
「キバットバット三世！」
案外気が合うのか、なかなか絶妙なやり取りに、思わずくすりと笑いが漏れる。
「さっきの青馬君は、『ファンガイア』って種類の存在で、人の命……ライフエナジーとやらを吸う存在なのだそうな」
「ああ。それが、僕達ファンガイアの食事だからだ」
ジャスミンの言葉を継ぐように太牙が改めて説明を開始する。
自分達の世界には、人間の命のエネルギー……ライフエナジーを食らって生きる存在がいる事、その中の一種が、ファンガイアである事。
そして太牙は現在、そのファンガイアを統べる「王」……「キング」の称号を持つ者であり、彼の号令の元、人間との共存の為にライフエナジーに代わる新しいエネルギーを開発しており、最近ようやくその目処が立ってきた事。
……そして、それでも人間を襲うファンガイアに対しては、太牙や渡、そして「ルーク」と呼ばれる存在が、その程度に応じた罰を与えている事など。
「成程、だからさっき、ジャッジメントせずにあの馬を攻撃した訳か……」
渋い顔で言ったホージーに、太牙と渡は同時に頷く。
納得してもらえるとは思ってはいないが、これは自分達なりのけ

じめなのだと、そう言った上で。
「それは……納得は出来ないけど、理解はした。でも、そもそも何で違う世界の住人って奴が、この世界に来れたんだ？」
「それは……僕達にも分りません」
バンの言葉に首を横に振りながら、渡は困ったように言葉を返す。
実際、よく分らない。
「異なる世界」と言う以上、そう簡単に行き来出来るとは思えない。銀色のオーロラを通るか、「時の列車」と呼ばれる物に乗るか、そのどちらかしか方法が無い、と以前聞いた事があった。
今回の自分達は前者の方法で来てしまったのだろうが……問題は先程のファンガイアだ。
それがどうやってこの世界にやってきたのかは分らない。何かの別の…自分達すら知らない、大きな力が働いている。そんな気がした。
「とにかく、一族の事は僕達が、僕達自身で決着をつける。それが僕達の誇りだ」
「何言ってんだよ！　郷に入っては郷に従え！　お前達の掟ってのが厳しいのは分ったけど、だからって俺達が手を拱いて見てる訳にも行かないだろ！？」
「バンの言う通りだ。俺達デカが、目の前で起きている犯罪を見逃すのは、俺達のプライドが許さない」
「だよな。さっすが相棒！　分ってるじゃん」
「相棒って言うな」
バンの言葉に同調するホージー。口先では「相棒と言うな」と言ってはいるが、その表情はまんざらでも無さそうに見えた。
太牙達には太牙達なりのプライドがあるように、目の前にいる刑事達にも、彼らなりのプライドがあるのだろう。そうはわかっていても、やはり自分達の起こした事は自分達で決着をつける。
それが、キングとしての太牙の役目であり、彼を支えると決めた渡の思いでもあるのだが……
困ったように渡と太牙が顔を見合わせた、その瞬間。

『宇宙警察地球署の皆様、お初にお目にかかります』
どこからとも無く、音声が響く。そう認識したと同時に、「普通に見れば」好青年の姿が映し出された。
「普通に見れば」と評したのは、その顔が狂気に歪んでいる事と、彼の後ろに映り込んでいた、縛られた無数の人達の姿のせいだ。
『僕ぁ、インキュバス＝ヘルズ。リバーシア星人『ヘルズ兄弟』の末っ子さ。ちなみにサキュバスは僕の双子の姉』
「ヘルズ兄弟って、3人じゃなかったの!?」
『僕ぁ、滅多に表舞台に立たなかったからねぇ。知らなくて当然かなぁ？』
ウメコの言葉に、画面の向こうの青年……インキュバスの顔がにやぁ、と歪む。その瞬間、彼の背後から、何やら牙の様な物が現れ……後ろで縛られている人の1人の首筋に、ストンと突き立った。
そして…突き立てられた人物は、徐々にその体の…否、魂の色を抜かれ、ガラスのように透明になってその場に砕け散る。それを見た他の「人質」と思しき人達は、声にならない悲鳴を上げた。
「今のは……！」
「吸命牙!?　だが、彼はこの世界の住人のはずだろう!?」
吸命牙。それはファンガイアがヒトからライフエナジーを吸う為に用いる、所謂「吸血鬼の牙」だ。
渡に続き、太牙も驚愕の声を上げる。それが聞こえているのか、相手はその綺麗な顔を醜く歪めると……
『うふふ……うふふふ。勢い余って殺しちゃった。でも……良いねぇ、このファンガイアの力。気に入ったよ、凄く』
「どういう事だよ、それ！」
『教えてあげな～い。ここにいる奴らを殺されたくなかったら、ポイント４７０に来てよ。殺してあげるから。ちなみに、３０分おきに、１人ずつ殺すからね』
「なっ!?」
『ああ、そうだ。それからそこにいる2人のキバも連れて来てくれ

ると嬉しいなぁ。じゃないと、こいつら殺しちゃうよ？　うふふ…
…あははは、あはははははっ！』
それだけ言うと、インキュバスの映ったモニターはブツンと音を立てて消えた。
耳障りな哄笑と、重苦しい空気を残して。
「何なんだよ、今の……！？」
「ファンガイアの力を持った、アリエナイザー……そう考えるのが妥当だろうね」
苛立ったようなバンの言葉に、センちゃんが静かに答えた。
信じ難い事だが、そう考えるのが最も妥当な所だろう。太牙もまた、同じ事を考え……同時に、疑問にも思った。
……何故、先程のインキュバスと名乗った男が、自分を……自分と渡を、「キバ」と表したのかを。
もしも先程の変身を見ていたのなら、相手は自分を「キバ」では無く「サガ」と呼んだはずだ。それに、渡は変身すらしていなかった。こちらが「2人のキバ」である事など、相手が知るはずも無い。
……自分達を知る何者かが、彼に教えない限り。
「どうやら、相手は僕達も相手にする気らしい。連れて行ってくれないか？」
「ナンセンス！　相手は凶悪なアリエナイザーです。連れて行く訳にはいきません！！」
「でも、僕達が行かないと……もっとたくさんの人が亡くなってしまいます」
怒鳴るように断ったテツを真っ直ぐに見つめながら、渡は真剣な表情でそう言葉を返す。
相手は、自分達も連れて来いと言ったのだ。それを無視すれば、人の命が奏でる音楽が、また1つ消されてしまう。それは渡にとっては、決して許されない事であった。
彼の父親が、命を賭けて守り通したいと願ったものだから。
「どうしても行くって言うのか」

「はい」
「相手が、ファンガイアって奴らと同じ力を使うからか？」
「違います。僕は……いえ、僕も、人の命を守りたい。守りたい理由があるからです」
バンの問いに答え……そして、しばらくの沈黙が降りる。
だが、やがてバンは諦めたようにふいとそっぽを向くと……
「好きにしろ。ファンガイアの力を相手にするって点じゃ、お前らの方がプロだしな」
そう言って、軽く渡の背を叩いたのであった……

第２２話：フェルマータ＝宇宙警察のカデンツァ（後書き）

玄金：は～い、更新お疲れ様ー

朱杖：……中途半端っ！

玄金：うっさいよ炎雀。ちなみに本日の甘味は長崎カステラです。お送り下さいました海人様、ありがとうございます

朱杖：……しかし最近、本当に甘味の贈呈増えたよなー。お中元？　あ、ヤベ、俺らお中元返ししてなくね？

玄金：（ずず～）

朱杖：テメェ今日は今日とて何茶ぁ啜ってんだよ！　しかもそれアレか！？　黄茶の代表格、君山銀針（くんざんぎんしん）か！？

玄金：うん。さっぱりした中にも、素敵な香りが漂っていて、和むんだよね～。カステラってザラメが結構甘いじゃない。さっぱり系のお茶が合うんだよ
あ、でもこのお茶、初めて飲む人には「薄い」って感じるかも。それに、基本的に黄茶って１００グラム数千円はくだらないし

朱杖：やっぱり高っ！　５グラムから販売してる茶なんて、そいつくらいのもんじゃね！？
って言うかお前、後書きの司会だろうが！！　さっさと回せ！！

玄金：はーい。えーっと……リバーシア星人のオリジナル敵、登場回だった訳だけど……大分イっちゃってるね～

朱杖：ひとえに、こいつが「ファンガイアメモリ」を購入、使用しているせいだな。ライフエナジー吸って何をしようとしてるのか、結構気になるトコだけど……その辺はやっぱ次回か？

玄金：そう聞いてるよ。何でも、購入の過程を書いて、その後バトルって流れらしいし
今までと違って、全然仲良くなった雰囲気無いけどね

朱杖：むしろアブレラとエステルの方が仲良しって言う、なんとも痛い状況だもんな

玄金：うん。あ、炎雀、カステラの紙ついたまま食べないようにね

朱杖：するかぁぁぁっ！
って言うか、何突っ込もうか忘れたからって、そっちにネタを振るんじゃねぇよ！

玄金：炎雀だって忘れてるくせに

朱杖：……あー、茶が美味ー（遠い目）

玄金：と言う訳で、今日はこの辺で
あんまり結愛ちゃんせかすと、それでなくても質の悪い文章と内容が、更に質が悪くなるから、せかすような真似はしないであげてね？

朱杖：ストレートに、「ナマモノは勘弁して下さい」って言っとけや……

Ｅｐｉｓｏｄｅ２３：ナイトメア・ナイト

深夜、と呼んで差し支えない時間。
「彼」は虚ろな瞳で、エージェント・アブレラの前に現れた。
青紫色の服装に、右目の下には牙を連想させる青い模様が入っている。
えていれば、端正な顔立ちの青年だったのだろうが、今はその面影も無く、痩せこけ、生きた屍のように覇気が無い。
本当に生きているのだろうかと疑いたくもなるのだが、瞳の奥に潜む憎悪の色を見る限り、一応は生きているらしい。
「エージェント・アブレラ。僕に、奴らを……宇宙警察の連中を葬る術をくれ」
彼の名は、インキュバス＝ヘルズ。表立っては知られていないが、ヘルズ兄弟の真実の末弟である。
表舞台には立たず、裏で兄達や姉に悪意ある計画を提案する「頭脳派」だ。いや、頭脳派「だった」。
だが、彼が尽くしてきた兄姉達はこの星の宇宙警察の連中に倒され、自分だけが残ってしまった。それは、「ヘルズ兄弟」は「３人」だと思われていたためだ。
宇宙警察の連中は、「ヘルズ３兄弟を倒した」と安心し、自分の存在に気付かなかった。
それは幸運なのか不幸なのかは分らない。少なくとも、兄や姉のいない世界など、彼には何の意味の無い物だった。
しばらくは、生きていながらも死んでいるようなものだった。
何故自分は生きているのか。そればかりを考え、悩んだ。
強くて頼りになった長兄、頭は弱いが力のあった次兄、そして美しくも残酷だった双子の姉。
思い出すだけで、何の力も持たぬ自分を嘆き、そしていっそ自分も死ねば……と考えた。だが、それすらも出来ず、彼は今まで生き

てきた。
自分が生きる意味。このつまらない世界で、生かされている理由。
それを考え抜いて出た答えが……復讐の二文字。
兄と姉を殺した存在を葬る為に、自分は生かされているのだと思う事にしたのだ。
しかし、長兄の様な絶対的な力も、次兄のような剛力も、姉のような技も無い。彼の持つ物は、残虐な思考回路だけだった。
だから……アブレラの元を訪れたのだ。自分の持たぬ「力」を、補う為に。
「復讐のための道具か？」
「そうだ。あいつらを殺し、兄弟の……特に、サキュバス姉さんの無念を晴らしたい」
双子であったが故、なのだろう。インキュバスにとって、サキュバスは他の兄2人よりも思い入れの深い存在だった。
力を持たない彼を2人の兄は嘲ったが、サキュバスだけは彼の持つ「残虐な思考回路」を認めてくれた。
――あんたの代わりに、あたしが暴力を振るう。だからあんたは、お兄ちゃんよりも残酷なその頭で、何をしたいか言えば良いの。あたしが叶えてあげるから――
そう言ってくれた彼女が、何よりも誇らしかった。愛していたと言っても、おそらく過言ではない。いや……現在進行形で愛している。
「おやおや。ただ殺す……それだけで良いんですか？」
嘲るようなその声は、アブレラではない。
彼の後ろで、何かの本を読んでいる、1人の男性だった。推理小説だろうか。表紙には、「Ａｎｄ　Ｔｈｅｎ　Ｔｈｅｒｅ　Ｗｈｅｒｅ　Ｎｏｎｅ」と書かれている。
本から顔をあげる訳でもなく、男は口元に笑みを浮かべていた。
「……何だ、君は？」
「いえ、アブレラの同業者です。お気になさらず」

こちらが睨んでいる事に気付いていないらしい。「アブレラの同業者」とやらは特に気にした風でもなく、視線を本に落としたまま答える。

「商売の邪魔をするなら、出て行って欲しい所だな、エステル」

「邪魔だなどと。私はただ、彼の持つ愛と言うものは、その程度なのかと思っただけですよ」

「……何ぃ？」

エステルと呼ばれた男の言葉に、インキュバス自信も信じられないくらいの低い声が出る。

その声に反応する部分があったのか、相手はようやく本から顔をあげると、インキュバスの顔を見てニヤリと笑った。

どこと無く、その笑い方は……自分が「悪巧み」を思いついた時の顔と同じ様に思えて、インキュバスは思わずびくりと身構える。

自分は、あんな風に歪んだ笑みを浮かべられるのかと、改めて思い知らされたような気がして。

「蘇って欲しいとは、思わないのですか？」

「……何だと？」

「ああ、失礼。それが出来る、たった１つの方法を、私は先程アブレラに売ってしまったんでしたね。申し訳ない。失言でした、忘れて下さい」

芝居がかった仕草で一礼をするエステルを見やりながら、インキュバスは今言われた事を反芻する。

……蘇って欲しい。それはずっとずっと思っていた事だ。出来るのならばとっくにやっている。

それが……できる？　本当に？

「よ……寄越せ！　それを、僕に！！」

縋るような思いで、インキュバスはアブレラに詰め寄る。彼のマントを掴み、思い切り引き寄せながら。

しかしアブレラは冷たく彼の手を払うと、フンと鼻で笑い……

「売ってやっても良いが……値段は２０万ボーンだ。払えるか？」

「払う。皆が……姉さんが蘇ると言うのなら、いくらだって払ってやる！」

間髪入れずにそう答えた瞬間、アブレラはニィと笑い…そして、懐から1本のメモリの様な物を取り出した。

本体の色は虹色。真ん中に「F」の字が書かれたシールが張られている。

「これは……何だ？」

「ガイアメモリ。エステルから仕入れたばかりの『方法』だ」

こんな小さい物が、本当に「方法」なのだろうか。

不審に思いながらも、インキュバスは言い値でそれを買い取り…使ってみて、理解した。

最愛の姉を蘇らせる方法を。そして……宇宙警察の人間に、最も屈辱的な死を与える方法も。

＊

「ああ……来たね、デカレンジャーと2人のキバ」

夜を連想させるくらいの暗闇の中、待ち侘びていたかのようにインキュバスが口を開く。

そんな彼の足元には、既に幾人もの人間が、命を吸われ、砕け散っていた。

「遅かったから、結構殺しちゃった」

「テメエ……！」

「何て事を……！」

クスクスと笑いながら言ったインキュバスに、バンと渡の声が重なる。

それぞれに、亡くなった人の多さと、その命を奪った相手に対する怒りのような物がこみ上げているのだろう。

直情型のバンはギリ、と歯を食いしばってインキュバスを睨みつけ、渡の方は静かに、だが怒りの篭った視線を相手に投げかけてい

た。

「怒った？　怒ったよねぇ？　僕だって怒ってるんだ。兄さんと姉さんをデリートしたお前達にね」

楽しげに言いながら、インキュバスはゆっくりと、狂気に彩られた目で彼らを見回し言葉を紡ぐ。

その手に、細長い、虹色をした何か……ＵＳＢメモリのような物を持って。

「それで、考えてみた。お前達に対する復讐の方法を。ただ殺すのは面白くない。最も屈辱的な死を与えなければ、僕の気が済まない。そして出た答えは……お前達の死に際に教えてあげるよ」

そう言うと、彼は自分の右手をかざした。

そこにあるのは、小さい、黒っぽい模様。どこと無くコネクタのようにも見えるが……

「何だ！？」

不審そうに、太牙が呟いた瞬間。インキュバスは軽くそれを叩く。

その瞬間。

『ＦＡＮＧＡＩＡ』

その電子音が聞こえたと同時に、インキュバスは哄笑を上げながら、掲げていた手に「メモリのような物」を突き立てる。

刹那、その「何か」が、ズブズブとインキュバスの体内へと沈み…相手の姿が、変わった。

顔に虹色の模様が浮かび上がったかと思うと、その次の瞬間には揚羽蝶を連想させる、青紫色のファンガイアのような姿へと変わった。

だが、恐らくは違う。どこがとははっきり言えないが。

両手に彼の姉……サキュバスが持っていたのと同じ短刀が握られており、吸命牙は常に出っ放し。

「うふ、うふふ。キバの事も、これで理解できたんだ。どうやらこの力は、君達の事を嫌っているようだよ、半端者の王と紛い物の王をね！」

「その物言い、それにその格好は……ビショップか！？」
「ビショップ……うん、そんな名前みたいだね。この力の持ち主だった奴は！！」
言うと同時に、インキュバスの吸命牙が、太牙にむかって襲い掛かる。
だが、それは飛んできたキバットとサガークによって弾かれ……
「どんな力を手に入れようと、俺達の手でお前の野望を壊してやるぜ！　チェンジスタンバイ！」
バンの声に応えるように、バン達５人は己の変身ツールであるＳＰライセンスを、テツは腕に着けたブレスロットルを構え。
「あなたが何者なのかは分らない。だけど、人の命を奪うのは……許せない！　キバット！」
「おっしゃあ！　キバって、行くぜ！！」
渡の言葉を待ってましたと言わんばかりに、キバットは彼の手の中に納まり、サガークは太牙の腰に巻きついた。
『エマージェンシー！　デカレンジャー！』
「エマージェンシー！　デカブレイク！」
『変身！』
「ガブッ！」
『Ｈｅｎ－ｓｈｉｎ』
８人が「変身」したのは本当に同時。
６人の刑事はそれぞれのパーソナルカラーのスーツを纏い、渡はキバットを腰に現れたベルトのような「止まり木」に止まらせる事で赤い吸血鬼…キバへとその姿を変え、太牙はサガークにジャコーダーを挿す事で白銀の鎧を纏い、サガへと変身した。
「１つ！　非道な悪事を、憎み！」
「２つ！　不思議な事件を、追って！」
「３つ！　未来の科学で、捜査！」
「４つ！　良からぬ宇宙の、悪を！」
「５つ！　一気にスピード、退治！」

「S．P．D！　デカレッド！」
「デカブルー！」
「デカグリーン！」
「デカイエロー！」
「デカピンク！」
『特捜戦隊！　デカレンジャー！』
嘘のような青空の下、名乗りをあげた5人の刑事を讃えるかのように、その場の地面が祝砲を上げる。
「無法な悪を迎え討ち、恐怖の闇をぶち破る！　夜明けの刑事！　デカブレイク！」
真白き刑事と化したテツは、エリートの証したる金バッジを輝かせ、5人とはまた少し異なる名乗りを上げた。
「何！？　名乗りがあるのか！？だったら渡、俺達も格好良い名乗りを……」
「いいよキバット、僕達にそう言うのは向かないんだから」
羨むようなキバットの言葉に軽く返すと、渡はすぐさま相手へ向かって距離を詰めた。
そのすぐ後ろには、太牙がジャコーダーを剣状にして走っている。
「アーナロイド、バーツロイド、そしてイーガロイド！！」
近寄ろうとした刹那、インキュバスが叫ぶとどこからとも無く無数の「兵士」と思しき者達が現れる。恐らくはアンドロイドの類だろう。動きがどこと無くだがぎこちない。
『みー！』
『みー、みー！！』
何とも言い難い声を上げ、銀の顔のアンドロイドと水色の顔のバツ印を連想させる兵士が、質より量と言った風に渡と太牙を囲む。
一方で、銅色の兵士は、デカレンジャーに向かって剣を振るっている。
『倒す』
「イガイガ君は相変わらず、渋いお声だ事で」

「すっごいハイテンションで、英語とか使ったら面白いのに」
「そんな事言ってる場合か。来るぞ！」
ジャスミン、ウメコの緊張感の無い言葉に返しながら、ホージーは相手の剣をかわし、その剣に狙いを定めて銃弾を放つ。
ほぼ１００％の命中率を誇るホージーの射撃によって、相手の剣の中央部分に穴が開くが……相手は気にせず、それでもなお斬撃を繰り出してきた。
感情の無いアンドロイドだからこそ出来る事だろう。
その様子を高みで見つめながら、インキュバスは軽く笑い……一言、低く呟いた。
「お前達の命で……姉さんを蘇らせる。お前達のライフエナジーが、悪事に使われるんだ。これ程の屈辱は無いだろう？」
と……

＊

「ああ、『悪夢の夜（ナイトメア・ナイト）』が始まりましたか」
パタン、と「Ｔｈｅ　Ｓｉｌｅｎｃｅ　ｏｆ　ｔｈｅ　Ｌａｍｂｓ」と書かれた本を閉じ、エステルは感慨深げにそう漏らす。その様子を、アブレラはあまり面白く無さそうに見つめていた。
「あのメモリの、どこに他人を蘇らせる力があると言うのだ？」
「……ありませんよ、そんな物」
「何だと？」
「知識としてはあるでしょうがね。実際には無理でしょう」
次の本、と言わんばかりに、今度は「Ｄｏｕｂｌｅ，Ｄｏｕｂｌｅ」と書かれた本に目を落とし、彼は楽しそうな声を上げた。
「ならば、何故あんな事を言った？」
「死者を蘇らせる方法と言うのは、あなたに売ったもう１つ……つまり、『あの情報』の方ですよ。勘違いをしたのはあなたです、アブレラ」

そして、彼もね。そう心の中で呟きながら、エステルはそのまま本の世界へと没頭していくのであった。

Ｅｐｉｓｏｄｅ２３：ナイトメア・ナイト（後書き）

玄金：どうも～。今日はシュークリームを頂いております。
龍牙様、ありがとうございます！！

青器：紅茶は「Ｈｅｒ　Ｍａｊｅｓｔｙ’ｓ　Ｂｌｅｎｄ」で頂いておりますね
洋菓子には紅茶が合うもの。残念なのは、今が３時では無いことかしら。シュークリームと言う生菓子には、渋みの少ないこのブレンドが合うのよね……

玄金：ちょっ……「女王陛下のブレンド」！？　一体本当にどこからそんな茶葉持ってきてるの、龍水ちゃん！？

青器：エステルから購入。結構品質良いのよ、あの人の売ってる茶葉

玄金：そんな物まで売ってるの！？　何、あの人「死の商人」じゃなかったの！？

青器：はいはい。良いから本編に行きなさい。時間が無いわ

玄金：ラジャー了解いたしましたり
えーっと、ネタが尽きたから悪役視点を多めに入れました……って事で良いのかな、今回

青器：いきなり元も子もないわね。事実だけれど
次回の最終話で、辰巳が「終わらない！！」と泣きながら執筆するのが目に浮ぶわ。デカマスターも出ていないし

玄金：……もういっそ帰ろうよ、結愛ちゃん……
しかもエステルさん、公約通り推理小説読んでるし！　「そして誰もいなくなった」、「羊たちの沈黙」、「ダブル・ダブル」の三冊、しかも原書

青器：辰巳には未来永劫縁の無い本ね。原書なら特に

玄金：そだね。それじゃ、時間もまずいのでとりあえずこの辺で！

青器：ああ、美味しかった。甘味は女性にとって癒しになる事が多いわね、やはり

玄金：……僕らやっぱり、いつか太るんじゃなかろうか……

青器：女性にそれは禁句よ、玄金。殺されても知らなくてよ？

第２４話：アレグロ♭メガロポリスは日本晴れ

へーイ、皆知ってるかー？

「アレグロ」とは、音楽用語の１つで、現代では、「速いテンポで」を意味しているが、元々は「陽気に」とか「楽しげに」と言う意味を持った言葉だ。

今の状態は、あまり陽気じゃぁ無いが、「速いテンポで」って言うのには当てはまるかもしれないな。

と言う訳で、次回も皆で楽しげに……「ＫＡＭＥＮ　ＲＩＤＥ！！」

「……言って良いか、そこの蝙蝠。」

「ん？　何だ、そこのトゲアンドロイド」

「言って良いんだな？　独り言をほざいている妄想狂に見える」

「ンな！？　ちょっとお前、失礼だぞ！」

イーガロイドと呼ばれていたアンドロイドのうちの１体に言われ、ある意味物凄く「アレグロ」なキバットが怒鳴る。

しかし、それを間近で聞いている渡としては……非常に不本意ではあるが、イーガロイドの言葉に同意していた。

何でわざわざ次回予告風なのかとか、何でいきなり「アレグロ」の解説なのかとか、更に言うなら、そもそも「皆」とは誰の事を指すのかとか。

気を抜けない戦いの最中なので、流石に突っ込もうと言う気は起きないが。

そんな中、いつの間に自分の後ろに立っていたのだろうか。赤い刑事……バンが、二丁拳銃を操りながら、並居るアンドロイドを撃ち抜いていた。

「畜生……数が多すぎてインキュバスまで近付けねぇ！　このままじゃジリ貧だぞ！？」

確かに、相手の数が多い。一体一体は決して強くないが、体力を削られていると言う部分だけで見るならば、確かに正しい作戦だろう。

数多の雑魚……時々それなりの実力者……をぶつけ、こちらを疲弊させる。そして最後に自分で止めをさす……

復讐に身を焦がし、それでいてなおここまで冷静な計画を立てられるのは、ある意味自分の実力を把握しているからなのだろう。随分と周到な相手だ、と太牙は感心してしまう。

だが……同時に、解せない。

疲弊した相手を殺す事が目的であるならば、何もファンガイアの力を手に入れて、何の関係も無い人間のライフエナジーを吸収する必要は無かったはずだ。

どうやってファンガイアの……それも、かつて「ビショップ」と言う地位にいた、神経質な男の力を手に入れたのかは知らないが、ライフエナジーを吸収して、何をしようとしているというのか。

不審に思い、太牙はちらりとインキュバスに目をやる。

ファンガイアに似た姿になっているため、表情は良く分らないが…少なくとも、この状況を楽しんでいるらしい。肩が小刻みに震えていた。

「あいつ……」

「笑ってる……？」

太牙の近くまで寄ってきたホージーとセンちゃんも、相手の様子に気付いたらしい。訝しげに呟いて、何とかインキュバスまでの道を開けようと相手を撃ち抜いた……その瞬間。

インキュバスが、その指を鳴らした。

そう気付くと同時に、棘のアンドロイド……イーガロイドを除くアンドロイドが、一斉にデカレンジャーと渡、そして太牙の体にしがみついた。

「ちょっと！　どこ触ってるのよ！？」

「痴漢、許すまじ！」

纏わりつかれ、不快感を覚えたらしい女性2人がそう怒鳴る物の、アンドロイドたる彼らに、そんな言葉は通用しないらしい。
ただひたすら、彼らにしがみつき……
その瞬間、一番密着されていたキバットが……気付いた。
ドロイド達の体内から聞こえてくる、カチコチと言う音に。
「カチッコチッ……って！　こいつら体内に爆弾仕掛けてやがるぅぅっ！」
「何だって!?」
「ナンセンス!まさか、最初から自爆させるつもりで……！」
悲鳴にも似たキバットの言葉に、バンとテツが慌てたように言った、瞬間。
「どか～ん」
インキュバスの、非情な声が聞こえた。
その認識と同時に、自分の体にしがみついていたドロイド達は一斉に爆発、その勢いに巻き込まれ、面々はそれぞれに深いダメージを負った。
幸い、変身解除はされていないし、一応五体満足だ。意識もはっきりしているし重大なダメージ、と言う訳でもない。
ただ、衝撃のせいなのか、体が痺れて動かないだけで。
「何……なんだよ、これ……っ！」
「う……つぅ……」
「あははっ。殺さない程度の爆発……気に入ってくれた?」
楽しげに笑いながらインキュバスはそう言うと、1番近い場所にいたバンの腹を勢い良く踏みつけ、そのままグリグリと爪先で踏み躙る。
「ぐあっ……！」
「あははははっ。実に良い眺めだぁ……デカレンジャーと2人のキバが地に平伏してる。まるで僕を崇めるように」
バンを踏みつける事に満足したのか、インキュバスはその脇腹を蹴り、渡の側へと飛ばす。同時に、呻くような悲鳴がバンの口から

漏れるが、それはインキュバスにとって些細な事らしい。今度は太牙へ近付くと、彼の左手を踏み躙った。
「やっぱり、この力の持ち主の感情なのかなぁ……僕ぁ、宇宙警察の連中も憎いけど、お前の事も憎いんだ。この出来損ないがっ！」
ガツガツと、まるで太牙の左手にある「キングの紋章」を憎んでいるかのように、インキュバスはひたすら彼の左手を踏みつけ、憎悪の篭った瞳で見下ろす。
姿のせいだろうか、まるでそれは、本当にビショップが彼を憎み、そして復讐しているかのように、太牙には思えた。
「……さてと。それじゃあ僕の望みの、最終段階に入ろうか」
「お前の……」
「望み……？」
楽しげなインキュバスの言葉に、バンと渡が不審げに声を漏らす。
「教えてあげるよ。何をしようとしているのかを」
姿を、ファンガイアの物から、元のインキュバスに戻し、彼は狂気に歪んだ笑みを彼らに向けると、朗々と言い放つ。
「人間のライフエナジーを奪って、僕ぁ兄弟を……サキュバス姉さんを復活させるのさ」
「何だと！？」
「そんな事が出来るの！？」
ホージーとウメコの驚愕の声に、インキュバスはその顔を更に奇妙に歪めると、高らかに笑いながら両手を広げた。
まるで、何かに陶酔しているように。
「ファンガイアの秘術の中にはね、亡骸にライフエナジーを与えて、復活させる事ができるってものがあるんだ。そこの、2人のキバなら知っているよねぇ？」
「……ビショップが先代キングにやった事と……同じ……！？」
「そう。もっとも、自我を伴う完全な復活には、通常の5倍のライフエナジーがいるんだけど……お前達の命で、ちょうど数が合う。合うように、僕が仕向けた」

「まさか……！」

「そう、そのまさかだ。お前達にその事実を教え、絶望した所を殺す。それが僕の、お前達に対する復讐さ」

きゃははは、と甲高い笑い声を上げ、インキュバスは悔しげに自分を見上げる面々に向かって、小ばかにしたような表情を向けた。

その顔に浮ぶのは、憎悪と侮蔑。そして、怨敵とも言えるデカレンジャーをこの手で葬れると言う愉悦。

歪んだ姉への、狂気じみた愛を感じさせるには、充分だった。

「悔しいだろう？　『正義』を掲げるお前達の命が、『邪悪』そのものである姉さんの復活に使われるなんてさぁ！　そもそも、『正義は勝つ』？　違うね、『勝った者が正義』なのさ！」

そう言ったインキュバスが、吸命牙を出現させると……最初の狙いを決めたらしい。

真っ直ぐにバンを見据え、その牙を突き立てようとした、まさにその瞬間。

ギィン、と金属がぶつかり合うような音がした。そして、その次にバンが知覚したのは、自分の脇に立つ鈍色のデカの姿。

「百鬼夜行をぶった切る！　地獄の番犬！　デカマスター！」

「ボス……！」

「待たせたな、皆！　無事か！？」

「大丈夫です！　でも、どうしてここに？」

「……彼を案内してきた」

倒れる面々に、心底心配そうに声をかけながら、彼はゆっくりと彼らを助け起こす。

その視線の先には、金色の、小さなドラゴンが飛び回っていた。

そのドラゴンを、渡と太牙は知っている。

渡の纏う鎧、「黄金のキバ」と呼ばれる力を、真に発揮させる存在……魔皇竜、タツロットだ。

その姿を見つけると同時に、バンの脇に彼が宣言通り「ぶった切った」と思しき、インキュバスの吸命牙の残骸が落ちている事に気

付く。
「渡さーん、キバットさーん！　ご無事で何よりです～！！」
「タツロット……！」
「タッちゃん、遅い！！」
「ナマステ～！！　すみません、何だか僕だけインドで迷子になっちゃって。でも、ここからは、テンションフォルテッシモで行きますよ～！」
フォルテッシモと言うより、ある意味こちらこそ「アレグロ」だ。
そう思いながらも、渡は痺れの残る体を無理矢理起こし、インキュバスを見つめた。
吸命牙を斬り落とされ、もはや他者のライフエナジーを奪う事の出来なくなった彼は、目の前の現実を受け入れられないのかガシガシと頭を掻き毟りながらその場に佇んでいた。
「嘘だ……嘘だ嘘だ嘘だ！　こんなの、こんな、あいつらにとって都合の良い事が起こるなんて……！　ありえない！　ありえないありえない！！」
「へっへ～ん。言っただろ、『正義は勝つ』って！」
「黙れ！　何で、どうして、どこで狂った！？」
彼は、知らない。最初からその計画には、無理があったという事を。
それ故なのか、彼はギロリと残っていたイーガロイドを睨みつけると、大声で怒鳴る。
「何であいつを止めなかったんだよ！？　何のためにお前らを買ったと思っているんだよ！？」
「ちっ。八つ当たりしてんじゃねぇよ、うぜぇガキだな。面倒臭ぇ」
「な……んだと？」
しかし……その怒声に返ってきたのは、アンドロイドとは思えない、感情の篭った一言だった。
何を言われたのか理解しきれず、呆然とするインキュバス。しかし、そんな彼に興味など無くなったのか、イーガロイドはフンと軽

く鼻で笑うと、彼の方は見向きもせず……真っ直ぐに、立ち上がろうとするデカ達目掛けて剣を振るう。

だが、その剣もデカマスターの持つDソード・ベガに弾かれ、そのまま返す刀でバッサリとその身を断ち切られた。

「ああ……あああああああっ！」

完全に形勢逆転。

その事に気付いたのか、インキュバスは慄くような、嘆くような、そんな声で悲鳴を上げた。

「リバーシア星人インキュバス。７９の惑星を壊滅させた罪並びに、地球における３８人の虐殺の罪で……ジャッジメント！」

バンの宣告と同時に、彼のＳＰライセンスを通じて宇宙最高裁判所の判決が下りる。

デリート許可なら「×」、デリート不許可なら「〇」といった具合に。そして、今回彼に下りた判決は……赤い、無情な「×」印。

「デリート許可！」

「同時に、こちらも王の判決を言い渡す。ビショップの力を使い、数多の人間を死に追いやったその罪は……やはり、死だ」

太牙の冷酷な宣言も重なり……インキュバスはその目を大きく見開いた。

死ぬ。

殺される。

今まで他人に向けてきた悪意が、今になって自分に返って来たと言う事だろうか。

……冗談ではない。愛する家族を取り戻す。それの何が悪いのか。

他人を巻き込む事が罪？　意思を持つ者なら、どのような形であれ他人を巻き込むのではないのか。それが、自分の場合……たまたま悪意に満ちたものだっただけだ。

「善悪は確かに絶対的な物かもしれないけれど……正義は見る者によって変わるんだよ！！」

泣きそうな声で怒鳴ると同時に、インキュバスはパチンと指を鳴

らす。そしてその音に応えて現れたのは……彼の兄が使った怪重機ゴッドパウンダー。

「僕には力はない。無いなら……奪えば良いんだぁぁぁ！」

まるで彼の中の悪意が暴走したかのように、彼は狂気に満ちた表情でゴッドパウンダーを乗り回し、周囲の物全てを破壊していく。

「壊れろ、消えろ、死に絶えろ！　お兄ちゃんや姉さんの墓標になるんだ、光栄に思え！！」

「誰が思うか！　スワンさん！」

「タツロット！」

「行きますよ～、変っ身！」

バンがスワンに彼らのマシンであるデカマシンの出動要請をすると同時に、渡もまた、やってきた「仲間」に要請する。己の纏う鎧の、真の力を発揮するために。

それに応えるように、タツロットは渡の鎧に巻き付いている鎖…カテナを解き放ち、彼の真の姿を開放した。

「黄金のキバ」……「皇帝」の名を冠する鎧、「エンペラーフォーム」へと。

「渡……頼んだ」

「……うん」

真直ぐに太牙を見つめ返して頷くと、渡はゴッドパウンダーに向かって駆け出し……連続でタツロットのスロットルを引き……その姿をエンペラーバットと呼ばれる姿へと変え宙を舞う。

「命名。キンキラコウモリ君」

「ジャスミン、今は命名してる場合じゃないと思うんだけど……」

ジャスミンに冷静に突っ込みを入れながら、センちゃんはデカマシンの到着の遅さに疑問を抱き……ふと視線をデカベースのある方向へと向けた瞬間、その理由を理解した。即ち……今回の要請に応じたのはデカマシンではなく、デカベースそのものであった事を。

「……何でデカベースクローラーが……」

「スワンには、あらかじめ俺が要請しておいた。今回は何が起こる

か分からなかったからな。デカベースロボで対応するようにと」
『そう言う事。ドゥギー、皆、それに太牙君も乗って！』
『ロジャー！』
「分かった」
ＳＰライセンス越しに聞こえるスワンの声に答え、残りの面々はすぐにデカベースに乗り込むと、退避命令発令の後、大型ロボのデカベースロボへと変形した。
「……凄いな。建物自体が変形するのか……」
感心したように太牙が呟くと同時に、エンペラーバットと化した渡も同意するように一声吠える。
あまりにも大型で小回りの利きそうに無いデカベースロボに対し、渡の方は割と小柄で逆に小回りが利く。渡の動きに翻弄され、その一方でデカベースロボの超重量のパンチを食らい…かつてはデカレンジャーロボを追い詰めた事さえあるゴッドパウンダーは、ふらついていた。
「くそ……くそ、くそ、くそぉっ！」
コックピットの中で、インキュバスは悔しげに操縦桿を握る。しかしそれも、もはや虚しい抵抗にしかならず……
『パトエネルギー全開！』
『Ｗａｋｅ　ｕｐ』
デカ達の言葉に乗せるように、太牙もまた、サガークにジャコーダーを挿し込みそのエネルギーをデカベースロボに送る。
『スネーキング・ヴォルカニック・バスター！』
デカベースロボが、その胸部に溜めたエネルギーを放つのと、その肩に止まった渡が、口から金色の光線……「ブラッディ・ストライク」と呼ばれるそれを放ったのは同時。
太牙の持つキングの紋章と、渡の持つキバの紋章が重なり合い、そこに更にスペシャルポリスのエンブレムが合わさり……その光線は、眩い光となって、ゴッドパウンダーを完全に貫いた。
「姉さん……やっぱり僕……駄目だったよ……」

爆発に飲まれ、自らの体から抜け落ちた「ファンガイアメモリ」を見つめながら、どこか嬉しそうな表情でインキュバスはその身を散らせる。

「お兄ちゃん……姉さん……あの世で、また一緒に……」

そう呟きながら……インキュバスは、完全にこの世から消え去った。

「これにて一件コンプリート！　メガロポリスは日本晴れの満月！」

バンの呑気な声が響き……そして、その月を見上げるかのように、渡は首をもたげて大きく一声鳴いたのであった……

＊

「惜しかったですねぇ……」

パタン、と手元の本を閉じるエステル。そのタイトルは「Ａｉｓｓ　Ｂｅｆｏｒｅ　Ｄｙｉｎｇ」と書かれている。

他にも「Ｆａｒｅｗｅｌｌ，Ｍｙ　Ｌｏｖｅｌｙ」、「銭形平次捕物控」など、そこそこ渋いラインナップの本が山積みにされていた。

「しかしまぁ、私としてはそれなりに稼げましたので良しとします。ではアブレラ、御機嫌よう」

にこりと笑ってその姿を闇に消すエステルを見送り、アブレラは困ったように考え込む。彼から買った「もう１つ」……本当に死者を蘇らせると言う存在の情報の使い道を考えているのだろう。

彼の手には「爆竜戦隊アバレンジャー超全集」という本。

彼の脳内には「トリノイドはふざけた奴が多いですよ」というエステルの言葉。

その２つを持ちながら、彼は次なる商売相手を探すのであった……

＊

「只今戻りました」
「……最低でありんす」
「す、すみません。僕もステラさんに同感です」
「いきなり何です？」
むう、と唇を尖らせるステラと、おろおろとした表情のズヴェズダに対し、エステルは心から何の事か分からないという風な表情で首を傾げた。
「何で最初から、あの可哀想な少年にサウナギンナンの事を教えなかったでありんすか」
「簡単です。実験ですよ。ファンガイアの先代ビショップは、実際にその知識で先代キングを蘇らせました。あのメモリにはその記憶が記録されている」
「上手く使えば……実際に出来たかもしれない」
エステルの言葉を継ぐようにそう言ったのは、何と言うか……顔全体が口という表現がしっくり来る様な異形だった。手には彫刻刀を持ち、一度目に入れば印象に残るはずなのに、全くと言って良い程気配が無い。
「エトワール……お前、いたのかよ」
「口数が少なすぎるのも問題だな。存在感が薄い」
「最初から居た」
天狼と爪牙に言われながらも、特に気にした様子も無く、エトワールと呼ばれたその異形は答える。
最初から、とは一体いつからだろうと思わなくも無いのだが、気付かなかったのはこちらの落ち度だ。
「行くのですか、エトワール？」
「うむ。新作が出来た。命を与えたい。それに……ゼブラロードは食って、メモリを得た。あの時代でアバレる為に」
そう言うと、彼はその場にいる面々に深々と頭を下げ……
「では……明滅の使徒、エトワール。侵略の園へ、行ってくる」
とだけ言い残し、その闇の空間から消え去ったのであった……

第２４話：アレグロ♭メガロポリスは日本晴れ（後書き）

玄金：ど～も～。今日はカテゴリーページ１、不幸と名高いこの玄金武士と！

ズヴェズダ（以降、ズヴェ）：こ、こんにちは。ほ、「星」の中で１番不幸と言われるズヴェズダ、です。あ、あああ、あの、皆さんお初にお目にかかります……

玄金：いや、もう皆本編見てるから、知ってると思うよ？　君の闇人格殿含めて

ズヴェ：あっ、そ、そうですね。すみませんすみません。あなたは邪魔するので、どうか死んで下さい

玄金：さらっと怖い事言わないで、お願いだからさ！　ズヴェズダ君、君、何気に酷いよね。ちなみに、エステルさん差し置いて、鳴海耀狐様から君を名指しで差し入れ入ってま～す。スペインでは１２００年前からあると言われる伝統菓子、「ポルボロン」！！　口の中で溶け切る前に、３回「ポルボロン」と唱えると幸せになれるのだそうな！

ズヴェ：あ、ありがとうございます。お茶は今回、ロシア流にジャムを舐めながら、煮出し式の紅茶で頂いています。あ、あの……こんな僕に、差し入れなんて……優しすぎて、殺したく……

玄金：読者様に向かって何言ってるのー！！　「殺す」ネタはもう良いから、自己紹介お願い

ズヴェ：あ、はい。えっと、その……名前は、ズヴェズダ、と申します。言い難いかもしれませんけれど、よろしくお願いします。一応、「冥獣人ハデス」と言う種として存在している時間が長いのですが、本当は「星の陸」……7人の中では、下から2番目の存在です特異体質なので、色々な所に出入りできまして。その、あの……基本的に、僕に結界は通用しません。それから、存在感がないので、気付かれずに悪事を働けます

玄金：……存在感の無い悪魔って、一体……

ズヴェ：よく言われます。あ、その、名前の由来ですが……僕のズヴェズダは「Ｚｖｅｚｄａ」……ラテン語で「星」を意味する単語、そのままです。ロシア語も、「ズヴェズダ」で「星」を意味するそうですけれど……

玄金：元々、ラテン語ってあの辺の大元になった言語だもんね～。どこかの小説で読んだけど、「欧米の言語を覚えたいなら、まずラテン語から覚えれば、後はラクショー」って聞いたよ

ズヴェ：そ、そうらしいですね。あの、そろそろ次回予告、良いですか？

玄金：あ、うん。お願い。あの感じから行くと、次回は……

ズヴェ：はい。アバレンジャーとアギトです。竜つながりで。ですので、次回は「２５話：アバレろ、その魂！」だそうです。え、エトワールさんが活躍なさってくれると信じてます！

玄金：……口だけ化け物のエトワール君……彼、エヴォリアンだったんだ……

ズヴェ：はい。あ、そ、それから、あの……これはさっき殺してきた辰巳さんからのお願いされた事なんですけど……とりあえず、半分過ぎたので今後のクロス予定を明かしておいてくれと

玄金：何で作者殺してるのー！！

……まあいいや、僕と一緒で明日には復活してるでしょ

えーっとって事は……

言っちゃうよ？

忍風戦隊ハリケンジャー×仮面ライダーディケイド

百獣戦隊ガオレンジャー×仮面ライダー龍騎

未来戦隊タイムレンジャー×仮面ライダー電王

ズヴェ：あ、あと、なんですけれど……ひょっとするとこちらの最後に、

仮面ライダーW×救急戦隊ゴーゴーファイブ

が入るかも……らしいです。

玄金：……そこはあえてつっこまないよ、僕。それじゃあ皆さん、また次回～

ズヴェ：え、えーっと……ＫＡＭＥＮ　ＲＩＤＥ！？

玄金：それは違うからね！？

25話：アバレろ、その魂！

紫蘇町（しそちょう）の街角に、黄土色の作務衣を着た、白髪白髭の「おじいちゃん」と呼べる年齢の男性……杉下竜之介、通称「スケさん」が営む喫茶店、「恐竜や」と言うお店がある。

その名の通り、恐竜好きで、店内は恐竜関連のグッズが多い。

最近では「恐竜カレー」と言うメニューが人気を博しており、雑誌にも紹介される程だ。

一見すると、「恐竜好きにはたまらない、ちょっと変わった喫茶店」なのだが、その実は……異次元からの侵略者、エヴォリアンと呼ばれる存在から、世界を守る戦士、「爆竜戦隊アバレンジャー」の活動拠点なのである。

ちなみに、爆竜とは、「ダイノアース」と呼ばれる異次元で超進化した、恐竜の総称。現在はエヴォリアンと戦うために、この世界……「アナザアース」に来て、アバレンジャーの面々と共に戦っている。

「……平和ですね～」

眼鏡をかけ、髪を某洋菓子メーカーの舌出しマスコットのように結んでいる少女は、「えみポン」こと今中笑里。高校生だが、現在は「恐竜や」にバイト中、アバレンジャーをサポートしている、かけがえの無い存在だ。……多分。

彼女もスケさんも、普通の人よりも「少しだけ」爆竜との意思の疎通をしやすい人間である。

「平和な事は良い事です。今のうちに、皆さんも骨休めしておくべきですよ」

「ま、確かにな」

スケさんの言葉に、軽く頷いたのは、トリケラトプスのプリントされた、青ジャケットの青年……アバレブルーこと三条幸人。ぶっきらぼうで冷たい印象を受けるが、その底には熱情を秘める整体師

だ。意外に子供の押しに弱い、と言うのも、ここに付け加えておこう。

「しかし、静か過ぎるのも気になります」

そう真剣に言ったのは、ブラキオザウルスのプリントされた濃い灰色のジャケットの青年、アバレブラックこと、アスカ。彼はこのアナザアースの住人ではなく、爆竜と同じダイノアースの住人で、「竜人」と呼ばれる存在である。そのため、この恐竜やでは、「大野飛鳥」と言う偽名を用いて働いている。

元からエヴォリアンと戦う戦士であるのだが、ダイノアースの住人であるが故に、アナザアースにやってきた頃は、電話ＢＯＸの上に乗って物見櫓代わりにしたり、「大金を蹴る」の意味を正確に理解できずに「大金」と言うボールを蹴る事だと勘違いしたり……相当な天然ボケである。本人は至って真面目なのだが。

「ただ今～」

「ああ、お帰りなさい、らんるちゃん」

大きな荷物を持って入ってきたのは、プテラノドンのプリントされた黄色いジャケットの女性。アバレイエローこと、樹らんる。

趣味はオタクを自称するくらいのメカ弄り。男勝りで、感情が昂ぶると若干違和感のある博多弁を繰り出す事がある。

「……何だ、その大荷物は？」

「これ？　この間、馴染みの機械屋さんで見つけたんだけど、弄り甲斐がありそうだったから、つい買っちゃった」

幸人の問いに、悪びれも無くらんるがぺろりと舌を出して答える。

ダンボールからは僅かに青い、機械の様な物が覗いているが……そもそも、「機械屋」って何だ、そんな物この世に存在するのか、いや、あるのかもしれないが利益は果たしてあるのだろうか、と幸人の頭をツッコミの嵐が巻き起こる。

……ホクホクと嬉しそうな笑顔のらんるが答えてくれるとは、到底思えないが。

「あれ？　そう言えば凌駕さんは？」

「凌駕君なら、舞ちゃんを迎えに行きましたよ」
アバレッド、伯亜凌駕の姿が無い事に気付いたらんるの問いにスケさんが答える。
ちなみに、「舞ちゃん」と言うのは凌駕の姪に当たる5歳の少女だ。事故で亡くなった兄夫婦に代わり、凌駕が引き取って育てている。
「そう言えば、もうそんな時間か。道理で静かな訳だ」
ちらりと時計を見やり、幸人が小さく呟く。
舞は、この店でもかなりの癒しだ。凌駕の育て方が良いのか、素直で明るい子だし、人見知りもしない。時々、年に似合わず物凄くしっかりしている時があるが…。
舞の事を思い、ほんわかとした空気が流れかけた瞬間。
店内に警告音が響き、彼らにエヴォリアンの襲来を告げた。
「ちっ。久し振りに来たか……！」
幸人が軽く毒吐くと同時に、アバレンジャーの面々は恐竜やの扉を勢いよく開ける。
「うわっ！？」
「あ、申し訳ありません。急いでいたものですから！　あの、お怪我は！？」
扉の外にいた青年と正面衝突しそうになり、思わずアスカはぺこりと頭を下げる。
青年の方は軽く苦笑を浮かべると……
「怪我はありません。でも、扉を開ける時は気を付けた方が良いですよ」
「本当に申し訳ありません。あ、私は急ぐので、これで失礼します」
もう1度ぺこりと頭を下げると、アスカは先に走っていった2人のあとを追うのであった。

＊

少し時間は遡り……ここはエヴォリアンの拠点、ダイノアースにある「侵略の園」。

エヴォリアンとは、邪命神デズモゾーリャを筆頭に、世界を侵略、破壊しようと企む集団である。

デズモゾーリャは自らの体を持たず、魂だけを「巫女」に憑依させて己の意思を伝えている。

その意思を伝える巫女は、「黎明の使徒」リジェ。真っ白な服を着た、見た目12、3歳くらいの少女だ。巫女であるが為に、彼女の地位はこのエヴォリアンの中でもかなり高位にある。

そんな彼女の目の前に、見知らぬ異形が佇んでいた。顔全体が口のようで、目はその大きく開かれた「口」の中でぼんやりと光っている2つの点がそれだろう。右手には彫刻刀を連想させる剣、左手には彼の作品と思しき掌サイズのシマウマの彫刻。

「あなた、誰？」

「……『明滅の使徒』。名はエトワール」

エトワールと名乗ったそいつは、持っていた彫刻をリジェに向かってそっと差し出す。

「この子、可愛い。くれるの？」

「……そのつもりだ」

こくりと頷きながら、彼は満面の笑みを浮かべるリジェに、肯定の言葉を返した。

もらったシマウマの彫刻を気に入ったのか、リジェは嬉しそうにそれを受け取ると、感嘆の声を上げてしげしげとそれを眺める。

愛らしくデフォルメされている物の、割と細かい所まで作りこまれており、今にも尻尾をパタパタと振りそうな印象だ。色はついていないが、細かく彫られたゼブラ模様が一層彼の苦労を感じさせる。

「嬉しい。大事にするね」

「喜んでもらえて、俺も嬉しい」

そんな風にはしゃぐリジェの声で、エトワールの気配に気付いたのだろうか。

某ＴＶ局のロゴマークを連想させるような、キーボードを持った目玉の化物と、騙し絵のような顔…正確に言えば、顔の中心に大きな鼻と両目に見える部分に小さな鼻を持つ絵筆のような杖を持った化物、さらには赤い服を纏った女性が、その姿を現した。

現れた順に、「無限の使徒」ヴォッファ、「創造の使徒」ミケラ、「破壊の使徒」ジャンヌと言う。

「はじめて見かける顔なんだなぁ」

「……普段は、ここにいない」

ミケラの言葉に、エトワールは静かな声で答える。見た目が「大きな口」であるだけに、声も大きいかと思うが、案外とそうでもない。低く、良く通る声ではあるが。

「口の化物の癖に、随分と大人しい奴だな」

「それで？　その滅多にいない貴様が、今更何の用だ？」

ヴォッファとジャンヌの２人に言われ、彼は空いた左手でごそごそと懐を探ると、細長い、真ん中に「Ｌ」と書かれた「何か」を取り出した。

色は黒と白。シマウマのような縞模様ではなく、「Ｌ」を境に端子のような物が付いている方が黒、上部と思しき部分は白。

しかし、その妙な物体からは自分達と同じ何か邪悪な物を感じ取る事ができる。

「……次のトリノイドに、これを使うと良い」

「何だ、これは？」

「『ロードメモリ』」

端的な言葉を返しながら、エトワールはその「ロードメモリ」とやらをミケラに、ぐいぐいと押し付ける。

受け取れと言う事なのだろう。とりあえずミケラはそれを手に取り、しげしげと眺めた。

「しかし、何でトリノイドになんだぁ？」

「……エトワロイドは製作時間がかかる。俺は彫刻家だから。材料調達が、難しい」

――何だか、物凄く理解できるんだなぁ――
――確かに、材料が無ければどうにもならんか――
エトワールの、心の底からの言葉に共感したのか、ミケラとヴォッファは慰めるように彼の肩を叩く。
材料調達……と言うか、トリノイドの材料のネタに困るミケラ。
創作意欲はあっても、曲が浮かんでこないヴォッファ。
芸術家肌の2人にとって、エトワールの持つ拘りは、物凄く理解できるのだ。できる事なら素材から拘り、細かい所まで趣向を凝らしたい。
「閃いた！　今回のトリノイドは……」
唐突に声を上げると、ミケラは宙に、三色の絵の具で1つずつ何かの絵を描いていく。赤で台所、黄色でクチナシ、青でシマウマ。
「シンクと、クチナシと、シマウマ……シンクチナシマウマの完成だ！」
出来上がった絵をぐるぐるとかき混ぜ、邪命体の「生命の実」を与える事で、初めてミケラの絵に命が吹き込まれる。
体はゼブラ模様。両肩にクチナシの花。腹部からは出っ張るように台所にあるシンクがあった。
「それじゃあ、頑張ってね！」
生まれたばかりのトリノイドに、そう声をかけると、リジェはクチナシ部分に軽くキスをし……そして、彼女の持つ力で、シンクチナシマウマをアナザアースへと送ったのであった。

＊

さて、アナザアースに視点を戻そう。
伯亜舞は、いつもより若干遅い自分の叔父をブランコに乗りながら待っていた。
「遅いなぁ、凌ちゃん」
きぃ、とブランコの軋む音を聞きながら、門の方を見た、その瞬

間。
そこに現れたのは、待ち侘びた叔父の姿ではなく、ダイノアースから送られてきたトリノイド、シンクチナシマウマだった。
相手はきょろきょろと周囲を見回すと、すぐに舞の姿を見つけたらしい。馬面のどこから声を出しているのか分らないが、ジャバババ、と奇妙な笑い声を上げて真っ直ぐに舞に向かって駆けて来る。
「きゃぁぁっ！」
恐怖からか、それとも生理的嫌悪からか。とにかく舞はぎゅっとブランコの鎖をつかんだまま、そう大きな悲鳴をあげた。
だが、その刹那。
「させません！」
「失せろ！」
その声と共に舞を救ったのは、2人の青年。
どことなく凌駕と似た雰囲気持つ青年の方は、舞を抱えて相手との距離をとりもう一方の髪の短い、やや怖い印象を抱かせる茶髪の青年は、それを確認するや否や、馬面を拳で思い切り殴り飛ばした。
「ジャバっ!?　いきなり何するの、お兄さん達!?　もぉ、すっごい痛い！」
「……何なんだ、こいつは？」
「この感覚は、アンノウンじゃないみたいですけど……」
「俺は、シンクと、クチナシと、シマウマの力を持ったトリノイド、シンクチナシマウマ！」
殴られた頬をさすりながら、シンクチナシマウマは青年2人に対し、若干涙目でそう名乗る。
……殴られた頬が、随分と痛かったらしい。
「トリノイド……？」
「姿からも名前からも、あんまり『鳥』って感じがしませんけど」
「トリノイド」の名前の由来を勘違いしているのか、青年達は軽く首を傾げている。
ちなみに、トリノイドの「トリ」は「3」の意味であるのであし

からず。
だが、そんな事を考えている場合では無いと思ったのか、きつめの表情の青年はギロリとシンクチナシマウマを睨みつけ、温和そうな方の青年は舞の方を笑顔で振り返り……
「大丈夫？」
「うん。舞、大丈夫」
「そっか。それじゃ、これから見る事は内緒にしてくれる？」
「内緒？」
「俺……いや、俺達、アギトなんだ」
にっこり笑うと、青年は「内緒」と言わんばかりに自分の口元に人差し指を当て、にっこりと笑うと、もう1人の青年同様、相手を真っ直ぐに見据え……
「変身！」
青年の宣言が響くと同時に、彼の……いや、彼らの姿が変わった。温和そうな青年は、黒地に金の竜を連想させる姿へ、きつめの青年の方は深緑でもう1人の青年よりも更に「生物」と言う印象を抱かせる姿へと。
それを見た舞が思ったのは…深緑の方は「アバレモードの凌ちゃん」、黒の方は「普段の凌ちゃん」みたいだ、と言う事だけで、不思議と、怖いとは思わなかった。
……少しだけ、深緑の方は、触ると痛そうだな、と思う程度だ。
「ジャバ！？　アバレンジャーじゃない！？」
「あばれんじゃぁ？　アギトの別名でしょうか？」
「さあな。とにかくやるぞ、津上」
「はい、葦原さん！」
深緑の方の言葉に、黒い方が力強く頷き……そして、同時に2人はシンクチナシマウマの方へ駆け寄ると、黒い方は体を低くして相手の腹部にあるシンク部分を蹴り飛ばし、深緑の方は変身する前にも殴った横面をもう1度殴り飛ばす。
その勢いに押され、シンクチナシマウマはよろりと数歩たたらを

踏んだ後、キッと2人を睨みつけ……
「ぶったね！　2回もぶった！　しかもそっちの黒い方はお腹蹴るし！　もうやだ、帰る！　ジャ～ババ～イ！！」
ブンブンと手を振り、シンクチナシマウマはあっさりとその姿を消してしまう。てっきり反撃される物と思っていただけに、2人は思わず顔を見合わせ……そして、無事を確認するためか、舞の方を振り返ったその瞬間。
「そこまでだ、トリノイド！！」
「へ？」
唐突に上がった声に、黒い方は間の抜けた声を返し、声のした方を見やる。
そこには、既にアバレッドに変身していた凌駕の姿があり、その身には何故だか怒気を孕んでいるように舞には見えた。
ぼんやりとそんな事を思っているうちに……黒い方は、彼をトリノイドだと勘違いしているらしいアバレッドに、思いっきり蹴られたのであった。

25話：アバレろ、その魂！（後書き）

青器：あら、更新されたのね。てっきり前回ズヴェズダに殺されたっきり、帰って来ないかと思ったのに

白刀：そこは玄金武士の言う通りだったな
「明日には復活してるだろうけど」とか言っていた気がするな……
結局、2日かかったが
ところで、今日の茶請けは何だ、青器龍水？

青器：本日は、海人様よりチーズケーキを頂いております

白刀：……確か、かなり以前にもらった物だったな。C．トリコイデスやP．クリソゲノム共の被害には……あっていないようだなチーズが醗酵モノ、という点から、今回は六茶の中で唯一鞠麹菌による醗酵をさせた茶……黒茶の代表格、プーアル茶で頂いている

青器：美容に良いのよ、黒茶。ちなみに今日のプーアル茶は、生茶のビンテージ品。あ、「生茶」が分らない場合は、「プーアル茶」で検索してみて頂戴ね。決して、某パンダの出てくるCMのお茶ではないから
今回も、エステルに無理を頼んで取り寄せてもらったの。ふふ。次は何を頼もうかしら……

白刀：……ここに約1名、あの守銭奴の常連が……

青器：うふふ。あの人、本当にこっちの無茶な要求も呑んでくれるんだもの。どうしても手に入りにくいお茶なんかは、全て彼に手配しているわ。……時々、缶に返り血と思しきものが付いている事が

あるけれど、中身が無事なら外観はどうでも良いわよね

白刀：……ここに玄金武士がいたら、「ちょっとそこは気にして！　お願いだから！」とか言いそうだな

青器：いない人の事を語ってもしょうがないわ。さ、今回の中身に行きましょう

白刀：了解だ。とりあえず、エトワールのリジェに対する態度が気に食わん。悪なら悪らしく、「誰が貴様になどやるか。欲しければ自分で買え」ぐらい言え
それから、シンクチナシマウマだが……結局何の能力も見せずに、ジャバジャバ言うだけ言って退散か

青器：トリノイドは一応、クチナシの花の香りで人間をおびき寄せ、シンクに流す、と言う力があるそうよ。それを表舞台に出すかどうかは、まだ分らないけれど

白刀：それから最後。……正直に言って、アギトが蹴られたシーンは、「ディケイド」の「電王の世界」でモモタロスがクウガに蹴られるシーンのパクリだろう？

青器：オマージュ、と言ってあげなさいな。大体、アギトにしろエクシードギルスにしろ、「トリノイドが出現した場所」に立たれていたら、敵だと勘違いするわ。特にエクシードギルス

白刀：とりあえず、散々な言いようだな……まあ、とにかく次回また会おう

青器：それまでに辰巳がきちんとアギトを勉強しているかしら？

白刀：……それは多分、辰巳結愛が１番思っている事だろうな

第２６話：元気莫大

「そこまでだ、トリノイド！！」
「へ？」
シマウマだか何だか、よく分らないふざけた感じの異形を退けた直後、別方向から怒声が聞こえた。
他にもまだ、トリノイドとか言う物がいるのだろうか？
そう思い、黒い戦士……アギトに変身した津上翔一が、間の抜けた声で声のした方を見た瞬間。彼の視界に入ったのは、赤い全身タイツのようなものを纏った戦士が、こちらに足を向けている所だった。
とび蹴りだ、と気付いた時には既に遅く、翔一の顔面を、その赤い戦士の足が捕らえていた。
「津上！？」
「だ……大丈夫です！」
深緑の戦士、エクシードギルスに変身している葦原涼の心配げな声に、翔一は派手に吹き飛びながらも、割と元気そうに声を返す。恐らく、相手の蹴りが直撃する寸前に、後方へ飛んで蹴りの威力を殺いだのだろう。
そして、蹴った方もそれを認識しているらしい。油断なくこちらを見つめながら、どこからかティラノザウルスの頭のような穂先の槍……と言うかロッドを取り出した。
刹那、彼の後ろから、同じ様なデザインの全身タイツもどきを纏った３人の戦士も駆けつけてくる。スーツの色は青、黄色、黒。
「凌駕、無事か？」
「大丈夫です。それより、気をつけて下さい！　今回のトリノイドは２人組です！」
「いや、あの、俺達は……」
どうやら自分達が、「トリノイド」とやらと勘違いされているら

しいと気付き、誤解を解こうと翔一は声をかけるのだが……あちらの方は、こちらの声など聞いていないらしい。
「しかし、今までのトリノイドとは少し違いますね」
「でも、いかにも悪者っぽい顔してる！　特に緑色の方」
エクシードギルスと化した葦原を指差しながら、黄色い戦士……声や仕草からすると女性らしい……が言い放つ。
……確かに、かつては友人の1人……氷川誠も、葦原の変身した姿を見て普通に重火器取り出して攻撃してきた事があったが……それに近いのだろうか。
確かに、アギトやギルスの姿は、何も知らないで見れば怪物のように見えるかもしれないが……
しかし相手には、翔一の、うーんと言う、困るような唸り声が聞こえていないらしい。こちらが動かないのを好機と取ったのか、それぞれ武器を構えてこちらに向かって攻撃を仕掛けてきた。
黒い戦士のみ自分の前に、そして残りの3人は葦原の方に。恐らく、葦原の方が危険だと判断されてしまったのだろう。
「あ、葦原さん！」
翔一が声をかけるよりも一瞬だけ早く、青い戦士の突撃が、葦原の腹部に炸裂した。
「ぐっ……！」
いつもならその口をあけて吠える彼が、今回は低い声を漏らしただけで終わる。それは恐らく、肺の中の空気を押し出されたがためだろう。
殴られたダメージが大きかったのか、彼はよろりと体勢を崩した……刹那。
「行きますよ！」
赤い戦士が、手に持つロッドで葦原の腹部目掛けて、突きを繰り出す。
……かわせない。
そう判断し、葦原は少しでも衝撃を和らげる為に自分の両手で腹

部をガードした……その瞬間。
「凌ちゃん、ダメ！」
そう言って間に入ったのは、「舞」と名乗っていた少女だった。
彼女は両腕を広げ、まるで葦原を守るかのようにして立っている。
急に飛び出してきた彼女に驚いたのか、赤い戦士は慌てて攻撃の手を止める。
他の戦士達も、彼女の行動に驚いたのか、それぞれぴたりとその動きを止めた。
「舞ちゃん！？」
「何をしてる、そこをどけ」
驚愕の声を上げる赤い戦士と、彼女の身を案じるように怒鳴る葦原の声が重なる。
どうやら、赤い戦士は彼女の事を知っているらしい。同時に、彼女も赤い戦士の正体に心当たりがあるように見えた。
しかし舞はブンブンと首を思い切り横に振ると、真っ直ぐに赤い戦士の顔を見つめ……
「このお兄さん達は、舞の事助けてくれたんだよ。だから、喧嘩しちゃダメ！」
「ほえ？」
「その、トリノイドがか？」
「……あの、俺達『トリノイド』じゃないんですけど……」
青い戦士の呟きに、困ったような声を返しながらも、翔一は誤解を解く溜めにその変身を解除した。
それに倣う様に、葦原もまた、変身を解き４人の戦士を見やる。
見やると言うよりは、睨むに近いかもしれないが。
「人間……だと？」
「嘘……」
信じられないと言わんばかりに、青と黄色の戦士が声を上げる。
だが、黒の戦士の方は、彼らとは対照的に感動したように葦原の手を取り、赤の戦士は思い切り翔一に向かって頭を下げ……

「本っ当ぉぉにごめんなさい！　俺、勘違いしてました！　てっきりトリノイドかと！」
「え、いや、そんな……」
その後、１０数分間に渡り、赤い戦士と翔一の間で、「ごめんなさい」、「いえいえこっちこそ」と言うやり取りが続いたと言う。

ある程度やり取りも終わり、４人……「爆竜戦隊アバレンジャー」を名乗る彼らの本拠地とやらの前に立った翔一と葦原は、それぞれ対照的な表情を浮かべた。
翔一は、物凄く嬉しそうな。そして葦原は、物凄く胡散臭そうな。
何しろ、そこは「恐竜や」と言う暖簾のかかった喫茶店なのだから。
「……喫茶店が本拠地か……？」
「お前の気持ちはわかるが、敵にばれ難くて良いだろ」
葦原の呟きに、青ジャケットの青年……確か「幸人さん」と呼ばれていた……が、ぽんと肩を叩きながら言葉を返す。
――多分、彼も最初は物凄く抵抗があったのだろうな――
そんな風に思いながらも、葦原は半ば諦め半分で彼らについていく。
「ただいまー」
「ただいま、お爺ちゃん」
「おや、皆さん。お帰りなさい。舞ちゃんもおかえり」
能天気な声で言った凌駕と舞に、カウンターの向こうに立っていた、この店の店主と思しき老人が、ねぎらうように声をかけた。
……それにしても、本当にこの店は恐竜好きらしい。カウンターと座敷席には恐竜の影絵、大きなテーブル席は、恐竜……ティラノザウルスの頭部の化石を模したオブジェが飾られている。
そんな中、カウンター席には1人の青年が座っていた。
後姿から判断するに、自分達と同い年くらいだろうか。出されて

いたカレーを食べ終わった所らしく、丁度スプーンをおいて、「ご馳走様でした」と呟いたところだった。
その後姿に、そしてその声に。
翔一と葦原は、妙に覚えがあり……恐る恐る、その「客」の顔を覗き込む。そして……
「あ」
「あ！」
ほぼ同時に、その客の男と翔一の声が重なった。
それもそうだろう。何しろ「客」は翔一の知り合い……「アギトの会」の補欠要員、氷川誠だったのだから。
香川県警の刑事だが、一時……自分達がアンノウンと呼ばれていた怪人達と戦っていた間は、警視庁の開発したパワードスーツである「G3」、その改良強化型の「G3－X」を着て共に戦った親友だ。
全てに決着がついた後、彼は確か香川県警に戻ったと聞いていたのだが……
「氷川さん！　香川に帰ったんじゃなかったんですか？」
「久し振りに警視庁に呼び出されまして。その帰りにここに寄ったんです。」
にこにこっと笑顔を向ける翔一に、氷川も僅かに口の端に笑みを浮かべ、言葉を返した。
呼び出されたので、何事かと思ったのだが……何の事はなく、以前自分が相手にしていたアンノウンに関する資料を纏めるのに駆り出された、と言うだけだった。
同じ様に、長野県警から駆り出された刑事がいたが、彼は自分より更に前のデータ……「未確認生命体」に関する資料を纏めなおすように指示されていたのを覚えている。
それにしても、と氷川は思う。
ここ数年、全く連絡も取っていない、会ってすらいなかった2人と、まさかこのような形で会えるとは。案外、世界は狭いのかも知

れない。
「あの、お知り合いですか？」
黒いジャケットの青年……確かアスカと呼ばれていた……が、興味深そうに彼らの顔を覗き込む。
そう言えば、先程氷川がこの店に入ろうとした時、ぶつかりかけたのはこのアスカだった。その直前に出てきた青と黄色のジャケットの2人も、よく覚えているが……赤いジャケットの青年と、その横に立つ少女ははじめて見る。
ただいま、と言っていたのを考えると、彼らもこの店の店員なのだろうか。
そんな事を思ったその瞬間。
どこからか、女性の声が響いた。
『らんる！　街の様子がおかしいプラ！』
「え？」
らんる、とは確か黄色い服の女性の名だったはず。そう思い、彼女の方を見やると、何故か彼女は腕につけているブレスレットの様な「何か」に顔を向けていた。
更によく見ると、その「何か」には、黄色のプテラノドンの顔を模した飾りがあり、その口が、声にあわせて動いている。
『街の人々が……』
『街の人々が、ミイラになってるテラ！』
続いて、幸人と赤……凌駕のブレスレットの飾りが、危機感一杯の声で喋った。
それと同時に、翔一はピクリと「何か」に反応したのだが……それとほぼ同時に、店内にブザーが鳴り響いて、カウンターが収納され、代わりに天井からスクリーンが下りて来る。
そこに映し出されているのは……確かに、声の言う通り、完全にミイラと化した人間達の姿と…その中央に立つ、シマウマのような異形の姿。
「やっぱり……この感じ、アンノウンです！」

しかし、何故？
そんな考えが翔一の脳裏を過ぎる。
アンノウン……いや、ロード怪人と呼ばれる彼らは、「人間と離れた力を持つ者と、その血族」のみを殺していたはずだ。
それに……これは氷川や葦原の知らない事だが、既にロード怪人は「人間と離れた力を持つ者と、その血族」を殺害してはいけないと言う命令を受けているはずだ。それは、彼が以前確認している。
「どうして……？」
「とにかく、この状況を放っておく訳には行きません！俺は市民の避難誘導をしますから、お2人は……」
「わかっている。連中を倒せば良いんだろ」
氷川の冷静な言葉に、葦原が頷く。
どうやら、穏やかな時間と言うものは……なかなか訪れないらしい……

＊

「メモリ……挿さなかった」
「だって！　『さす』って何か痛そうじゃないの、ジャバジャバ」
侵略の園に逃げ帰ったシンクチナシマウマに対し、エトワールが低く声を漏らす。
今、シンクチナシマウマが帰って来たと知っているのは、ここにいるエトワール以外にはいない。
他の面々は、何故か凍りついたようにその場に固まったまま、動かないでいる。固められた……と言う表現が正しいのだろうか。
いや……むしろ、この場で動いている者が、エトワールとシンクチナシマウマの2人だけ、と言った方が正しいかもしれない。
自分達以外の全て……使徒だけでなく、中にいつも立ち込めている白いスモークの流れも、宙を舞う埃すらも、その場でぴたりと止まっている。

ひょっとして、時間を止められているんじゃないかしら。
シンクチナシマウマは、目の前の「明滅の使徒」に対して恐怖しながらも、それでも心の片隅でそんな暢気な事を考えていた。
それに気付いているのだろうか。エトワールは手に持つ剣をゆっくりと振り上げ……
「もっと痛い目……みるか？」
「それも嫌ぁぁっ！」
淡々と喋るエトワールの声に、「本気」を感じたらしい。シンクチナシマウマはブンブンと首を横に振り、ガタガタと震えながら物陰に隠れる。
しかしそれも無駄な抵抗。大きな口のようなその異形は、隠れようとした先にいつの間にか回り込んでおり、自分の目の前に現れていた。
柱の影、机の下、果ては部屋の外。その全てに逃げようとしても、何故か先回りされている。
「なななな、何でいつも先回ってるの、ジャバジャバ！？」
「……貴様の時間……止めて、食っている」
相変わらず淡々と、しかしとんでもない事をさらりと言われ、シンクチナシマウマはようやく悟る。
目の前の存在は、「使徒」とは全く違う存在で……同時に、とてもでは無いが勝てない存在だと。
「さっさと、挿せ。そして、行け。送るくらいの力は、ある」
「怖い～。この人超怖い～」
「……生憎と、人ではない」
「いや、わかってたけどね。ジャバジャバ」
「じゃば……無糖紅茶？風呂釜掃除の道具？　アリスの魔獣？　それとも当て字で邪馬？」
「いや、どれも違うから」
「……そうか。残念」
怖いと思う反面、なんでこんなボケをかましたのか、今1つ読め

ぬまま……結局、気圧されたシンクチナシマウマは、もう1度アナザアースに向かうのであった。

「……奴の時間は……不味かった。」

ポツリとエトワールはそう呟くと、今度はパチンと指を鳴らし……止めていた時間を動かし始める。

同時に、今までその動きを止められていたリジェをはじめとする4人が、何事もなかったかのように動き出し……それを確認すると、今まで時間を止めていた張本人は、何食わぬ様子で軽く頭を下げ……

「俺も……アナザアースに、行く」

「え？　行っちゃうの！？」

「やるべき事が……ある」

残念そうに言ったリジェの髪を優しく撫でながら、エトワールはもう1度、今度は深く一礼し……懐から、今度は木彫りのウサギと思しき物を取り出し、彼女の手の上にそっと乗せた。

「やる」

「ありがとう」

「……ん」

「それじゃ、エトワール。頑張ってね！」

にっこりと笑い、リジェはエトワールの右手に軽くキスを落とし……そして、巨大口の彫刻家を、侵略の対象となる世界へと送り込んだのであった。

第２６話：元気莫大（後書き）

青器：本日は、海人様より頂いた宇治金時で暑気払いよ。良かった、溶けてはいないみたいね

朱杖：暑気払いって……何か、俺がめっちゃ払われそうな気がするんだけど。「名前からして暑苦しい」とかって

青器：私がそんな事をすると思って？

朱杖：いや、龍水はしないだろうけど……風虎や武士辺りは、平然とやりそうじゃねーかな？　「失せろ」とか「君って名前からして暑苦しいよね～」とか……

青器：それもそうね。……さて、今回の宇治金時だけれど、小豆は大納言小豆、宇治抹茶は本場の物を使用しているわ

朱杖：トリビアって訳じゃねえけど、宇治茶って本茶じゃないじゃん？　てっきり龍水の事だから、「宇治？　邪道ね、あり得ないわ」とか言って全否定に入るかと思ったぜ

青器：現代でこそ高級茶として誉れ高いけれど、南北朝時代では「栂尾産の茶以外は本茶に非ず」と言われていた為、宇治産や醍醐産の緑茶は「非茶」と呼ばれていたの。懐かしいわね、あの頃。足利尊氏が室町に幕府を開いた頃だったかしら

「ずいずいずっころばし」の「茶壷に追われて」も、あれは幕府に献上される宇治茶のお茶壷道中の事を指しているの

朱杖：ヤベェ、龍水に茶の話を振ったら、いつまで経っても終わら

ねぇ……。とにかく今回の話！

青器：……我を忘れる所だったわ。いけないわね、私とした事が読者様のニーズに応えきれなかった感が漂っているわね。特に津上

朱杖：色んな人から、「翔一が『恐竜や』の新メニューを考えたり……」とかって言う意見頂いていたのにな。って言うか、最初は結愛も「魚の口に小指突っ込んで鮮度を見分ける」って奴をやろうとしたらしいんだけど……

青器：挫折した、と？

朱杖：おう。必死で勉強したにもかかわらず、そしてそのシーンを捻り出すのに5時間かかったにもかかわらず、データがぶっ飛んだらしくてな。こまめに保存かけねーからこんな事になるんだよ……

青器：あとは……そうね、アバレキラーは出るのか、とか氷川は出たけどG3－Xはどうする気だ、とか……

朱杖：これはネタバレになるから、微妙らしいんだが……実は、G3－Xのプロテクターの方は、ちょっとだけ描写が入っているらしい。問題は、それを氷川が車無しで着られるかどうかの確認だけだそうだ

青器：と言う事は、また「お勉強」？　どれだけ時間をかければ気が済むのかしら

朱杖：「知らないと言う罪」とはよく言ったもんだぜ。辰巳の場合、「知り過ぎる罠」は無いから置いておいて

青器：そうかも知れないわね。それでは次回、またお会いしましょう

27話：トリノイドはアバレ足りない？

「うー……嫌だなぁ、これ挿すの、結構怖い～」

1人ごちながら、トリノイド・シンクチナシマウマは、掌の中に納まる細長いそれ……「ガイアメモリ」と、エトワールが呼んでいた物を見下ろす。

本能的に、それが持つ力に怯えているのだろう。だが、同時にそれを渡したエトワールと言う存在にも恐れを感じる。あれは、自分達とは全く異なる存在だと、彼は理解していた。

邪命神・デズモゾーリャ。それよりも、もっと恐ろしい存在かもしれない。何しろ、時間を喰う事の出来る存在なのだから。

「うー、そんなにこれを使いたいなら、自分が使えば良いじゃないかぁ」

ブツブツと愚痴をこぼしながら、それでも彼は使わなかった時に来るであろう「お仕置き」に体を震わせ……やがて、意を決したようにそのスイッチを押す。

『Ｌｏｒｄ』

後はもう、勢いだった。音が聞こえたと同時に、シンクチナシマウマはそのメモリを自分の腹部に挿し……その力を、己が身の内に取り込んだ。

最初に感じたのは、己の体に生まれた違和感。基本的には今までと大して変わらないが、背中に退化した羽根のような物が生え、自分の頭上に光の輪が浮かぶ。

「ジャバ？　何なの、この羽根と輪っか!?」

慌てたように己の体を触りつつ、彼は感嘆にも似た声をあげた。流れ込んでくるパワーも、今までとは段違いに大きい。パワーアップしたのだと理解でき、嬉しくなったのだろう。

だが……次の瞬間。彼の頭の中に、自分の物とは異なる考えが怒涛の勢いで流れ込んだ。

――人間は、人間のままで存在しなければいけない――
――ダイノガッツや邪命因子は、人間を人間でなくしてしまう――
――異なる進化の可能性を……潰せ――
「ジャバ！？　え、ちょっ！？　ダメダメっ！　その考えは……」
流れ込んできた考え。
それは……アナザアース人や竜人のみならず、自分達邪命体まで否定する考え。
それは、トリノイドであるシンクチナシマウマにとって「決して思ってはならない事」。それが、メモリを通じて彼の頭を……そして意識を支配すべく、シンクチナシマウマの自我を食い荒らし始める。
「ぎゃ……うわあぁぁぁぁっ！！」
メモリの力と邪命因子が、互いにぶつかり合い、彼の体内で暴れる。
その際に生じる激痛が、彼の口から悲鳴を引き出し……やがて、彼の悲鳴は止んだ。
……その目に、妙な色を宿して……

＊

凌駕達が騒動の真ん中に辿り着いた時、そこで見たのは縞模様のトリノイド……シンクチナシマウマであった。
だが……様子が、どこと無くおかしい。何かに操られているように、暴れている。
「ダイノガッツ、邪命因子……人間を、人間で失くす可能性……」
ブツブツと呟きながらそんな事を言うシンクチナシマウマに、どこか違和感を覚えたのだろう。翔一が軽く首を傾げ……そして、気付いた。その存在から放たれる、アンノウンの気配に。
よく見れば、先に会った時には無かった「退化した羽根」が背中

についている。
「あれは……やはりアンノウンですか！？」
「いえ、あれはトリノイドです。少し、様子がおかしいですが」
氷川の問いに、アスカが返す。彼も、おそらく気付いているのだ。邪命因子の他に別の「何か」が作用しているらしい事を。それは竜人特有のものなのか、それとも戦士としてのものなのか……とにかく、アスカの直感が、これは不味いと告げていた。
今までのように、ダイノガッツだけでどうにかできるものでは無い、と。
それは、相手の足元に転がる人々の亡骸を見ても理解できる。水分だけでなく、ダイノガッツすらも奪われ、からからに渇いてしまった人間の亡骸。
「酷い……」
「こんなに沢山の人を……許せません！」
ポツリと漏れた氷川の言葉に同意するように、凌駕が怒気の混じった声で答える。
その声でようやくこちらを認識したのだろうか。シンクチナシマウマの、暗く澱んだ瞳がゆっくりとこちらを捉えた。
「アバレンジャー……強大なダイノガッツの持ち主。アギトやギルスと同じくらい、危険な存在……」
「何だと？」
低く呟かれた言葉に、軽く眉を顰めた幸人が問い返す。だが、その刹那。相手の目はさらに凶悪な光を宿し、ゆっくりと掌をこちらに向けた。
本能的に、それが不味いと感じたらしい。全員がその掌の直線上から散開、直後に放たれた光から何とか逃れる。
「アギト、ギルス、ダイノガッツ……全部……消す！！」
そう怒鳴るように相手が言った瞬間、今度は思い切りこちらに向かって突進してきた。それを何とかかわすと、凌駕達は相手との距離を取り……そしてきつく相手を睨んだ。

今までも、人を襲うエヴォリアンを許せないと思う事は何度かあった。しかし、今回は特に許せないと思う。

何しろ、人の命が失われてしまっているのだ。それも、かなり沢山の。

凌駕は、姉夫婦を亡くしている。だからなのかは分らないが、人一倍「人の命の重み」を重視している節がある。

「皆……チェンジだ！」

「ああ」

「ＯＫ」

「はいっ！」

凌駕の号令に、幸人、らんる、アスカの順に短く返事を返し、その手に嵌るブレスを構えた。

『爆竜チェンジ！』

４人の声が重なり、それぞれのパートナーである爆竜の鳴き声が響く。

同時にブレスの中に収納されている、アタック・バンディレット・レジスタンススーツ……通称「アバレスーツ」が彼らの体を覆い、エヴォリアンと戦う戦士……「爆竜戦隊アバレンジャー」へと変えた。

「元気莫大！　アバレッド！」

基本色は赤。パートナーは超ドリル進化した爆竜ティラノサウルス。

「本気爆発！　アバレブルー！」

基本色は青。パートナーは超シールド進化した爆竜トリケラトプス。

「勇気で驀進！　アバレイエロー！」

基本色は黄。パートナーは超カッター進化した爆竜プテラノドン。

「無敵の竜人魂！　アバレブラック！」

基本色は黒。パートナーは超ハンガー進化した爆竜ブラキオサウルス。

彼らの胸元の「三つ指の足跡」に似た紋様から、熱く滾るダイノガッツがあふれ出し、僅かにシンクチナシマウマが怯む。
「荒ぶる、ダイノガッツ！　爆竜戦隊」
『アバレンジャー！』
ポーズが決まると同時に、彼らのダイノガッツが爆煙の幻を見せた気がした。
「なんか、色とりどりで良いですね」
「……津上さんは1人で3色体現できるじゃないですか」
「そっちの方が派手だろう」
パチパチと呑気に拍手を送る翔一に軽くツッコミを入れながら、氷川と葦原が呆れたような視線を送る。
しかし、翔一としてはやはり羨ましいと思うらしい。アギトは黒が強いし、ギルスは暗い緑、G3－Xは鮮やかな青だが、それは今ここにはないし、何よりも全て寒色だ。三位一体……トリニティフォームや、超絶感覚の赤……フレイムフォーム、燃え盛る業火の戦士……バーニングフォームなら暖色である赤も入るが、やはり全員で色違いと言うのは、少し羨ましい気がした。
「アバレンジャー……ダイノガッツ……闇にも光にも属さぬ、ヒトの力」
ゆらりとその馬面を傾げつつ、シンクチナシマウマが低く呟く。その声に、憎悪にも似た何かを感じたのだろうか。翔一は腰にベルトを出現させ、葦原は低くその身を構える。
唯一氷川だけは、悔しげにそこから一歩下がり……
『変身！』
氷川の前で、2人の姿も変わる。
暗い緑のエクシードギルスと、銀色の胸元に赤い角のアギト・シャイニングフォームに。
「氷川さん、逃げ遅れた人達の誘導お願いします」
「分りました。……お気をつけて」
翔一の言葉に、どこか悔しげに頷くと、氷川は素早く周囲を見回

しながらその場から離れる。
その視線の先に、何者かの影を見止めて。
一瞬、シンクチナシマウマの追撃でもあるのでは無いかと警戒をするが、相手は駆ける氷川を目で追うだけで、攻撃を仕掛ける様子も無い。
それを不思議に思ったらしい。凌駕は軽く首を捻って小さな呟きを落とす。
「……あの人の事は、見逃した……？」
「あれは、人間。殺してはいけない、者」
「これだけ沢山の人を殺しておいて、何を言う！」
シンクチナシマウマの答えに納得がいかなかったのだろう。怒鳴るようにアスカはそう返すと、彼の武器であるダイノスラスターを構え、薙ぐ様に相手を斬り払う。
ダイノスラスターは相手の肩にあるクチナシの花を捕えるが……ガギン、と見た目に反した金属音が響き、その剣戟は弾き返されてしまう。
「今の手応えは……！？」
「ジャバジャバ。俺は全身超合金的な感じなのだ」
「超合金『的』ってお前……」
「超合金じゃ無いのか」
抑揚のない声で答えた相手に、思わずツッコミを入れる幸人と葦原。
それを聞き、一瞬だけ相手は固まるが……何故か素直にこくりと頷いていた。
「それなら、何とかなるかも知れないです……ね！」
翔一が言うと同時に、その手の中にある剣……シャイニングカリバーが閃き、相手の体を薙ぎにかかる。同時に葦原も大きく1つ吠えると、踵に生える棘とも刃とも言える物を振り上げ、相手の出っ張った腹部めがけて振り下ろした。
その様子を冷静に見つめながら、シンクチナシマウマはかわそう

と身をよじる。だが、僅かにではあったが、2人の刃は相手の脇腹を掠め、抉った。

浅い。そう判断し、凌駕達もアバレイザーで追撃をかけようとした瞬間。相手が……吠えた。

頭の中の何かを追い払うようにブンブンと頭を振り、シンクからはジャバジャバと水が溢れ出す。まるで今まで奪ってきた水分を、一気に放出するかのように。

「一体、何……？」

「お……俺がぁ……」

らんるの驚愕の声が聞こえているのかいないのか。相手が小さく呟いたかと思うと、突如その顔をこちらに向けた。

その瞳は、先程までの暗いものでは無い。明るい……とは決して言えないが、トリノイド「らしい」ふざけた印象の色が浮かんでいる。

妙に苛立っているように見えるのは、先程の翔一の攻撃のせいなのか、それとも別の要因があるのかは分らないが……

「俺が一番上手く、アナザアース人を殺せるんだぁぁぁぁっ！」

そう咆哮を挙げると同時に……シンクチナシマウマはジャバジャバと言いながら、彼らに向かって突っ込んでいくのであった。

＊

「フッ……この感じ。ときめくぜ」

その戦いを、遠くで眺める白いコートの青年がいた。

名を仲代壬琴。ダイノマインダーと呼ばれるブレスを持つ、白い戦士……アバレキラーである。

ときめきを求め、そしてそれを得る為ならエヴォリアンだろうがアバレンジャーだろうが敵に回す……そう言う存在であった。

そして今。暴走し、アバレンジャーや見慣れぬ男の戦士と戦うトリノイドに僅かながらではあるがときめきを感じ、更に引っ掻き回

してやろうと画策していたのだが……

ふと、自分の背後に生まれた気配に気付くと、彼は軽く眉を顰めてそちらを向いた。

そこにいたのは、「口の化物」。エヴォリアンの一味のような印象を抱かせるが、それ以上に何か別の邪悪さを感じる。

「何だ、貴様？」

「……お前に邪魔をされては、困る者、だ」

静かな口調で相手はそう言うと、相手は一息にこちらとの距離を詰め、彫刻刀のような物を振り上げる。

珍しく不味いと判断したのだろう。仲代はちぃと小さく舌打ちをすると、後ろに飛んでそれをかわし、手に嵌るダイノマインダーを構え……しかし、彼を変身させるつもりは無いらしい。チェンジするよりも早く、再び相手が仲代の眼前に迫る。

「ちぃっ！！」

無意識の内に舌打ちをしつつ、何とかその攻撃をかわそうと体を捩る。しかし、完全にかわしきる事は出来なかった。

仲代の左腿に、振り下ろされた彫刻刀が深々と突き刺さり、彼の動きを封じる。

焼け付くような痛みの後、傷からは彼の血潮が溢れ出していた。

「ぐ……あぁっ！？」

「これから、貴様を食う。それで……お前は、終わる」

漏れた悲鳴など気にも留めず、相手は淡々と言い……その口を、大きく広げた。その中に広がる深い闇は、全てを飲み込むブラックホールだろうか。

初めて「死への恐怖」を感じ取り、仲代がぞくりとその身を震わせた瞬間。

「およしなさい、エトワール。そんな物を食したら、腹を壊しますよ？」

いつからそこに立っていたのだろうか。口の化物の背後にいる青年が、窘めるように声をかけた。

相手の顔に、これと言って特徴は無い。だが、何故だか仲代に妙な胸騒ぎを与える。

見た目はエトワールの方が禍々しいのに、その後ろに立つ青年の方が危険だと、半ば直感で感じられた。

「……エステルか」

「全く、少し目を離すとすぐに喰おうとする。いっそ『暴食（グラトニー）』と改名しては如何です？　大体、この男を殺したら、リジェや伯亜舞が悲しみます。それはあなたにとっても不本意でしょう？　まあ、私はどうでも良いんですけれどね」

「子供が泣くのは……可哀想、だ。分った。今日は、退く」

こくりと頷き、エトワールはそう言うと……もはや仲代への興味など失したかのように、くるりと踵を返して背を向けた。

それが、彼の癇に障ったのだろう。痛む足を押さえながら、それでも勢い良く立ち上がり、噛み付くように怒鳴り声を上げる。

「貴様……逃がすか！」

「逃げる？　いいえ。見逃してあげるんですよ、私達が」

仲代の声を無視して、姿を消したエトワールとは対照的に、エステルと呼ばれた方の青年は、見下すような視線をこちらに送ってそう言葉を放つ。

見逃して「あげる」と言う言い方も、非常に腹立たしい。

ギリギリと奥歯を噛み締めながら、仲代はきつい眼差しを相手に向けてやる。

こんな傷さえなければ、すぐにでもチェンジして切り刻みそうな勢いだ。

しかし、そんな殺意を受け流し、エステルはクスリと笑うと、優雅に一礼し……

「フフ。いくらあなたとは言え、エトワールから受けた傷は、そう簡単に治りはしないでしょう。どうせ残り短い人生なんです、大切になさい」

呪詛にも似た言葉を紡ぎだすと共に、彼の姿もまた虚空に消える。

後に残されたのは、悔しげに床に拳を打ち付ける仲代の姿であった……

27話：トリノイドはアバレ足りない？（後書き）

玄金：いつの間にか11月直前だよ、龍水ちゃん！！

青器：……そうね。ゼロライダー様から頂いた特製肉まん等点心セットが美味しい季節ね。ああ、桂花茶が美味しい

玄金：時期物だもんね、キンモクセイの香りも。……でもさ、前回確か「宇治金時で暑気払いっ！！」とか言っていたはずなんだけどねぇ。って言うか、僕の前に菓子類がないのは何故!?　Ｔｒｉｃｋ　ｏｒ　Ｔｒｅａｔ！！

青器：仮装しなくても化物の癖に、何を言っているのかしら？　Ｓｅａ　Ｃｈａｉｎ，　Ｓｅａ　Ｃｈａｉｎ

玄金：ちょっ！　待っ！　寒っ！　冷たっ！！　かかってるかかってる！！　思いっきり水かかってるから！！　って言うか、この国では基本的に、そっちはメジャーじゃないからね!?　ハロウィン＝「Ｔｒｉｃｋ　ｏｒ　Ｔｒｅａｔ」だからね!?

青器：ハロウィンの時期、水播きする時にはこの「Ｓｅａ　Ｃｈａｉｎ」……「シーチェーン」と言う呪文を唱える決まりなのよ。仮装して「Ｔｒｉｃｋ　ｏｒ　Ｔｒｅａｔ」の方が有名なのであまり知られていないけれど、目に見えない物に、何の警告も無しに水をかければ、問答無用で悪戯されると信じられているらしいわ。だから、「これから水を撒きますよ、気をつけて下さい」と言う意味をこめて、「Ｓｅａ　Ｃｈａｉｎ」と言いながら水を撒くの。

玄金：……どうして結愛ちゃんはそんな要らん知識を持っているの

か……って言うか僕は目に見えてるでしょ！？　何で水をかけるの！？

青器：英語の教科書に載っていたそうよ？　ちなみに玄金に撒いたのは、単純に鬱陶しかったから。
それはともかく、今回は若干「過剰不適合者」の様な印象が強いわね。自分の存在全否定のメモリじゃなくて？

玄金：酷っ。回を増す毎に僕への扱い酷くなってない！？
まあ……そもそも、ロードのメモリをエヴォリアンとかジャカンジャとか、あの辺に適用しようとする事自体が無理じゃない

青器：しかも、またあの駄馬は連邦の白い悪魔みたいな台詞を……

玄金：うん、たぶんそれが彼のアイデンティティなんだよ

青器：そして最後……仲代壬琴は変身するの？　出るには出たけど

玄金：一応、するんじゃないかって話。Ｇ３－Ｘ登場への布石も置いたとか置かないとか、そんな噂を耳にしてるよ

青器：そう。それでは皆様、次回、また

玄金：……次は何ヵ月後だろーねー？

青器：あなた、本気でいつか辰巳に殺されるわよ？

第２８話：１つになって

一般市民の退避誘導のため、翔一達の側から離れた氷川が見たのは……大きな口のような顔をした異形に襲われている、白いコートの青年だった。

助けなければと思い、駆けだした瞬間、その異形はすっとその姿を消したが……どうやら青年の方は、足を負傷したらしく、ずるりとその場に崩れ落ちるのが見えた。

痛みからなのだろうか、青年の顔が険しく歪んだのが見え、氷川は出来るだけ短い距離で青年の元に駆け寄り、声をかけた。

「大丈夫ですか！？」

「……何て事は無い」

ふいとそっぽを向きながら答える青年。しかしその額に脂汗が浮いている事から、やはり怪我をしているらしい。そう思い、視線を彼の足に落とすと……白いズボンが、彼の血で真っ赤に染まっていた。

「これは……すぐに病院に行かないと！」

「いい！　……こんな傷、すぐに治る」

くっ、と苦痛に顔を歪めながら、それでも青年の瞳は拒絶の色を見せている。すぐに治るとは言っているが、とてもそうは見えない。正直、病院に連れて行くべきだと思うのだが……何故だろうか、この青年の視線に、氷川は気圧されていた。

病院嫌いとか、そう言うものでは無い。もっと別の感情……強いて言うなら、孤独と殺意だろうか。初めて会った時の葦原に、何となくだが似てる気がした。

「この俺が、あんな奴に……しかも情けをかけられただと？　ふざけやがって」

氷川の方は見ず、悔しげに吐き出す青年。

自身への絶対の自信と誇りがあったのだろう。それを先程見かけ

た異形が打ち砕いたと言う事か。
　なんと声をかけて良いのか分らず、しかしそれでもこの場から彼を退避させようと氷川が考えた瞬間。青年の腕に着いているブレスレットから声が響いた。
『無様だな、人間』
「黙れ」
　その侮蔑にも似た声が、更に青年を苛立たせるらしい。彼はチィと大きく舌打ちをすると、そのブレスに向かって、短く……そして吐き捨てるように呟きを落とす。
　ブレスは通信機の代わりなのだろうか。形としては、先程のカレー屋の面々が付けていた物に似ている気がする。
「ひょっとして……あなたも、伯亜さん達の仲間ですか？」
「仲間……？　何を言ってるんだ、お前」
　氷川の問いに、青年は心底馬鹿にしたように返す。声だけでなく、視線まで馬鹿にしている気がする。鼻で氷川の問いを笑い飛ばし、そのまま視線をシンクチナシマウマとか言う異形と戦う彼らに向け……皮肉気な、それでいてどこと無く寂しそうにも見える表情で言葉を返してくる。
「あいつらと共にいても、俺はときめかない。それに、俺に仲間は必要ない」
「……仲間が必要ない人間なんて、いないと思います。少なくとも、俺は」
「フン。それは弱い奴の言葉だ」
「寂しいですよ、1人きりは」
　軽く眉を顰めて青年に返すが、彼には彼なりの考え方と言う物があるのだろう。侮蔑の眼差しをもう1度氷川に送ると、ゆっくりと立ち上がった。
　足の傷が痛むらしい。やはり微かに眉を顰めてはいるが、動けない程ではないらしい。案外、見た目よりも浅い傷なのかもしれない。
『それで人間、お前はこれからどうするゲラ？』

氷川が思った刹那の後、彼のブレスからそんな問いかけが飛ぶ。
その問いに青年はまたしても鼻で笑い……
「決まりきっているだろう、トップ」
答えにならない答えを返し、青年はゆっくりとブレスを構え……
そして、低く呟いた。
「爆竜チェンジ」
キュウ、と何かの鳴き声に似た音が聞こえると同時に、青年の姿が白い色の「アバレンジャー」に変わる。
やはり、仲間なんじゃないかと言う気がしなくも無いが……何故だろう、他の４人に比べて随分と邪悪な印象を抱かせる。
棘のような模様の色が、黒だからだろうか。それとも仮面の目に当たる部分が、血のような赤だからだろうか。
「あなたは……」
「勘違いするな。俺は……俺を虚仮にした奴を、叩きのめすだけだ」
それだけ言うと、彼はひらりと、戦いの渦中へとその身を躍らせた。
軽やかに、ではあるのだが、やはり左足を引き摺っている。
怪我人である彼ですら、戦いに赴いていると言うのに、人を守る仕事をしているはずの自分が、戦いの場にいない。その事が、氷川にとって悔しかった。
アンノウンと戦っている際にも何度か感じた事のある無力感。翔一や葦原とは異なり、システムが無ければ戦えない。
ギリ、と歯噛みしたその時。ずぅん、と地鳴りが聞こえ、氷川の頭上に影が差す。
それを不審に思う間も無く。氷川の足が、地面から離れた。
「え？　……うわっ！？」
悲鳴をあげる暇もあらばこそ。自分が、どこからか現れた「黒い恐竜」が自分の襟首を咥え、自分の体を持ち上げているのだと気付く。それと同時に、その体内と思しき所に放り込まれ……氷川は周囲を見回した。

ちらりとしか見ていないが、感じとしては草食恐竜だろうから、食われたと言う訳ではないだろう。体内である事には変わりないだろうが、どうにもここは「格納庫」のような印象も受ける。

やがて氷川の視界に、恐竜のような生物の姿が入る。「ような」と表したのは、自分が知る恐竜とは明らかに異なるから。

その中の、黄色い翼竜……プテラノドンだろうか、それがしきりに氷川の足元を示すように口先を向けてくる。不思議に思い、そこに視線を落とすと、やや大きめの段ボール箱が1つ置かれている。

「この箱が、何か？」

氷川が問うと、その場にいる恐竜達が大きく吠える。まるで、中身を見ろと言わんばかりに。一体何があると言うのか。

軽く首を傾げながら、それを開け……ぎょっと目を見開いた。だがそれも一瞬の事。すぐに彼は笑うと、目の前の箱の中身を取り出したのであった……

＊

「俺が一番上手く、アナザアース人を殺せるんだぁぁぁぁっ！」

咆哮と共に、今まで虚ろだったシンクチナシマウマの瞳に光が点った事に、最初に気付いたのは葦原だった。

刹那、周囲一帯に強い芳香が漂い始めた。その強すぎる香りに、頭がくらくらする。翔一も同じなのか、小さく呻いてその場に膝をついていた。

「一体何ね、この匂い」

「クチナシの香り……？」

らんるの問いに、不審そうに答えたのは翔一。クチナシの花は、ジャスミンのような芳香を放つ事で有名な低木だ。翔一は主に、料理の色付けに実を使う事が多いし、実際自分の店の裏側にもクチナシの木を植えている。

甘い香りに蟻が寄ってくるのが難点ではあるが、白い花はテーブ

ルの飾り付けにも使えるし、それなりに重宝している。
……しかし、今のこの香りは、いくらなんでも強烈過ぎる。蟻ではなく、人を惹き付けるための香りなのか、その香に誘われるように、翔一の足はシンクチナシマウマの方へと向いてしまう。
無論、自分の意思ではない。体が勝手に、と言う奴だ。葦原やアバレンジャーの面々も、吸い寄せられるようにシンクチナシマウマの方へと歩みを進めている。
「くっ……体が勝手に……」
「このままでは、奴の餌食に！」
「ジャバババっ！　誰からやっつけようかな～？　2回も殴ったギルスかな～？　それともやっぱりアバレンジャーかな～？」
ニヤニヤと笑いながら、近付いてくる戦士達に向かってそう冷酷な声をかけるシンクチナシマウマ。
そして、その手がゆっくりと凌駕の方へと近付いた……その瞬間。白い何かが通り過ぎ、シンクチナシマウマの両肩についていたクチナシの花をすっぱりと切り落としていた。
その瞬間、周囲を支配していた甘い香りもあっさりと薄まり、翔一達も体の自由を取り戻し、相手との距離を取った。
「ジャバッ！？」
その影に驚き、相手も目を見開いて、自分を斬った相手を見やる。白いスーツに羽根ペンのような短剣。アバレンジャーの持つスーツに似ているが、どこか違うと思わせるに足る禍々しさ。
それがアバレキラー……仲代壬琴と言う存在だと、最初に気付いたのは凌駕だった。
「仲代先生！」
「手伝ってやる。……今日だけだがな」
嬉しそうに声をかけた凌駕に、軽く肩をすくめながら仲代はそう声を返す。
今日だけ手伝うと言うその物言いに、僅かながら葦原は不信感を覚えるが、今は敵では無いと判断したのか、追及するような事はせ

ずにちらりと視線を送るだけだった。
そして、彼の登場に最も大きな反応を見せたのは……シンクチナシマウマだった。
「……危険、危険、危険！！　貴様は……危険！　そんな気がするっ！」
本能的に、彼の危険性を感じたのか。そう叫ぶと、相手は仲代との距離をつめ、その掌で彼の頭を鷲掴みにしようとする。しかし、仲代はそれを上回る速さでそれを回避、逆に羽根のような剣……ウィングペンタクトでシンクチナシマウマの体を斬りつける。
そこは丁度、先程葦原が蹴り降ろした部分。寸分違わず同じ場所を攻撃された為か、相手はうっと小さく呻く。
その目に、正気と狂気がちらちらと点滅しているのが見てとれる。
シンクチナシマウマの中で、トリノイドとしての正気と、「ロードメモリ」に記録されたロード怪人の正気が鬩ぎあっているという証拠なのだが、凌駕達アバレンジャーも、翔一達アギトもそんな事を知る由も無い。
アバレンジャーやアギトと言った「外の敵」に加え、自分の意識を乗っ取ろうとするロードの力と言う「仲の敵」とも戦っている状態。
そんな四面楚歌にも似た状態で勝てる程、「外の敵」は甘くは無かった。
彼らの攻撃は着実にシンクチナシマウマの体にダメージを与え、それと同時にロードメモリは自分の意識を殺いでいく。
折角取り戻したはずの「トリノイドとしての自我」は、その攻撃で再び失われていくのが分る。そして……トリノイドとしての自我よりも、ほんの僅かにロード怪人の記憶の力が上回った瞬間。
……トリノイド・シンクチナシマウマと言う存在は、壊れた。
「あが……ジャバ……グゥあああぁぁぁぁぁっ！！」
獣のような咆哮が上がり、その瞳からは完全に光が消える。代わりとでも言うかのように、その頭上に光の輪が現れ、そこから円月

刀のような武器を取り出すと、今までとは比較にならない速さで、凌駕達を切りつけた。
「早い！？」
驚きの声は誰の物だったか。少なくとも、その速さだけなら仲代の上を行くものかも知れない。
おまけに、今の仲代はここに来る前の負傷によって、本来の機動性が出せない状態。
シャイニングよりも、フレイムで対抗すべきかも知れない。
そう判断し、翔一がフレイムフォームに変わろうと意識を集中させた……その瞬間。
激しい銃声と共に、シンクチナシマウマの体が傾ぎ、吹き飛んだ。
全弾命中とは言わないが、翔一達には一発も当てず、シンクチナシマウマだけを打ち抜いたのは見事と言えるだろう。
「今のは一体……！？」
思わず銃声がした方を振り返る凌駕達。
そこに立っていたのは……青い鎧に身を包み、大型のガトリング式機銃……ＧＸ－０５ケルベロスをしっかりと構えた何者か……Ｇ３－Ｘの姿だった。
「ひょっとして、氷川さん！？　どうしてその格好に？」
「よく分りませんが……彼の中にありました」
シンクチナシマウマから視線は外さず、氷川は軽く頭を「彼」の方に傾ける。氷川が「指した」方に視線を向けると……そこには、ずんと低い音を鳴らしながら、悠然と近付いてくる黒い爆竜・ブラキオサウルスの姿。
「ブラキオ！？　何故ここに！？」
『君のままで、変われば良いブラ』
アスカの問いには答えず、ブラキオは呑気とも取れる言葉を放つ。
その直後、らんるのブレスを通してプテラが呆れたような声をあげた。
『らんるが買った物が、その人の鎧だって教えてもらったプラ』

『それで、えみポンさんに頼んで、ブラキオの中に入れてもらったんですケラ』
「私が買ったって……ひょっとして、機械屋で売ってた、あれの事!?」
そう。らんるが昼間に買った「箱の中の青いもの」。それが実は、G3－Xのユニット一式だったのだ。
買ったらんるも、まさか氷川の物とは知らなかったらしい。驚いたように口元に右手をあて、左手で氷川を指差している。
「驚いてる場合じゃないだろう。折角氷川が作ったチャンスだ」
「あ、そうですね。それじゃ、一気にやっちゃいましょう」
冷静に言った葦原に返し、凌駕達は己の武器を合体させた。
一見すると、カノン砲にも見えるそれを構え、真っ直ぐにシンクチナシマウマに向けると……
『スーペリアダイノダイナマイト!』
どこにあったのか、かちりと引鉄を引く。それと同時に翔一と葦原は高く飛び上がり、氷川は持っていたケルベロスに、GM－01・スコーピオンを連結、砲身の先にロケット弾頭を装着し、GXランチャーへと変え、同じく引鉄を引いた。
アバレンジャーのスーペリアダイノボンバーと、氷川のGXランチャーの砲撃がシンクチナシマウマの体に直撃し、轟音を上げる。
その一瞬後には、飛び上がっていた2人のライダーのキック……翔一のシャイニングライダーキックと、葦原のエクシードヒールクロウが炸裂し……
シンクチナシマウマは、その身を四散させたのであった……

＊

倒され、そして巨大化する気配を見せないトリノイド「だったモノ」を見つめ……エトワールは軽く溜息を吐き出した。
「どうやらエヴォリアンにロードは失敗の様だ。性質が真逆だ」

「そうですね。今回ばかりは、私も失敗だと思っています」
エトワールの隣で、エステルも苦笑を浮かべながらそう答えると、軽くその身を翻す。
同時に彼らの周囲の景色が、闇へと変わった。
空間を移動することくらい、彼らにとっては瞬きをするのと同じくらい容易い事。
その闇の中で、彼らの仲間が口の端に奇妙な笑みを浮かべているのが見えた。
「……何です、爪牙？　その嫌な笑みは」
「いや？　エステルでも、しくじる事があるのだなと思っていただけだ。そんな事はせぬ、完璧な商人だと思っていた故に。ロードの力が、邪命体の『命の実』を喰らい尽くしたのは、流石に貴殿も計算外であった……という事か」
「そうですね。今回は完全に私の選択ミスです」
ふぅ、と深い溜息を1つ吐き出し、彼はいそいそと着替え始める。
恐らく、「次」の準備なのだろう。ネガティブシンジケートの元に向かった時同様にスーツ姿だが、ネクタイの模様は赤で丸に百足という何とも言えない模様。
「次も、エステル……か」
「ええ。それとも、彼らの相手をしてくれる人が他にいますか？」
やや疲れたような表情で問いかけるエステルに、他の5人が一斉に首を横に振る。
爪牙は商売っ気が無いし、天狼が行けば恐らく戦いになる。エトワールは小さい者が絡まないと動かないと言う厄介な性格。ズヴェズダは人見知りが激しいし、ステラに到っては三下相手に悲鳴をあげるだろう。
と、なるとやはりエステルしかいないのだ。
いくら彼らのまとめ役とは言え、やはりかなりの疲労が蓄積しているのだが……適当な人材がいないのだから仕方ない。
思いながら、ふとエステルは眉を顰めた。

「それにしても、鬼宿はどうしたのです？　こんなに長い間ここを開けるなど、今まで無かった事では？」
「ああ、鬼ぃたんなら、まだ下準備中でありんすよ？」
「な、何でも……『仲間として認めてもらうのも一苦労だＺｅ、Ｙａ－ｈａ！！』……とか」
「……まあ、彼がいないと静かで良いですが」
それにしても、下準備……ねえ？
少々訝しく思いながら、それでもいない人物を責める事は出来ないとわかっている為か……疲れたような溜息を吐き出し、そして小箱に入れたガイアメモリを懐にしまいこんだ。
「ジュラルミンじゃねーのか？」
「沢山持って行って、帰ってきたら藁束に変わっていた……と言う事にはしたくないので」
天狼の問いに答えると、彼はくるりと踵を返し……そして、そのまま次の商売相手の元へと向かって行った。
……百足を意味する、宇宙の忍が居る場所へ……

第２８話：１つになって（後書き）

青器：逃げたわね、辰巳

エトワール：逃げた……な

青器：巨大戦をやる気力も体力も無かったのかしら？

エトワール：偉い奴の隣に座るようになって、忙しくなった……と聞いている。言い訳じみていたから、喰った、けど

青器：まあ、あの作者なら食われてもいつかは復活するわね。さて、今日は海人様から頂いたゴマ団子を、「星」一の大食漢、エトワールと共に食しながらお送りしていくわ

エトワール：名前は、エトワール。これ、フランス語で「星」……「Ｅｔｏｉｒ」

肩書きは、「明滅の使徒」と……「星の伍」。小さいモノは……可愛いと思う

青器：だから本編中では、リジェに対して甘かったのかしら？

エトワール：リジェ、小さい。伯亜舞にも、会いたかった。可愛い物、好き

青器：……口から涎が垂れていてよ？

エトワール：可愛い物は、食べたくならない、か？

青器：ごめんなさい、その感覚はちょっと分らないかもしれないわ……

エトワール：小動物も、可愛い。俺は、可愛いモノ、小さいモノ、好き。それを虐める奴は……嫌い。だからデズモゾーリャ、嫌い。リジェを、苦しめる

青器：……だからって、仲代壬琴を食べようとしないで頂戴。話に齟齬が生じる所だったでしょうに

エトワール：我慢、した。あ、あと……彫刻も好き。結構手先が器用って、ステラが誉めてくれる。……これ、美味い

青器：お団子だけじゃなくて、皿まで食べるのはどうかと思うのだけど？

エトワール：「毒を喰らわば、皿まで」。皿も食わなきゃ、勿体無い。それに……腹、減った

青器：意味が違うし、失礼よ。さて、次回は……

エトワール：ハリケンジャーと……ディケイド。「巻之二十九：通りすがりと寫眞館」

青器：何だか喋り方が、キバのドッガやオーズのガメルみたいねぇ……

巻之二十九：通りすがりと寫眞館

西暦２００２年も残り少なくなってきた頃。

霞一甲、一鍬の兄弟は、道路工事に勤しんでいた。

工事作業員と言うのは、世を忍ぶ仮の姿。本来の彼らは、迅雷流忍術の忍者……ゴウライジャーである。忍であっても、金が無ければ腹も減るし住まう場所にも困る。まして今は、忍としての仕事では金も出ない状況。

肉体労働は嫌いでは無いし、修練にもつながるので良しとしているが……それでもいつか、この地球を脅かす外敵……宇宙忍群ジャカンジャを打ち滅ぼし、「忍として」生きていきたいと思いながら、今日もあくせく働いていた。

「兄者、そろそろ飯にしないか？」

現場監督から渡されたらしい、温かい茶を差し出しながら、一鍬は気遣うように兄に向かってそう声をかける。

太陽は南中をやや超えており、認識と共に一甲の腹の虫が微かに鳴いた。

「もうそんな時間か」

苦笑気味に呟きながら、一甲は弟の持つ弁当を受け取り……そして少しだけ離れた場所にいる青年にも声をかけた。

「鷹介、お前もどうだ？」

「ああ、貰うよ」

青年の名は椎名鷹介。こちらは派遣会社から送られてきた「助っ人人員」であると同時に、一甲達と同じ忍である。

ただし、彼らとは流派は異なる。鷹介が属するのは疾風流忍術であり、その中でも空中戦を得意とする空忍と呼ばれる忍、ハリケンレッドだ。彼もまたジャカンジャと戦う存在であり、紆余曲折はあったものの、今や一甲や一鍬の良き仲間であり友人でもある。

「それにしても……やっぱり疲れるよな、こういう仕事って」

「何だ鷹介、もうバテたのか？」
「修行が足りんぞ」
溜息混じりに吐き出された鷹介の言葉に、一甲と一鍬はからかい半分でそう声をかけた。勿論、鷹介もからかわれているのだと分っている。だが、からかわれ放しなのは癪に障るのか、小さくだがむうと唸ると……一瞬の隙を付き、一鍬の弁当にあった昆布巻きを奪い、口の中に放り込んだ。
「なっ……！　鷹介貴様、俺の弁当を！！」
「油断しすぎだぜ一鍬。修行が足りないんじゃないか？」
先程のお返しとばかりにそう言葉を返すと、鷹介はその口角を軽く上げた。
かつては敵として剣を交えた間柄だと言うのに、今ではこんな下らないやり取りをしている。
――人間、変わろうと思えば変わるものだな――
苦笑気味に思いながら、一甲は弁当の中身を奪い合う2人に温かい視線を送る。
昔から、迅雷流と疾風流は争ってきた。「切磋琢磨する」と言えば聞こえは良いが、要は単なるいがみ合いだったように思う。それが今では弁当の中身を奪い合うという、ある意味いがみ合いからは程遠い関係。
それを、良かったと思う自分に少しだけ驚きつつ、一甲は自分の弁当を守りながら食事を続けていた。
その時だっただろうか。ふと、鷹介の動きが止まり、その表情に真剣な色が浮かんだのは。
「……どうした、鷹介？」
「何だ、あいつ？」
彼の真剣さに気付いたらしい。一鍬もまた動きを止め、鷹介の視線の先を見やる。
そこにいたのは、身軽そうな服装の青年。しかも何故か楽しげな笑みと視線をこちらに向けている。

何か用なのだろうかと不思議に思い……そして、その一瞬後に気付いた。青年が左手に持つ、2枚のメダルの存在に。

「あれは……シノビメダル!?」

「それも、7番と8番!?」

遠目ではあるが、そこは忍の身。青年の持つメダルの正体に気付くと同時に、一甲と鷹介は驚きの声をあげ、確認するように自分の体をまさぐる。

シノビメダルとは、彼らが扱う巨大ロボ……カラクリ巨人が、カラクリボールと呼ばれる「ツール」を出す為に用いる物。

それぞれに番号が振られており、青年が持っている物は疾風流のカラクリ巨人である旋風神と、迅雷流のカラクリ巨人である轟雷神を合体させるカラクリ武者、風雷丸を呼ぶ為のメダルだった。

普段は7番の「兜」……風雷ヘッドを鷹介が、8番の「拳」……風雷ナックルを一甲が持っているのだが、いつの間に奪われたのか。

「もしや、奴はジャカンジャ!?」

思わず漏れた一甲の声に、鷹介と一鍬の顔にも緊張が走る。それを見るや、青年の方は指鉄砲でこちらを撃つような仕草を取り……

「お宝は頂いて行く。僕に奪われた事を、誇りに思いたまえ」

その言葉を残し、華麗な身のこなしでその場を走り去っていく。

だが、3人も黙って見送るはずも無い。彼らは真面目な顔で頷き合うと、急いでその青年の後を追った。

＊

尾藤吼太は、訪問介護士もしている忍である。流派は鷹介と同じ、疾風流。その中でも、地上戦を得意とする陸忍、ハリケンイエローである。

その彼が、介護の仕事から帰る途中。妙な違和感を覚え、立ち止まった。

これと言って、普段と変わった様子は無いと思うのだが……何か

が違う。そう思い、ゆっくりと辺りを見回して……気付いた。
昨日までは喫茶店だったはずの「そこ」が、今日は何故か写真館になっている事に。
――どういう事だ？　まさか、ジャカンジャがまた何か……――
不可思議な事があればジャカンジャの仕業と言う考えが染み付いてしまっているのか、無意識の内に彼はきゅっと顔を顰めると、ゆっくりとその写真館に足を踏み入れる。
見た印象は、どこにでもある静かな写真館だ。壁に飾られたセピア色の写真達が、この店の歴史を物語っているように見える。
「あのー、ごめん下さい」
「あ、いらっしゃい。お客様かな？」
意を決し、吼太が声をかけた一瞬の後、奥から現れたのは白髪の、笑い皺を目元に刻んだ老爺だった。
別段、怪しい雰囲気は無い。むしろ人の良さそうな印象もある。だが、いきなり現れたと言う点を考えると、どうにも警戒してしまうのも事実。
「ここ、喫茶店じゃありませんでしたっけ？」
「いや？　うちは昔から写真館ですよ？　偶にコーヒーも出しますけどね」
ニコニコと、悪意とは縁遠そうな笑顔で返す老爺に、吼太もつられて笑顔になる。
頭では怪しいと分っているのだが、どうも目の前の老爺は人の緊張を緩める特技を持っているらしい。あれよあれよと言う間にスタジオに通され、ソファに腰掛けさせられてしまった。
「ちょっと待ってて下さいね。今コーヒー入れますから」
「あ、お気遣い無く」
いそいそと奥に引っ込む老爺の背を見送り、吼太はスタジオをぐるりと見回す。
使い込まれたカメラに、綺麗に清掃された床。壁にかかっているのは背景ロールだろうか。赤い鷹、青い海豚、黄色い獅子、深紅の

甲虫、蒼天の鍬形が、緑の手裏剣の周りに座している。周囲にあるのはメダルだろうか。特に頂点にある2枚のメダルが、吼太の気を惹いた。

どこと無く、シノビメダルに似ている気がする。

しかし、それを知るのはもはや限られた者しかいないはず。不審に思いながらも、その絵をじっと見つめていると……唐突に彼の背に気配が生まれた。

先の老爺とは違う気配に振り返り、その存在を確認すると……そこにいたのは、見知った様な、そうでない様な、何とも言い難い存在が視界に入る。

顔を隠し、黒い服装に身を包んだ「黒子」。

疾風流の中では、忍に関わる記憶を消去させる為に活躍するロボだが、今回は違うと直感できる。

気配がある。と言う事は、目の前の黒子は人間だ。似たような格好だが、自分の知る黒子ロボではない。……もっとも、黒子の格好など、どれも似たようなものなのかも知れないが。

「何者だ!?」

「……通りすがりの黒子だ」

声に不信感を滲ませながら問うた言葉に、黒子がどこか忌々しげな声で答える。黒子にしては随分と堂々としているし、存在感がありすぎる気がするのだが……

そんな事を考えつつ、吼太がじっとその黒子を見つめていると、先程まで奥に引っ込んでいた老爺が、コーヒーカップ片手に近付いてくるのが見えた。

「おや士君。随分早かったね」

「まあな。ああ、爺さん。俺にもコーヒーをくれ」

この店の従業員なのだろうか、士と呼ばれた黒子は、ペロンと顔を隠していた布を上げると、どっかとソファに腰を下ろす。

客よりも態度の大きい従業員と言うのも、どうかと思うのだが。

我知らず、顔に苦笑が浮いてしまったのだろう。黒子の鋭い視線

が、吼太の顔に向けられる。
だが、その瞬間。
腹に響くような轟音が、吼太の耳に届いた。
それが爆発だと認識した瞬間、吼太は真剣な表情になり、条件反射的に音の方向へと駆け出していた。
道中、服装を忍装束に変え、腕に変身ツールでもあるハリケンジャイロも装着。
現場に到着した時には、既に仲間である水忍、ハリケンブルーこと野乃七海が、敵と切り結んでいるのが見えた。
「七海！」
「吼太！　丁度良かった！！」
七海と戦っているのは、見慣れた自分達の「敵」……宇宙忍群ジャカンジャの下忍、マゲラッパ達だ。
だが……不思議に思うのは、七海の横で、やはりマゲラッパを蹴り飛ばしている青年の存在。何故だろうか、随分と戦い慣れている雰囲気がある。
「あの人は？　……って、聞いてる場合じゃないよな」
次から次へと湧いてくるマゲラッパを相手にしながら、吼太と七海は背に挿している刀、ハヤテ丸を引き抜き、相手を次々に斬りつけていくのであった。

＊

所変わって、ジャカンジャの居城、センティピード内部。吼太と七海が、マゲラッパと遭遇する少し前。
中央に座すジャカンジャの頭領、ドン・タウザントの前に、彼の直属の部下である上忍、暗黒七本槍と呼ばれる面々が並んでいた。
「七本槍」とは言え、既にその内の2人はハリケンジャー達に倒されている為、実際にいるのは5人だけなのだが。
未だ地球を腐らせる事が出来ず、苛立ったような空気が流れてい

る中、どこからとも無く1人の青年が姿を見せた。
「宇宙忍群、ジャカンジャの皆様でございますね？」
慇懃無礼、という表現が合いそうな態度で一礼するその青年に、5人は軽く眉を顰め彼を一瞥する。
唐突に現れたそいつに、最初に食いついたのは京劇役者のような顔をした、仮面の忍……六の槍、サタラクラであった。
やってきた青年を、品定めでもするかの様に見やりつつ、大げさなリアクションで声をかける。
「何？　何なのチミはぁ？」
「私は旅の商人。エステルと申します。以後、お見知り置きの程を、サタラクラ殿」
「エステル？　聞いた事無いわね」
名乗った青年……エステルに言ったのは、セクシーな印象の錬金術師……四の槍、ウェンディーヌ。どこか馬鹿にしたような彼女の言葉にも、気を悪くした様子も見せずに、エステルはにこやかな笑顔を顔に張り付かせ、またしても一礼と言葉を返す。
「駆け出しでございますから、あまり知られてはおりませんが……それ故に、皆様と懇意にさせて頂ければと」
「ほう？　それで、貴殿は今日、何を売るつもりだ？」
「いえいえ。本日は売りに来たのではなく『ご挨拶』に伺ったのです、サンダール殿」
「何？」
鮫のような顔をした忍、七の槍、サンダールに答えながら、エステルは懐中から1本の「何か」を取り出す。
色は黒。中央付近には「Z」の字を模る鞭のような絵が描かれている。
「これは『ガイアメモリ』。ただの強化ツールに過ぎませんが、きっとフラビージョ殿の採点でも、満点を頂けると信じております」
「フン。随分と余裕だな」
答えたのは蜂のような格好をしている一の槍、フラビージョでは

なく、武者鎧のような戦士である五の槍、サーガイン。
それに気を悪くした風でもなく、エステルはふと軽く口の端を歪ませた。
サーガインの言う通り、余裕に満ちた表情で。
「フフ。余裕が無ければ商人など勤まりません」
外見上は恭しいまでの態度を見せつつ、エステルはにこやかにそう言うと、その「ガイアメモリ」をタウザントに向かって差し出す。
「使う、使わないはタウザント様の自由。こちらはサービスですが、別料金で使い捨ての駒もご用意致します」
「……ほう」
「ご興味がおありでしたら、今すぐにでもご用意致しますが？」
クス、と笑いながら差し出されるそれを見つめ、タウザントはすっとその目を細める。
目の前に立つ男は、かなりの邪心を持っているらしい。「使い捨ての駒」までも用意しているとは、実に周到な相手だ。
仮にここで断れば、今度は地球忍者の元に売り込みに行くかもしれない。それは少々厄介だ。
それに……エステルの持つその「ガイアメモリ」からは、どこと無く邪悪な力を持っているように感じる。「アレ」を発生させるに足るかもしれない、どす黒い何かを。
「……良かろう。その商談、成立させようでは無いか」
低く、ゆったりとした物言いで返すと、タウザントはそのメモリに手を伸ばし……そして、サンダールに向かって放り投げた。
恐らくは、サンダールにそれを使えと言う意思表示なのだろう。
「フフ。流石はタウザント殿。誰に使わせるべきかを心得ていらっしゃる」
クックと喉の奥で笑いながら、エステルはそう言うと、顔をサンダールに向け……
「扇忍獣にお使い下さい。そうですね……出来れば狼系がよろしいかと」

そう言ったエステルの表情に、サンダールは思わず戦慄し……だがそんな事はおくびにも出さず、彼もまた慇懃無礼に頷いた。

心の奥底で、エステルに対する不信感を抱きながら……。

巻之二十九：通りすがりと寫眞館（後書き）

白刀：相変わらず、サブタイトルと内容の不一致が目立つな

朱杖：まあ、仕方ねーよ。最初から一甲&；一鍬＋鷹介って言う、何かえこひいき的な印象の出だしからスタートだしあ、今日は心の剣様から頂いた、シャルロット・オ・フレーズ（苺のシャルロット）を頂きながらお送りしてまっす

白刀：ちなみに茶はそれに合わせてストロベリーティー。シャルロットも一般的に知られている「冷やした物」では無く、元々の「熱いシャルロット」の方だ。時期も時期だしなさて、今回の話だが……

朱杖：時期的にはサンダールさん登場から2、3週目くらいかな。5人いるし、まだ御前様の存在も鷹介達は知らない所

白刀：しかし、いきなり主人公ライダーよりも先に海東大樹が現れるのはどうなのだ？　しかも、今回のターゲットはシノビメダルとは。アレか、オーズに触発されてメダルか？

朱杖：……聞くが、他にお宝になりそうな物が、ハリケンにあるか？

白刀：ニンジャミセン

朱杖：きっぱりだな！！　って言うかそれは結構難しいと思うぞ！？　シュリケンジャー相手にどこまで盗めるかわかった物じゃないし！！

白刀：辰巳結愛もそう考えたから、風雷丸のメダルを盗ませたのだろう

朱杖：トライコンドルでも良くね！？　それもアレか、シュリケンから盗むのは難しいからって理由か！？

白刀：それもあるだろうが……何より、あの状況で海東大樹がシュリケンジャーと接触などしてみろ。収拾が付かん

朱杖：何で収集が付かないんだよ……

白刀：シュリケンジャーといえば、シュリケンゲストだろう？

朱杖：……まさか！？　いや、でも、そんな……！

白刀：と言う所で今回は幕引きだ。シュリケンゲスト……恐らくは朱杖炎雀の想像している人間だろう

メモリも「狼系」、「Z」、そして「鞭」が大きなキーワードだなでは、次回また会おう

第３０話：仮面と忍

「今度は何の世界だ？」

写真館の窓の外に広がる景色が変わるや否や、門矢士はどこと無く不機嫌そうな表情でそう言った。

とは言え、彼のこういった表情はいつもの事。言われた方……光夏海と小野寺ユウスケは、特に気にした風でもなく肩をすくめた。

写真館のホールに降りている背景ロールは、赤青黄三色の動物と、紅藍二色の虫。それらが碧の手裏剣の周りで五角形を描くように存在しており、更にその周囲をメダルのような物が取り囲んでいる。頂点には殊更存在を強調するような２枚のメダル。

それを見やった瞬間、士の体を銀色の何かが通り過ぎ……彼に、この世界における「役割」を与えた。

それは、黒い頭巾に黒い着物、浄瑠璃などで見かける、いわゆる「黒子」の格好だった。

「こいつは……」

「士のその姿は……黒子、だよな？」

「と言う事は、ここは『シンケンジャーの世界』なのでしょうか？」

以前にも、士はこの「黒子」と言う役割を振られた事がある。隙間に潜む外道と戦う侍達が存在する代わりに、仮面ライダーのいない世界……「シンケンジャーの世界」とも呼ぶべき世界での事だ。

その時と同じ格好と言う事は、やはりここは「シンケンジャーの世界」なのだろうか。

不審げに首を傾げる夏海に対し、士の方は……苛立たしげに顔にかかる布を跳ね上げ、どっかとソファにその身を沈めた。

ここまで態度の大きい黒子も、珍しいかも知れない。

「またこの格好か！　この俺に黒子なんて役割を振る世界はあいつらぐらいの物だろう！」

「まあまあ。良いじゃないか。それよりさ、ここが本当にシンケンジャーの世界なら、殿様達に会いに行かないか？　色々積もる話もあるだろ？」

不満げに言った士に対し、ユウスケの方はウキウキと言う擬音が聞こえるような、楽しげな声で言葉を返す。

ユウスケも……そして夏海も気付いているのだ。彼の態度の裏に隠された、どこか嬉しげな雰囲気を。

基本的に士は、偽悪家だ。自分を悪く見せようとするが、その根幹は善人だと信じている。だからこそ、ユウスケも夏海も……偶に衝突をする事があるとはいえ、士に惹かれているのいるのだろう。

とにかく、どこと無く緊張が緩んだ雰囲気になったそのホールに。夏海の祖父でありこの写真館の主人である栄次郎が、入っていたらしい新聞紙を広げ、首を傾げながら入ってきた。

老眼鏡の奥にある目を、軽く瞬かせて。

「うーん、おかしいなぁ？」

「どうしたの、栄ちゃん。首なんか捻っちゃって」

「ああ、キバーラちゃん。いやね、新聞を読もうと思ったら、古新聞が入ってたんだよ。ほら」

栄次郎に問うたのは、「キバの世界」からついて来た、蝙蝠型モンスターであるキバット族の1人、キバーラ。体躯の小さいキバット族の中でも群を抜いて小さい、自称「謎の多い女」であると同時に、夏海が変身するための力を貸す存在でもある。

そんな彼女にも見せるかのように、栄次郎は答えながら郵便受けに入っていた新聞の日付を指し示した。

「あら本当。平成１４年じゃない」

「って事は、結構前だよな。へぇ、こんなに綺麗に残せる物なんだな。まるで今日刷ったばかりみたいだ」

栄次郎の持つ新聞を覗き込みながら、キバーラとユウスケが感嘆の声を漏らす。少し離れた所にいた夏海も、物珍しげにその新聞紙に視線を向けていた。

しかし士だけは、自分でも理由の分らぬ奇妙な予感を覚えたのか、微かに不信感を顔に浮かべ……それを誤魔化すかのような呆れた溜息と共に、言葉を吐き出す。

「どこまでもお気楽な奴だな。１０年近く前の新聞が、そんなに綺麗な訳があるか」

「じゃあ、この新聞は何だって言うんです？」

「……さあな」

思った事をそのまま口に出し、そして自分でも答えが出ない事を暗に認め。

士は頭巾の布を下げて自分の顔を覆うと、首に提げたトイカメラを懐中に忍ばせて、小さく呟く。

「……撮ってみるか。この世界って奴を」

それだけ言うと、彼は未だ新聞紙を興味深そうに眺めるユウスケと、士とユウスケの間で困ったように顔を顰める夏海を放って、そのまま外へと出かけてしまった。

言葉通り、この世界を撮り、収める為に……

新聞紙に気を取られ、いつの間にかいなくなった士を探して、ユウスケと夏海が街に出た矢先。「それ」は突然彼らの目の前に現れた。

赤黒いタイツの様な物を纏い、髷の様な物が頭の上に乗っている。それが、何とも言えぬ独特なステップを踏みながら、周囲の建物を破壊し始めたのだ。

「マゲ～」

「ゲラッパ！」

「マゲマゲ～」

口々にそんな声を上げながら、その集団は手当たり次第に破壊していく。しかも対象は「建物」だけではなく、「人」も入っているらしい。こちらに気付いた何人かが、手に持っている刀のような物

を振り上げて容赦なく襲い掛かって来た。
戦い慣れているユウスケの方は、その攻撃を紙一重でかわして相手の腹を蹴り飛ばす。しかしほとんど実戦経験が無い夏海には、その攻撃はかわしきれない物だったらしい。
声を上げる暇もなく、彼女の頭上に凶刃が振り下ろされる。
それを止めねばと思うのだが、ユウスケの手の届く範囲に彼女がいない。
「夏海ちゃん！！」
何とか逃げてくれ。そんな思いを乗せ、ユウスケが彼女に向けて叫んだ瞬間。
ひゅるりと、一陣の風がユウスケの横を通り過ぎたかと思うと、そのまま夏海に向かって一直線に駆け抜け……更に次の瞬間には、夏海に向かって振り下ろされた刃を、刀で受け止めている青い服を着た女性の姿があった。
「大丈夫？　早く逃げて！」
女性は夏海に短くそう言うと、そのまま相手の刀を跳ね上げて１人、また１人と斬り散らす。
彼女の持つ刀は、以前見た「侍」達の物に比べるとやや短い。鞘も、腰ではなく背に差している事から考えると、日本刀と呼ぶよりも、むしろ忍刀と呼んだ方が良さそうだ。
随分とこの兵士達と戦い慣れしているのか、相手の攻撃を的確にかわし、逆にその太刀を浴びせている。
「夏海ちゃん、大丈夫！？　怪我は？」
「ありません。それより、これは一体……？」
何とか夏海の側に寄り、彼女を背に守りながら問いかけたユウスケに、彼女は自らの疑問を口に出す。
目の前に現れた兵士達。そしてそれと対峙する忍刀の女性。
もしもここが、以前来た事のある世界だとするならば、この兵士達も外道衆と言う事になるが……どうも違う気がするし、戦う彼女も「侍」と言う雰囲気では無い。

何とも理解し難い状況ながらも、何とかその兵士を退けていると、女性が着ているのと同じデザインをした、黄色いジャケットを着た青年が、やはり刀を抜いた状態で飛び込んで来るのが視界の隅に入った。

「七海！」

「吼太！　丁度良かった！！」

「あの人は？　……って、聞いてる場合じゃないよな」

女性……七海と言うらしい彼女に、飛び込んできた青年……吼太が険しい表情で相手を睨みつけながら、荒々しい剣捌きで相手を切り伏せる。

その際、斬られた相手の一部が夏海の足元に落下した。反射的に、夏海は「それ」に目を向け……ざあっと音を立てて、その顔から血の気が引いた。

「……ひきゃぁぁぁっ！」

「夏海ちゃん!?」

「む、むかで……こ、この兵士、スーツの中に百足がいっぱい詰まってます！」

「ええっ!?」

夏海の声に反応し、ユウスケもそちらに目を向け……直後、襲い来る人型の兵士と「それ」を交互に見つめては、呆れと嫌悪の混じった、何とも表現し難い表情で相手を退ける。

動きは完全に人の物だと言うのに、中身は無数の百足と言う正体を知れば、夏海でなくとも、大抵の女性は悲鳴をあげるだろう。ユウスケだって、出来る事なら関わりたくない。

際限なく襲い来る相手に、いい加減こちらも痺れを切らし始め、刀で応戦している2人にも焦りの色が見え始めた……その刹那。

「ったく、マゲマゲうるせぇ連中だな」

「士！」

再びユウスケの視界の端に、誰かの影が映りこむ。そして耳に届いた聞き慣れた声に、抗議と歓喜の混じった声で、その主の名を呼

ぶ。
　2人組もその声で士の存在に気付いたらしい。その表情には、あからさまな驚きが浮かんでいた。いや、正確には……「何でこんな所にわざわざ来るんだ」と言う、抗議めいた表情と言った方が正しいかもしれないが。
「あの人、さっきの黒子！？」
「成程な。大体分った」
　吼太の声を軽く聞き流し、士はほとんど口癖とも言える言葉を放つと、その腰にベルトを巻きつけ、1枚のカードを構え……そして宣言する。
　目の前の雑魚を倒す為に。
「変身」
『ＫＡＭＥＮ　ＲＩＤＥ　ＤＥＣＡＤＥ』
　電子音が響き、士の姿を、マゼンタ色を基調とした緑の目を持つ戦士、ディケイドへと変える。
「嘘でしょ、変身した！？」
「あの人、一体……」
「通りすがりの仮面ライダーだ。覚えておけ」
『ＡＴＴＡＣＫ　ＲＩＤＥ　ＢＬＡＳＴ』
　士の変身に驚いたらしい、七海と吼太が、それぞれに声を上げる。それに反応するように、士は腰についていた白いカードホルダー……ライドブッカーをガンモードに変えながら、さも当然と言わんばかりの声で言葉を返す。
　それと同時に、周囲の兵士を完全に滅すべく、1枚のカードを読み込ませると、エネルギー弾を連射、その、銃弾の大きさに見合わぬ膨大なエネルギーは、相手を塵1つ残さず消滅させた。
「……ま、ざっとこんなもんか」
　パンパンと手を軽く叩く様な仕草を取りながら、士はベルトを外してその変身を解く。
　その顔には、ほんの僅かにではあるが、不信感が滲んでいる。そ

れは夏海やユウスケも同じなのか、いつもよりも険しい表情で、兵士の居た跡に視線を送りながら呟きを落とした。
「今の、一体何だったんでしょう？」
「……百足だろ」
「そう言う意味じゃありません！」
夏海の言葉を軽くいなすが……それでも彼女の言わんとしている事は理解しているらしい。
自分に「黒子」と言う役割が振られた以上、てっきりここは「シンケンジャーの世界」だと思ったのだが……現れたのは以前見かけた外道衆とは異なる存在。
しかも、それと戦っていた2人はどう見ても侍と言うよりは……忍者と言う印象が強い。
――やれやれ。「侍」の次は「忍者」か――
ふぅ、と溜息を吐きつつ思う士に、吼太と七海の2人はゆっくりと近付くと、不思議そうな表情で問いかけてきた。
「あの、聞いても良いかな？」
「あなたも……ううん。あなた達も、正義の戦士なの？」
と。

一方その頃の海東大樹。
彼は今にも踊りだしそうな軽やかなステップを踏むと、手に入れた「お宝」を見つめてはフフ、と軽く笑っていた。
……そのニヤケ面は、端から見ていると、ある種不審者に見えなくも無い。
自分を追っていた3人組は、インビジブルのカードを使って撒いた。それでも、まるで自分の姿が見えているかのようにしつこく追って来られたのだが……
途中で何かあったらしい。彼らは悔しげに舌打ちをすると、別の方向へ駆けて行くのを見かけた。

流石に今回は逃げ切れないかもしれないと思っていた矢先の出来事だっただけに、自分には運が味方に付いているとさえ思える程だ。

何しろ相手は忍者だ。逃げるにしろ、一筋縄では行かない相手だと思っていたのだが。

海東の持つメダルには、それぞれ「兜」と「拳」の文字が書かれている。このメダルを、ある装置に入れると、最高のお宝とも呼べる物が出現すると言う。

「疾風と迅雷のお宝、風雷丸……まさに、僕が持つに相応しい」

止められぬ笑いを噛み殺す事無く、浮かれ気分で前に進もうと思った矢先。

海東の背後から、声が響いた。

「Ｈｅｙ、そいつはどうかな？」

「……誰かな？」

声の主を確認しようと、ゆっくりと海東は振り返る。しかし、声がしたはずのそこには誰もいない。

人の気配は無い。しかし、確実に「居る」。強いて言うなら、自分が先程まで使っていたカード……インビジブルの効果を発動している時に似ているだろうか。

恐らくは先の3人組の仲間と言った所だろう。ならば油断は出来ない。

手に入れたメダルを奪われぬようにぐっと握り締め、もう1度自分もここから姿を消すべく銃型の変身ツール、ディエンドライバーと変身に使用するためのカードを構え……

その一瞬後、自分の手の中からディエンドのカードが消えた。それが奪われたのだと気付いたのは、いつの間にか現れた「そいつ」の手の中に、ディエンドのカードが納まっていたのを見てからだった。

「なっ！？」

「ユーが何をしようとしているのかは、ミーも大方Ｕｎｄｅｒｓｔａｎｄしているさ」

「……それは僕のカードだ。返したまえ」
「ＯＫ。ただし、ユーが鷹介達にシノビメダルを返したら、と言う条件をつけさせてもらうよ」
「断る。このお宝は僕の物だ」
「Ｏｈ　ｎｏ。それじゃあ、このカードはユーには返せないな」
海東の言葉に、「そいつ」はひょいと肩を竦めながら余裕綽々と言った態度で言葉を返す。声や仕草は、どこかふざけている印象を持たせるのに、その姿には隙が無い。
これが、本物の忍と言う物なのかもしれない。
――参ったな、どうにかして僕のカードを取り返さないと――
表情には出さず、そう思った瞬間。相手はそれまでとは打って変わった真剣な声で、海東に向かって言葉を放つ。
「それに……ユーじゃぁシノビメダルは扱いきれない」
「そう言われて、引き下がる僕じゃない」
人気の無いトンネルの中。
２つの人影は、静かに火花を散らす……

第３０話：仮面と忍（後書き）

白刀：空きすぎだ、愚か者

青器：いきなり作者（たつみ）に文句を言うのは止めてあげなさい。連続出張による酔い止めの飲みすぎで、日常生活に異常をきたしているらしいんだから

白刀：しかし、以前ハニー様に頂いた「霧の森大福」が危険な事になってはいないか？　まあ、頂いたばかりの過去からかっぱらってきた物故に、危険は無いが

青器：遅くなりました事、誠に申し訳ございません。ようやく只今愛媛産のお茶と一緒に頂いております

白刀：小豆の……と言うか、餡の喰えん辰巳結愛には拷問に近い食料だがな。……で？　今回は何だ？　狼の扇獣は出なかったではないか

青器：何でも、ディケイド側の視点で１話をちょっと進めたら、意外と長くなってしまったんですって。いつだったかも同じ様なことになったと言うのに、進歩が無いわね、辰巳

白刀：ああ……確かゲキレン＆ａｍｐ；５５５の時だったな。本当に進歩の無い……

それから最後のやり取り……どうせバレているのだから、はっきりと書けばいいだろう。「そいつ」とかではなく

青器：だけど、仮面ライダー側からすれば、彼の名を知らないでし

ょう？　だからあえて書かなかったそうよ

白刀：妙な所でこだわりおって。それでは、また次回会おう

青器：……いつになる事やら

白刀：それは本人が一番危惧している事だろうな

巻之三十一：宇宙忍者と大ショッカー

なし崩し的に、と言うのはこういう事を言うのだろうか。
洞窟の中の「隠れ家」のソファに座りながら、吼太は苦笑を浮かべながらそんな事を考えていた。
マゲラッパを倒したマゼンタの戦士……自称、「通りすがりの仮面ライダー」とその仲間らしき男女を、七海がとっ捕まえ、メカニック専門の「白忍」であり、忍風館の館長の娘でもあるおぼろの呼びかけで、彼らを半ば強引にここへ連れて来て早１０分。
その間に、妙に不機嫌な鷹介と霞兄弟の３人も戻ってきたのだが……一体、彼らは何者なのだろう。
七海が彼らに「正義の戦士か」と問うた瞬間、「通りすがりの仮面ライダー」は凄まじいまでにその顔を歪めていた。
「それで、結局何者なんだよ、あんたら？」
「『仮面ライダー』と言っていたな。それは一体？」
「以前、聞いた事がある。異次元……いや、異世界とも呼ぶべき場所に、その世界を守る戦士達がいると言う話を。その戦士達を、その世界では『仮面ライダー』と呼んでいるそうじゃ」
鷹介の不審そうな声に乗るように、一甲も自身の疑問をぶつける。だが、その問いに答えたのは青年達の方ではなく、机の上でちまちまと愛らしく動き回るゴールデンハムスターであった。
無論、ただのハムスターではない。彼こそ、忍風館の館長、日向無限斎。今でこそ「訳あって」ハムスターの姿をしているが、れっきとした人間である。ちなみに、ゴールデンハムスターの声帯でどうやって人間の……しかも威厳ある「オジサン声」が出るのかは不明なのだが。
「異世界て……それ、ホンマなん？　お父ちゃん」
「ええっ！？　ハムスターが喋った！？　って言うか『お父ちゃん』！？」

訝るように言うおぼろの声に続き、背が低めの青年……確か小野寺ユウスケとか言うらしい……が、驚いたように声を上げる。

しかし一緒にいた黒子……こちらは門矢士とか言うらしい……の方は、ふぅと呆れたような溜息を吐き出すと、びしりと紅一点、光夏海と言うらしい子を指差し……

「何を驚く事がある、ユウスケ。ナツミカンの祖父さんは『イカでビール』の怪人だし、家には喋る蝙蝠がいるだろう」

「……あ、そっか」

「ちょっと士君！　お祖父ちゃんは怪人じゃありません！　ユウスケも何を納得しているんですか！」

イカでビール？　と不思議に思うが、そこを突っ込んだら負けのような気がするのか、あえて突っ込まずに鷹介はむすっとした表情で士の顔を見やる。

一方の士も、特に何を考えているのか分からない表情で、首から提げたカメラを構え、鷹介達の姿をフィルムに納めた。

だがその刹那。洞窟内に警報が鳴り響き、ジャカンジャの出現を告げ、おぼろの前にあるコンピュータの画面には、被害にあっていると思しき街の様子が映し出される。

それを見た瞬間、忍達は半ば条件反射的にその場所を確認、洞窟を飛び出していた。

「……忍者、か……」

小さく呟く士の声を、背中で聞き流しながら……

＊

鷹介達5人が、街に到着した時。既にビルはただの瓦礫と化し、濛々と上がる土煙と、小さく爆ぜる炎の音が、被害の大きさを物語っている。

後手に回ったと言う悔しさを押し殺しながらも、鷹介達はぐるりと周囲を見回し……そして、この惨状を生み出した存在を、その視

界に納めた。
「ゲラッパ！」
「マゲー！！」
それはある意味地球忍者にとって見慣れてしまったジャカンジャの下忍であるマゲラッパ。しかし、今回はそれだけでなく……
「イー！」
「イー！」
「い」に濁音が付いていそうな、何とも表現し難い声で人々に襲い掛かる、黒地に骨のような模様が描かれた全身タイツを纏った、男達の姿であった。
更にその後ろには、左目に眼帯をかけた、鮫のような顔をした宇宙忍者……暗黒七本槍の1人、七の槍サンダールの姿もある。
「待ち侘びたぞ、地球忍者達」
「まさか、俺達をおびき寄せる為に街を……！？」
サンダールの言葉に、鷹介は憤ったような声で問いかける。一方の問われた方は、それを軽く鼻で笑う。それは暗に、鷹介の言葉を認めているに他ならない。
その態度に、今にも沸騰しそうな怒りを噛み殺しつつ、鷹介がきつく相手を睨む。だが、その視線すらも遮るように、彼らとサンダールの間に、無数のマゲラッパと黒タイツの男達が壁を作った。
「物量作戦と言うのは、あまりスマートでは無いが……今回は確実に貴様らを葬りたいのでな」
やれ、と短い命令が飛び、下忍の壁が一斉に襲い掛かる。
それが合図になったかのように、鷹介達も忍刀であるハヤテ丸とイカヅチ丸を引き抜き、相手を斬り払う。
斬と言う音と共に、本体である髷を斬られたマゲラッパからは、統率を失った無数の百足が這い出し、そそくさと散っていく。
……とは言え、いつもと勝手が違う敵も居る。言うまでも無く、「黒タイツ」だ。イーイーと喚きながら、拳を繰り出し、蛮刀を振るっては彼らに襲い掛かる。

マゲラッパだけを相手にする、もしくはこの黒タイツだけを相手にすると言うのならば、然程問題は無い。しかし、相手は今、入り乱れてこちらを襲っている。

瞬時に相手を見極め、確実な一撃を食らわすのは、かなりの集中力を要し……実際の所、いつもより余分に消耗しているのがわかった。

精神力、体力に、僅かでは衰えが見え始めた瞬間。そこに生まれた僅かな隙を逃さず、黒タイツは一斉に鷹介の元に襲い掛かる。

――まずい！――

刀を構え直すが、一瞬だけ出遅れたのが自分でもわかる。振り下ろされた蛮刀を、何とか受けていなそうとした、その刹那。

鷹介の視界に入ったのは、ピンクに近い色をした一陣の風。そして、直後には黒タイツ達が弾かれたように吹き飛んで行く姿。

相手が、バイクに跳ね飛ばされたのだと気付いたのは、そこから不遜な態度の男……士とユウスケが、ゆっくりと降り立つのを見た時であった。

「士、こいつら……」

「やれやれ。大ショッカーの連中が、この世界にまで来ているとはな」

ユウスケの真剣な声に対し、呆れ声で返す士。

その表情から鑑みるに、どうやら黒タイツの方は彼らの敵と言う事らしい。

鷹介にしては珍しく、あっさりとそう納得したとほぼ同時に、士はこちらに顔を向け……またしても呆れたような声で、言葉を放った。

「お前らは『正義の味方』なんだろ？　もっとしっかりしたらどうだ？　それとも、余計なお世話だったか？」

「……いや。助かった。けど……何でかな、礼を言うのは癪に障る」

「奇遇だな。俺も礼なんて言われたくない」

「おい、士……」

「鷹介も素直じゃないなぁ。ま、お互い仲良くやろうぜ。お互い『正義の戦士』なんだから」

素直ではない鷹介をフォローするかのように吼太が言う。だが、士はその言葉に対して軽く笑うと……ベルトを腰に巻きつけ、1枚のカードを掲げた。

「『正義の戦士』？　違うな」

「ほう？　では何だと言うのかな？」

マゲラッパと黒タイツの壁の向こうで、士の否定を聞いたらしいサンダールが問いかける。一方の士は、不敵な笑みのまま……

「俺は……いや俺達は、通りすがりの仮面ライダーだ。覚えておけ！」

『変身！』

『ＫＡＭＥＮ　ＲＩＤＥ　ＤＥＣＡＤＥ』

ちらりとユウスケに視線を送った後、彼ら2人の声が重なった。

士はカードをベルトに挿し込むと同時に、電子音が響き……黒地のスーツにマゼンタ色の鎧を身に纏った姿に変わる。

一方のユウスケは、赤い、どこかクワガタムシを連想させる姿の戦士に変わった。どこと無く金属質な印象を受ける士の鎧に比べ、ユウスケの鎧はどちらかと言えば昆虫の殻に近い気がする。

「チームで戦う事」を主体に置いている自分達のスーツとは異なり、若干ゴテゴテした印象を受けるのは、おそらく彼らが「個々人で戦う事」を主体に置いているからだろう。

「仮面ライダー（オレたち）が正義の味方とは限らない。だが……俺は、全ての世界を救うと決めた。だから、ここにいる」

「俺は、皆の笑顔を守る為に戦ってる。……君達は？　『正義の戦士』だから戦うのか？」

2人の仮面ライダーに問われ、5人の忍はその言葉の意味を考える。

自分が宇宙忍者と戦う理由。それは、何故なのか。

正義の戦士だから戦う。それも立派な理由の1つだ。だが……そ

れは、自分自身の意思とは言い難い。では、自分の意思はどこにあるのか。

永遠とも思える一瞬の思考の後、それぞれは……己の心に、確固たる答えを導き出した。

単純にして明快な……「守りたいから戦う」と言う答えを。そしてそれを自覚した瞬間。彼らの胸の内がカッと熱くなり、その熱に突き動かされるように構えを取った。

人を守る力を、身に纏う為の構えを。

「忍風」

「迅雷」

『シノビチェンジ！』

疾風迅雷。素早き時の流れを司る2つの流派の忍の声が重なり、彼らの体を特殊な「忍装束」が覆った。

その勢いに、気迫に。

呑まれたのか、マゲラッパと「大ショッカー」の兵士とやらが、ビクリと体を震わせ、その動きを止めた。

「風が哭き、空が怒る。空忍！　ハリケンレッド！」

鷹介が変化したのは、空を司る動物である鷹を模した胸の模様と仮面の忍。自由に宙を舞う、赤き風。

「水が舞い、波が踊る。水忍！　ハリケンブルー！」

七海が変化したのは、水を司る動物である海豚を模した胸の模様と、仮面の忍。奔放に海を渡る、青き水。

「大地が震え、花が歌う。陸忍！　ハリケンイエロー！」

吼太が変化したのは、陸を司る動物である獅子を模した胸の模様と仮面の忍。自在に地を駆ける、黄の花。

「人も知らず」

「世も知らず」

「影となりて悪を討つ」

「忍風戦隊！」

『ハリケンジャー！　あ、参上ぉ』

歌舞伎役者のような見切りを見せて名乗りを上げたのは、疾風流忍者の3人。

例え人が、そして世が、彼らと言う存在を知らなくとも。その影となり、疾風の如き速さで悪を討ち、人の、世の、そして全ての未来を担う、「伝説の後継者」。

「深紅の稲妻。角忍！　カブトライジャー！」

一甲が変化したのは、全てを貫く甲虫を模した胸の模様と仮面の忍。影に奔る臙脂の稲妻。

「蒼天の霹靂。牙忍！　クワガライジャー！」

一鍬が変化したのは、全てを切り裂く鍬形を模した胸の模様と仮面の忍。光に負けぬ紫紺の霹靂。

「影に向かいて影を斬り」

「光に向かいて光を斬る」

『電光石火、ゴウライジャー！　見参！』

かちゃりと刀を構えて名乗りを上げたのは、迅雷流忍者の2人。

影に、そして光に潜む偽りと言う名の敵を。迅雷と言う刃を以って切り裂いて、隠された過去を守り司る「闇に生まれ、闇に生きる忍」。

人を守り、悪を斬る忍達と、己の意思を貫く仮面の戦士達の攻撃は、確固たる己の意思を持たぬマゲラッパを斬り裂き戦闘員を叩きのめす。

――先程与えたはずの疲労が、回復しているか――

確実に減ってきている下忍と戦闘員を見つめながら、サンダールはふむ、と小さく頷いた。

認めたくは無いが、仮面ライダーと名乗る存在の登場で、己の計画がある程度破壊されたと言っても良いだろう。

とは言え、最初からあの戦闘員に対して期待など抱いていなかった事も事実。やはり信用できるのは自分が飼っているモノしかいない。

「ならば、このような手はどうかな？　行け、暴扇獣ブドーギ」

「何!?」

サンダールの言葉を聞きとめたのか、一甲がそちらに振り向いた瞬間。サンダールが広げた扇から、1匹の獣が現れた。

金色の毛並みをした、狼男を連想させるその獣は、甲高い声で大きく吠えると、素早く動いてマゲラッパごと鷹介達の体をその爪で引き裂きにかかる。それに続くように、サンダールは己の刀である「赦悪彗星刀(シャークすいせいとう)」を構え、他の面々に切りかかるべくゆったりと駆け出し……

「おっと。君の相手は、僕だ」

その声が聞こえたと同時に、サンダールの足元と黄金の狼……ブドーギに向かって銃弾が放たれる。

それは流石に予想外だったのか、サンダールはらしくも無くチィと舌打ちをして距離をとると、その声の方向に目を向けた。

そこに立っていたのは1人の青年。右手で銃のような形を作り、まるでそれを撃ち放ったかのように軽く指先を上げた。

「貴様!」

「さっきの泥棒! 俺達のシノビメダルを返せ!」

「海東、お前また性懲りも無く……」

一鍬と鷹介の敵意に満ちた声と、士の呆れ声がほぼ同時に青年に向かって放たれる。

しかし青年の方は、困ったようにその顔を顰めた後、ひょいと肩を竦めるだけ。

「Oh, そんな怖い顔をしないでくれ。メダルは、ミーが取り返した」

両手を挙げ、ややオーバーリアクション気味に「海東」と呼ばれた彼はそう言うと、奪ったはずのそのメダルを一甲と鷹介に向かって放り投げて、それぞれ返却する。

それを不思議に思ったのか、ユウスケは軽く首を傾げ、シノビメダルを奪われていたと言う事実を知らない吼太と七海は今更のように驚きの声を上げ、更に一甲はマスクの下で思い切り眉を顰めた。

奪ったはずの物を「取り返した」などと表現したのだから、ある意味当たり前の反応なのだが。

そして……邪魔をされた事で多少なりとも苛立っているのか、サンダールが感情を押し殺すように誰何の声を上げた。

「……貴様、何奴？」

「フフ……ミーは通りすがりの忍者さ。Ｄｏ　ｙｏｕ　ｕｎｄｅｒｓｔａｎｄ？」

言いながら、「海東」は懐から緑色のボールのようなものを取り出す。

そしてそのボールは、鷹介達にとってよく見かける物。唯一「素顔のわからぬ仲間」の……

まさか、と言う思いが口をついて出そうになった瞬間、別の方向から、今度は水色の拳銃めいたものを持つ海東が姿を見せた。

心なしか顔を顰めているように見えるのは気のせいだろうか。

「全く、僕の姿で変な言葉を使わないでくれたまえ。それに、そのメダルはいつか絶対に僕が頂く」

「え？　ええっ！？　海東が２人！？」

おろおろと言ったユウスケに向かって、「海東」はフフ、と爽やかに笑うと、持っていたボールを構え……

「天空、シノビチェンジ！」

するりとボールの横を左手で撫で、直後それを天高く掲げる。

その次の瞬間には、「海東」の姿は緑色の仮面と金色の帷子を纏った、四方手裏剣のような模様の戦士へと変わった。

「変身」

『ＫＡＭＥＮ　ＲＩＤＥ　ＤＩＥＮＤ』

「海東」の変身とほぼ同時に、海東もまた拳銃のようなもの……ディエンドライバーと呼ばれるそれに、カードをセット。その一連の動きは、隣の「海東」が取ったポーズと全く同じ。

直後にはディケイドによく似た、シアンの戦士へとその姿を変えた。

「Ｉ　ａｍニンジャ・オブ・ニンジャ。緑の光弾、天空忍者シュリケンジャー。参上！」

「僕もまた、通りすがりの仮面ライダーだ。覚えておきたまえ」

緑とシアンの戦士の登場に、一瞬だけサンダールは忌々しげにその鋭い目を細め……しかし、それでも何か手でもあるのだろうか。

……クスリと、小さく嘲笑ったのである……

巻之三十一：宇宙忍者と大ショッカー（後書き）

白刀：また中途半端な　（ぱくぱく）

玄金：なんかね、大樹君の格好したシュリケンジャーはもうちょっとやりたかったらしいんだけど……尺の都合上でカットだって

白刀：門矢士の説教とか、無いのか？　（もぐもぐ）

玄金：強いて言うなら、「仮面ライダーが正義の味方とは限らない」とか言ってる辺りじゃない？　どう考えたって、大樹君とか「正義の味方」って柄じゃないし

白刀：……実際の所は、やはり尺の都合上か？　（がりがり）

玄金：いや、多分最初からネタが浮かばなかったんだと思う。……って言うか風虎ちゃん!?　さっきからなんで1人で頂き物のチョコレートアイス抱え込んで食べてるの!?

白刀：龍牙様からの頂き物だ。ちなみに2L独り占め中　（キーン）

玄金：そりゃ頭痛もするよね!?　って片手になんでホワイトココア!?　にきびとか口内炎とかできても知らないよ!?

白刀：脂肪分30%アイスクリームに比べればマシだ　（ぬくぬく）

玄金：……それ、高い奴じゃ!?　えーっと……ちなみに、次回の後書きゲストは？

白刀：まだ出ていない鬼にするか、それとも悪魔の闇人格にするか、悩み所だな。何しろ余った方が次の朱杖炎雀との対談になる（もぎゅもぎゅ）

玄金：……炎雀、ファイト！　それじゃ、今日はこの辺で！

白刀：ちなみに、今回のショッカー戦闘員の中身は……

玄金：中身とか言わない！　そこは次回の最後にステラちゃんが嘆いてくれる予定になってるらしいんだから！

白刀：……ああ、アレか……

玄金：遠い目ぇして言わないでぇぇぇ！！

第３２話：伝説の後継者

金色の狼……暴扇獣ブドーギは、新たに現れた緑と水色の戦士が気に入らないのか、喉の奥でグルルと低く唸ると、瞳を血走らせて真っ直ぐに２人めがけて突進してくる。

そのスピードは、先程鷹介達を引き裂いた時よりも上がっており、気付いた時には２人の体には深い爪痕が刻まれていた。

「どうした？　口だけかな？　あのような登場をしておきながら、それは無いだろう？」

いつの間に戻っていったのか、己の脇に控えるブドーギの頭を撫でながら余裕気な声で言い放つ。

その声を聞きつつ、そして倒れたシュリケンジャーを助け起こしつつ、鷹介はギリと悔しげに奥歯を噛み締める。

忍である以上、鷹介達も己のスピードには自信がある。しかし、ブドーギもまた忍獣。獣特有のしなやかさを持っている分、自分達よりも体の使い方が上手いらしい。

まして単体で惑星１つを腐らせる事の出来るサンダールの飼う獣だ、通常の忍獣よりも、更に早いのだろう。

「おい、お前ら忍者なんだろ？　分身の術とか、変わり身の術とか、そう言うのでどうにかならないのか？」

「出来るならとっくにやってる。けれど、早すぎて、抜け身の術を使う前にやられるんだよ」

不機嫌そうな士の声に、同じく不機嫌そうに鷹介も返す。

その言葉に、何かを思ったのか。士はふぅと深い溜息を１つ吐き出すと、腰のホルダーから１枚のカードを取り出した。

「……って事は、純粋にあの狼よりも上の速さで対抗すれば良いんだろ。大体分った」

「大体って……何をする気だよ、あんた？」

「決まってるだろ？　奴よりも早く動く。丁度こっちには……カブ

トとクワガタもいるしな」
　ちらりと一甲、一鍬兄弟を見やり、どこか楽しげな声でそう言う士。その言葉の意味を理解したのか、フフ、と海東も楽しげに笑い……
「成程。確かにそれなら早く動ける。それじゃ、小野田君は僕に任せたまえ」
「小野『田』じゃなくて、小野『寺』なんだけどな、俺。って言うか、何する気……」
　ユウスケの言葉を最後まで聞かず、海東は1枚のカードを持っていた銃に挿し込むと、銃口をユウスケの背中に向けた。
　それを振り向き様に見た瞬間、ユウスケは慌てたように首を横に振る。しかし海東はそれを軽く無視し……
「クワガタつながりと言う奴さ。それに、痛みは一瞬だ」
『ＦＩＮＡＬ　ＦＯＲＭ　ＲＩＤＥ　Ｋ・Ｋ・Ｋ　ＫＵＵＧＡ』
「うっわ！」
　電子音とユウスケの悲鳴が同時に上がる。その直後、ユウスケの体はふわりと宙に浮き……「ありえない」としか言いようの無い変形を見せた。
　人体の構造……特に股関節脱臼は免れないであろう変形は、ユウスケの姿を人間大のクワガタムシのような姿に変えた。
　どこと無く、一鍬のシノビマシンを小さくしたようにも見えるそれは、一瞬だけ恨めしげに海東の方を見やると、すぐさま「クワガタつながり」のもう1人……つまり、クワガライジャーこと一鍬をその背に乗せ、ブドーギめがけて一直線に飛ぶ。
　一鍬とてその変形に戸惑っていたのだが、今はそれを気にしている場合では無いと理解しているためか、すぐに自分の武器であるスタッグブレイカーを構え、ブドーギの体を捉え、電撃を与える。
「グゥ……ヲォォォン！」
　上半身に与えられる電撃と、下半身に与えられる強力が苦しいのか、ブドーギは大きく吠え、必死にその2つの鍬形の牙から逃れよ

うともがく。
　爪を振り回し、膝をクウガゴウラムの顔面に叩きつけるべく折り曲げ……その瞬間、２種の牙はブドーギの体を解放した。
　……遥か、上空で。
　それ故に、ブドーギの体は重力に逆らえずドスンと音を立てて大地にめり込む。その隙を突くかのように、今度は一甲がイカヅチ丸でブドーギの爪を切り裂き、返す刀で相手の腹を薙ぐ。しかし、腹への一撃は皮１枚を掠めただけで、深手とまでは言えない。
　逆にその攻撃が、さらにブドーギの怒りに油を注いだらしく、相手は血走った目で一甲を睨みつけ、距離を詰めようと１歩退いた……瞬間。
「それじゃ、今度はカブトつながりだ」
『ＫＡＭＥＮ　ＲＩＤＥ　ＫＡＢＵＴＯ』
　トントンとカードの縁を叩き、今度は士が自分のベルトにそのカードを差し込む。同時に電子音が響き……彼の姿を、赤い甲虫を連想させる戦士に変えた。
「こっちは赤だからな。普通のより３倍早い」
『ＡＴＴＡＣＫ　ＲＩＤＥ　ＣＬＯＣＫ　ＵＰ』
　パンパンと軽く手の埃を叩くような仕草をした後、士はもう１枚のカード……異なる仮面ライダーの力の１つである「クロックアップ」を使い、ブドーギすらも追いつけない高速の世界へ突入し、拳を、膝を、相手の体に叩き込んでいく。
　ブドーギの主であるサンダールすらも、見えるのは士の赤い影のみ。ブドーギの体は宙を舞い、着地する前に別方向に向かって吹き飛ばされる。
　そして、士の赤い影が止まるのと、ブドーギが派手な土煙を立てながら地面に落ちたのはほぼ同時。
　ようやく高速の世界から帰還した赤いカブトの戦士は、一瞬灰色のモザイクがかかったかと思うと、すぐさま元のマゼンタ色の戦士……ディケイドへと姿を戻した。

爪を斬られ、地面を転がるブドーギを見下ろしながら……しかしサンダールの表情は、追い詰められている者のそれでは無いのが見て取れる。

まだ、何か隠しているような……

ハヤテ丸を構えながら、鷹介がそんな風に思った瞬間。サンダールが懐から、黒い何かを取り出した。

「まだだ。まだ終わらんよ！」

『ＺＯＲＵ　ＴＡＩＳＡ』

サンダールが、それ……ある世界に蔓延る、「人を怪人に変えるツール」とも呼べる「ガイアメモリ」のスイッチを入れた瞬間。

「ゾル大佐」と言う音声が響き、そのままそれをブドーギに向かって突き立てた。同時に、ブドーギの姿が僅かにではあるが変わる。

全身を覆っていた黄金の体毛は、一部が黒に染まって軍服のように変質、右目には黒い眼帯、そして失った爪の代わりとでも言うかのように、右手には鞭が同化していた。

その変身……いや、「変質」が終了した途端、ブドーギはギロリと土を睨み付けると、吠えるように叫んだ。

『おのれディケイドォォッ！　服装の乱れは精神の乱れェェ！』

「嘘、喋った！？」

「ゾル大佐……成程、鳴滝さんか。それにしても、支離滅裂だね」

七海の驚愕の声と、海東の苦笑混じりの声も響く。

しかし次の瞬間、「ゾル大佐ドーパント」とも呼べるブドーギの鞭が、９人めがけて奔った。

元々早さに定評のあるブドーギ。そこにガイアメモリの力も加わった為か、１本しかないはずの鞭が、ほぼ同時に９人の体を直撃、その体を大きく吹き飛ばす。

それも、１発ではない。ほぼ同時に、最低でも６発は喰らっているのがわかった。

ユウスケも、その攻撃で変形解除されたらしく、普段のクウガとしての姿に戻ってしまう。

「つ、強い……」
「まだこんな隠し玉を持ってたなんて……！」
先程までは優勢だったはずなのに、いつの間にか逆転されている。
サンダールの余裕は、このガイアメモリと言う切り札があった為だろう。一筋縄ではいかない存在だとは知っていたが、今日程この存在の恐ろしさを痛感した日は無い。
「甘いな、地球忍者達よ。戦いとは常に二手、三手先を読んで行う物だ」
ブドーギと共にゆっくりとした足取りで彼らに近寄っていくサンダール。だが、それもある程度までの事であり、決してハヤテ丸やイカヅチ丸の届く範囲には寄らない。
この距離からじわじわと、嬲り殺しにしようとでも考えているのか。ブドーギが再び鞭を構え、サンダールも「赦悪彗星刀」を構えて彼の業の1つ、「縄頭蓋」を放とうとした、まさにその時。
「フフッ」
この場に、この状況に見合わぬ笑いが、海東の口から漏れる。
よく見れば、その隣で伏しているシュリケンジャーもまた、笑いを堪えているかのようにその肩を震わせていた。
「……何がおかしい？」
「『戦いとは常に二手、三手先を読んで行う物』……だったかな？」
「それなら、ミー達の勝ちだ」
「何？」
端から見れば、どう考えても不利なはずなのに。それなのに、海東とシュリケンジャーの声は妙に自信と確信に満ちている。
――まだ何か策を持っていると言うのか？――
2人の様子に嫌な物でも感じ取ったのか、サンダールは思わずその顔を顰めてその場から数歩後ろに下がる。それに倣うように、ブドーギも1歩だけ下がった。
だが、それこそが狙っていた物だとでも言うかのように、海東は思い切り顔を上げると、楽しげな声で言葉を放った。

「ナツメロン！　今だ。お見舞いしてやりたまえ」
「光家秘伝、笑いのツボ！」
「何！？」
いつからそこに居たのだろうか。
サンダール達の背後には、純白の女戦士が立っていた。その認識とほぼ同時に、彼女は持っていた細剣の石突部分をブドーギの首筋に押し込んだ。
刃ではなく、石突と言う部分に引っかかりを覚えはするが、そこは数多の惑星を腐らせてきた宇宙忍者の勘なのか、彼女の攻撃を喰らうまいと、大きく跳び退って距離を取る。
一方、彼女の「攻撃」を喰らったブドーギはと言うと……その場で笑い転げていた。
おまけにその「強制された笑い」が引鉄になったのか、ブドーギの体からはガイアメモリが抜け落ち、バキンと音を立ててその場で砕け散る。
そして、メモリブレイクされた物によく見られる事だが……まるで力を吸い取られたかのように、ブドーギはその場で突っ伏して動かなくなった。
痙攣をしているので、生きてはいるのだろうが……立ち上がるだけの力は無いだろう。
「あなた、夏海ちゃんなの！？」
「はい、七海さん。私も……士君達と同じ、通りすがりの仮面ライダーですから」
倒れていた面々をゆっくりと助け起こしながら、白い戦士……仮面ライダーキバーラこと、夏海が七海の問いに答える。
「しかし流石はナツミカン。ガイアメモリもイチコロとはな」
「た、偶々です！　士君は私を何だと思ってるんですか！？」
「凶暴で凶悪で、何かと言うと親指を炸裂させる柑橘類」
「……どうやら士君とは、じっくりと話し合わないといけないみたいです」

「ま、最後に『1番信頼できる仲間』ってのを加えてやっても良いけどな」

ポン、と夏海の頭を軽く撫でながら、士は言葉を付け加える。

そんな彼を見やりながら、後ろではユウスケが仮面の下で微妙ににやけ顔をしていた事を、ここに追記しておこう。

彼女の登場で、一瞬緩みかける空気。しかしそれを締めたのは、悔しげに目を光らせているサンダールだった。

「馬鹿な、いつの間に！」

「ああ、その事か。実は君の前に現れる直前、僕のインビジブルのカードを……」

「ミーの超忍法・技移しで彼女に移して、万一に備えて待っていてもらったのさ」

もっとも、この作戦はサンダールの索敵用忍法である『凶ザ目』を使われた場合、確実に失敗に終わっていただろう。

……だからこそ、シュリケンジャーと海東は、自分達と言う存在を印象付けた。シュリケンジャーが海東の格好をし、「2人の海東大樹」と言う強烈な印象を与え、そちらに意識を向けさせ、もう1人の隠れた味方をこっそりと配置する。

手品師などがよく使う手を講じたのだ。

策士であるサンダールに対して、この手段が上手く行くかは、ある意味賭けではあったが。

そしてサンダールもまた、気付かなかったと言う失態に憤慨し、ギシリと奥歯を噛み締めていた。

「貴様ら……よくも！」

「サンダール……覚悟！」

チャキ、と剣を構え直した鷹介が言葉を放つ。

この場で戦える敵は、現在サンダールのみ。ブドーギは恐らくまだ立てないだろうし、何より人数を考えても、こちらの方が圧倒的有利。それを利用しない手は無い。

他の面々も同じ事を考えているのか、各々の武器を真っ直ぐにサ

ンダールに向けて構え……
その、次の瞬間。
どこからとも無く、声が響いた。
「ほう……可能性を考慮してはおりましたが、やはりメモリブレイクされましたか」
その言葉が終わると同時に、サンダールの影からジワリと滲み出るようにして、1人の男が現れた。
スーツ姿の、ごくごくありきたりな印象の男性。これと言った特徴も無く、明日にでもその顔は忘却の彼方へと消えてしまうだろう。しかし、身に纏う雰囲気は「ありきたり」からは程遠い。
「お前……一体何者だ!?」
「ああ、失礼。私はエステル。しがない死の商人でございます。以後、お見知りおきの程を」
濃厚な闇の気配に反応し、鷹介の声にも無意識の内に緊張が混じる。しかしその緊張を気にも止めず、相手……エステルと名乗ったそいつは、優雅な仕草で一礼をした。
視線こそこちらに向けられているが、相手にされていない……そんな印象さえ受ける。
そもそも「ただの商人」が、宇宙忍者の影から現れるなどと言う芸当ができる訳が無い。
見た目通りの存在ではないと、サンダールを含むその場の全員が思う。
一方のエステルはそんな緊張感などまるで気にしていないかのように、ぴくぴくと痙攣するブドーギと、その脇に転がる破壊されたガイアメモリを交互に見比べると、呆れ混じりの溜息を吐き出した。
「お試し、と言う事でお渡ししていたガイアメモリが、あまりにも不甲斐無い結果を出しましたのでね。汚名返上する為にも、サービスをと思いまして。サンダール様には余計なお世話かも知れませんが」
にこりと、いっそ清々しいまでの笑顔を浮かべ、エステルは言葉

を紡ぐ。直後、彼はパチンと軽く指を鳴らし……
「ではビービ虫。行って差し上げなさい」
その声に応える様に、虚空から眼球に蝙蝠の羽が生えたような、何とも言い難い生物が、一斉にブドーギに群がり、止まった刹那。ブドーギは大きく一声吠えると、その体を５０メートル程の大きさへと変えた。
それが、巨大化したのだと士達が気付いた時には、鷹介達はおぼろに向かってシノビマシンの発進を要請、それぞれのマシンに乗り込んでいく所だった。
「なんか……異様に大きいんですが」
「彼らにはあれが日常茶飯事なのか？」
「らしいな。……で？　俺達の相手はお前らか？」
驚くユウスケと夏海に返しつつ、視線を巨大化したブドーギから、エステルとサンダールに移して、士はライドブッカーを構えて問いかける。
同様に海東もまた、ディエンドライバーの銃口をサンダールに向けている。
だが……銃口を向けられているにも拘らず、サンダールはもはやこの戦いには興味ないと言わんばかりに刀を鞘に納めると、溜息混じりに言葉を吐き出した。
「興が殺がれた。私は戻らせてもらう」
その言葉が終わると同時に、サンダールの姿は煙の如く掻き消える。恐らく、少し前から「ここに居たサンダール」は彼の分身か何かだったのだろう。
やはり喰えない鮫だと心の中でのみ思いつつ、４人はその視線を、残されたエステルに向ける。一方の向けられた方は、やれやれと言わんばかりに肩をひょいと竦めると、彼らとの距離を取るかのように、大きく後ろへと跳び退った。
「そうですねぇ……相手が『世界の破壊者』と『死神の神子』、さらには『終焉』と『解読』も居るこの状況では、いくら私と言えど

分が悪い。既にある程度の利益は出ましたし、ここでお暇させて頂ます。ですがその前に、お近付きの印にこちらを差し上げましょう。どうせ私では使えません」

そう言いながら、エステルは懐中から1枚のカードを取り出すと、それを士に向かって投げ渡す。

描かれているのはマゼンタ色の球体が、機械の巨人の胸部から飛び出している絵だ。

「……あなたは、敵じゃないんですか？」

「敵か味方かと問われれば間違いなくあなた方の敵ですよ。しかし、私自身は儲かればそれで良い。金になるのでしたら、敵にもコネを作ります」

あくまでも、ビジネスライクと言いたいのか。エステルはにこりと綺麗な笑顔を浮かべると、1枚のカードを士に向かって放り投げる。同時に、ジワリと滲み出す闇の中へとその身を沈め……

「ああ、そうだ」

思い出したようにぽんと手を叩くと、彼は軽く眦を下げると、心底申し訳なさそうな声で言葉を放つ。

「非常に厚かましいお願いなのですが……もしも『魔術師（マグス）』いえ、鳴滝に会うようでしたら、是非とも『あなたに対する利子は10秒1割ですので』とお伝え願えませんか？」

「うわ、高っ！」

「何を仰いますか。私への支払いを踏み倒すつもりの輩になど、それくらいの暴利で充分です。……見つけ次第、皆様の前で、骨の髄まで絞り上げてご覧に入れますよ」

「クックック」と言うよりはむしろ「んっふっふ」と笑いながら。今度こそエステルは闇に溶けてその姿を消し去る。

後に残された4人の仮面ライダーは、仮面の下でぽかんとした表情を作り……

「鳴滝の奴……あいつから何を買ったんだ……？」

「って言うか、踏み倒すのか……」

と、やや呆れの混じった言葉を交わすと、彼らは視線を上に向けた。

＊

「流派超越」
『風雷合体！』
「風・雷・合・覇ァ！」
『轟雷旋風神、推参！』
「機将変形！　天空神、推参！」
一方巨大化したブドーギと対峙する忍者達は、海東から取り返したメダルで轟雷旋風神に合体、シュリケンジャーはメカを天空神に変形させていた。
巨大化した事で本来の獣性を取り戻したのだろうか、ブドーギは血走った眼を2体のメカに向けると、瞬時に間合いを詰め、カラクリ巨人の腕を、脚を、斬り裂いていく。
「うわぁぁぁっ！」
「やはり、早い！」
轟雷旋風神の場合、パワーと重量はあるが、疾風流本来の機動性は損なわれる。パワーで押し切るにも、攻撃が当たらなければ意味が無い。
無論、シュリケンジャーの操る天空神と、リボルバーマンモスの手助けはあるが、それでもブドーギの猛攻は止む事は無い。
人間大だった時に断ち切ったはずの爪は復活しているし、巨大になった分、高速で移動する際に生まれる衝撃波も大きい。それはまるで、大気が鞭となって、彼らの体を叩いているようだった。
轟雷旋風神の巨体すらも、攻撃の度にぐらりと傾ぎ、援護に回る天空神も衝撃波に巻き込まれてコントロールを失いそうになる。
それでも、彼らは諦めない。
――決して諦めない。されば勝利はやってくる――

かつて、地球を守護った先輩戦士の言葉。それを胸に刻み込んでいるから。

「俺達は……伝説の後継者なんだ！　こんな所で負けてられるかぁぁぁ！」

鷹介が叫ぶ。それに応えるかのように、轟雷旋風神は己の持つ絶対究極奥義の構えを見せた。

しかし……エネルギーをチャージしきるよりも先に、ブドーギの突進が轟雷旋風神に炸裂。真正面から喰らったせいか、折角チャージしたはずの力は霧散し、轟雷旋風神自身も派手に大地に倒れこむ。

「ハリケンジャー！　ゴウライジャー！！　……っくぅっ！」

倒れた轟雷旋風神を……そしてその中にいる5人を案じ、思わずシュリケンジャーも声を上げる。とは言え、彼自身も衝撃に煽られ、体勢を崩す。

――決して諦めない。でもこの状況……どうすれば良い！？――

その場にいた忍者の、誰もが焦りと共に心の中でそう思った刹那。

自分達の背後に、気配が生まれた。

正確には、鷹介、七海、一鍬、そしてシュリケンジャーの背後に、と言った方が正しいかもしれない。思わず振り返ると、そこには……士、夏海、ユウスケ、そして海東がそれぞれの後ろに立っている。

「やあ、シュリケン君。ところで、君達は『伝説を継ぐだけ』で良いのかい？」

「Ｗｈａｔ！？」

問われた意味を理解しきれず、思わずシュリケンジャーは海東の方を振り返りそうになる。もっとも、ブドーギは攻撃を継続しているため、振り返ってその隙に直撃……などと言う愚は犯さないが。

「伝説って、継ぐだけの物じゃないと思います」

「え？」

「それってどういう意味、夏海ちゃん？」

七海を助け起こしながら言った夏海に、吼太と七海も疑問の声を上げる。だが、その問いに答えたのは……一鍬の後ろに立つ、ユウ

スケだった。
「伝説は『継ぐ物』じゃなくて、『塗り替える物』だろ？」
「伝説を……」
「塗り替える、だと？」
「ああ。伝説は、継ぐだけじゃ意味が無い。伝説を継いで、塗り替えた時、はじめて意味を持つ」
最後に士に言われ……鷹介は軽く目を伏せる。
「伝説の後継者」を名乗り、それに恥じない働きをする。それで良いと思っていた。
だが……それでは駄目なのだ。伝説を継ぐだけでは、ただの二番煎じ。前人の偉業を称え、その上でそれを乗り越える。そうする事で、初めて自分達の「伝説」を作る事が出来る。
「……俺達は……俺達は、伝説の後継者なんだ！　だから……だから、その伝説を塗り替える為にも、負けられない！」
「なら、手始めに渡されたカードでも使うか。……かなり胡散臭いけどな」
鷹介の叫びに応えるように、士は先程エステルに投げ渡されたカードの縁を軽く。
彼の言葉通り、「敵から渡された物」と言う点において、かなり胡散臭いのだが……それでも、万に一つでもそこに可能性があるのなら、そこに賭けてみる。
……士が……そして鷹介達が、今までそうして来たように。
「行くぞ。心の準備はいいだろうな？　『伝説の後継者』」
「ああ、新しい伝説を作ろうぜ！　『通りすがりの仮面ライダー』」
『ＡＴＴＡＣＫ　ＲＩＤＥ　ＫＡＲＡＫＵＲＩ　ＢＡＬＬ』
「これは……新しいカラクリボール！？」
マゼンタ色に輝くそのボールから飛び出したのは、士が持つケータッチを巨大にした物のように見える。
ただ、士が持つ「本来のケータッチ」とは異なり、描かれている文様は８つ。それぞれのシンボルマークと、エンターキーとクリア

キーらしい。
　そう認識すると同時に、轟雷旋風神の指先がそのマークをなぞり始めた。
『ＲＥＤ、ＢＬＵＥ、ＹＥＬＬＯＷ、ＫＡＢＵＴＯ、ＫＵＷＡＧＡ、ＳＨＵＲＩＫＥＮ』
『ＦＩＮＡＬ　ＳＨＩＮＯＢＩ　ＣＨＡＮＧＥ』
　士達にとっては聞き慣れた……そして鷹介達にとっては馴染みの無い音声が響いた後、轟雷旋風神の……そして、天空神の姿が輝き始めた。
　トライコンドルを呼んだ訳でも無いのに、轟雷旋風神は天雷旋風神に変形し、そこから更に追加装甲のような物が加わった。
　右肩から左肩にかけて、カラクリボール１番から６番までのと９番から１４番までの中身の描かれたカードが上下２列に並び、７番、８番が合体した風雷丸が描かれたカードは腹部に、そして１５番から１７番までが合体したトライコンドルが描かれたカードは他のカードを見守るかのように、頭上で輝いていた。
「いよっしゃぁっ！」
『天雷旋風神、コンプリートフォーム……推参！』

「な、何と！」
「お父ちゃん、そないに驚かんでも。ま、あたしはこないなると思とったよ」
　洞窟の中で、「天雷旋風神・コンプリートフォーム」の登場を見て驚くハムスター館長。それに比べ、おぼろの方はのんびりとお茶を啜り……そして、カメラ目線で一言。
「……スペシャルやしな」

　そんな幕間はさて置き。天雷旋風神・コンプリートフォームは…

…明らかに先程よりも大型になったにも拘らず……翼が生えたかのような軽やかな動きでブドーギとの距離を縮め、右拳を相手の頬に叩きつける。

動きは軽いが、攻撃自体は重いらしい。今まで吹き飛ばす側に立っていたはずのブドーギが、今度は吹き飛ばされる側に回り、ドォンと派手な音と共に地面に伏す。

「Ｏｈ……機体が軽い！」

「だが、力は衰えていない。むしろ上がってすらいる」

「これが……『伝説を塗り替える力』！」

ぐっと両の拳を固め、その力を実感するかのように鷹介達が呟く。

おまけに、この姿になるのは初めてなのに……それでも、彼らには理解出来る。コンプリートフォームと化した今の天雷旋風神は、全てのカラクリボールの力を備え、使う事ができるのだと。

それ故に……必殺技もまた、全てのカラクリの力を使うと言う事実も。

「さて、そろそろ止めと行くか」

「よぉし！　世界超越！」

『ファイナル究極奥義（アタックライド）！　ディメンジョンカラクリストライク！！』

彼らの宣言に合わせるかのように、天雷旋風神のレリーフを象ったレリーフが、一直線にブドーギに向かって降りる。

そのエネルギーに拘束でもされたのか、ブドーギは悔しげな声で吠えながらも、そのカードの列から逃れる事が出来ず、ただその場でもぞもぞと体を捩るだけ。カラクリの形を模したエネルギーが、次々とブドーギの体を襲い……

そして最後に、上空に飛び上がった天雷旋風神・コンプリートフォームの蹴りが、その体を貫き……轟音と共に、暴扇獣・ブドーギはその身を爆散、後に残ったのは、金色の毛が一筋だけであった……

＊

「……いつの間にショッカー団員まで売ったのだ、エステル」
帰ってきたエステルを真っ先に出迎えたのは、爪牙の放った呆れ混じりの言葉であった。その後ろには、エステル自身と「もう1人」を除く面々が、何とも言えぬ表情で控えている。
それに対し、エステルは心底疲れたと言わんばかりに専用のソファに身を沈め、彼らしからぬ乱暴な仕草でネクタイを外すと、深い溜息と共に答えを吐き出した。
「団員は売っていませんよ、爪牙。まあ……スーツは売りましたけど」
「……って事は連中の中身はマゲラッパと同じってか？」
「いいえ天狼。もう少し嫌悪感をもよおすモノ……と聞いていますが？」
「ムカデより、嫌悪感？　……アレか……」
「ああ！　台所や風呂場に出没する、無条件に女性に恐怖感を与える、あの黒光りする虫ですね！　人によっては油虫って呼ぶ！　一般的には『御器齧り』って……」
「いぃやぁぁぁぁぁっ！　エステルたん、連れて帰って来てないでありんしょうね！？」
「彼らって、鞄に潜り込んで移動するって聞いた事ありますよ！」
「いやもぉ何故にズヴェたんはそんなに楽しそうなんでありんすかぁぁぁぁぁ！！」
「ゴ」で始まる家庭内害虫の話で盛り上がりを見せる……と言って良いのか微妙な線だが、とにかく妙に騒がしくなり始めた5人に視線を送り……そして、再びエステルは溜息を吐き出した。
……最も騒がしい「最後の1人」の帰宅に気付いたから。
「Ｈｅｙ、俺抜きで随分楽しそうじゃないＫａ！　混ぜてくれよ、Ｓｔｅｌｌａ（ステラ）」
「鬼宿（きしゅく）、煩いですよ」
「Ｗａｏ！　不機嫌だねぇ。おまけにかなり疲れてＲｕ」
「……誰のせいだと思っているんですか、あなたは」

最後の1人、鬼宿と呼ばれたその存在は、耳まで裂けた口の端を更に吊り上げ、楽しそうに肩を竦める。

額には1本の角、顔は赤く、伝記で見かける「鬼」に見える。ただ……その格好は、黒い皮に金糸で虎の刺繍が施されているジャンパーに、ケミカルウォッシュのジーンズ、そして濃茶色のロングブーツと言う、そこそこファッショナブルに思えなくも無い服装ではあるが。

そんな彼の登場にようやく気付いたのか、他の面々もジトリと冷ややかな視線を彼に送り……

「元々、鬼ぃたんがあまりに遅いから、余計にエステルたんの機嫌が悪いのでありんす。しかも、超忙しかったでありんすよ～」

「……鬼宿。要・反・省。俺達は、苛立ったエステルに、八つ当たりをされた、だけ。彫刻刀……取り上げられた」

「今更のこのこ現れるとは、我を差し置いて良い御身分だな。下準備は済んでいるのであろう？　ならばさっさと行って来てはどうなのだ？」

「居なかったら居なかったでちょいと寂しいが、居たら居たで煩ぇんだよな、鬼宿」

「Ｗｈａｔ！？　何（なに）Ｋａ、これは最近流行の村八分（ハブ）られてるって奴Ｋａ！？　それともＩＺＩＭＥ！？　真面目な爪牙やＥｔｏｉｌｅ（エトワール）ならともかＫｕ、天狼やＳｔｅｌｌａ（ステラ）まで俺の敵Ｋａ！？」

「だ、大丈夫です！　どちらかと言えば、その……僕の方が無視されている率が、その、た、高いですから！」

「Ｚｖｅｚｄａ（ズヴェズダ）、それは慰めになってねぇＹｏ。……でもまあ良いＳａ、確かに俺もゆっくりしすぎたと思ってたトコだしＮａ」

唐突に現れ、そして怒涛の仲間内からの批難を浴びながらも、鬼宿は明るく前向きに、ＨＡＨＡＨＡと、ある意味気色悪い笑い声を上げてくるりと踵を返す。

……その目尻にうっすらと涙が浮かんでいるのは、恐らく気のせいでは無いだろうが。

「……せいぜい『皇帝に愛された子』達にはお気をつけなさい。何しろこちらのメモリにあわせた戦士を送って来ているようですからね」

「安心しＮａ、Ｅｓｔｒｅｌｌａ（エステル）。連中はしっかりと閉じ込めておくＳａ。この、『Ｍのメモリ』で……Ｎａ」

第３２話：伝説の後継者（後書き）

白刀：チッ

シュテルン：オイ待てテメェ、いきなりの舌打ちとは、いい度胸じゃねぇか、この腐れ腹黒猫がぁっ！

白刀：黙れ闇人格。作者の思いつきで途中から作られたキャラクターの癖に、いけしゃあしゃあと読者様からの頂き物を貪り食いおってちなみに今回は緑紫混離様より頂いた特製マカロンを、青器龍水秘蔵のニルギリを勝手にパクって頂いている。「ニルギル」とは、現地の言葉で「青い山」と言う意味だそうだ。つまりニルギリは、「紅茶のブルーマウンテン」と言ったところだな

シュテルン：何だ、その役に立たねぇ豆知識。……身内からパクるテメェに、「いけしゃあしゃあ」とか言われる筋合いはねぇよってん？　「いけしゃあしゃあ」……シャア……何か今回あったな、「赤は3倍早い」とか、「戦いとは常に」云々ってヤツ

白刀：うむ。最初に「黄金オオカミ」に決めた時、「扇獣で～、金色だから両肩に百とか～」と、阿呆な妄想全開で書こうとしていたらしいぞ

シュテルン：元ネタの方はよく知りもしねーのに、何をやろうとしてやがる、あのカスがっ！　連邦の白い悪魔とか、ジオンの赤い彗星とか、いい加減そのネタから離れやがれ！　つか今回の必殺技も語呂悪すぎだろ！？

まあ良い、自己紹介だな。俺はシュテルン。階級は「星の零」……つまるところ、あのド生意気な商人ふぜいよりも格上だ。普段はズ

ヴェズダの中で眠ってる。だから外見はズヴェそのものだ。ちなみに仮の名はインフェルシアの「無幻神」。冥府の神のロストメンバー……みたいな扱いだな
あと、俺の事を「闇人格」なんて呼ぶが……実際は実体を持たない魂だけの存在であって、ズヴェの「別人格」じゃぁねぇ

白刀：……つまり、「２２の神々版イマジン」と言う訳だな

シュテルン：言いえて妙なだけに、余計ムカつく表現だな、毛だけ白い黒猫

白刀：……確か貴様、１週間のうち２０分しか行動できないとかいう設定だったな、引き篭もり

シュテルン：俺がフルで力使ったら、ズヴェの体がもたねーんだよ、このウザゲス猫
ちなみに、シュテルンってのはドイツ語の「Ｓｔｅｒｎ」。これも相変わらず「星」その物の単語だな。略して「シュタ」とも呼ばれてるが……別に呼び名なんざどうでも良いな

白刀：では、親愛の念を込めて、シュタたんと

シュテルン：……テメェにそう呼ばれると果てしなくイラっとするのは何でだろうな
さて、次回はやっと煩い馬鹿鬼の暗躍……ガオレンジャー&ａｍｐ；龍騎になる訳だが……
……ヤベ、眠ぃ。おかしいぞ、２０分経って……ねぇ、はずなのに……

白刀：……ふむ、エステル特製の睡眠薬は、シュタには効くと

シュテルン：テメェ！　ふざけた真似、を……　（ぐー）

白刀：さてと、ゲストも落ちた事だし、今日はこの辺にしておくか。

では、また今度

Ｑｕｅｓｔ３３：鏡獣、魅せる！（前書き）

別の意味でＥｐｉｓｏｄｅ　ＷＨＩＴＥ。
ちなみに今回と次々回は、地の文はジャムおじさんボイスで脳内再生プリーズです　（丸投げた！！）

Ｑｕｅｓｔ３３：鏡獣、魅せる！

「きゃあ！」
「ホワイト！！」
必死に手を伸ばすガオホワイトと、彼女の手を掴もうとする仲間達。
しかしその手は、あと少しと言うところで届きません。ガオレッドの爪と、ガオホワイトの爪が微かに触れるだけで……しかし次の瞬間には、ガオホワイトの姿は、仲間達の目の前から消えてしまったのです。
目の前に居る、オルグの攻撃によって。
そのオルグの両脇には、ヤバイバとツエツエの2人が、おかしそうに笑いながら立っています。
一体、何があったと言うのでしょう。
そして、ガオホワイト……大河冴は、一体どこへ消えてしまったと言うのでしょうか。
それを知る為に、私達はほんの少し、時間を遡る事にしましょう。

うららかな青空の下、天空島ではパワーアニマル達とガオレンジャーは、久し振りに穏やかな昼下がりを過ごしていました。
ハイネスデュークであるウラを、新たな仲間……ガオシルバーと共に倒してから数日。このところ、オルグが鳴りを潜めていた事も、大きな要因なのでしょう。
「ホント、良い天気だなー。……シルバーも天空島に来れば良いのに」
ぐっと大きく伸びをしながら言ったのは、赤き戦士であり、ガオレンジャーのリーダーであるガオレッドです。そんな彼の声に同意するかのように、崖の上では彼の相棒とも言えるパワーアニマル、

ガオライオンが雄々しい咆哮を上げています。
千年の時を経て、現代に蘇ったガオの戦士であるガオシルバー。彼には戦士として、そして仲間として、レッドは色々と話をしたいと思っています。
しかしシルバーは、レッドをはじめとする5人と距離を取るかのように、この天空島ではなく地上の……どこか人目につかない場所に居る事が多かったのです。
それは多分、理由があったとは言え、「狼鬼」と言う名のオルグとして彼らの前に立ち塞がり、彼らを苦しめてしまったと言う事実と、「1人だけ平安人である」と言う思いが、5人の前に居辛いと感じているからなのかも知れません。
――俺達、仲間なのになぁ――
「……でも、きっといつか、シルバーも俺達と一緒に、天空島で過ごしてくれるよな」
半ば自分に言い聞かせるように言ったレッドの言葉に、ガオライオンも再び同意の咆哮を上げてくれます。
ガオライオンもまた、散り散りになっている他のパワーアニマル達と共に、この天空島に居たいと思っているのかも知れません。
その思いを感じ取り、レッドがふ、と笑った瞬間。ガオの巫女であるテトムの、緊張感溢れる声が響き渡りました。
……邪悪な衝動を感知した、と。
ある意味、久し振りとも言えるオルグの出現に、ガオレンジャーは顔を引き締め……そして、オルグがいるであろう場所に向かったのでした……

＊

一方、こちらは鬼洞窟。その中では、ピエロのような顔をしたデュークオルグ、ヤバイバと、人間の女性によく似た顔をしたデュークオルグ、ツエツエが困ったようにうろうろとその場を行ったり来

たり。
　それもそのはず。次のハイネスデュークが見つからないのです。オルグはある意味、ハイネスデュークの存在を中心に集っている様な物。次のハイネスデュークがいないと、オルグ自体が纏まらないのです。
　下手をすると自然解散、と言う事になりかねません。
「ガオレンジャー共が6人に増えちまったって言うのに、こっちは次のハイネスが見つからないなんてよぉ……これは、流石にヤバイバ」
　甲高い声で、ヤバイバは心底困ったように唸ります。それに同意するように、ツエツエも深い溜息を吐いては、この鬼洞窟にいるオルグに目を向けていました。
　集ってくる魔人はいるものの、どう考えてもガオレンジャーに対抗しきれるとは思えない者ばかり。つまり、「使えない」と思わされる者ばかりなのです。
　ハイネス不在、力あるオルグも決定的に不足。この不景気を絵に描いたような状況では、溜息も漏れると言うものです。
　そんな中……1人だけ、妙に明るいオルグがいます。
　額の角の本数は1本。と言う事は、ヤバイバ達と同じデュークオルグなのでしょうか。真っ赤な顔に、耳まで裂けた口、金糸で虎の刺繍が施されたジャケットは、一体どこで手に入れたと言うのでしょう。
「Ｈｉ、ヤバツエコンビ。辛気臭いＦａｃｅしてるＮａ」
「お前は……」
「ゲ。鬼宿」
　ニヤニヤと笑う鬼宿と言う名のデュークオルグに対して、ヤバイバとツエツエは何故かとても渋い顔で返しています。
　過去に何かあったのでしょうか。妙に温度差があるのは、気のせいでは無いのでしょう。
「それで？　今更現れて、何の用なのよ？」

「Ａｈ－Ｈａ！　なぁ、あっちにいるオルグは、『サンメンキョウオルグ』だよＮａ？」
「おうよ。それがどうした？」
鬼宿の指の先にいるのは、その名の通り三面鏡らしいオルグです。鏡の部分を頭部に持ち、化粧台の縁の部分に彼の目があります。
とは言え、それ程強くは無いのでしょうか。他のオルグ達から、ただの姿見扱いを受けているようです。
「奴にＰｒｅｓｅｎｔしたいモノがあるのＳａ」
「あんな奴に？」
「何を？」
「Ｐｏｗｅｒ　Ｕｐ　Ｉｔｅｍ！　奴の力をＭａｘまで引き上げられるＺｅ」
訝る２人に対し、鬼宿は上着のポケットの中から、細長い棒状の何かを取り出して見せます。
本体の色は銀で、微かに射し込む光を反射して輝いていますし、中央付近には反射した光のような絵で「Ｍ」と大きく描かれているのも特徴でしょうか。
それと鬼宿の顔を交互に見つめながら、ヤバイバもツエツエも、その顔に浮かぶ不信感を隠そうともしません。
それどころか、ヤバイバに到ってはあからさまな疑いを声に出していました。
「こんな物でかぁ？」
「Ｙｅｓ！　そいつの名は『ガイアメモリ』。そいつの種類は……使ってからのお楽しみ、だＺｅ」
にやりと笑いながら、鬼宿は自信たっぷりにそう言うのでした。

そして……現在に至るのです。
サンメンキョウオルグとガオレンジャーの戦いは、決してガオレンジャーにとって不利な物ではありませんでした。

途中で邪悪な衝動を感じ取ったらしいガオシルバーも合流し、サンメンキョウオルグを追い詰める所まで行ったのです。

しかし……次の瞬間。サンメンキョウオルグは自分の体に、件のガイアメモリを突き立てました。

そこからの反撃は、まさに猛攻と言っても差し支えないでしょう。有利だったはずのガオレンジャーはいつの間にか逆転され、そして……サンメンキョウオルグが、自分の頭である三面鏡を見せた瞬間。

ガオホワイトは強烈な力によって、その中に引きずり込まれてしまったのです。

「ここは一体……あたし、どうなっちゃったの……？」

変身が解けた自分の姿を見下ろし、ホワイトは思わず周囲を見回します。

変身が解けたのは、サンメンキョウオルグに吸い込まれた時でしょうか。奇妙な違和感を覚えたのを、ホワイトははっきりと認識しています。

周りの景色は、先程と殆ど変わっていませんが……自分以外、誰も見当たりません。仲間はおろか、戦っていたはずのオルグの姿さえも。

ただ、間もなく南中に差しかかろうとする太陽の光と、吹き抜ける風だけがホワイトの長い髪を撫でていくのです。

――あたし、オルグの作った空間に閉じ込められちゃったの？――

今まで戦ってきたオルグの中には、特殊な空間を作って自分達を閉じ込める、と言う手段に講じた者もいます。それを思い出したのでしょう、彼女は一瞬だけ呆然としたような表情になりました。

しかしすぐにその顔も消し、戦士としてここから抜け出す事を考え……そこで初めて気付いたのです。変身に使うツールである、Gフォンがどこにも無い事に。

「そんな……」

吸い込まれた際に落としてしまったのでしょうか。もう1度周囲を見回しましたが、Gフォンの影も形もありません。

あるのはただ、切り立った山々と、灰色の砂利、そして、崖の上からこちらを見下ろす、黒いガゼルのような生き物だけです。

「……え……？」

――ガゼルのような、生き物……？――

自分の視界に入ったその生き物を、彼女は思わず凝視します。二足歩行のガゼル。しかも、人間とほぼ同じ大きさのその獣。

妙にメタリックな印象を抱かせる事を考えると、新しいパワーアニマルなのでしょうか？　いいえ、それにしては妙に邪悪な雰囲気を持っています。強いて言うなら、シルバーが「狼鬼」であった時に使役していた、「魔獣」のような……

そこまで思った瞬間、その獣は地を蹴り、ホワイトめがけて襲い掛かってきたのです。

危ないと思うよりも先に、戦士として……そして武道家として、反射的に彼女の体が反応します。咄嗟に相手の角を避け、すれ違い様にその付け根部分に手刀を叩き込んだのです。

――硬い――

叩き込んだ感触の固さに思わず顔を顰め、ホワイトはくるりと背を向けると一目散に駆け出しました。

変身していれば……いいえ、武器さえあれば、何とかなったかもしれません。しかし今は完全に丸腰です。角を叩き折るどころか、まともに戦うのも難しいと判断したのでしょう。

――こんな時、Gフォンがあったら……――

歯噛みしたくなるほどの悔しい思いを胸に抱きながら、ホワイトは極力ガゼルとの距離を取るべく、ひたすらに走ります。

しかし……何故でしょうか。彼女は妙な違和感を覚えていたのです。自分の知っている道のはずなのに、どんどん見慣れない雰囲気へと変貌していきます。

おまけに、それ程時間も経っていないと言うのに、体が徐々に重い……いいえ、気だるいような疲労感に襲われ始めているのです。

ふと空を見上げると、太陽は南中まであと1時間程度と言った位

置で輝いて……

――待って、そんなはず無い――

否定の言葉が心に浮かぶと同時に、ホワイトの足がぴたりと止まってしまいます。

――だって、さっき見た時はもうすぐ南中で……ううん、その前に、私がオルグと戦っていた時、もうお昼は過ぎてた――

――まさか、時間を退行してるの!?――

オルグの作った空間であれば、それもあるかもしれません。

ぞくりと、冷たい物がホワイトの背を駆け抜けます。しかし……恐怖で慄くほどの余裕も与えてくれないのでしょうか。

先程のガゼルが、低い唸り声を上げて、ホワイトの前に立っていたのです。

――先回りされてたなんて!――

逃げようにも、ガゼルとの距離はそう開いていません。戦うか、それともやはり隙を突いて逃げるか。

刹那の内にその二択を頭の中で思い浮かべ、そしてその答えを出そうとした……その瞬間だったのでしょうか。

唐突に、彼女の頭上に翳が落ち、鈍い衝撃と共に体が大きく吹き飛ばされていたのです。

「きゃあっ!」

ずしゃ、と砂利に思い切り叩きつけられる音と、思わずもれた自分の悲鳴を聞きながら、それでもホワイトは冷静に周囲を見ていました。

今、自分の体を払ったのは、ガゼルではありません。何故ならガゼルは今、別の……蜘蛛の様な大きな怪物によって捕えられ、手を、足を、そして胴を貫かれ、完全に事切れてしまっていたのですから。

「何!?　何でこんな……!?」

手に当たった「何か」を無意識の内に拾い、そしてゆっくりと起き上がりながらも……ホワイトは足に根が生えてしまったかの様にその場から動く事ができません。

オルグと戦っていた時は感じた事のない「恐怖」が、彼女の体を束縛していたのです。

――あたし、ひょっとしてこのまま食べられちゃうの!?――

ガゼルから出たエネルギーらしき光を完全に飲み下し、ゆっくりとこちらに体を向けなおす蜘蛛を見やりながら、ホワイトが思わず身構えたその瞬間。

『ＳＴＲＩＫＥ　ＶＥＮＴ』

彼女の背後から、電子音が聞こえたかと思うと、すぐ脇を、炎を纏った赤い龍が通り過ぎ、蜘蛛の体を貫いたのです。

しかし、それだけではありませんでした。蜘蛛とホワイトの間に割って入るように、突然紺色の蝙蝠がその姿を見せたのです。

「え……？」

『ＦＩＮＡＬ　ＶＥＮＴ』

疑問に思うよりも先に、またしても背後から電子音がホワイトの鼓膜を叩きます。すると……蝙蝠は高く舞い上がり、その一瞬後、何か黒い「杭」の様な何かが、蜘蛛を完全に葬ったのです。

――この蝙蝠も、パワーアニマル？　でも……雰囲気が違う――

「君、大丈夫か!?」

何が起こったのかわからず、思わず呆然とするホワイト。そんな彼女の背に、レッドと同い年くらいと思しき男性の声がかけられたのです。

その声に振り返ると、そこには……別の意味でレッドと呼んでも良さそうな、赤い騎士の姿がありました。

どこか龍を連想させる鎧に身を包んでいますが、感じられる雰囲気はどこか自分達と同じ、戦士のように思えます。少なくとも、先程のガゼルや蜘蛛とは、明らかに異なる何かがあるのです。

そして、その一方で。蜘蛛を倒した「杭」らしき存在もまた……その姿を見せました。

杭だと思ったのは、どこか蝙蝠を思わせる鎧を着た騎士。こちらは龍の騎士とは違い、闇色のマントが風にたなびいています。

その彼は、ちらりとホワイトの方を見ると、一瞬だけ呆れたように肩を竦め……そして、彼女に向かって、こう言ったのです。

「……早く変身しろ。消えたいのか？」

と……

Ｑｕｅｓｔ３３：鏡獣、魅せる！（後書き）

朱杖：ガオらしさを出すためとは言え、地の文が丁寧語だと、非常に違和感があるんだけどな。おまけに前書きで「ジャムおじさんボイスプリーズ」ってお願いも痛々しいな

鬼宿：だＮａ

朱杖：……ってぅをわっ！？　何でアンタがここにいるんだよ！？

鬼宿：Ａｈ……何かな、ガオ＆ａｍｐ；龍騎がいつ終わるかわかんねーから、来ちゃっＴａ

朱杖：「来ちゃった」ぢゃねぇぇぇぇぇっ！　こっちにも心の準備が！　つか、今日は風虎のはずじゃ！？

鬼宿：「さっさと貴様の紹介を終わらせて、こちらとしても後顧の憂いを絶っておきたい」だとＳａ

朱杖：マジか、風虎、マジで神様顎で使ってるのか……

鬼宿：それにあの虎女、ヴィンテージのジーンズくれるっＴｅ言うからＮａ！

朱杖：何に釣られてんだ、あんた！？　まあ良いや、つーことで、ある意味「星」の面々最強の虐められっ子、鬼宿の登場だ

鬼宿：さーて自己紹介だＺｅ！　俺は鬼宿。元はかに座のθ星Ｄａ。他の読み方に、「たまほめぼし」、「たまをのぼし」とかあるらし

いＮａ
元々は二十八宿のうちの、南方朱雀七宿のうちの１つらしいＺｅＡｎ？　どこかの漫画で、「鬼宿」って書いて「たまほめ」ってキャラがいた？　Ｈａｈａｈａ、確かどっかの少女マンガだったっけＫａ

朱杖：……詳しいな、オイ

鬼宿：趣味の１つだからＮａ、少女マンガを読むＮｏ

朱杖：ぶばぁっ！　え、何、鬼の顔で本屋行って少女マンガ買うの！？

鬼宿：勿論だＺｅ！　見た目はオルグだが、これでも「星の参」。結構な実力を持ってる「星」Ｄａ。それに、別名は「憤怒」。普段はこーやっておちゃらけているＧａ、怒らせると結構……くっくっＫｕ

朱杖：……で、時に鬼宿、今回のメモリは？

鬼宿：バレバレだＲｏ？
ちなみに今回はガオホワイト　ｉｎ　ミラーワールドなんだＧａ…
…相変わらず、Ｙｏｕ　ａｒｅはディスパイダー好きだＮａ

朱杖：……結愛か！？　「Ｙｏｕ　ａｒｅ」って「結愛」の事か！？
まあ、あいつ基本的に、ディスパイダーとシアゴーストくらいしか知らないらしいし
……って、ちょっとマジ待て、ガオホワイトこれ死亡フラグじゃね！？

鬼宿：いや、むしろライダーフラグだＲｏ。ゲキ編で出来なかったことを、やっちまおうと言う魂胆丸見えＤａ

朱杖：……え、やるの？　やるやる詐欺はもう飽きたぞ、俺

鬼宿：やらなきゃガオホワイト死亡だろうＧａ。だからやるんじゃねえＫａ？　丁度動物も色も合うＳｉ

朱杖：あまりネタばらしすると、後々でネタバレ粛清委員の風虎とか龍水に殺されるぞ、アンタ
そんじゃあまぁ、今日はこの辺で

鬼宿：またＮａ～

第３４話

行きつけの店からの帰り。その森の中で、キィンとミラーワールドの呼び声とも言える特徴的な音がしたのを聞き止め、城戸真司はバイクを止めると、周囲を見回して音源を捜した。

それは一緒にいた秋山蓮と手塚海之も同じだったのだろう。真司とは別の方向を見回し、音源を捜し……そして、不法投棄された粗大ゴミの中に置かれていた三面鏡が音源であると知って、慌てて真司は三面鏡を覗き込む。

三面の内の二面が合わせ鏡になり、互いに互いを映して無限の可能性を映し出す。その一方で、唯一合わせ鏡に参加できなかった一面が、映すべき景色とは異なる景色を真司に見せた。

それは、白い蜘蛛のような異形と、それに襲われる少女の姿。

無論、「こちら側」にはそんな化物も少女もいない。だが……真司達は理解していた。

それが、「向こう側」で実際に起こっている事であると言う事実を。

自分達がかつて、「仮面ライダーとして戦い合っていた歴史」を思い出してから数ヶ月。ミラーモンスター以外の異形……オルフェノクだとかファンガイアだとか……とは戦ったが、ミラーモンスターは自分の契約モンスター以外は全く現れなかった。

しばらくの間鳴りを潜めていたミラーモンスターが、動き出したとでも言うのだろうか。

どちらにしろ、やる事は１つなのだ。

思いながら、真司は持っているデッキを三面鏡にかざし、ベルトを出現させる。その横では蓮も呆れたようにベルトを出現させ……

『変身』

２人の声が重なり、それぞれの体を鎧が包み、騎士を連想させる姿へと変えた。

真司は深紅の龍と契約せし者、龍騎に、蓮は闇の蝙蝠と契約せし者、ナイトに。その一方で、手塚だけは手の中のデッキを玩ぶだけで……どこか不審げな表情を浮かべ、変身しようとはしなかった。

「手塚……？」

「奇妙な感じがする」

それは占い師としての勘なのか。助けに入るべきだとは思うものの、それと同じ位関わるなと言う警告が頭の中で響いている。

手塚の占いは当たる。その事は、真司も蓮も良く理解している。しかし……それ以前に、「人が襲われている」と言う事実を前にして、止まると言う事が出来なかったのだろう。

真司は「っしゃあ」と気合を入れると、そのまま三面鏡の「向こう側」……ミラーワールドへと飛び込んで行く。

「城戸！」

「……考え込みすぎるのも問題だが、あいつの場合、少しは考えるって事を覚えた方が良いだろうな」

驚いたように声を上げる手塚に対し、蓮はやれやれと呆れたように呟き……

「行って来る。俺達に何かあった時は……」

「それ以上は言葉にしない方が良い。言葉は……それを真実にする力を持つ」

「……分った。なら……必ず帰ってくるから、待ってろ」

それだけ言葉を交わすと、蓮もまたミラーワールドへと向かい、その身をするりと三面鏡に潜り込ませた、刹那。

パタン、と。

触れてもいないし風も吹いていない。だと言うのに、三面鏡はひとりでに閉じた。まるで、2人が入っていくのを見計らったかのように。

「なっ！？」

驚愕の声をあげ、手塚は慌てて鏡に手をかけ開こうと画策するが、三面鏡は口を閉ざす貝の様にぴったりと隙間無く閉じている。

――これが、俺の感じた予感の正体なのか！？――

心の中で思うが、どこか違う気がする。本当に予感の正体が、この事象なのだとすれば……今頃この胸にわだかまる予感も消え、明確な感情になっているはずだ。それなのに、今だ手塚の胸を締めているのは「感情」ではなく「予感」のまま。

何か、とんでもない事に巻き込まれたような、そんな……

「言葉には、それを真実にする力がある。だから……城戸と秋山は、必ず帰ってくる。俺はそう……信じて待っているだけだ」

徐々にこみ上げてくる不安を押し隠すように言いながら、手塚はその三面鏡から離れ、自分のバイクのバックミラーを覗き込む。

……そこに映りこむ、ミラーワールドの様子を見る為に……

＊

真司がミラーワールドに到着した時、蜘蛛型のモンスターであるディスパイダーがゆっくりと少女の方へと向きを変えるところだった。

――危ない！――

『ＳＴＲＩＫＥ　ＶＥＮＴ』

反射的に、彼女の背後から真司はストライクベントを発動させ、ディスパイダーの体を吹き飛ばす。当然、この程度で相手が倒れるはずも無い。それは真司も重々理解している。

しかし……真司は、信用していた。自分の親友の存在を。そしてその信用は、ある意味最も理想的な形で応えてもらっていた。

少女とディスパイダーの間に、蓮の契約モンスターであるダークウィングが、その姿を現したからである。

「え……？」

『ＦＩＮＡＬ　ＶＥＮＴ』

不思議そうに首をかしげる少女の声には答えず、蓮のバイザーが宣言を放った。

同時に、宙高く舞っていた蓮が、ディスパイダーの体を貫き、軽やかな足音を立てて降り立つのが、爆煙の向こうからチラチラと見える。

ディスパイダーの生命エネルギーが飛び出したのを見るや、ダークウィングがそれめがけて飛んでいくのだから、抜かりない。

苦笑気味に思いながらも、真司は少女に駆け寄り、声をかけた。

「君、大丈夫か!?」

真司の声に、少女は驚いたようにこちらを振り返る。

先程は鏡越しでよく分らなかったが、腰まであるストレートの黒髪に、黒っぽい色のジャケット。背には白い虎の絵がプリントされている。

だが、ミラーワールドに引き込まれてから大分時間が経っているのだろうか。ジリ、と彼女の指先から粒子化が始まっていた。そしてふと……その手に収まっている、黒いケースが目に留まる。

――この子……デッキを持ってる!?――

持っている物は、自分達と同じ「ライダーのデッキ」。と言う事は、彼女もライダーなのだろうか。

それにしては、ミラーモンスターを前にして呆然としている事、そして粒子化し始めているのに気付いていない事が気にかかるが……

「早く変身しろ。消えたいのか?」

同じ事を思ったのか、いつの間にか側に来ていた蓮もまた、いつも通りのぶっきらぼうな口調で少女に促す。

しかし、少女は一瞬だけきょとんとし目を見開くと……直後、むっとした様に口を尖らせ、更には睨みつけるようにこちらを見つめると、その口を開いた。

「変身って……そんな事言っても、あたし、Gフォンが……」

「ジーフォン? 君、何を言ってるんだ?」

「手に持っているデッキは何だ? お前も仮面ライダーなら、さっさと変身しろ」

蓮に言われ、初めて自分の手の中の物に……そして、自分の体に

起きている異変に気付いたらしい。彼女はぎょっと目を見開くと、困惑したように自分の体とデッキ、そして真司達を順番に見つめた。
「何これ!?　あたし、どうなってるの!?」
「落ち着いて。とにかく、そのデッキを近くの鏡にかざして」
きょろきょろと周囲を見回すと、自分達が来た時に通ったのであろう三面鏡が視界に入る。
2人はその前まで、困惑している彼女を連れて行くと、出来るだけわかりやすく……しかし急いで彼女に指示を出す。
変身をする事で、その後色々と問題が起きる事も分っているが……それでも、彼らは彼女を変身させると言う手段に出るしかなかった。
……デッキを使わなければ、この世界から出て行く事は、ほぼ不可能なのだから……

＊

「はぁぁぁぁ……イライラするんだよ」
自称、「他人より少しだけイライラし易い凶悪犯」である浅倉威は、ここ数日のうち最大級の苛立ちを感じていた。
と言うのも、何故か隣には無条件に苛立たしくさせる男、北岡秀一が立っており、おまけに目の前には見知らぬ異形。それと対峙する5色の戦士がいたからだ。
いや、「いるだけ」ならこれ程苛立ちはしない。最大級に苛立たしいのは、異形も、そして戦士達も、自分と北岡と言う存在を無視して何やら争っている事だ。
ぐるりと首を回し、心底忌々しげに呟く浅倉。それに対し、北岡も深い溜息を吐き出し……ポツリと呟いた。
「全く、おかしいよねぇ。さっきまで車の中にいたと思ったんだけど。ゴローちゃんもいなくなっちゃってるし、どう言う事なのかな？」

「知るか」
北岡の言葉に短く答えると、浅倉はねめつけるように異形達を睨み付け、口元に奇妙な笑みを浮かべながら、彼らの側へそっと近付いた。
最初にその存在に気付いたのは、銀色の戦士。狼を思わせる仮面を被っているそいつは、はっとしたようにこちらに視線を向ける。
その一瞬後には、化粧台に2本の角が付いたような異形もまた、視線をこちらに向けた。
しかしそれに怯むことなく、浅倉は真っ直ぐに異形に向かうと、足元に落ちていた白いバトンを拾い、異形の角めがけてそれを振り下ろした。
「あれって……ホワイトの!?」
後ろで驚いたように青い仮面の鮫戦士が言っているが、そんな事はどうでも良い。浅倉がそれを拾ったのも、異形を狙ったのも、そしてその角を殴りつけたのも、全ては彼の本能の赴くままだ。より苛立たしいと感じた方を殴ったに過ぎない。
それが分っているのか、北岡はふぅ、と深い溜息を吐き出すと、我関せずと言わんばかりに目を背けた。
しかし……殴られた側は、それを許してくれないのだろう。ピエロに似た方の異形が、何やら怒ったように怒鳴りながら、北岡めがけて剣を振り上げ、斬りかかってくる。
――これは流石に避けないとまずいかな?――
彼らしからぬ、舌打ちしたいような気分になりながら、北岡は避けようと身構え……しかし、その刃は北岡の体を引き裂く直前、黒い仮面の戦士の持つ斧に受け止められていた。
「ふぅらっはぁっ！　珍しいじゃねーか、ガオブラック！」
「自分でも、そう思ってる所……だ！」
ガオブラックと呼ばれた黒い戦士は、力任せに相手の剣を弾き飛ばすと、斧を手放し自分の両手でそのピエロをどんと突き飛ばす。
突き飛ばされた方は勢い良く吹き飛び、浅倉の足元に転がった。

それを機と捕えたのか、浅倉は楽しそうにその口の端を歪めると、躊躇無く相手の腹を踏みつけ、押さえ込む。
「ぐえぇぇ……ぐ、苦じい……」
「聞こえねぇなぁ」
ジタバタと浅倉の足から逃れようと暴れるピエロに対し、足の持ち主は白々しい態度でそう言いながらも、化粧台をひたすら殴り続けている。
唯一浅倉の邪悪とも言える攻撃から逃れている女は、おろおろと……しかし浅倉以上に苛立ちを感じているような仕草を見せると、ダン、と足を踏み鳴らし……
「サンメンキョウオルグ！　ガオホワイトをやった時みたいに、そいつも殺っておしまい！」
「了解で……ぴっかーん！！」
女の声に応えるように、化粧台の異形……正確には三面鏡の異形らしい……の頭部がばかんと開く。
そこには、彼の名前通り、三面の鏡が浅倉を映し出し……その向こうで、何かがこちらを見つめているのが見えた。
映っている浅倉ではない。紫色の、巨大なコブラ。それが大きく口を開け、その端からダラダラと毒液を撒き散らし、まるでこちらを飲み込もうとしているように見えた。
……もっとも、相手からすれば単純にじゃれつこうとしているだけなのかもしれない。少なくとも、浅倉にとってその巨大コブラは見慣れた存在だ。全く警戒せず、そのまま立っていたのだが……
「危ない！」
コブラの影を見て、第一印象通り……つまり、相手が自分を飲み込もうとしているとでも思ったのだろう。赤い仮面をつけた、獅子を連想させる戦士が浅倉の体を抱え、大きく横に跳び退る。
「おい、邪魔を……」
邪魔をするな。
そう、浅倉が言いかけた瞬間。ぎゅおお、と言う音と共に、彼ら

のいた空間があからさまに歪み、三面鏡の中へと吸い込まれていくのが見えた。
「何？」
「ホワイトも……今の攻撃で吸い込まれた。どこにいるのか分らない状態なんだ」
空間が吸い込まれる直前、紫のコブラ……浅倉の契約モンスターであるベノスネーカーの姿が見えていた。
と言う事は、あの鏡はミラーワールドにつながっているのだろう。
……と、考えた所までではたと気付く。ミラーワールドは、普通の人間には見えない。当然、ここにいる戦士達が……ライダーのデッキを持っていない限りは、先程のベノスネーカーの姿も見えなかったはずだ。
と言う事は、単純にこの赤い戦士は相手の攻撃の出がかりに気付いて自分を救ったと言う訳か。
――余計なお世話だ――
と思う反面、さらに浅倉の中に苛立ちが増す。
それは、戦士達に対してではなく、自分を吸い込もうとした三面鏡に対して。
戦うのは好きだ。自分が優位になるのは、もっと好きだ。
だが……思いもかけない反撃をされるのは、楽しい反面苛立ちも大きい。「思いがけない反撃」をしていいのは、浅倉にとって北岡と……そして、かつて必死になって戦いを止めようとした赤い戦士、龍騎こと城戸真司だけ。
「ああ……イライラするんだよ……」
彼の放った低い声に気圧されたのか、赤い獅子は一瞬怯んだように体を震わせ……
それでも、戦士としての使命感でもあるのだろうか。浅倉を自分の背中に回し、彼を守るようにして三面鏡の異形の前に立ち塞がったのであった。

第３４話（後書き）

朱杖：つー訳で、ゴーカイの次々回のゲストがガオレッドらしいと言う確かな筋からの情報を込めて！

白刀：Ｈａｐｐｙ　Ｂｉｒｔｈｄａｙ！　素晴らしい！　実に素晴らしいじゃないか朱杖君！！　（宇梶氏ボイス）

朱杖：いや待て風虎、何で鴻上のおっさんの真似！？　意味なくね！？

白刀：レッツゴー仮面ライダーに、鴻上光生が出ていなかったのでな。ここで出してやろうかと

朱杖：余計なお世話だし！　って……今回ライダー盛りだくさんだな、おい

白刀：ちなみに今回の設定は、「紅蓮の空、漆黒の戦士」を読んでいないとわかりにくい事この上ない事になっている

朱杖：んじゃ、この場で簡単に説明するか
これは「龍騎」本編の最終回後。つまり、彼らは「ライダーバトル」など「無かった歴史」を辿っていた訳だが……どっかの「白衣の変態」やら「白い独裁者」やらがデッキを彼らの元に置いたお陰で、１３人のライダーのうち、何人かが「ライダーバトルを行ったと言う記憶」を思い出した事になっている

白刀：ちなみに、デッキを持っている仮面ライダーは、今回登場した５人……城戸真司、秋山蓮、手塚海之、北岡秀一、浅倉威と、ミ

ラーワールドにいる神埼士郎、そしてミラーワールドの城戸真司…
…つまりリュウガの7人だ
ファム、ベルデ、インペラーは「ライダーであった事」を思い出してはいるが、権利を破棄、タイガ、ガイ、シザーズに到っては「思い出さずに破棄」していると言う設定だ

朱杖：だから、ガオホワイトこと冴にタイガのデッキ（未契約）が行ってるんだけどな

白刀：うむ。では、次回……と言うか、巨大戦や鬼宿はどうするのだ？

朱杖：……わからん

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0089j/

五色の戦士、仮面の守護

2011年9月2日12時57分発行